原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第18集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書

2000

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第18集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書

原の辻遺跡全景（北方洋上に対馬を望む）

原の辻遺跡全景（西から）

高元・原地区全景

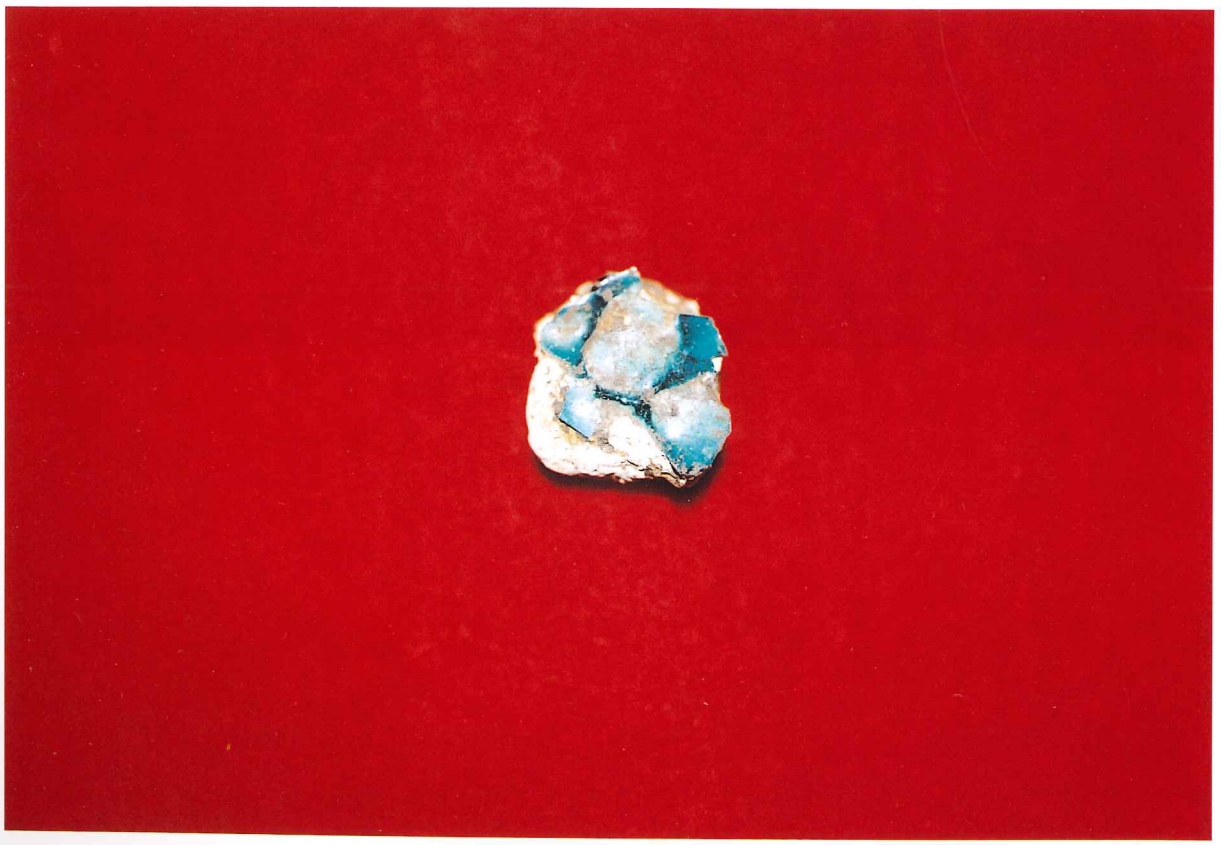
原の辻遺跡全景（北から）

原 2 区遺構検出状況

原 6 区貝塚出土状況

原 7 区遺物出土状況

朝鮮半島系土器出土状況



イスラム陶器（1／1）

不條地区遺構検出状況（西から）

不條地区旧河道検出状況（西から）

不條地区環濠検出状況（上層，南から）

不條地区環濠検出状況（下層，南から）

発刊にあたって

本書は，平成７年度から国庫補助を受けて実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成10年度から平成11年度分の発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は，朝鮮半島や大陸からの舶載品が注目されることや，大規模な多重環濠が巡ることなどから，弥生時代を通じて一支国の中心集落で，『魏志倭人伝』に現れる国々のうち中心集落が特定できる希有の遺跡として，平成９年９月国の史跡指定を受けました。

遺跡全体の面積は約100ヘクタールにも及び，全国有数の規模を誇っており発掘調査も計画的に進められております。

平成10年度は石田町大川地区と原ノ久保Ａ地区，芦辺町原地区と高原地区の調査を実施しました。大川地区では初期貿易陶磁や土師器に混じってイスラム陶器が１点出土しました。たった１点のイスラム陶器の出土ですが，古代の壱岐が海上交通の重要な役割を担っていたことも改めて実感しました。また柱穴などの遺構の出土は，弥生時代以降も重要な施設が置かれていた可能性を示唆するものでした。原地区では，弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物が多量出土し，居住域が台地中央の東側にも拡がっていることが確認されました。

平成11年度は，石田町柏田地区と芦ノ木地区，芦辺町不條地区の調査を実施しました。遺跡の南東側の端にあたる芦ノ木地区では，弥生時代の遺物は非常に少ないことがわかりましたが，旧石器時代の文化層は残っていることが確認できました。また不條地区では，昨年の船着き場跡水路等状況調査で確認されていました柱穴や環濠が拡がり，大形の掘建柱建物跡が旧河川に隣接して位置していたり，これまでの内濠や中濠，外濠につながる環濠もあります。

このように，継続した調査によって，丘陵部や低地部の当時の状況が徐々に明らかになりつつあります。今後も調査は続けられますが，平成10年にまとめられた，原の辻遺跡整備基本計画に基づき，地域の方々の御理解と御協力をいただきながら，壱岐の風土に根ざした遺跡の保存と活用を図っていかねばならないと考えています。

原の辻遺跡の発掘調査成果が，学術的資料として活用され，文化財の愛護に役立てていただければ幸いです。

平成12年３月31日

長崎県教育委員会教育長　木村道夫

例　　言

1．本書は，国庫補助を受けて平成７年度から実施している原の辻遺跡発掘調査事業の平成10年度から平成11年度分の発掘調査報告書である。

2．調査は，芦辺町教育委員会と石田町教育委員会の協力を得て，長崎県教育委員会が主体となって実施したものである。

3．本書に収録した現場担当者は（　）内に記した。また，執筆者については本文目次の項に示した。

①大川地区　　平成10年度調査　（担当者　安楽　勉）
壱岐郡石田町石田西触字大川

②原ノ久保Ａ地区　平成10年度調査　（　　〃　　）
壱岐郡石田町石田西触字原ノ久保

③原地区　　平成10年度調査
壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字原　　（　　〃　　）

④高元地区　　平成10年度調査
壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字高元　　（　　〃　　）

⑤不條地区　　平成11年度調査　（担当者　宮崎貴夫・杉原敦史）
壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字不條

⑥柏田地区　　平成11年度調査　（担当者　安楽　勉）
壱岐郡芦辺町深江鶴亀触

⑦萱ノ木地区　　平成11年度調査　（　　〃　　）
壱岐郡石田町石田西触字萱ノ木

4．本書関係の出土遺物と図面および写真類は，長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所に保管している。

5．本書の総編集は，安楽が担当した。

6．本書で方位の基準としたのは磁北である。図ではＭＮの略字を使用した。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1．壱岐島の地理的概要……1（安楽）

2．壱岐島の弥生時代遺跡……2（〃）

Ⅱ　調査の経緯

1．平成10年度の調査……7（〃）

2．平成11年度の調査……8（〃）

Ⅲ　調　査

1．大川地区の調査

(1)　調査概要……10（〃）

(2)　土　層……10（〃）

(3)　遺　構……12（〃）

(4)　遺　物……12（〃）

2．原ノ久保A地区の調査

(1)　調査概要……28（〃）

(2)　土　層……29（〃）

(3)　遺　構……29（〃）

(4)　遺　物……30（〃）

3．高元・原地区の調査

(1)　調査概要……31（〃）

(2)　土層及び遺構……31（〃）

(3)　遺　物……42（〃）

①6区出土の土器……42（〃）

②7区出土の土器……49（〃）

③7区出土上層の土器……62（〃）

④原地区出土の朝鮮半島系の土器……82（〃）

⑤原地区出土の石器……85（〃）

⑥その他の遺物……94（〃）

4．平成11年度不條地区の調査
(1) 調査概要 ……125(杉原)
(2) 遺　構 ……125(〃)
(3) 遺　物 ……130(宮崎・杉原)
(4) 小　結 ……147(杉原)

5．平成11年度柏田・苣ノ木地区の調査
(1) 柏田地区の調査概要 ……173(安楽)
①土　層 ……173(〃)
(2) 苣ノ木地区の調査概要 ……177(〃)
①土　層 ……177(〃)
②苣ノ木8区出土の土器 ……180(〃)
③苣ノ木8区出土の石器 ……181(〃)

Ⅳ　まとめ ……195(〃)

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　壱岐弥生時代主要遺跡分布図……3
第３図　原の辻遺跡概要図……6
第４図　年度別調査対象地区……9
第５図　大川地区調査区域図（１／2000）……11
第６図　大川１・８区土層及び遺構実測図（１／80）……13
第７図　大川８区５出土小児甕棺墓（１／20）……15
第８図　大川８区５出土小児合口甕棺実測図（１／３）……15
第９図　大川８区５Ｎ６Ｎ遺構実測図（１／30）……16
第10図　平成６年度大川地区出土遺物（１／３）……17
第11図　大川地区出土遺物実測図①（輸入陶磁器及びイスラム陶器）……18
第12図　大川地区出土土器実測図②（１／２）……19
第13図　大川地区出土土器実測図③（１／２）……20
第14図　大川地区出土土器実測図④（１／２）……21
第15図　大川地区出土石器実測図①（２／３）……24
第16図　大川地区出土石器実測図②（２／３）……25
第17図　大川地区出土石器実測図③（２／３）……26
第18図　大川地区出土石器実測図④（２／３）……27
第19図　原ノ久保Ａ地区調査地域図（１／2000）……28
第20図　原ノ久保Ａ２区周辺表面採集の土器実測図……29
第21図　原ノ久保Ａ２区土層及び遺構実測図（１／60）……30
第22図　高元・原地区の調査区域図（１／2000）……32
第23図　原３区土層及び遺構実測図（１／40）……34
第24図　高元１区・原２・４区土層及び遺構実測図（１／80）……35
第25図　原６区土層及び遺構実測図（１／80）……37
第26図　原５・７区土層及び遺構実測図……39
第27図　原６区出土土器実測図①（１／４）……43
第28図　原６区出土土器実測図②（１／４）……44
第29図　原６区出土土器実測図③（１／４）……46
第30図　原６区出土土器実測図④（１／４）……47
第31図　原６区出土土器実測図⑤（１／４）……48
第32図　原７区出土土器実測図①（１／３）……50
第33図　原７区出土土器実測図②（１／３）……51
第34図　原７区出土土器実測図③（１／３）……53
第35図　原７区出土土器実測図④（１／３）……54
第36図　原７区出土土器実測図⑤（１／４）……56
第37図　原７区出土土器実測図⑥（１／４）……57
第38図　原７区出土土器実測図⑦（１／４）……58

第39図　原７区出土土器実測図⑧（１／４）……60
第40図　原７区出土土器実測図⑨（１／４）……61
第41図　原７区出土土器実測図⑩（１／4，１／６）……63
第42図　原７区出土土器実測図⑪（１／４）……64
第43図　原７区出土土器実測図⑫（１／４）……65
第44図　原７区出土土器実測図⑬（１／４）……66
第45図　原７区出土土器実測図⑭（１／４）……68
第46図　原７区出土土器実測図⑮（１／４）……69
第47図　原７区出土土器実測図⑯（１／４）……70
第48図　原７区出土土器実測図⑰（１／４）……71
第49図　原７区出土土器実測図⑱（１／４）……73
第50図　原７区出土土器実測図⑲（１／４）……74
第51図　原７区出土土器実測図⑳（１／４）……75
第52図　原７区出土土器実測図㉑（１／４）……76
第53図　原７区出土土器実測図㉒（１／４）……78
第54図　原７区出土土器実測図㉓（１／４）……79
第55図　原７区出土土器実測図㉔（１／４）……80
第56図　原７区出土土器実測図㉕（１／４）……81
第57図　原地区出土朝鮮半島系土器実測図①（１／２）……83
第58図　原地区出土朝鮮半島系土器実測図②（１／２）……84
第59図　原地区出土朝鮮半島系および楽浪系土器実測図（１／２）……85
第60図　原地区出土石器実測図①（２／３）……86
第61図　原地区出土石器実測図②（２／３）……87
第62図　原７区出土石器実測図①（１／３）……89
第63図　原７区出土石器実測図②（１／３）……90
第64図　原７区出土石器実測図③（１／４）……91
第65図　原７区出土石器実測図④（１／４）……92
第66図　原７区出土石器実測図⑤（１／３）……93
第67図　原地区出土石器実測図（１／２，１／３）……94
第68図　原地区出土その他の遺物（２／３）……95
第69図　原７区出土ガラス玉実測図①（１／１）……96
第70図　原７区出土ガラス玉実測図②（１／１）……97
第71図　調査区位置図（１／1000）……126
第72図　調査区北壁土層図（１／60）……127
第73図　遺構配置図（１／200）……128
第74図　濠土層図（１／40）……129
第75図　１号旧河道出土土器実測図①（１／４）……131
第76図　１号旧河道出土土器実測図②（１／４）……132
第77図　１号濠出土土器実測図①（１／４）……133
第78図　１号濠出土土器実測図②（１／４）……134
第79図　２号濠出土土器実測図①（１／４）……135

第80図　２号濠出土土器実測図②（１／４）……137
第81図　１号溝出土土器実測図（１／４）……138
第82図　朝鮮半島系土器実測図（１／２）……139
第83図　石器実測図①（２／３）……141
第84図　石器実測図②（１／２，１／３）……142
第85図　石器実測図③（１／３）……143
第86図　石器実測図④（１／３）……144
第87図　石器実測図⑤（１／３）……145
第88図　石器実測図⑥（１／３，１／４）……146
第89図　石器実測図⑦・金属製品実測図（１／２）……148
第90図　昭和51年度第20試掘壙出土の土器……173
第91図　柏田地区調査区域図（１／1000）……174
第92図　柏田２・５区土層及び遺構実測図（１／80）……175
第93図　萱ノ木地区調査区域図（１／2000）……178
第94図　萱ノ木３区東側及び西側土層……179
第95図　萱ノ木８区出土の土器実測図（１／２）……180
第96図　萱ノ木地区出土石器実測図①（１／２）……182
第97図　萱ノ木地区出土石器実測図②（２／３）……183
第98図　萱ノ木地区出土石器実測図③（２／３）……184

図版目次

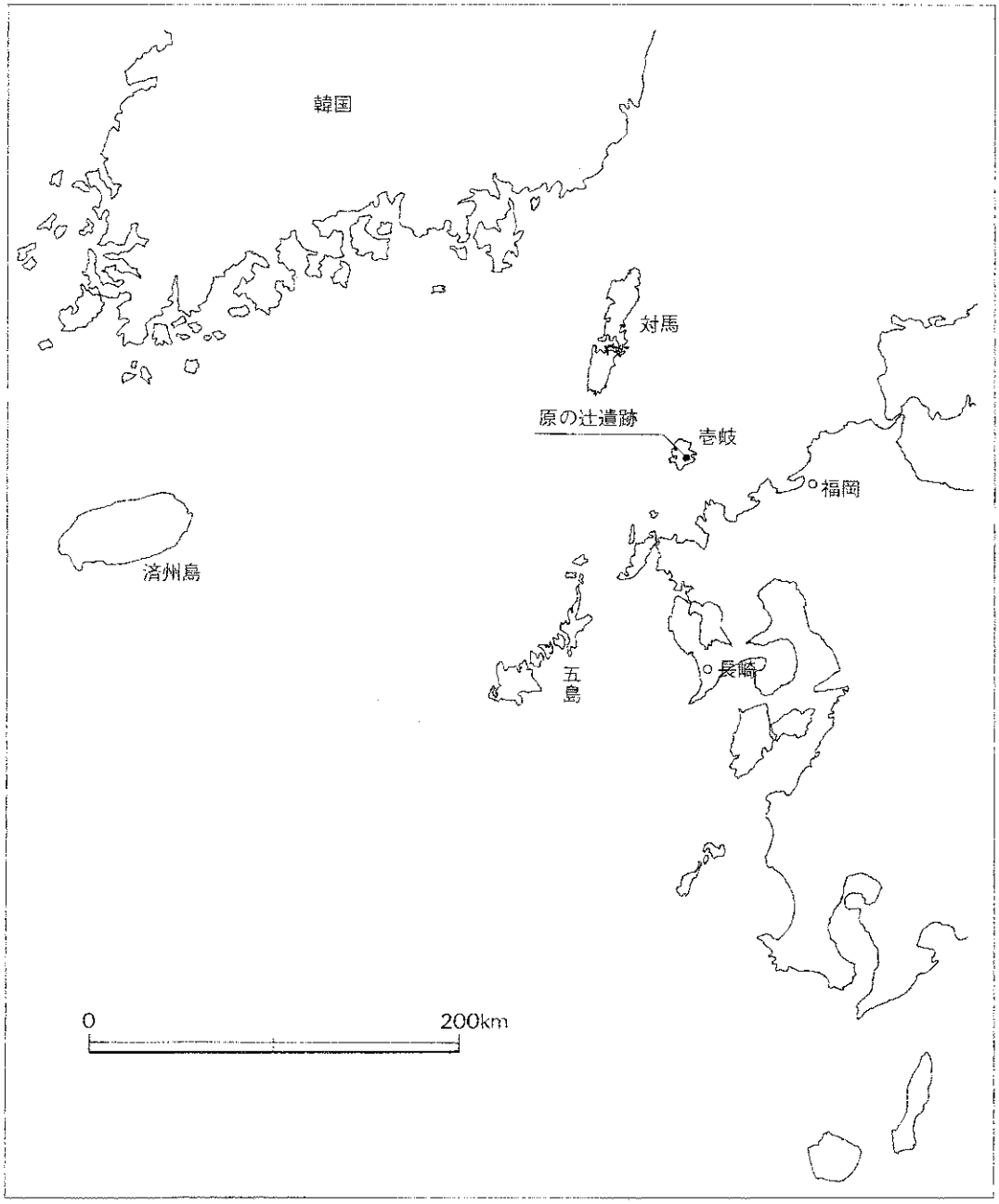
ＰＬ１　1948（昭和23）年米軍撮影空中写真
ＰＬ２　原の辻遺跡遠景（北から）
ＰＬ３　大川地区調査区遠景及び大川１区２区調査区近景
ＰＬ４　大川１区土壙遺物出土状況及び大川１区遺物出土状況
ＰＬ５　大川１区遺物出土状況及び大川１区遺構出土状況
ＰＬ６　大川１区遺物出土状況及び大川２区遺物出土状況
ＰＬ７　大川８区５小児甕棺出土状況及び大川８区小児甕棺調査状況
ＰＬ８　大川８区５Ｎ遺構出土状況及び大川８区Ｎ遺構側面出土状況
ＰＬ９　大川14区南側土層及び大川14区遺物出土状況
ＰＬ10　大川８区４Ｎ土層及び大川13区土層
ＰＬ11　原ノ久保Ａ２区遺構出土状況
ＰＬ12　原の辻遺跡調査区遠景（東から）及び高元１区遺構出土状況
ＰＬ13　原２区調査区遠景及び原２区調査区近景
ＰＬ14　原２区遺構出土状況及び原３区遺構出土状況
ＰＬ15　原４区遺物出土状況
ＰＬ16　原４区遺物出土状況及び原４区－３銅鏃出土状況
ＰＬ17　原６区遺構及び遺物出土状況（西から）
ＰＬ18　原６区遺物出土状況

ＰＬ19　原６区貝層出土状況及び原６区遺物出土状況
ＰＬ20　原７区調査壁全景及び原７区北側土層
ＰＬ21　原７区４七層及び原７区５土層
ＰＬ22　原７区５遺物出土状況及び原４区５遺物出土状況
ＰＬ23　原７区３遺物出土状況
ＰＬ24　原７区４遺物出土状況
ＰＬ25　原７区３遺物出土状況
ＰＬ26　原７区５朝鮮半島系遺物出土状況及び原７区５遺物出土状況
ＰＬ27　調査区遠景
ＰＬ28　調査風景
ＰＬ29　調査風景
ＰＬ30　調査風景
ＰＬ31　調査風景
ＰＬ32　１号濠，２号濠遺物出土状況
ＰＬ33　１号濠遺物出土状況
ＰＬ34　１号濠遺物出土状況
ＰＬ35　１号濠遺物出土状況
ＰＬ36　１号濠，２号濠遺物出土状況
ＰＬ37　２号濠遺物出土状況
ＰＬ38　２号濠遺物出土状況
ＰＬ39　２号濠遺物出土状況及び１号濠横断土層
ＰＬ40　２号濠横断土層及び１号濠，２号濠完堀状況（南から）
ＰＬ41　１号濠，２号濠検出状況
ＰＬ42　１号溝検出状況
ＰＬ43　１号溝検出状況及び遺物出土状況
ＰＬ44　１号溝横断土層及び１号旧河道調査風景
ＰＬ45　１号旧河道遺物出土状況
ＰＬ46　１号旧河道遺物出土状況
ＰＬ47　１号旧河道遺物出土状況及び１号旧河道横断土層
ＰＬ48　１号旧河道検出状況
ＰＬ49　１号旧河道検出状況及び調査区全景
ＰＬ50　調査区全景（東から）
ＰＬ51　柏田地区遠景及び柏田１区東側土層
ＰＬ52　柏田２区遺物出土状況
ＰＬ53　柏田２区遺構出土状況及び北側土層
ＰＬ54　柏田５区土層出土状況
ＰＬ55　萱ノ木地区空中写真
ＰＬ56　萱ノ木地区空中写真
ＰＬ57　萱ノ木１区土層及び遺構出土状況
ＰＬ58　萱ノ木１区調査状況及び遺物出土状況
ＰＬ59　萱ノ木３区土層

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1．壱岐島の地理的概要

手のひらのような形をした壱岐島は，玄界灘と対馬海峡の間に浮かび29の属島をもつ，弥生時代の日本の様子を記した，いわゆる『魏志倭人伝』には，大陸の使者が最初に立ち寄る倭人の国として「対馬国」についで「一支（大）国」として登場する。この二つの島は，中国大陸や朝鮮半島と日本列島を結ぶ重要な役割を果たしてきた。



第1図　遺跡の位置

壱岐の北端から対馬の南端まで約50km，九州本土部最短距離の佐賀県呼子まで約26kmであり，島内最高所の岳ノ辻（213m）からは，特に悪天候でないかぎり，対馬，糸島，唐津，松浦，平戸方面まで見渡せる。

島の面積は南北約17km，東西15kmで，134km²の広さは全国の離島中第20位，対馬は第３位である。現在の耕地率は32%，沖縄県宮古島についで全国第２位で，対馬の2.66%と対象的である。

『魏志倭人伝』には「三千ばかりの家が有る。差田地もあって，田を耕すが，それでも食が足らぬので，ここでも亦南北に市糴している」と記されている。９世紀から15世紀の壱岐の水田面積は『日本三代実録』（876）に水田616丁（約611ha）人口10,689人とあり，『海東諸国記』にも620.6丁（約615.4ha）と見え，耕地の少なかったことがわかる。ちなみに，現在の水田は2.323ha畑は2.203ha，人口は約35,000人である。

２．壱岐島の弥生時代遺跡

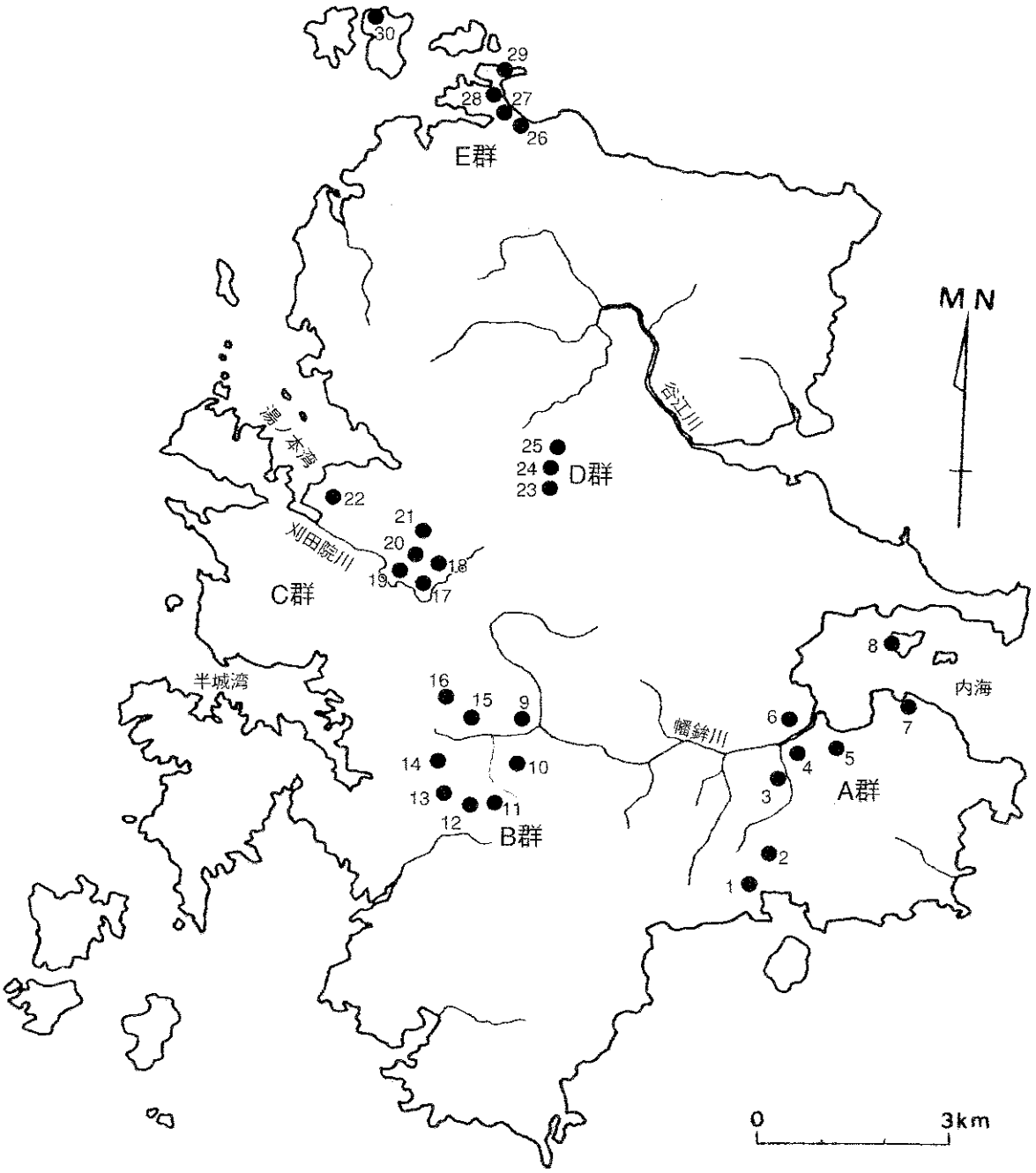
島内には現在，旧石器から歴史時代まで473の埋蔵文化財が登録されている。弥生時代の遺跡は60箇所余りであるが，古墳時代になると，現在残っている高塚古墳だけでも264基と圧倒的に多くなる。

ここでは島内の弥生遺跡について概観してみる。弥生遺跡につながる縄文晩期終末の遺跡は現在３箇所で確認されている。島内最北端の串山ミルメ浦遺跡は砂丘上に営まれた６～７世紀のアワビ生産加工を主体とした遺跡である。一部潮間帯にも遺物の出土が認められるが，その潮間帯より夜臼式の完形小型甕が１個出土した。埋納されたような状況の出土であり前後関係や周辺とのつながりも不明である。郷ノ浦町名切遺跡は縄文前期から晩期にかけての潮間帯の遺跡であり，後期を中心に貯蔵穴が多く検出されている。潮間帯より若干上がった所から夜臼式土器が出土している。石田町堂崎遺跡は海岸に面した標高５mの砂丘に営まれた遺跡であり，やはり夜臼式土器が採集されている。この時期の島内の遺跡に共通していることは潮間帯もしくは海岸のすぐ近くに位置しており小規模な範囲にとどまっているということで，稲作が行われていたとは考えにくい状況にある。

壱岐における弥生時代遺跡について，地理的条件や遺跡の性格をまとめ分類した[注1]山口麻太郎は，遺跡の立地を第１～７の地帯に分け，第１～４地帯を第１群として，弥生単一の土器文化であるとしている。[注2]武末純一もほぼこの考えに従ってＡ群～Ｃ群に分類している。弥生時代の遺跡を地図にプロットした上で概観してみよう。

Ａ群……原の辻遺跡を中心とする遺跡群である。島内で一番長い河足をもつ幡鉾川は池田川や日の本川などの支流を合わせて内海の湾に注ぎ，両岸には上流から下流まで沖積平野が発達している。県下で２番目に広いといわれる深江田原は下流に位置し，その中央には一支国の中心集落である原の辻遺跡が広がる。隣接して闇縁遺跡と鶴田遺跡が位置するが，ともに弥生中期初頭から中葉にかけての墓地であり，原の辻遺跡を構成する遺跡であると考えられる。

現在の印通寺港は佐賀県呼子港と呼ばれているが，この港を見下ろす緩い斜面に洋の宮遺跡がある。



第２図　壱岐弥生時代主要遺跡分布図

1	山中遺跡	11	車出遺跡	21	牛方遺跡
2	津の宮遺跡	12	田ノ上遺跡	22	石路遺跡
3	鶴田遺跡	13	大谷遺跡	23	大谷第１遺跡
4	原の辻遺跡	14	戸田遺跡	24	大谷第２遺跡
5	雀の辻遺跡	15	柳田遺跡	25	月読神社前遺跡
6	関繰遺跡	16	山中遺跡	26	天ケ原石棺群
7	筒崎遺跡	17	経ノ辻遺跡	27	天ケ原遺跡
8	青島遺跡	18	カラカミ遺跡	28	串山ミルメ浦遺跡
9	桜江遺跡	19	小場遺跡	29	オオタキ遺跡
10	鉢形遺跡	20	国柳遺跡	30	若宮島石棺群

かつては甕棺墓や石棺墓が出土したことが伝えられている。また，この地には湧頭という地名が残っており，このあたりが『延喜式』に記されている駅家優通の地であったと考えられ，最近の山中遺跡の発掘調査においても出土品から裏付けられている。原の辻遺跡の面積は100ha，三重の濠に囲まれた面積は24haで日本有数の拠点集落を形成している。

B群……壱岐西部の幡鉾川の源流にあたる郷ノ浦町柳田地区で，車出遺跡を中心とする遺跡群である。

鉢形山を中心にまとまりのある平野部が形成されている。鉢形山頂部には，延久三年（1071年）銘のある国重文の滑石製如来座像が出土した経塚と，旧式内社で壱岐一の宮と称される天手長男神社が鎮座し，歴史的にも重要な地域である。弥生遺跡群は，車出遺跡，戸田遺跡，田ノ上遺跡，大谷遺跡，山中遺跡など14箇所が挙げられるが，調査が実施されたのは車出遺跡と山中遺跡及び戸田遺跡だけである。車出遺跡は1997年圃場整備事業に伴って調査された。時期は弥生中期から後期にかけてである。調査の結果，多量の土器とともに舶載鏡の獣帯鏡片，小形仿製鏡一面，貨泉一枚。銅鏃三本が出土した。土器は丹塗壺類がまとまって出土し，祭祀の場であった可能性が指摘された。また遺構は弥生中期の貯蔵穴一基と，濠が検出された。濠には多くの後期土器を含む。1999年度も範囲確認調査を実施しており，遺跡南側の高い部分から濠を検出しているが，前回とつながるのか今後が注目される。遺物は国道を挟んで西側にも広範囲に出土しており，田ノ上遺跡や鉢形遺跡も車出遺跡の範疇で捉える必要がある。山中遺跡は弥生後期から古墳時代にかけての墓地である。土取り工事でかなり破壊されたが，1998年の調査で弥生時代後期後葉の三重甕棺墓や西新式土器も出土している。また，古墳時代初頭に位置づけられる石棺墓も検出されている。戸田遺跡は1952年，東亜考古学会により調査され，甕棺墓や石棺墓及びイノシシ骨や人骨が出土したといわれるが，不明な点も多い。大谷遺跡の一連の広がりと考えてもよい。

この地域は原の辻遺跡と同じ水系で，直線で約５km程上流である。ここにも有力者層が存在していたことが想定できる訳で，北から南に深く湾入した半城湾を意識し，島の西側をかためる拠点集落とも考えられる。

C群……島の中央に源を発し，湯ノ本湾の支湾である片苗湾を注ぐ刈田院川中流の右岸に点在する。現在は河口新田として埋め立てられているが，約１km上流のすぐ近くまで潮は遡ってきたものと思われる。C群は牛神，国柳，小場，経ノ辻の各遺跡が分布するが，標高60mから80m前後の起伏にとんだ複雑な地形である。カラカミ遺跡は，唐加美神社の祠を中心にした丘陵で，数回の調査が実施されている。1952年には東亜考古学会，1977年には九州大学，1982年以降は勝本町教育委員会によって調査されている。1952年には小川貝塚，辻屋敷貝塚と称される地点が調査され，方格規矩鏡や銅鏃，鉄鎌，鹿角付刀子や弥生中期後半から後期の土器が出土している。1977年の調査では，神社南側傾斜面で中期後半から後期中頃の時期の土器を含み，斜面に対して斜めに走る溝状遺構が検出され，銅鋤先，鯨骨製鉇先などとともに，イノシシ，シカの肩甲骨に点状の焼灼を施した卜骨が出土している。また，後期後半の土器とともに三韓式土器も出土している。1982年以降の調査では，中期後半から後期後葉

にかけての遺物を一括投棄した状況が捉えられ，穿孔したり打欠いたものが多く見られることから祭祀の後に廃棄したことも考えられている。また溝状遺構や卜骨も発見されている。1987年には小児用甕棺2基と集石土壙が検出され，それまで明瞭でなかった墓地の一部が確認された。

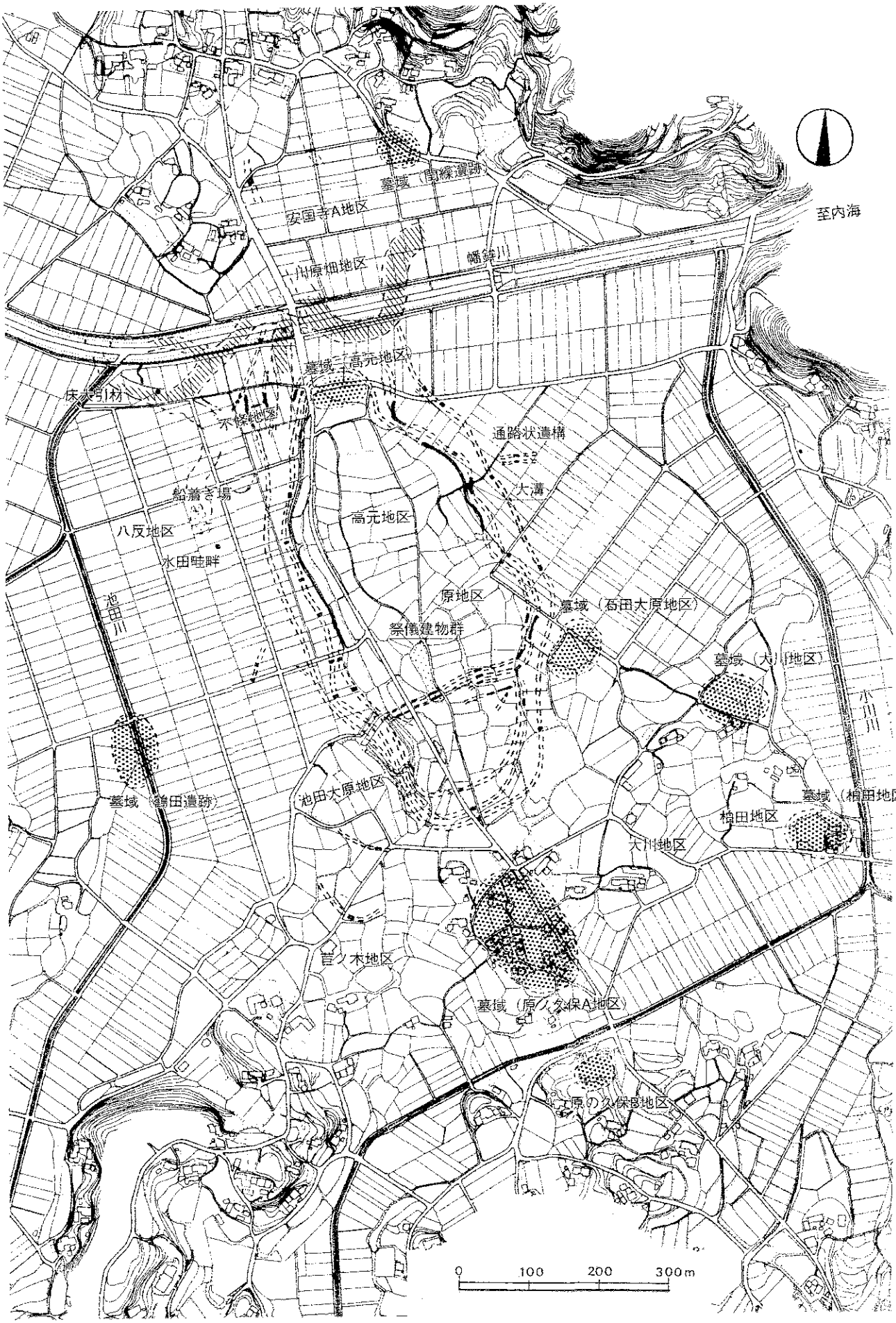
牛神，国柳遺跡もカラカミ遺跡同様の遺物の出土が見られるので同一の集団と考てよい。さらに，これらの遺物の組成から分析すると，農耕的要素よりも漁労的色彩が強く，海人集団の拠点集落だったことが窺え，当然朝鮮半島との結び付きも強かったものと推測される。

D群……島の中央部標高約100mの丘陵地に点在する遺跡で，発掘調査が実施されている遺跡は無い。このあたりには壱岐の古墳を代表する巨石墳と呼ばれる6世紀後半～7世紀前半にかけての鬼の窟古墳や笠塚古墳，百田頭古墳群などが群集していることや，壱岐直（いきのあたい）の居館跡と鴻分寺が置かれていた所でもあり，古代においては重要な地域である。有望な弥生遺跡は見られないものの，今後に期待したい地域といえよう。

E群……島の最北端に点在する。大瀬戸，博多瀬戸を挟んで東から名烏島，若宮島，辰ノ島が点在し，勝本港は天然の良港として漁業が盛んである。この地域は平地に乏しく，山がすぐ海に迫り対馬的な地形が感じられ，弥生の墓地が営まれている。地形も似た所がある。若宮島の石棺群やオオタキ遺跡，天ケ原石棺群は岬状の突端に位置している。若宮島石棺群は弥生後期から古墳前期で四乳輻状帯鏡一面が出土している。天ケ原遺跡は砂州状に位置し，弥生土器や朝鮮半島系無文土器などが出土している。ここで特筆されることは，この天ケ原の海岸線の護岸工事中に，壱岐では珍しい国産の中広銅矛三本がまとまって出土している。場所は海岸の波打際でセジョウガミと呼ばれる石祠の地下80cm位の所から発見されたというが，遺構等が存在したか不明である。勝本浦は対馬，朝鮮半島に一番近い寄港地として重要だったとも考えられ，ここからさらに一海を渡るための航海の安全を祈願して埋納されたものであろう。壱岐の銅矛はこのほかに熊野神社にも御神体として身と袋の部分が伝世されているが，出土地は不明である。対馬では黒島の埋納銅矛15本を筆頭に数カ所で埋納遺跡が確認されており，壱岐と同様の性格をもつものであろう。

注1　山口麻太郎『壱岐国史』　1982

注2　武末純一『三世紀の考古学』「下巻三世紀の日本列島」－壱岐・対馬－　学生社　1983



第3図　原の辻遺跡概要図

Ⅱ　調査の経緯

1．平成10年度の調査

原の辻遺跡では，「幡鉾川流域総合整備計画」に伴って，平成５年度から本格的な発掘調査を実施し，その結果，低地部である水田にも遺跡が拡がり，内濠，中濠，外濠の三重環濠をもつ『魏志倭人伝』に記された「一支国」の中心集落であることが明らかになった。

しかし，遺跡の広さは100haにも及ぶと推定されたため，より細かい遺物の内容把握に努めることになり，平成７年度から国庫補助事業による範囲確認調査を進めることになった。平成７年度は原地区の台地頂上部分と，大川地区の墓域が調査された。平成８年度は原地区の台地頂上部で確認された濠や住居が関連の遺構が東側斜面にどのように拡がるかを追及した。また，原ノ久保Ａ地区では墓域を調査した。平成９年度は原，高元地区の前年度調査区の南側を中心とした調査区と，原ノ久保Ｂ地区を調査した。

平成10年度は，石田町域が大川地区と原ノ久保Ａ地区，芦辺町域が原地区と高原地区で，平成10年10月５日から平成11年２月８日まで，調査面積1,397㎡を実施した。

石田町大川地区は平成６年度に県営圃場整備事業関連の農道拡幅工事に先立って調査が実施され，この時には初期貿易陶磁など古代の遺物が出土しており，今回はその範囲の確認や，新たに遺構が確認されるのかを目的として行った調査である。

原ノ久保Ａ地区の調査は前回調査時の墓域がどこまで拡がっているかの確認調査で，以前に石棺と甕棺が出土したことがあるとの地権者の情報に基づいて調査壙を設定した。

芦辺町原地区・高元地区は，丘陵部西側中央部に若干地形がくびれた部分があり，ここにも区画性をもつ濠が確認できるのではないかとの目的で調査区域を設定した。

調査関係者は以下のとおりである。

調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所　長　　田川　肇
課　長　　安楽　勉　（直接担当）
課　長（兼）岩永　道雄（壱岐教育事務所）
主　事（兼）米澤　潤二（　〃　）

調査協力　芦辺町教育委員会
石田町教育委員会

2．平成11年度の調査

平成11年度は前半を芦辺町不條地区，後半を石田町柏田地区と萱ノ木地区の範囲確認調査を平成11年６月21日～７月13日までの前半300㎡と，平成11年11月１日～平成12年２月４日までの後半1,250㎡の合計1,550㎡実施した。

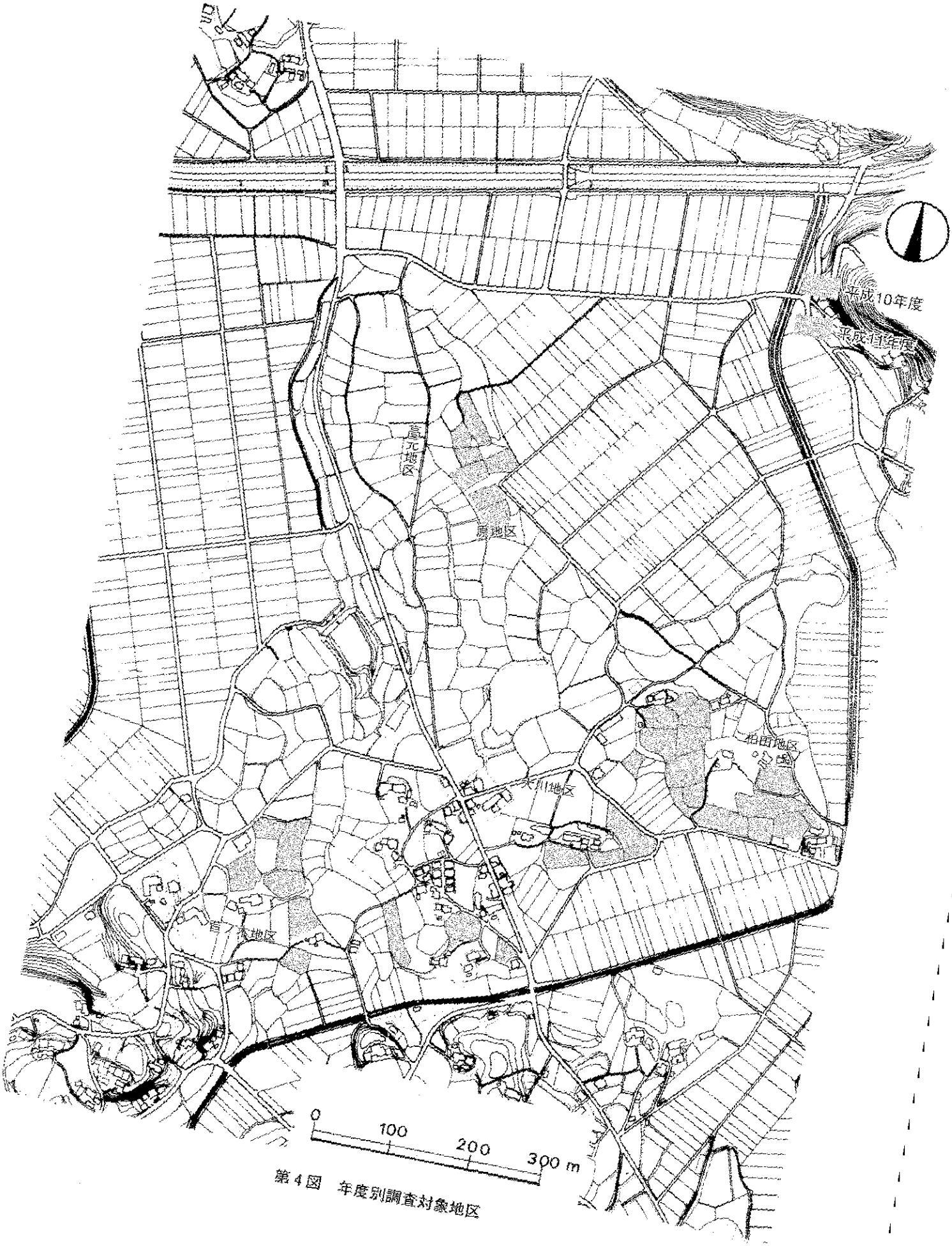
柏田地区は原の辻遺跡の南側の最も東寄りに位置する地域である。北側には大川地区墓域が，西側にはイスラム陶器や初期貿易陶磁が出土した地区が隣接する。１区～５区の調査壙の中で，２区は昭和51年度の範囲確認調査の際，完形に近い弥生中期壺形土器が１個ほぼ直立する形で出土した第20試掘壙が含まれる。また，５区のすぐ南側では，平成５年に安川建設宅地造成に伴う調査で，小児用合口甕棺１基が出土している。しかし，今回は両遺物に関連したものは確認できなかった。２区では旧石器時代の遺物が出土した。

萱ノ木地区は柏田地区とは反対側の一番はずれの，南西寄りにあたる。調査壙は１区から９区まで設定した。１・２区の調査壙は昭和50年の調査で旧石器の遺物が出土した地点で，今回の調査でも剥片石器を中心に出土した。６区は昭和52年度に確認されている濠に近い位置に設定したが，すでに２次的破壊を受けて確認できなかった。８・９区は平成７年，土砂採取に伴う緊急範囲確認調査で部分的に試掘壙が設定され，黒曜石片や土師器などが出土している。今回はさらに東側を調査したが，内容は同じような結果であった。ただ９区埋め土中より，弥生後期終末の大型甕棺破片が出土した。地主の話では畑の整地中，大甕のようなものが出たという話が伝えられている。

調査関係者は以下のとおりである。

調査担当　長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所　長　　田川　肇
課　長　　安楽　勉　　（直接担当者）
文化財保護主事　村川逸郎
〃　　西　信男
課　長（兼）町田一久　（壱岐教育事務所）
係　長（〃）長岡正記　（　　〃　　）

調査協力　芦辺町教育委員会
石田町教育委員会



第4図　年度別調査対象地区

Ⅲ 調　　査

1．大川地区の調査

(1) 調査概要

当該調査地区は，遺跡の南東部に位置し，標高11mの台地上である。すぐ裏手の北側は昭和51年の県文化課による範囲確認調査において弥生時代の墓地が調査され，箱式石棺墓２基，土壙墓２基小児甕棺墓４基が検出され，副葬品も出土している。また調査とは別に，畑の深耕時に規矩鏡片や有鉤銅釧３点，ガラス玉多数が採集されている。

平成７年度の調査は前述した区域の一段低くなった東側部分の調査を実施し，箱式石棺墓５基，石蓋土壙墓および土壙13基，小児甕棺墓７基，溝状遺構５条などが検出され，鉄鋤先，鉄剣，碧玉製管玉，ガラス小玉などが副葬品として出土している。また遺構からではないが，後漢鏡片も出土している。この地区は弥生中期後半から後期の時期に営まれていることが判明した。

町道江里線の南側では平成６年，農道拡幅に伴う調査が実施された際に８世紀から10世紀頃を主体とする陶磁器や須恵器，土師器，滑石製品などが出土している。特に中国産の初期貿易陶磁には越州窯系青磁が多く出土して注目された。

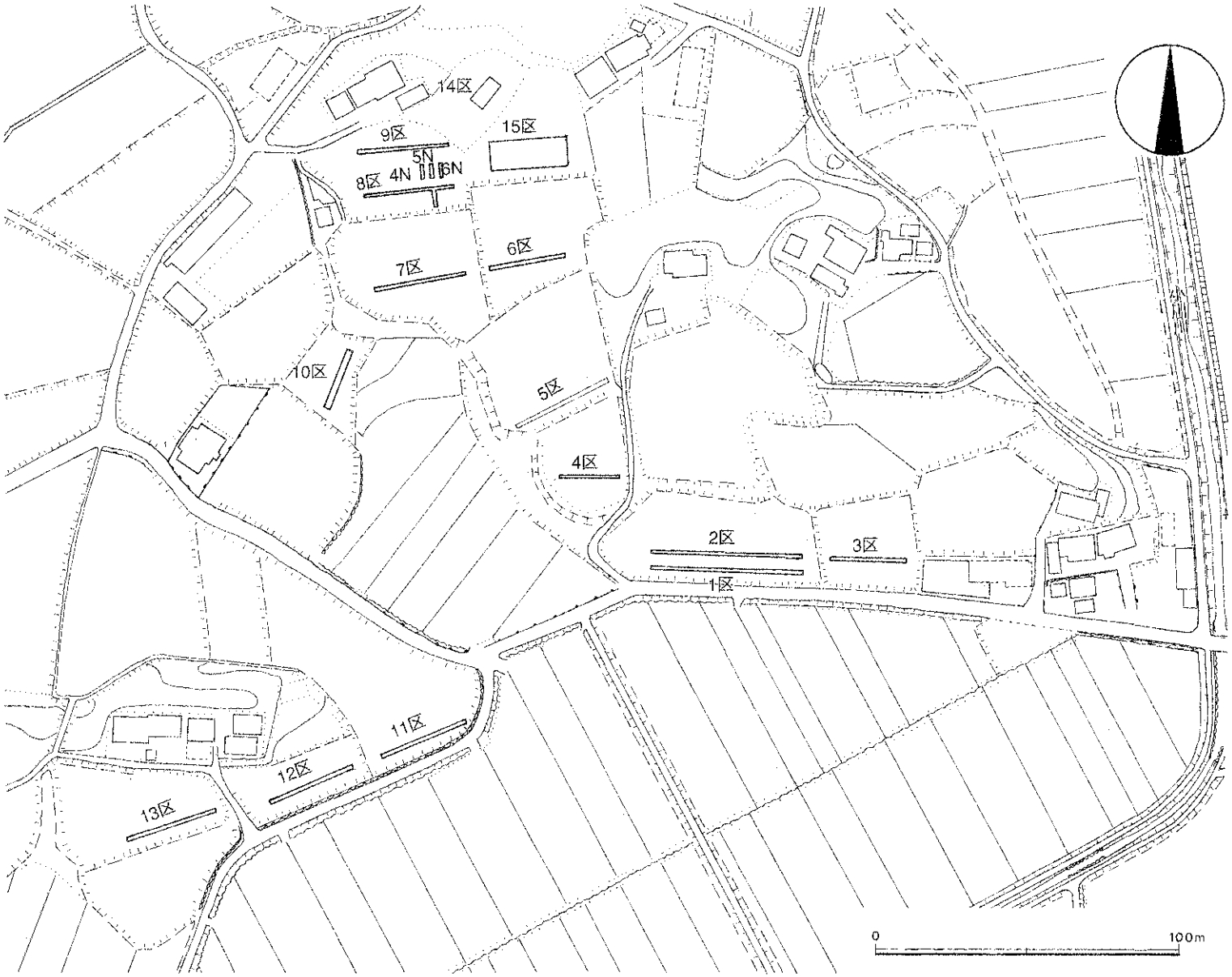
今回の調査は，以上の成果を踏まえてこれらの遺構や遺物が，どこまで拡がりを見せるのかの確認をすることに主眼が置かれた。この区域では１区～14区の調査区を設定した。その中で古代に関係した調査区は１～３区，11～13区で何らかの関わりが認められた。また，８区・９区では中世の遺物や石組遺構が検出された。しかし，調査区のほとんどが水田という制約もあり，１m幅のトレンチの設定ということで遺構の検出については断片的な観察にとどまらざるを得ない面もあった。この地区を全体的に概観するならば，北側の墓地群が南側へ広がることを期待したが，８区で小児甕棺１基を検出しただけであった。弥生の集落跡についても確認できなかった。ただ15区の大トレンチではほとんどが削平を受けていたが，わずかに弥生土器が集中している箇所があった。

古代の遺物も，平成６年時同様出土している。前回は初期貿易陶磁などを中心に，製塩土器や，土師器，須恵器，滑石製品などが出土しているが，今回も傾向は変わらない。しかし最も注目された出土遺物はイスラム陶器である。小破片で１点のみであるが，その意義は大きい。遺構では柱穴も多く確認されたことから，古代の重要な施設が存在していたことが考えられる。この区域では中世の貿易陶磁も出土していることから，多角的な視点からの観察も必要となる。

(2) 土　　層

大川第１区・２区

この２つの区は同一水田で距離も５m離れて設定したため，基本的には層位は変わらない。１層は耕作土層，２層は褐色土層であるが攪乱を受けている。３層は灰黄褐色で，若干の遺物が混じる。４



第５図　大川地区調査区域図（１／2000）

層は暗褐色粘質土層で黒色に近い色調である。この層に遺物は包含される。５層は地山層で遺物は含まれない。調査壙は５ｍを１区とし10区まで設定した。東側10区では４層が削平され薄くなっているが，これは畑の耕作で徐々に削り取られたためである。８区では１層の耕作土層の下に２層の暗褐色土層が残るが，この層は貿易陶磁器などの小破片が含まれるところから中世の層と考えられる。３層の黄褐色粘質土層（地山層）には柱穴が掘り込まれている。

(3) 遺　　構

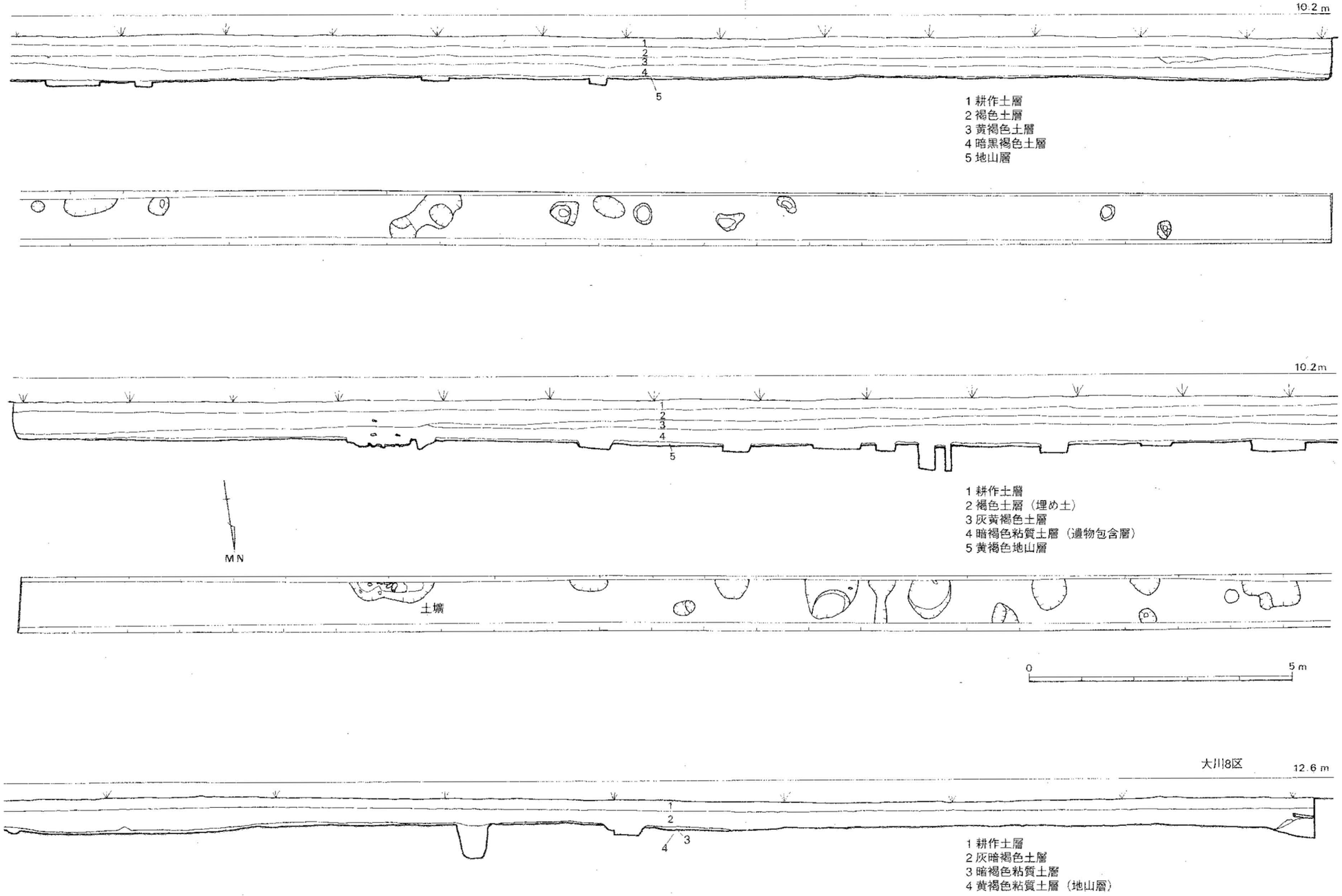
大川地区での古代関係の遺構は１区と２区および12区・13区で柱穴が確認されている。前者では比較的大形の柱穴が目立ち，直径30cmを超えるものもあり掘建柱建物の存在が考えられる。この他に，ここでは土壙が１基検出され，中には玄界灘式製塩土器が見られた。特にこの区域に柱穴は集中するが，一段上った東側の３区では極端に少なくなる。前回の調査では，12区の一段低い東側で遺物も多く出土しており，また人頭大の石を一列に並べた配石状の遺構も確認されている。しかし，今回の12区では削平された部分が多く，２・３の柱穴を検出したのみで，遺物も殆ど得られなかった。13区では西側半分の包含層は削平を受けていたが，東側では柱穴が検出された。ここでも大形建物を窺わせるような柱穴が見られる。遺物は小破片であるが貿易陶磁が出土している。４区から７区では，昭和に入ってからの水田化による削平や瓦焼きのための攪乱を受けており，遺物包含層も見られず，遺構も残っていない。８区では中世の陶磁器類と土師器類が出土しているが，その拡張部からは，第９図に見られるように８区５Ｎ区２層の暗灰褐色土層と黄褐色地山層を階段状に削り，そこに大小の角礫や円礫を貼りつけた集石が検出された。この遺構の拡がりを確認するために，東西側に2.5m離して調査壙を設定した。西側の４Ｎではわずかに石が１個確認されただけであったが，東側では５Ｎと同じような集石状況が見られた。また，この遺構に接して直径25～30cmの柱穴も３個確認され，この階段状の集石遺構が，中世の建物遺構の付属施設としての機能を有するのではないかと考えられる。

８区５では弥生時代中期の小児甕棺１基が検出された。上甕は口縁部だけが残るが，下甕は全体の形状を知ることはできるが，上面は削平を受けている。上下の甕の復原口径は約27.4cmで高さは50cm弱になると思われる。上甕の口縁は端部が若干外に下がり，下甕の口縁は内側にやや内傾し，外側には１条の断面三角形の突帯を有する。小児甕棺はこの他には確認されておらず単独で出土していることから，集団墓からはずれた小児墓として隔絶された埋葬形態をとっているようである。

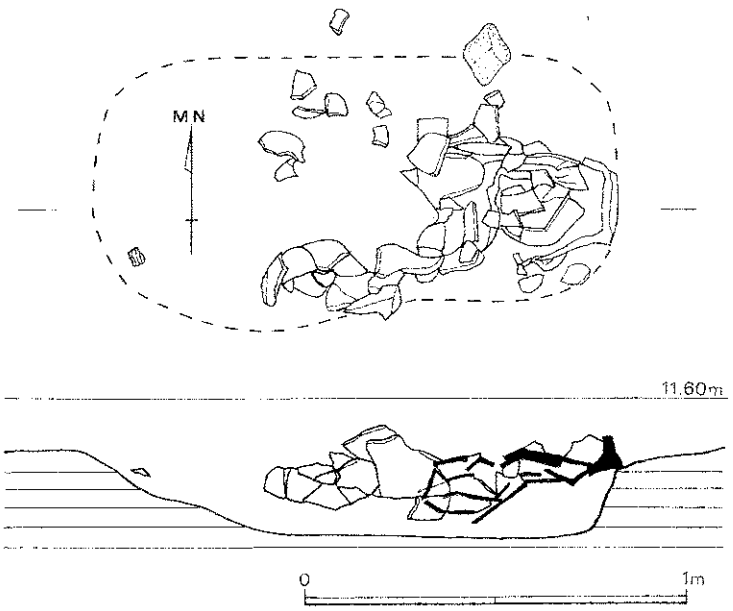
(4) 遺　　物（第10～第14図）

①輸入陶磁器類

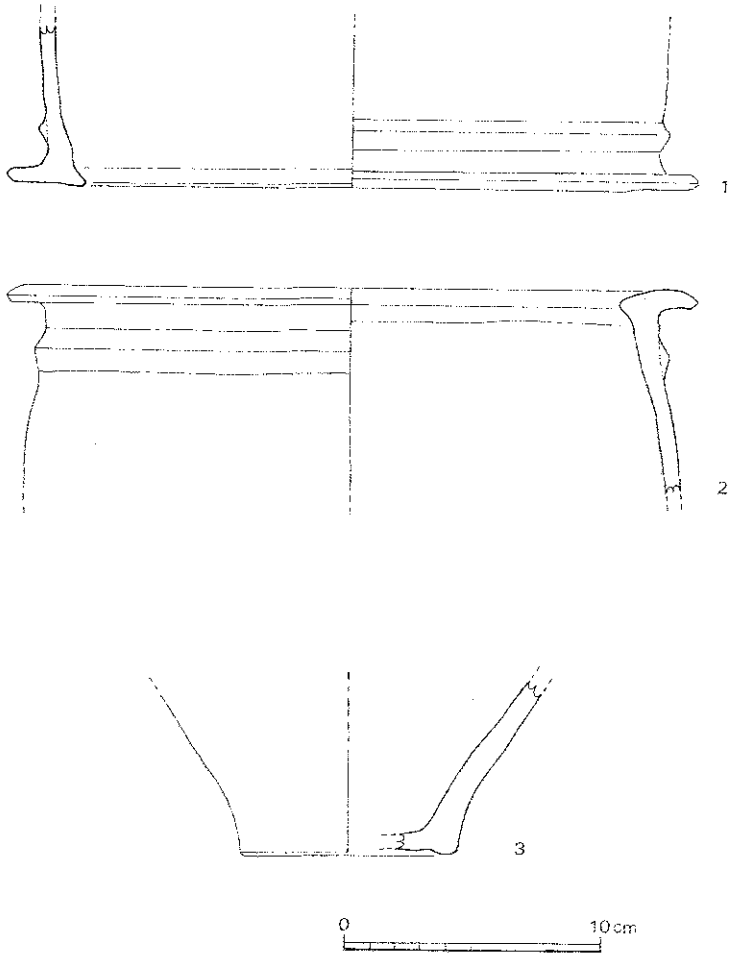
１～３区及び12，13区から出土した遺物は，前回の平成６年度に出土した遺物と類似点が多い。そこで先ず前回の遺物についてふりかえってみる。[注1]第10図は代表的な遺物をまとめたものである。初期貿易陶磁は総計54点が出土したことが報告されている。その中で１～５に示した越州窯系青磁は34点である。また６～８の白磁は荊州・定窯系に分類されるが，別系統のものも含まれて出土している。



第6図　大川1・8区土層及び遺構実測図（1／80）



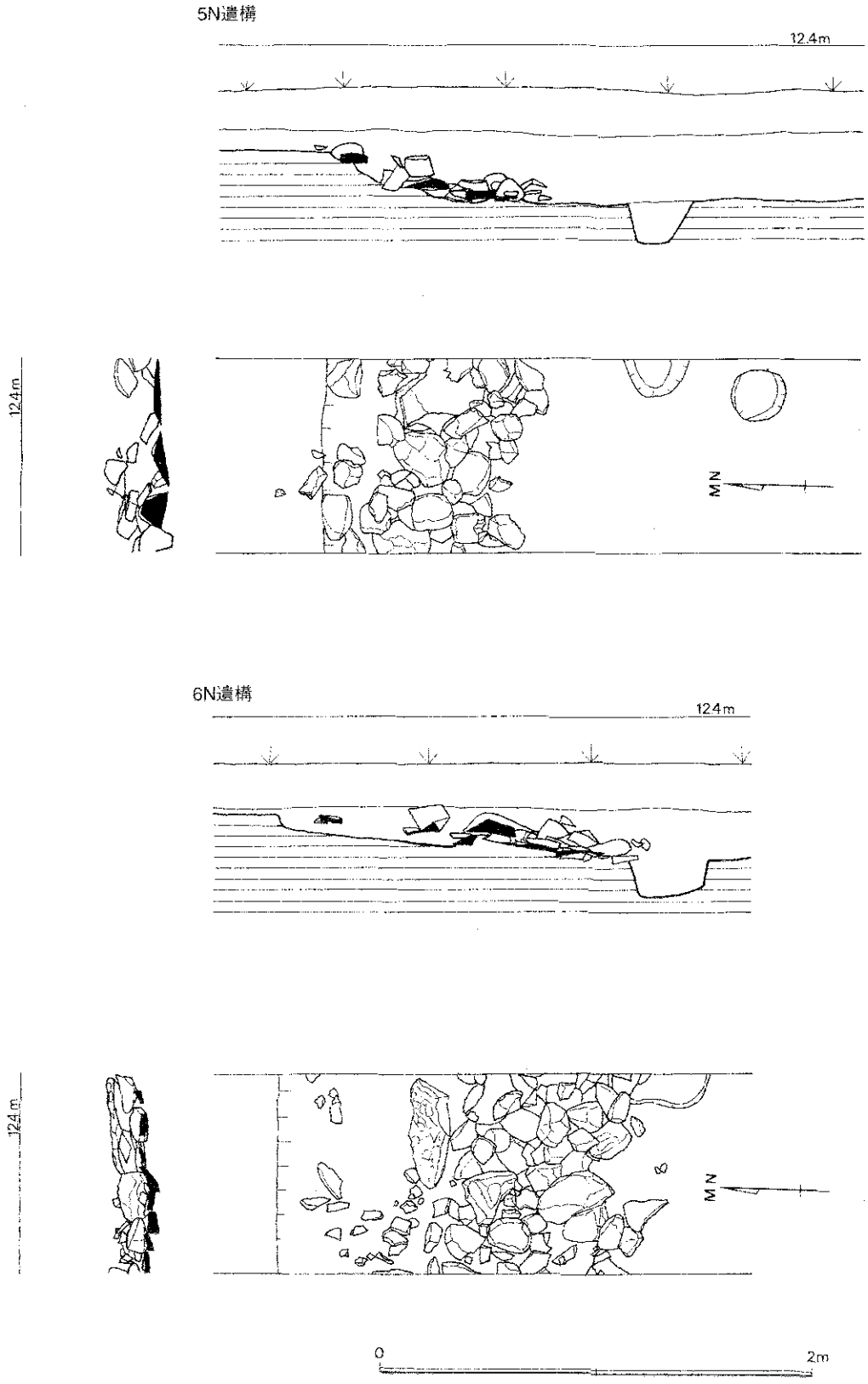
第７図　大川８区５出土小児甕棺墓（１／20）



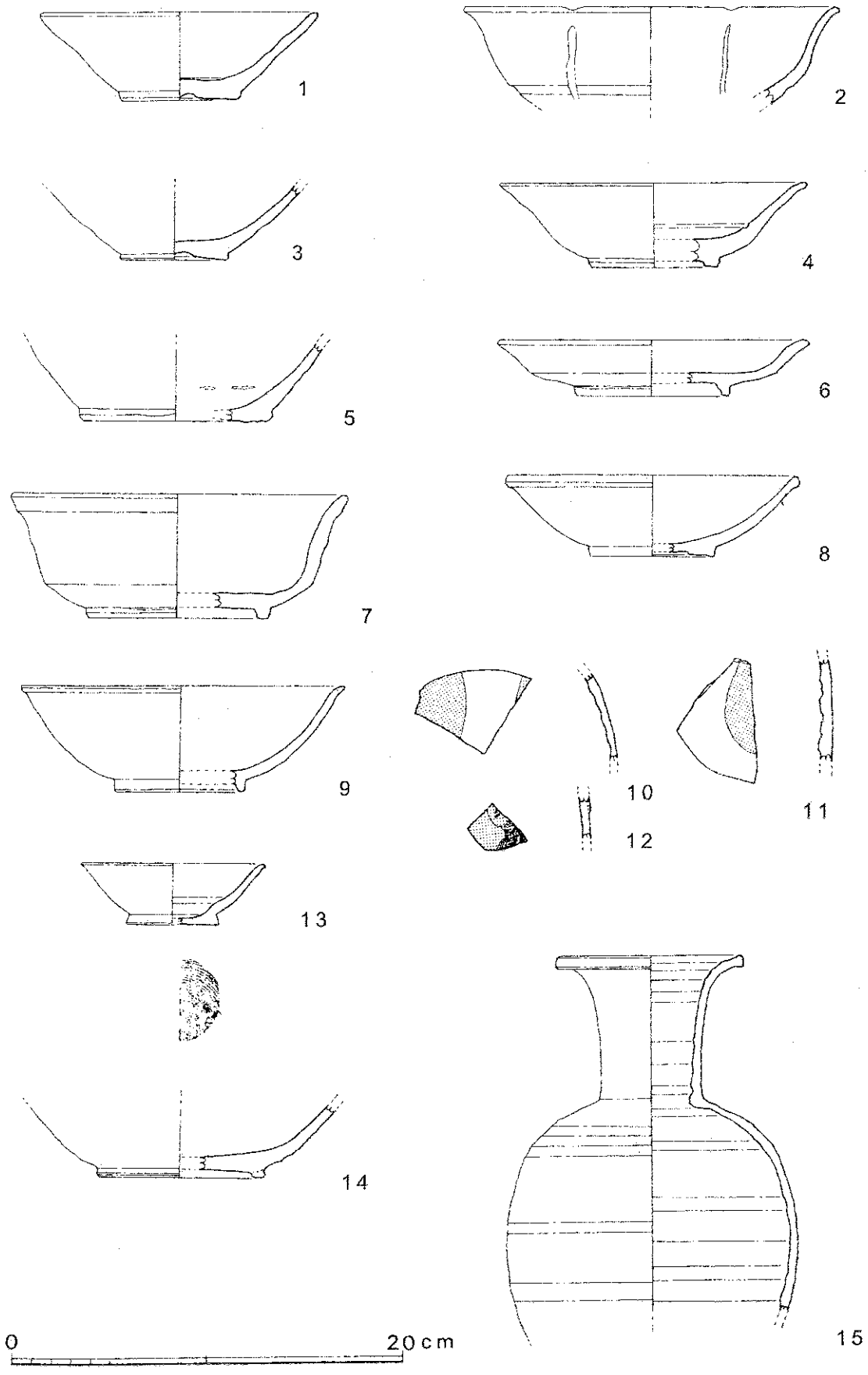
第８図　大川８区５出土小児合口甕棺実測図（１／３）

10～12は長沙窯系黄釉褐彩水注で褐釉がかかる。報告者によると３点とも同一個体ではないかと考えられている。12～15は国産施釉陶器である。12は釉は暗灰色に変化し，器肉は瓦質に近い須恵質である。洛西系との指摘も受けている。13は淡緑色の釉がかかる黄色の斑が認められる。胎土は軟質で黄褐色を呈し，糸切の円盤状高台である。以上が前回の初期貿易陶磁の概要である。

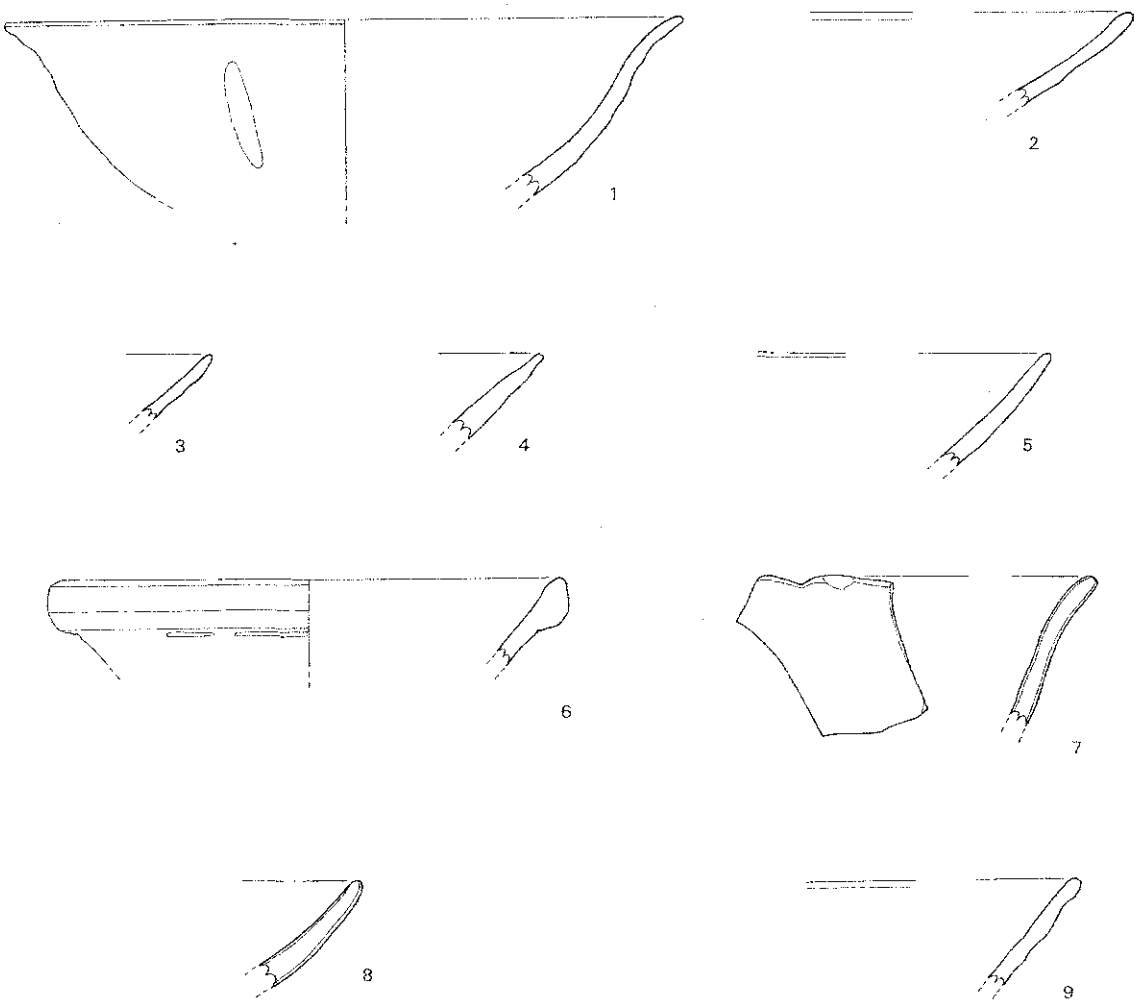
今回の初期貿易陶磁は，第11図に図示したが，小破片も含めると数十点に及ぶ。出土地点は１区と２区が主体を占める。１は越州窯系青磁で復原径18cmを測る碗である。口縁から体部にかけて残り，口縁は輪花になっている。やや黄色がかって発色し内外面とも貫入が認められる。２と３も越州窯系青磁の碗小片である。やや黄緑色に発色しているが３の釉にはムラがある。４は２区Ⅳ層からの出土で外面には象眼かと思われるような細い線が入るがはっきりしない。輸入陶磁器には間違いないが産地不明である。５は２区Ⅲ層出土で碗である。素地がやや軟質である。内外面に明瞭な貫入が認められる。５は12区出土の白磁碗Ⅳ－１ａ類の玉縁状口縁である。外面の釉はあまりよくなく，わずかに露胎が観察される。７は13区出土の白磁碗で輪花が認められる。仕上がりは非常によい。８は２区Ⅱ層出土の明染付で淡

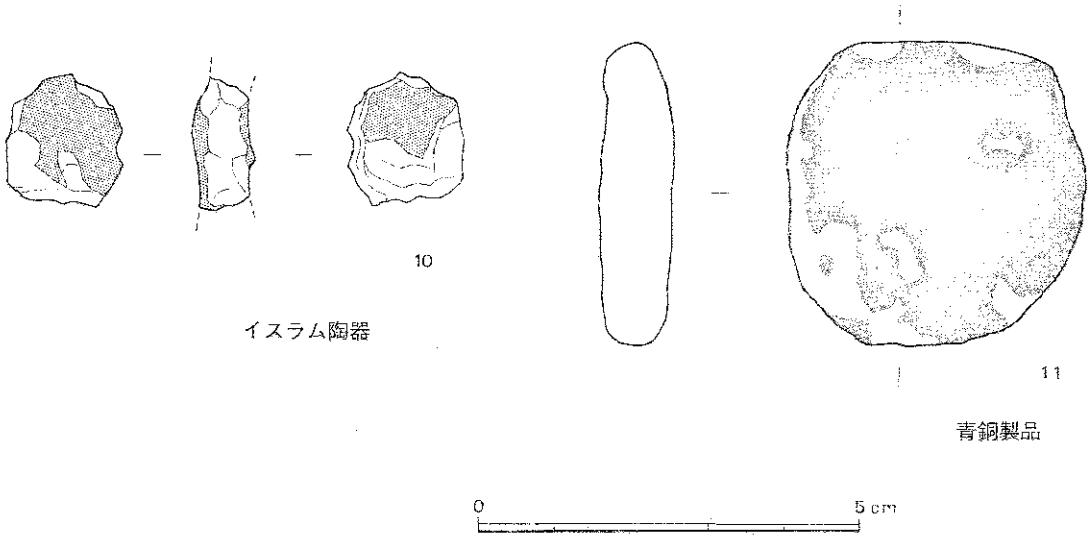


第９図　大川８区５Ｎ６Ｎ遺構実測図（１／30）

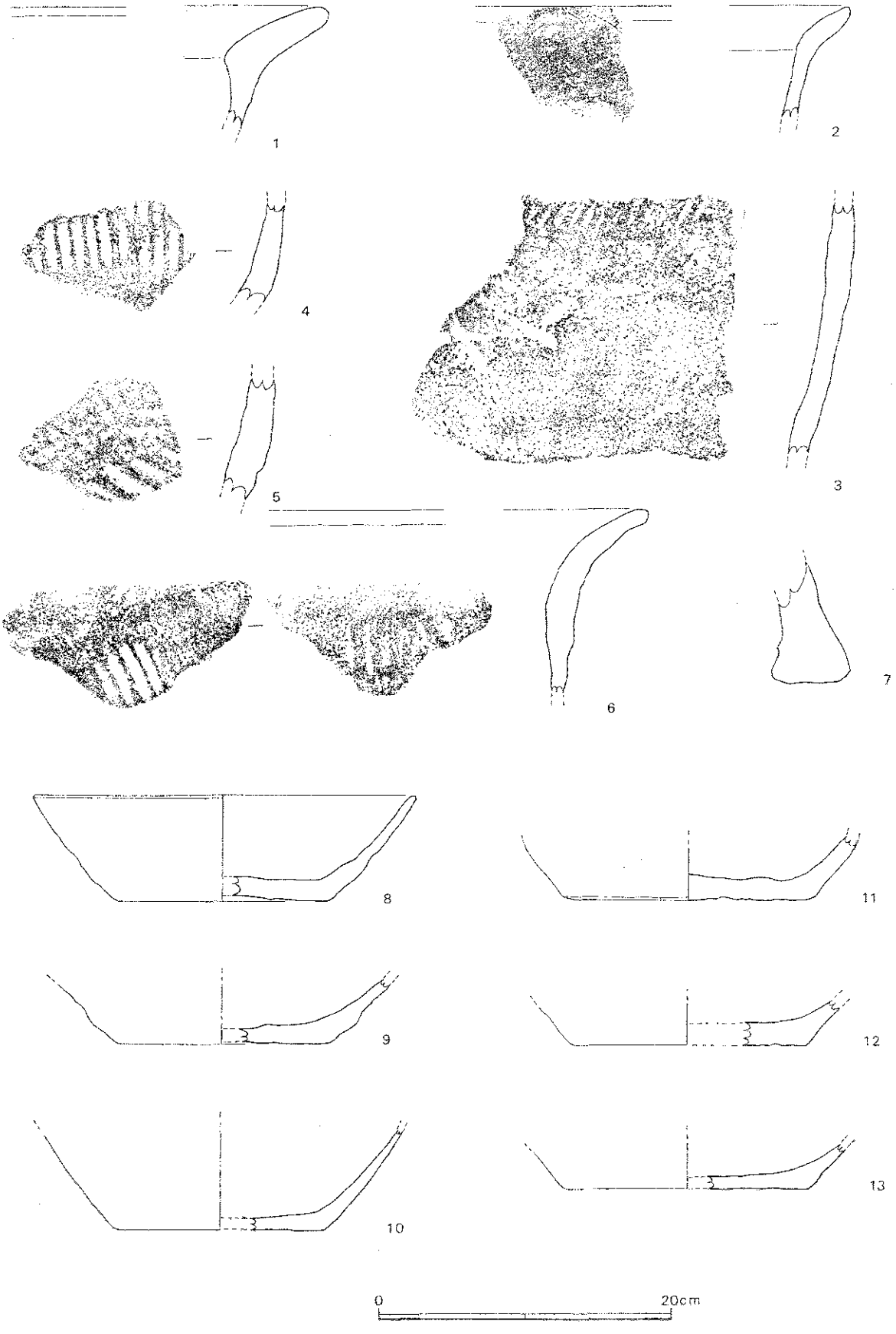


第10図　平成６年度大川地区出土遺物（１／３）（注１より）

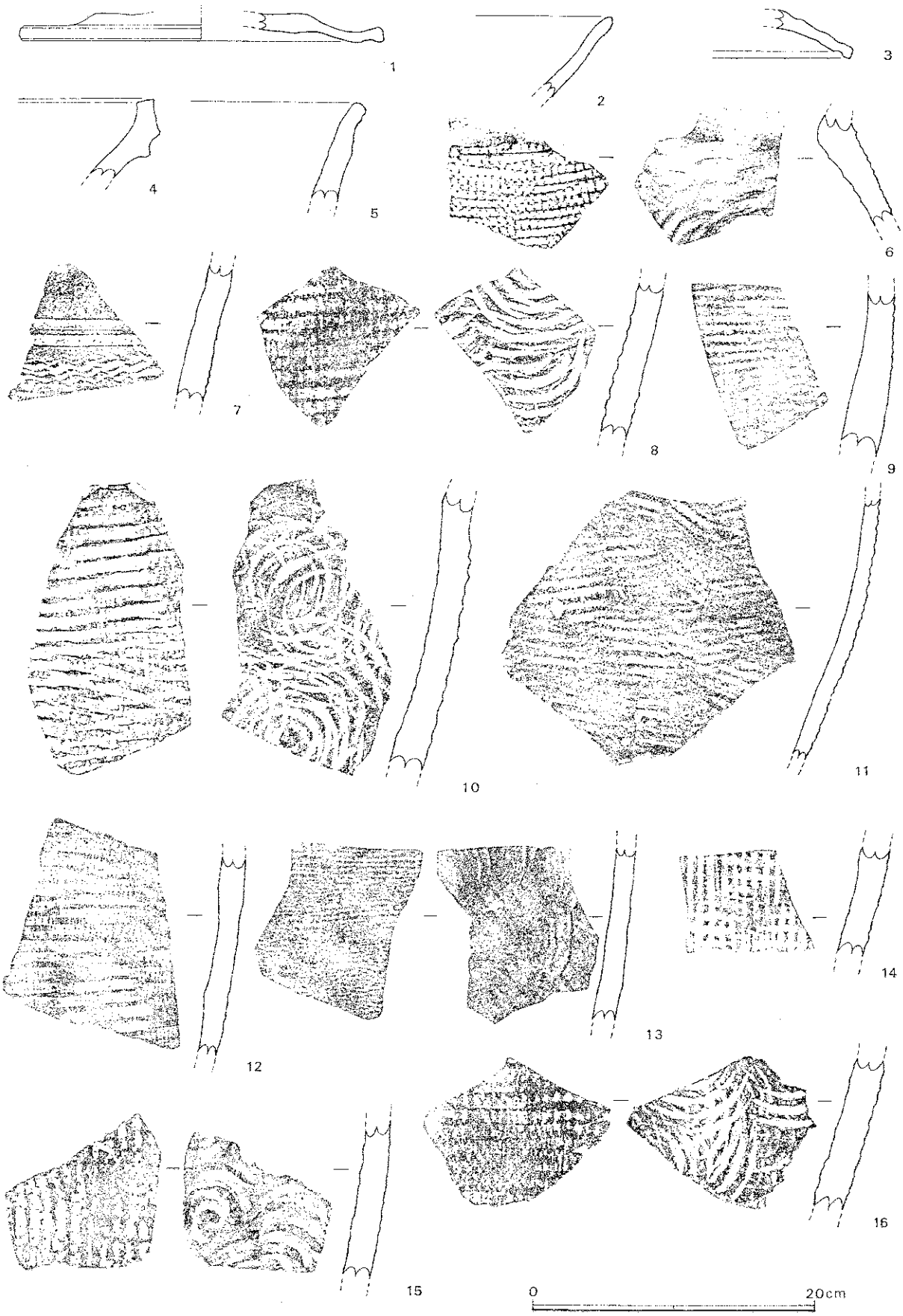




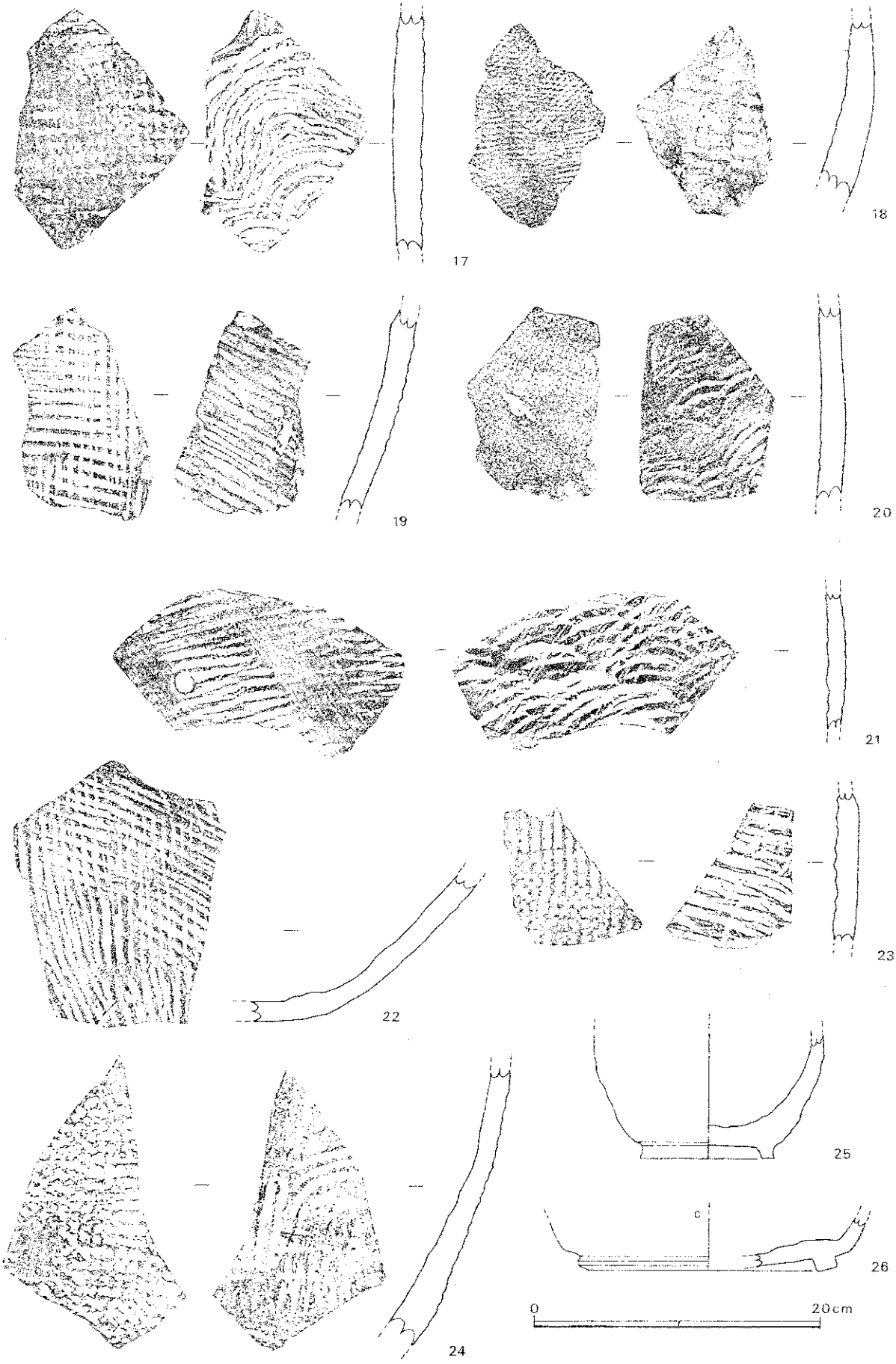
第11図　大川地区出土遺物実測図①（輸入陶磁器及びイスラム陶器）



第12図　大川地区出土土器実測図②（1／2）



第13図　大川地区出土土器実測図③（1／2）



第14図　大川地区出土土器実測図④（１／２）

い呉須の上に釉が厚くかかる。内面にも口縁部に呉須がかかる。形状は碗と思われる。9は1区Ⅳ層出土の碗であるが，素地にしまりがなく軽いことや釉ののりも悪く表面がザラついていることなどから，古瀬戸の可能性も考えられる。

②イスラム陶器（第11図10）

10はイスラム陶器片でわずか1.5cmの楕円形の大きさである。やや軟質の黄灰色を帯びた胎土にルリ色の透明釉が厚くかかっている。表面はガラス質で光沢がある。部位は壺の胴部を飾る貼付綱文にあたる。イスラム陶器は，これまでに大宰府条坊跡や筑後国府跡，福岡市多々良込田遺跡，博多築港1次，鴻臚館跡などで出土しているにすぎない。今回の出土は，1区4のⅣ層からであり，壱岐においては初例にあたる。他の遺物とも比較してみると8～9世紀の可能性が大きい。

③青銅器　（第11図11）

11は1区8のⅣ層から出土。直径約4cmの楕円形で重さ70.4g，形の割には重たい。表面には全体的に緑青が見られるが，銅としての本来のキラキラした部分もわずかに観察される。完全な円でもなくやや凹凸が見られることから完成品でもない。おそらく素材と考えられる。

④土師器類（第12図1～13）

土師器類は小破片が多く出土しているが，復原できるものはここに示した器種に限られる。1は甕口縁で外側に大きく開き端部は尖りぎみに丸くおさまる。内面は頸部から下にケズリ痕が見られる。胎土には白い砂粒や金雲母が含まれる。色調は橙。2は1を小ぶりにした感じで口縁はゆるく外反する。胎土には白い砂粒や赤色土，金雲母などを含む。3は口縁部下に斜に刻みを施すが，端部を欠く器壁は粗く凹凸があり，胎土には石英や長石を含み色調は茶褐色を呈する。4～6は製塩土器と考えられる。1区7の土壙から集中して出土した。6は口縁で外反し端部は丸くおさめられている。内外面とも胴部上面からタタキ痕が認められる。4も同一であるが，タテのタタキが強調されているが，よく観察すると横にも縄目が入っていることがわかる。5はほぼ底部に近い部分である。縄目状のタタキ痕が残る。以上の資料は西九州地域でもかなり出土が知られるようになり，玄界灘式製塩土器とよばれている。前回は1点の資料しか確認されていないが，面的な調査を行えば資料数は増えるものと思われる。壱岐島では勝本町のカラカミ遺跡や大清水池で断片的に確認されているが，同町北部の串山ミルメ浦遺跡からは，6世紀後半から8世紀にかけての良好な資料が得られている。7はカマドの下部の部分と考えられる。底は平坦になりやや内湾ぎみに立ち上がる。胎土は細かな土を精選し，金雲母も混じる。8～13は杯である。13の3区出土を除いて1区からの出土である。ロクロ成形で底はヘラ切りである。土師器の時期については玄界灘式製塩土器や杯の関係からしても8世紀以降と考えられよう。

⑤須恵器（第13図1～第14図26）

甕胴部と杯の破片が出土している。前回は古墳時代後半のものと，8世紀末から9世紀にかけてのものが得られている。今回の資料も同時期と考えてよい。1は杯蓋である。中程に段をもち口縁部まで平坦で口唇部もわずかに見分けられる程度である。3は1よりもやや深くなっているが，口縁部の

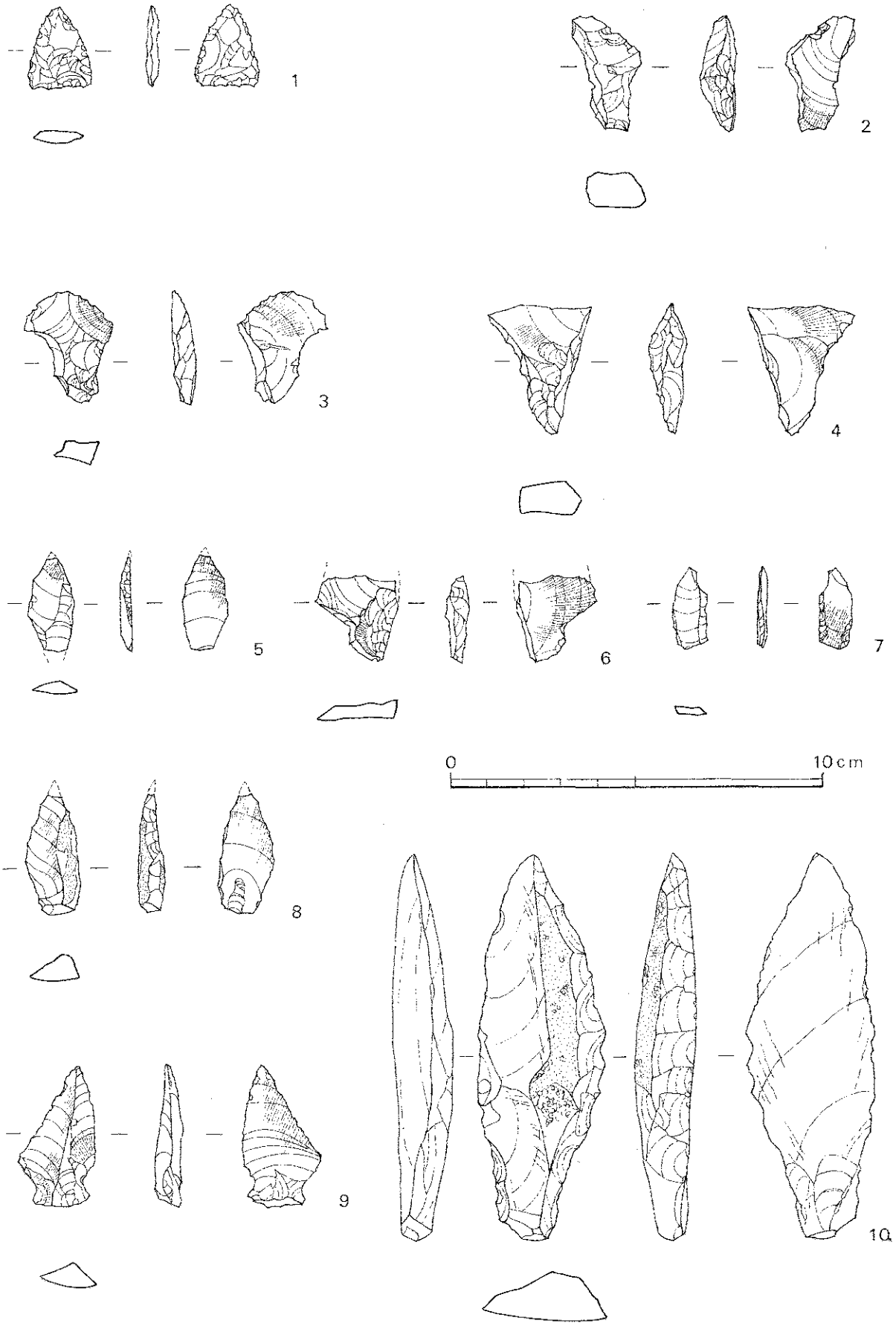
特徴は浅い。2は碗で口縁はわずかに外反している。4は13区出土で口縁に太い凹文が2条巡り形状は鉢形を呈すると思われる。須恵器というより瓦質土器として据えられるもので，時期的には下るものと思われる。6は甕の頸部から胴部にかけての部分で器表は格子目状のタタキ，内面には青海波タタキである。7は甕頸部である。外面に2本の浅い沈線とその下に櫛描の波状文が施されている。内面は黒色である。8～24は甕胴部片である。ほとんどの土器が外器に横平行タタキか格子目タタキを施している。また内面には青海波タタキで調整されている。22と24は底部に近い破片で，22は平行タタキを重ねて格子目状に仕上げている。内面には平行タタキが部分的に施されている。25は小形壺の下半部と思われる。丁寧なロクロ仕上げで高台が付く。見込には細い十字状の窯印が入る。26は13区4のⅢ層出土で焼は甘くやや瓦質がかっている高台杯である。4と同様中世まで下がると考えられる。

⑥石　　器（第15図1～第18図35）

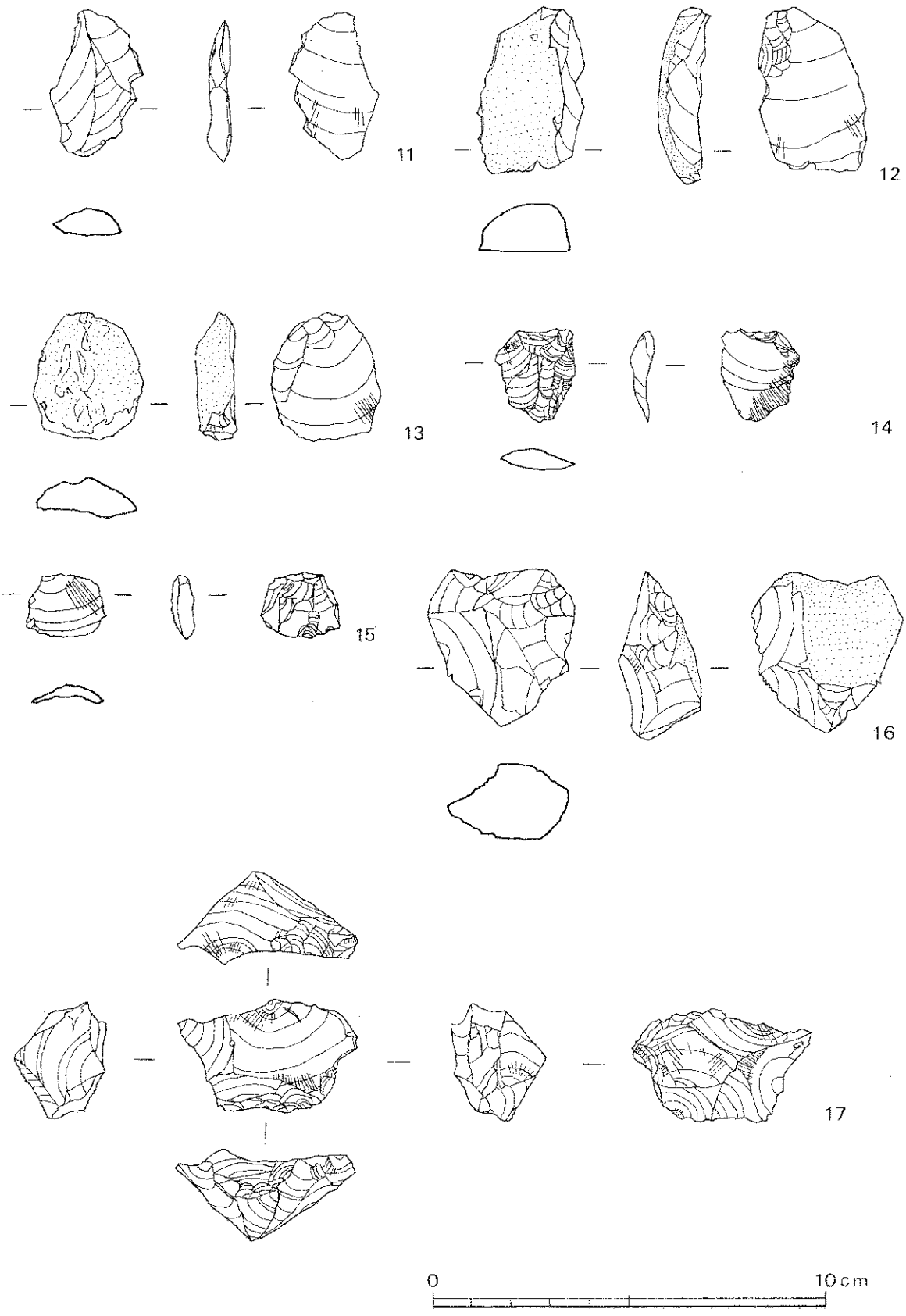
大川地区からは黒曜石を主体とする石器群が見られる。しかし，そのほとんどは旧石器時代に属するものである。残念ながら，旧石器時代の層は攪乱を受けておりプライマリーな層からの石器は得られていないが図示しておく。

1は5区表土層出土で黒曜石製の無茎石鏃である。全体が押圧剥離を受けうすく仕上げてある。黒曜石も灰色がかっており島外産と考えられる。縄文時代の所産と思われるが，原の辻遺跡ではこれまで数十例の出土が知られている。2～4は台形様石器，3は部厚い剥片を利用し，切断して両側面を丁寧に調整している。刃部は斜めにつけている。端部小剥離面が残るが使用痕の判断はつかない。2は8区Ⅱ層出土で良質の半透明な黒曜石を使用。基部の両側縁は打面調整され，刃部はややカーブを描き左側が尖るように突出す。いわゆる典型的な原の辻型台形様石器である。4は厚手の良質の黒曜石の剥片を用い二等辺三角形状に仕上げている。両側縁とも丁寧に何度も調整剥離し，刃部は両面から1回の剥離を行い，鋭利に仕上げている。5～8は小形の黒曜石製ナイフ型石器である。5はわずかに基部を欠くが，刃潰し加工を両側縁に施し片面は斜めに刃をつけている。6は先端部を欠失しているが，基部は両側縁にブランティングを行っている。形状から台形様石器とも考えられる。7は基部を欠き両側縁にブランティングが残る。刃部は先端部にやや内湾して付けられている。8はナイフにしては厚手の剥片が用いられ，表面に一部自然面を残す。突端部を若干欠くもののほぼ完形で，刃部は斜行し，基部は切断されブランティングを受けている。9は2区5Ⅲ層出土で縦長の良質の黒曜石を用い，片面は1回の剥離で，もう一方は2回の剥離で三角状に仕上げている。打撃面は平坦で両側からノッチを加え，剥片尖頭器状に仕上げている。原の辻遺跡では新資料である。10は8区6Ⅱ層出土でサヌカイト製である。主要剥離面は縦に1回で剥離されている。裏面は中央に自然面が残り2本の陵線が入る。右側面は丁寧に剥離調整され，左側面は上半分は刃部として使用され下部は剥離調製され，基部は細くなっている。形状としてはナイフ型石器とも考えられるが，大型製品であり，剥片尖頭器と考えられなくもない。類似形態に長与町堂崎遺跡出土石器がある。11から35は剥片類である。16と17と24は不定形な石核と思われる。26から29は典型的な縦長剥片であり一部使用痕が認められる。これらの石器の表面に一部自然面が認められるが，いずれも島外産の小形円礫の良質な黒曜石が使用されている。

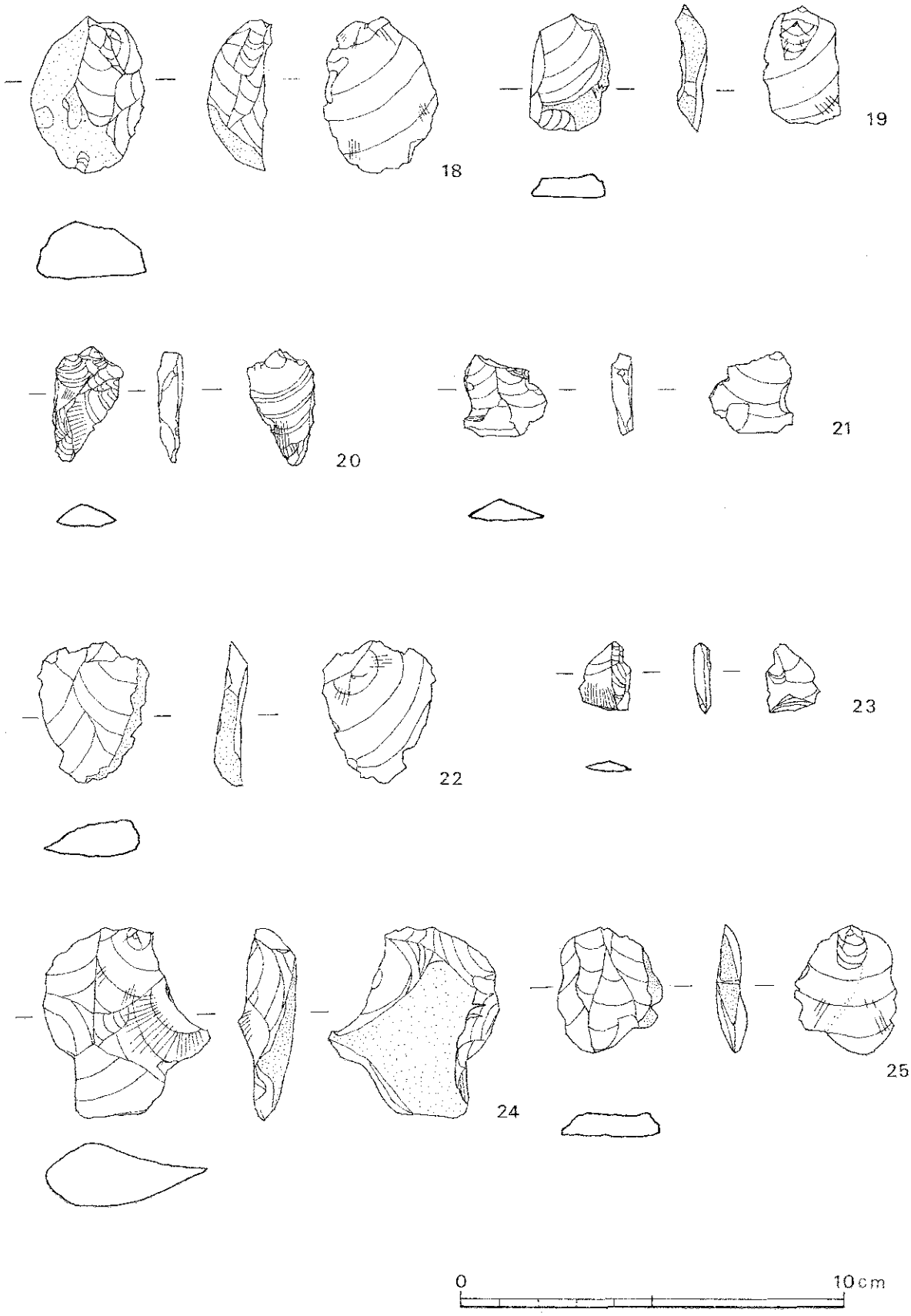
注1　原の辻遺跡調査事務所調査報告書第1集「原の辻遺跡」長崎県教育委員会1997



第15図　大川地区出土石器実測図①（2／3）



第16図　大川地区出土石器実測図②（２／３）



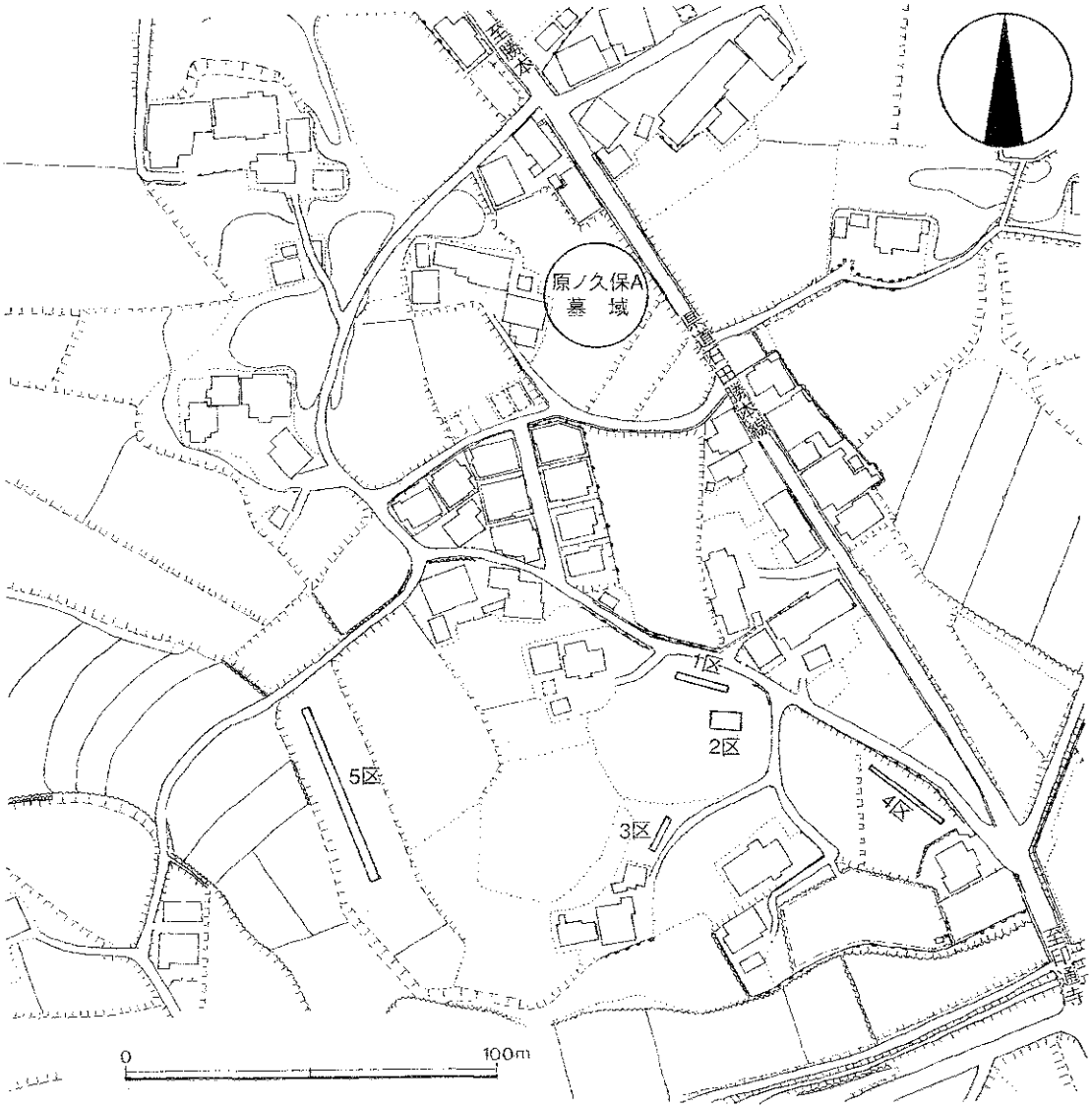
第17図　大川地区出土石器実測図③（２／３）

第18図　大川地区出土石器実測図④（2／3）

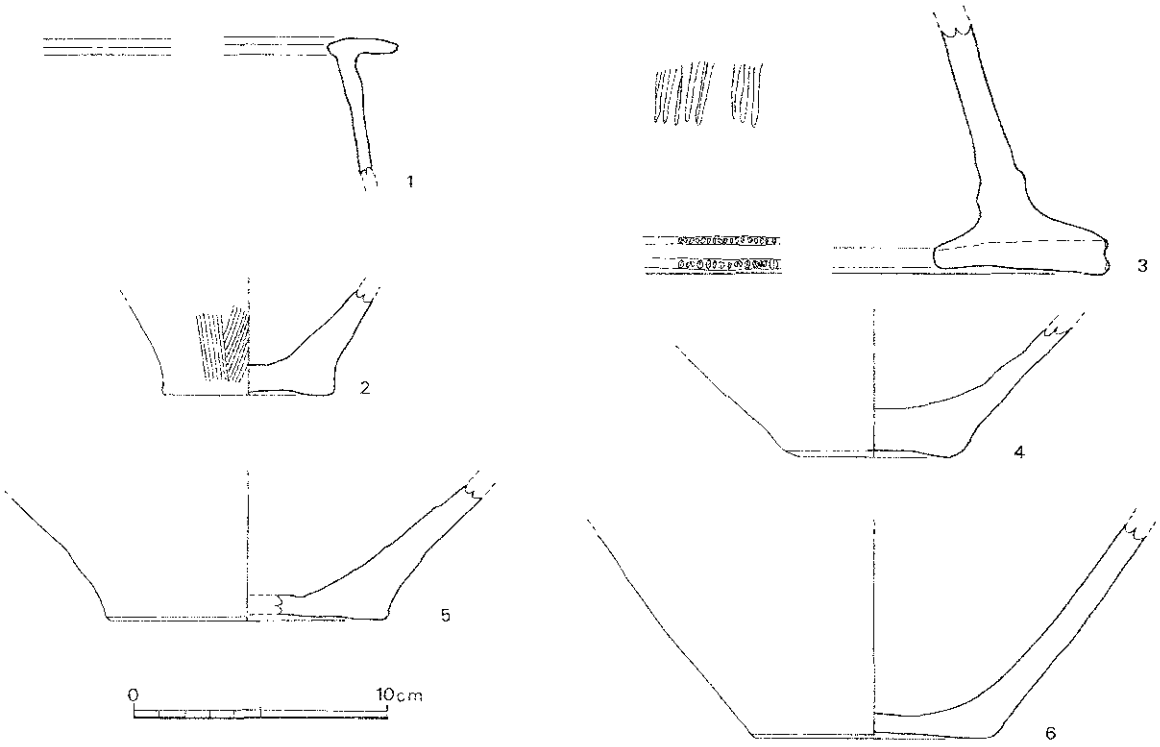
2．原ノ久保Ａ地区の調査

(1) 調査概要（第19図）

原ノ久保地区は丘陵の基部にあたり，小川川の北側標高約13～15mの区域である。平成８年度の墓域調査では，箱式石棺墓13基，石蓋土壙墓５基，土壙墓１基，土壙８基，甕棺３基が検出されたが，調査区域は部分的であり，現小野氏の宅地にも拡がると考えられる。副葬品類は後漢鏡や小形仿製鏡，ガラス製勾玉，丸玉，筒形不明青銅器などがある。今回の調査地点は前回のやや南側に５箇所の調査区を設定した。１区・２区は，地主の中島氏の話では，昭和30年代に畑の整地をした際，石棺や甕が出てきたという。確かにこの話を裏付けるように，畑の隅に板状の石棺材と思われる石や弥生中期の甕棺の破片と思われるものが置かれていた。調査の結果１～４区の調査区の中で，２区以外は表土層のすぐ下は地山，もしくは埋め土であり，包含層は削平されていた。２区は５m×８mの調査区であ



第19図　原ノ久保Ａ地区調査地域図（１／2000）



第20図　原ノ久保Ａ２区周辺表面採集の土器実測図

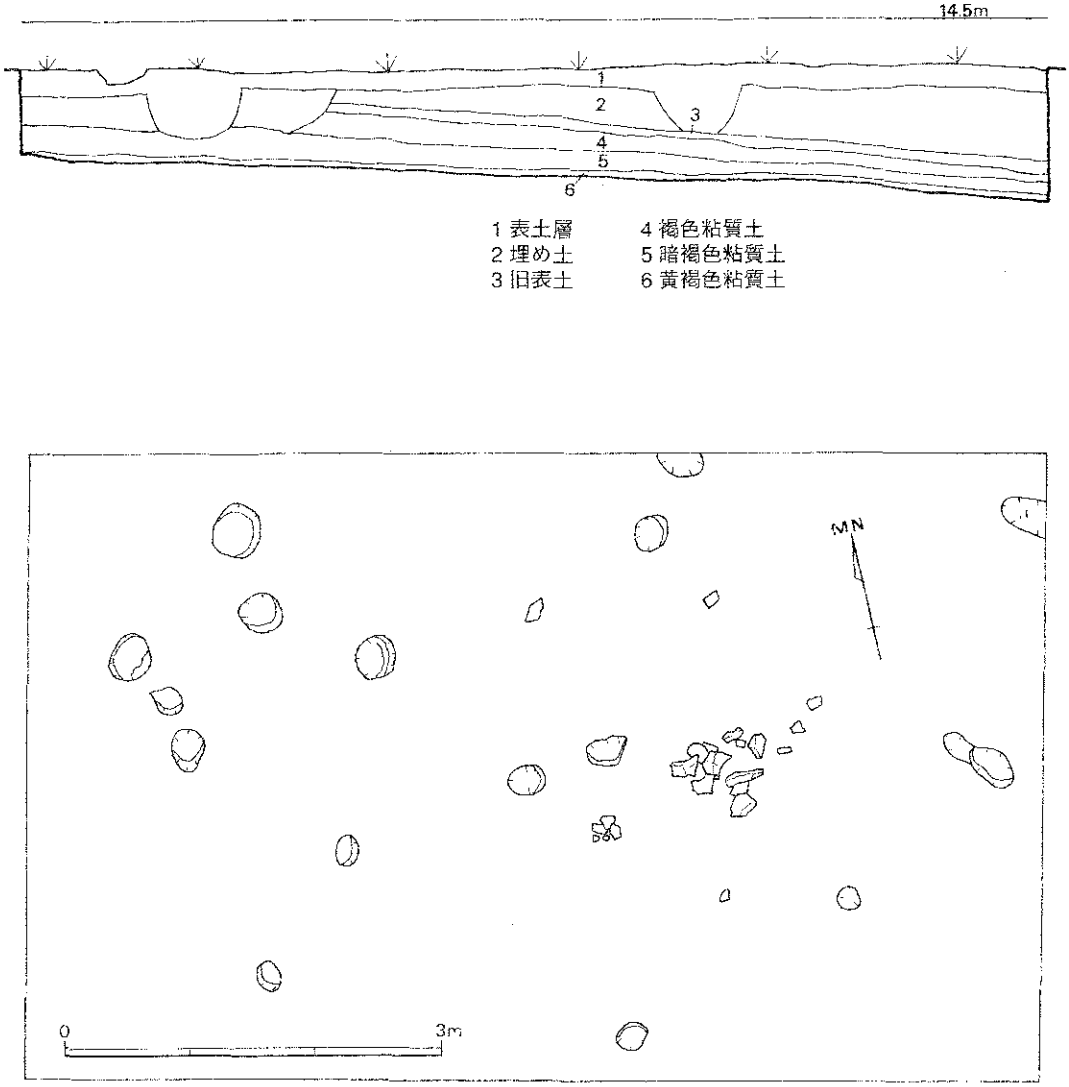
るが，中央部に石棺材と思われる石と，弥生土器小片がわずかに残っているだけであった。しかし，この畑は柿が植えてあり，広い面積を有するので墓地として残っている可能性は大きい。５区は丘陵部に谷状に入り込む地形に接して設定した。ここも一番端にあたり造成を受け，弥生土器の小破片がわずかに出土したにすぎなかった。

(2) 土　　層（第21図）

２区の土層は１層は耕作土層で２層は西側が約20cm，東側が約50cm堆積した埋め土が見られ，この層には以前にみかんが植えられていた穴が明瞭に残る。３層は有機物を含んだ層で旧表土層と考えられる。旧地形は西から東に向かって傾斜しており，現在は盛土され表面は水平に保たれている。４層はやや明るい褐色の粘質土で，小さな破砕礫を多く含み，攪乱を受けている。５層は暗褐色粘質土でしまっている。この層は弥生時代の包含層であり，柱穴もこの層から掘られている。６層は黄褐色粘質土層で，ややふんわりとしている地山層である。

(3) 遺　　構（第21図）

調査壙の中央南寄りに弥生土器と割れた石が局所的に集まった部分がある。土器は小破片で時期をはっきり確定できない。石はやや厚みがあり，通常使用されている石棺材とも異なっている。しかし



第21図　原ノ久保Ａ２区土層及び遺構実測図（１／60）

先にも述べたように，この畑からかつて石棺が出土しており，石棺墓とのつながりも否定できない。また柱穴が全体で15個検出されている。掘り込みの状況などは見られないし，プランもはっきりしない。しかし，住居跡の可能性も考えられる。

(4) 遺　　物（第20図１～６）

１～６の土器は発掘調査で出土したものではない。かつて畑を整地した際に，石棺などと一緒に掘り出されたもので，地主によって畑の隅に置かれていたものである。１は鋤先状を呈した口縁で，外側に若干たれ，端部は丸くおさめられている。内外面とも風化を受け調整痕は不明である。胎土には石英，長石，金雲母を含む。色調は橙。２は大型の口縁部破片である。口縁から胴部への傾斜から合口甕棺の上甕になると考えられるが，形状は鉢に近いかも知れない。口縁平坦部は幅6.5cmを測り，内側に張り出し丸くおさめれている。口縁部の製作技法は一回平坦面を作り出した上に，さらに粘土を接ぎ足し両端部を細くしている。外面は，約４cm幅で細いヘラ状工具で暗文風に仕上げている。胎土には石英，長石，金雲母を含み，焼成は良好。色調はにぶい橙を呈する。３～６は底部である。３は甕底部で外側は丁寧なハケ仕上げ，底はわずかな上げ底である。４，５は大形の甕底部で甕棺の可能性が大きい。４は底中央がわずかに凹でいる。立ち上がりの状況から大形の壺と考えられる。

3．高元・原地区の調査

(1) 調査概要（第22図）

舌状に北に延びた丘陵部東側の中央部には，地形が若干谷状に入り込み，くびれている部分が見られる。そこで，このあたりには区画溝などの遺構が存在するのではないかという予想のもとに，1～7区の調査区を南北に沿った形で設定した。

一番北側のⅠ区は1m×50mの面積で設定した。その結果，竪穴住居跡と思われる遺構や柱穴が見られ，土器片も多く出土している。南側は地形が落ち込んでいるが，土層からは沼状の堆積が観察された。2区では柱穴が多量に検出されているが，遺物包含層はほとんど削平されている。遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土している。3区は2区よりも一段低い位置にあたるが，ここも遺物包含層は削平を受けており，柱穴がわずかに残るだけである。4～6区では弥生時代中期から後期，および古墳時代初頭の遺物が良好な状態で出土した。特に6区では貝層がブロック状に残りハマグリ，サザエ，アワビなどが含まれる。7区は一番低い谷状の標高7.4mの水田に4m×25mの面積で調査壙を設定した。この水田は休耕田ということもあり広い面積をとった。調査の結果，多量の遺物の出土があった。半分は低湿地状の性格で，地山は北から南へ傾斜し，東側の未調査の区域にも落ち込む状況が見られ，台地と低地が接する部分にあたると考えられる。遺物は弥生時代中期から後期が多量に混在するが，深い部分では中期が多くなる。古墳時代前期の遺物も出土している。墓地は確認されていないが，7区5の北側壁寄りでは，ガラス製小玉が250個以上まとまって出土している。この7区では朝鮮半島系の土器や，銅鏃2点，石庖丁なども出土している。

(2) 土層及び遺構

①1区土層及び遺構（第24図）

1区の基本土層は1層が表土層，2層が暗褐色土層で遺物も包含される。3層は黒色土層で主要包含層となる。柱穴は3層から掘り込まれ，4層の黄褐色地山層に達している。西側では2層の堆積はうすくなり削平されている。反対の東側では2層の下部に緑灰色の土が堆積し，かつて水が溜り，沼状になったことを示している。このことは，調査壙を設定したすぐ南に小さな池があることと，北東部に小さな谷状のくぼ地が見られることから，水路状になり水が溜っていたと考えられる。

土層は図示していないが，Ⅰ区4では柱穴が認められ，竪穴住居跡と思われる掘り込みと焼土が認められる。またⅠ区2では土壙も出土している。

②2区の土層及び遺構（第24図）

2区は標高9.20mの休耕田に4m×25mの面積で設定した。1層は表土層，2層は褐色粘質土層がうすく入るが2区3の所で削平されている。3層は暗褐色粘質土層で遺物包含層であり，この層から下の黄褐色の地山層に柱穴が掘り込まれている。したがって，この区の遺物包含層は北半分は削平されて，表土層の下に遺構面が現れるという感じである。遺構は第24図のように，柱穴が多く検出され

第22図　高元・原地区の調査区域図（1／2000）

ているが，焼土は検出されていない。柱穴の配置もかなり複雑で，プランとして捉えられない面がある。明確な竪穴住居と認められるものもない。遺物は弥生時代後期の土器が点在して見られるほか，古墳時代初頭の布留式土器が２区５に２個体分まとまって出土し，そのうちの１個体は不整形なピットに入っていた。土壙と思われるものも検出されているが，遺物などは出土していない。

③３区の土層及び遺物（第23図）

３区は標高8.40mの休耕田に10m×10mの面積で設定した。土層は表土の下に２層の黄褐色土層があるものの埋め土であり，全面的に遺物包含層は削平されている。地山の岩盤を切り込んで柱穴が残っているものの，10cm程度の深度しかなく，全体を把握するまでは至らない。

④４区の土層（第24図）

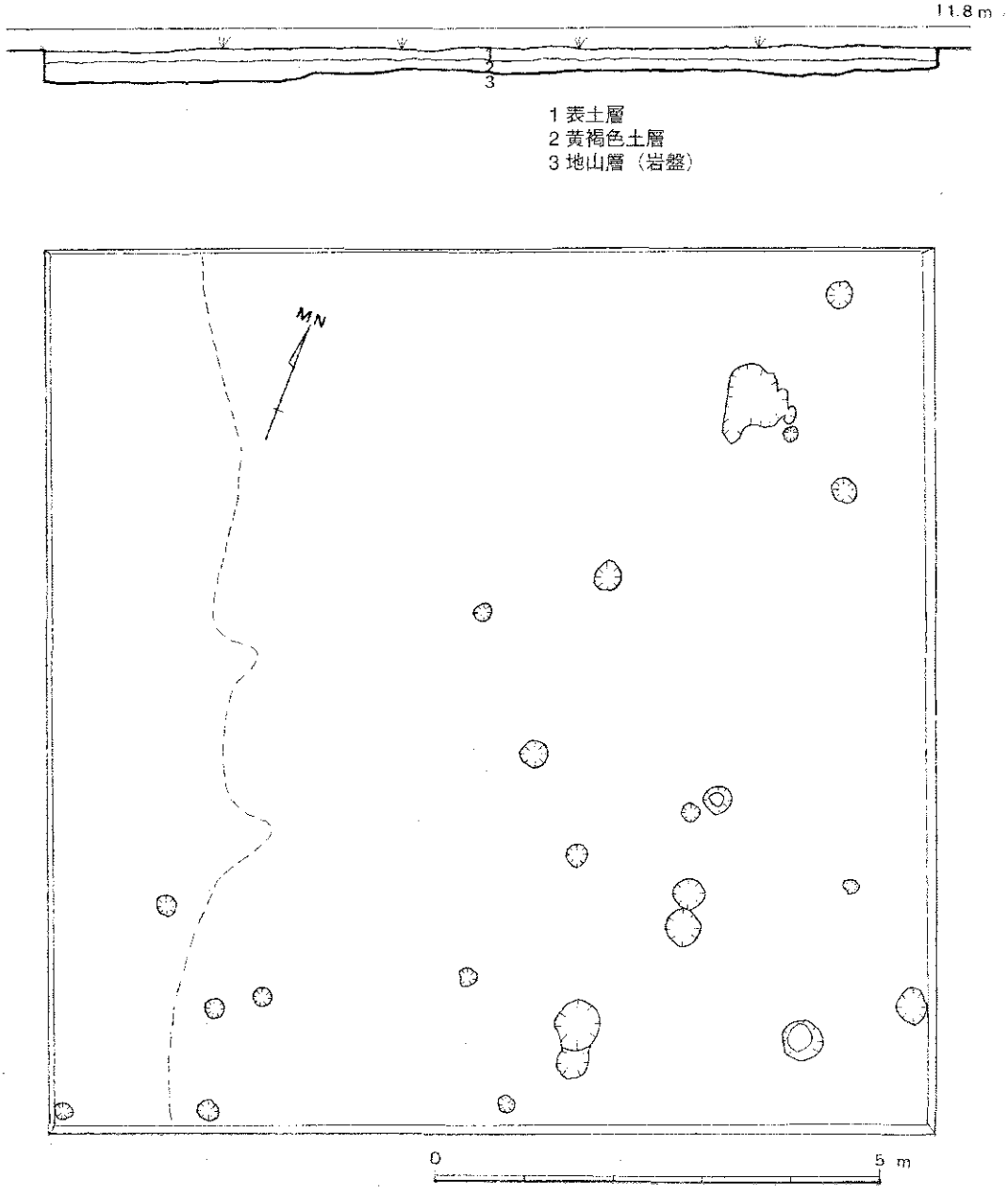
４区は標高約9.40mの水田に１m×20mの面積で設定した。１層は耕作土，２層は暗褐色の粘土で遺物包含層が一度動かされた土である。３層も基本的には２層と同じで遺物包含層が混じり，２層と４層の中間色となっている。この層は東西の両端に深く堆積しているが，これは水田造成前の饅頭畑の名残りである。畑の端は，土が上から下に流れるので，常に下から上に土をかき上げる作業が必要で，徐々に深くなり，地山層まで削られるという訳である。そのため，４層の遺物包含層である暗褐色粘質土層も調査壙の両端で削平されている。しかし残された遺物は多く，弥生時代中期から古墳時代初頭の土器がびっしりと堆積した状態である。なお，この２区の遺物は上面に砂をかぶせて保護し，埋め戻した。

⑤５区の土層及び遺構（第26図）

５区は標高約９mの水田部に１m×15mの面積で設定した。土層は基本的には４区と変わらないが，調査壙の両端は饅頭畑の影響で削平を受け，４層の暗褐色粘質土層の遺物包含層が中央部だけに残っている。この４層から６層の灰色地山層に柱穴が掘り込まれており，住居跡が存在することが確認された。全部ではないが，柱穴の部分にブロック状に黄褐色粘質土層が見られる。また北側の低く削られた地山層の上には，５層とした緑灰色の粘質土層が堆積するが，遺物は含まれない。

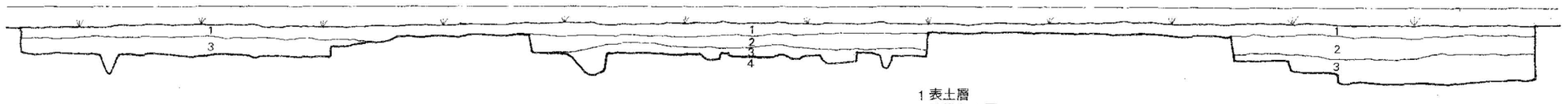
⑥６区の土層及び遺構（第25図）

６区は標高約9.2mの水田に１m×40mの面積で設定した。西側約８mの部分は削平を受け埋め土だけである。地山は南側が表土から約40cmの深さに対し，北側は130cmと南から北に向かって傾斜している。１層は表土層，２層は黒色土と褐色土混じりの埋め土で平均した厚味である。３層は褐色粘質土層で，遺物も若干出土するが主要な包含層ではない。４層は暗褐色粘質土層で主要包含層である。そして６区５と６にまたがって貝層が４層上部にブロック状に堆積する。規模は南北約１m，東西約1.8m程である。４層の下部には５層の斑黄褐色粘質土層がブロック状に入り，この層は2.5mの幅で地山層を切り込んでおり，土器片や柱穴も見られることから竪穴式住居跡と考えられる。柱穴は全体的に検出されるが，ブロック貝層の下層，いわゆる地山層まで掘り下げて見ると，浅い溝状の遺構が東西に４条見られる。さらに2.5m北側に離れた地点でも浅い溝が１条検出された。狭い範囲の調査であり，性格等については不明である。



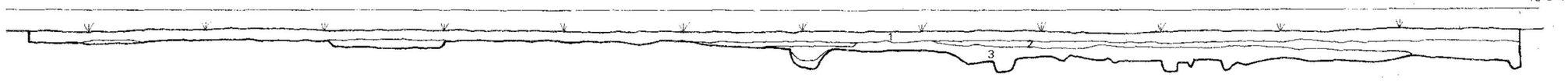
第23図　原３区土層及び遺構実測図（１／40）

高元1区東側土層実測図



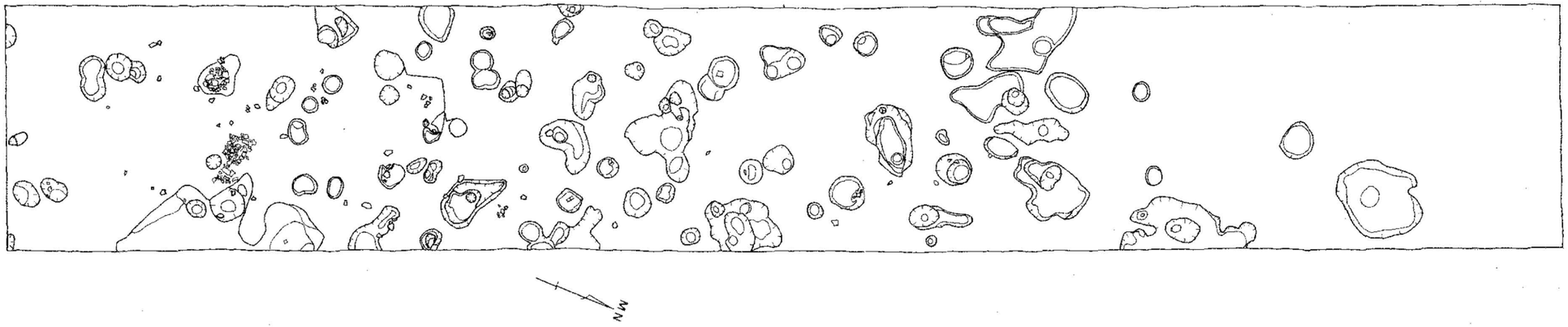
1 表土層
2 暗褐色土層
3 黒色土層
4 黄褐色地山層

原2区東側土層実測図

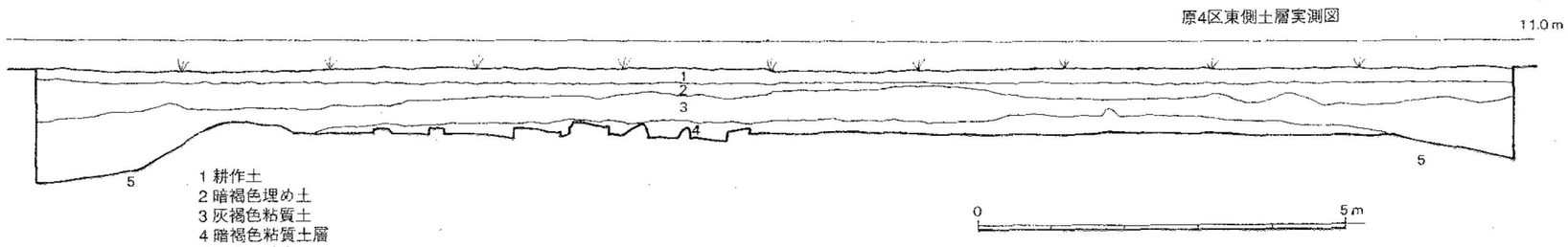


1 表土層
2 褐色粘質土層
3 暗褐色粘質土層遺物包含層

原2区遺構実測図

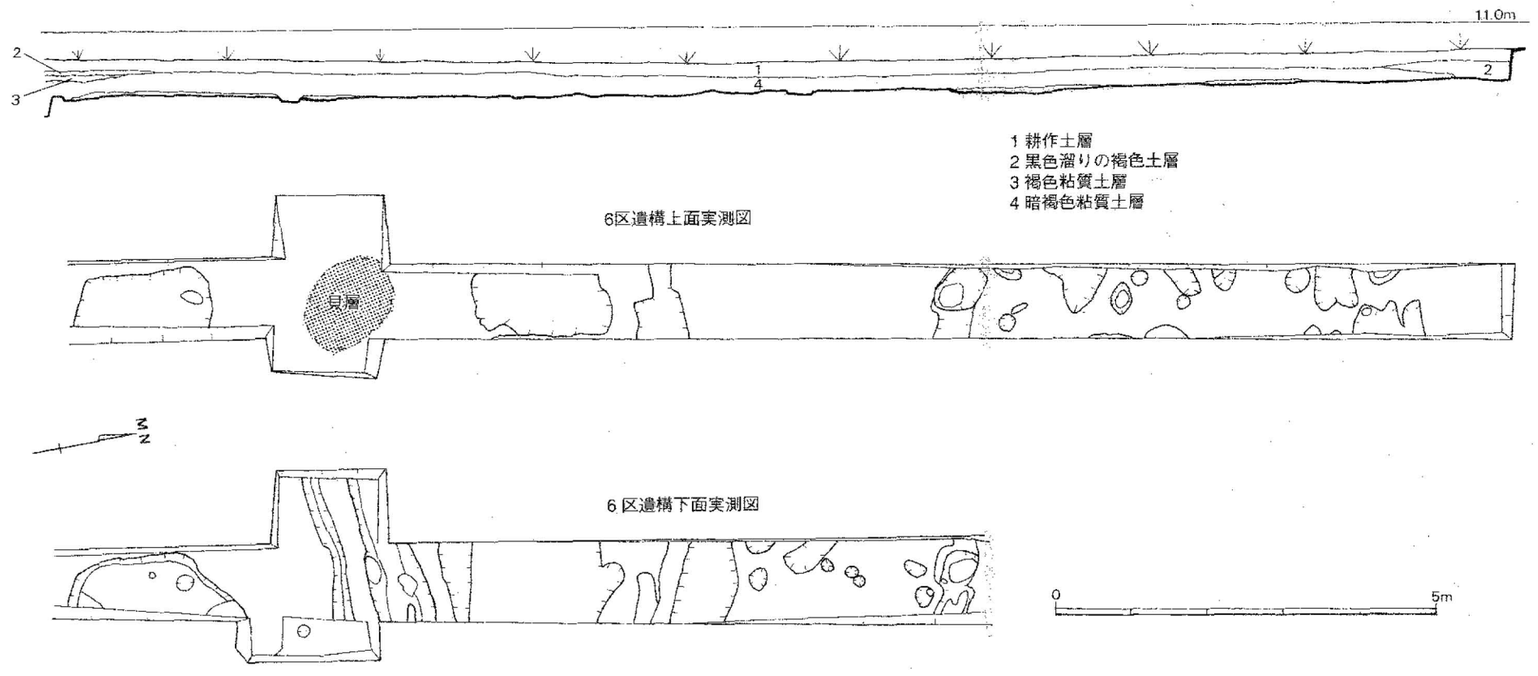


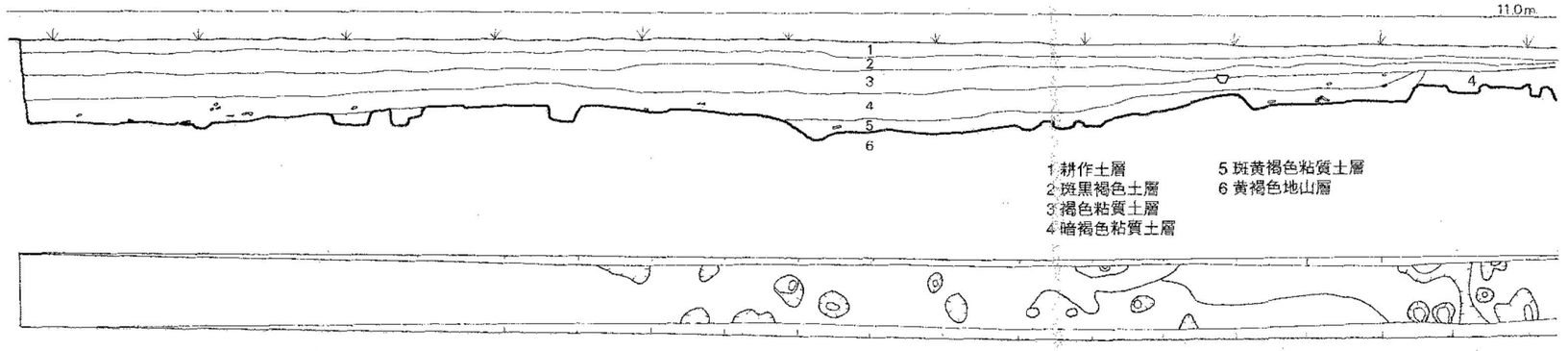
原4区東側土層実測図



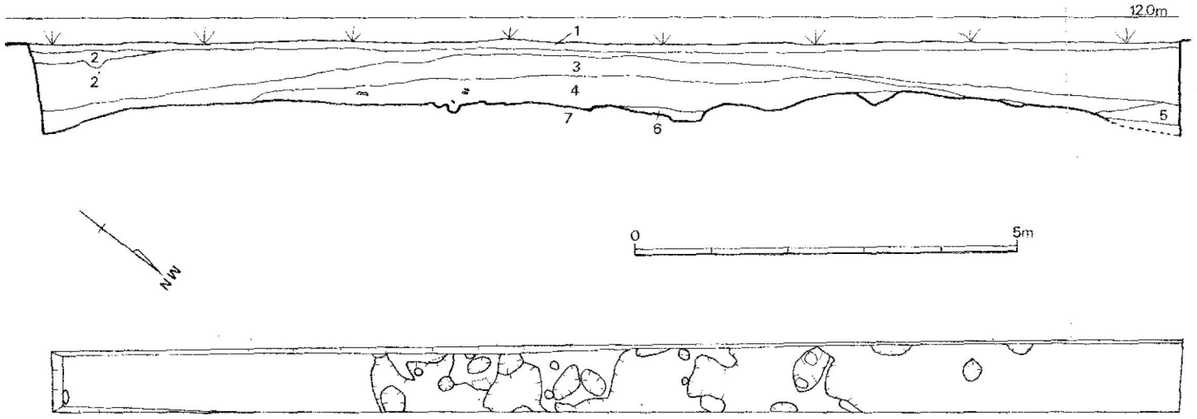
1 耕作土
2 暗褐色埋め土
3 灰褐色粘質土
4 暗褐色粘質土層
5 かたい地山層

第24図　高元1区・原2・4区土層及び遺構実測図（1／80）



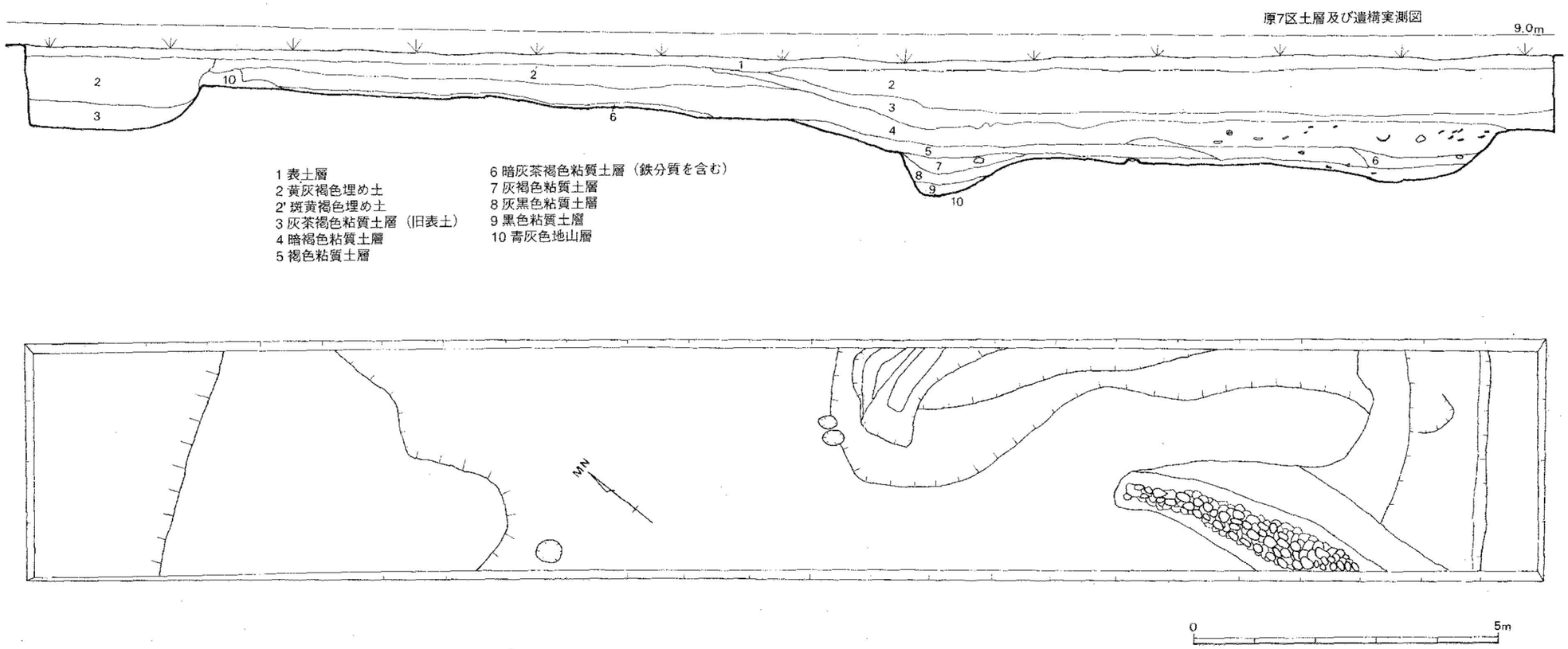


第25図　原６区土層及び遺構実測図（１／80）



原5区土層及び遺構実測図

1 耕作土層
2 黄色埋め土
2' 黄褐色埋め土
3 褐色粘質土層
4 暗褐色粘質土層
5 緑灰色粘質土層
6 黄褐色粘質土層
7 岩盤層



原7区土層及び遺構実測図

1 表土層
2 黄灰褐色埋め土
2' 斑黄褐色埋め土
3 灰茶褐色粘質土層（旧表土）
4 暗褐色粘質土層
5 褐色粘質土層
6 暗灰茶褐色粘質土層（鉄分質を含む）
7 灰褐色粘質土層
8 灰黒色粘質土層
9 黒色粘質土層
10 青灰色地山層

第26図　原５・７区土層及び遺構実測図

6区5層出土の遺物は貝層とともに弥生時代中期が主体であり，この地点にかぎって新しい段階のものは非常に少ない傾向が窺える。

⑦7区の土層及び遺構（第26図）

7区は標高約8.7mの休耕田に4m×25mの面積で設定した。この区は今回の調査区の中では一番低い地点に位置する。三方が一段高くなっており，かなり削平を受けていることも考えられたので，できるだけ北側に設定した。調査の結果は，弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてのぼう大な量の遺物が出土した。土層は1層は耕作土，2層は厚いところで約80cmの埋め土があり，この埋め土も南から125mの所で消え，旧来の表土層である3層の灰褐色粘質土層になる。層は北から南へと傾斜するが，埋め土が消えるあたりから東南の方にさらに傾斜している。全体に共通する土層は4層で，暗褐色粘質土層。弥生時代中期から古墳時代初頭までの遺物が混じって出土する。南から約10mの地点にV字溝の断面が観察されるが，この溝は東壁から約2m南から始まり東方向に延びていくと考えられる。層はこの溝を中心に堆積する。5層は溝の中心から約1.5m北から凹レンズ状に堆積し，南から約5.5mの所で止まる。色調は褐色粘質土層で粘質度が強い。6層は暗灰茶褐色粘質土で鉄分質を含む。溝にレンズ状に入る。7層は灰褐色粘質土でやや砂混じり，弥生時代中期土器を主体に出土する。8層は灰黒色粘質土で，ねっとりとした感触で黒味がある。やはり弥生時代中期の土器を含む。9層は黄緑色のやわらかい岩の地山である。なお北側の一段高い地山層は青みがあり粘質が強く，青灰色地山層とし，10層として取り扱った。

遺構は第26図に示したように，一番北側に約3m幅で削平された跡がある。土層は半分が埋め土でその下には旧表土の灰茶褐色粘質土が，堆積していることから，近世以降に掘られたものと考えられる。調査壙中央から南北寄りに向う溝の始まりは端部が丸く階段状に深くなっており，上面と下面の差は約90cmである。

南側壁面では地表から約120cmの深さで岩盤層が見られる。この地山層は北へ80cmの幅で全く平坦に削られたように水平を保っている。しかし，その先は緩やかにカーブを描きながら，約80mの深さに達し，さらに幅約50cm，深さ約10cmの浅い溝が見られる。この状況は人工的に掘られたように見られるが，北側には掘込みは見られない。ただ，この区域には沢山の土器や石器が出土する一方，平坦面である地山の上には遺物包含層も見られなく，遺物も皆無である。南側に拡張すれば地山平坦面の性格が判明するかも知れないが，今後の調査に期待したい。

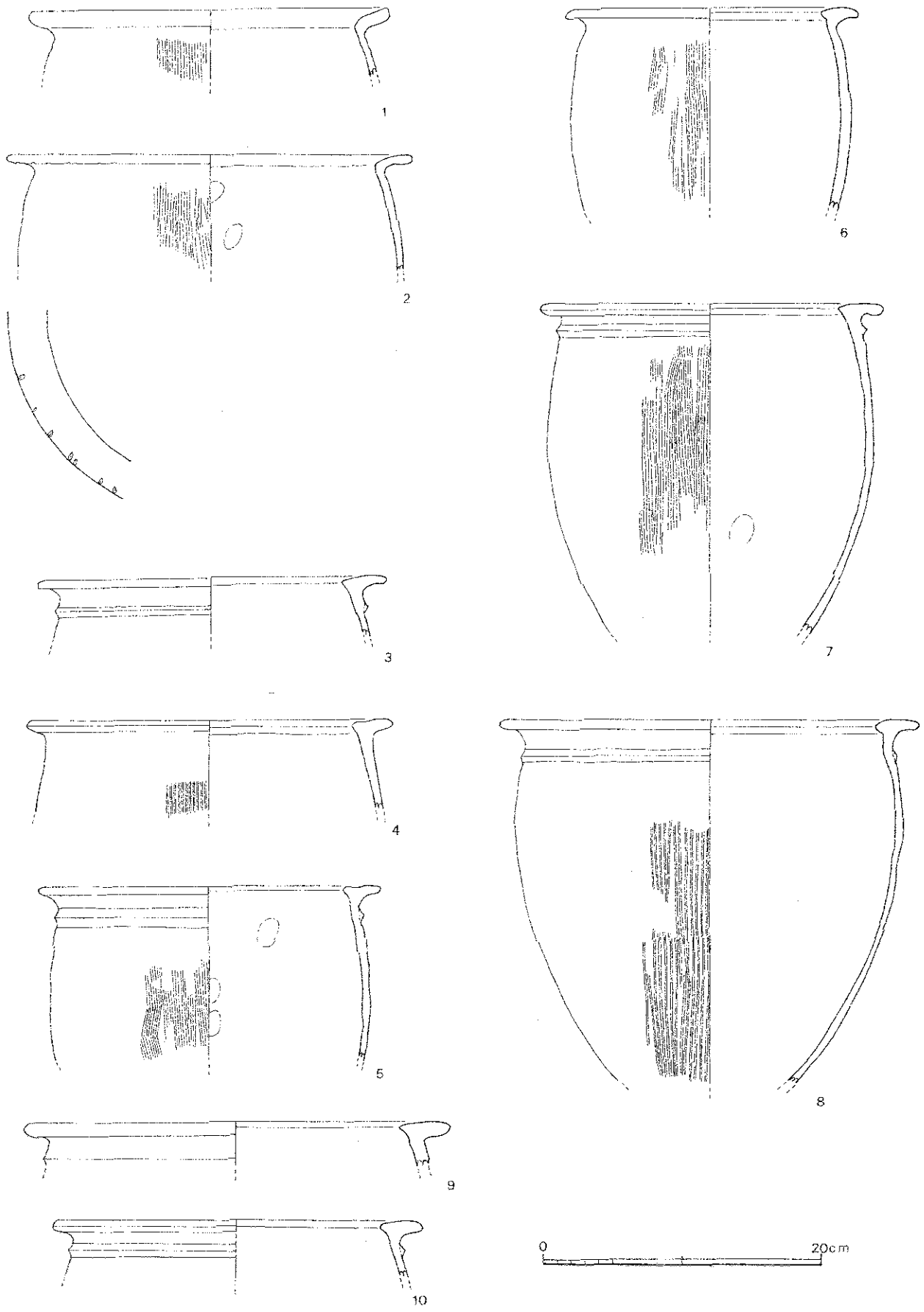
ピットは3個確認されている。割合しっかりしているが住居跡との関わりは考えにくく，溝状端部のものは違った用途が考えられるのではないかと思われる。西壁に南北に延びる石積が検出された。人頭大から拳大まであり高さは約1mに達する。中に弥生土器も含まれるが，近世の水田の石垣ではないかと考えられる。

この7区は，出土遺物の中に朝鮮半島系の土器や，銅鏃2本，ガラス小玉270個余りと多量の土器が出土していることや，東側の環濠に近い地点でもあり，今後の重点的な区域と考えていかなければならない。

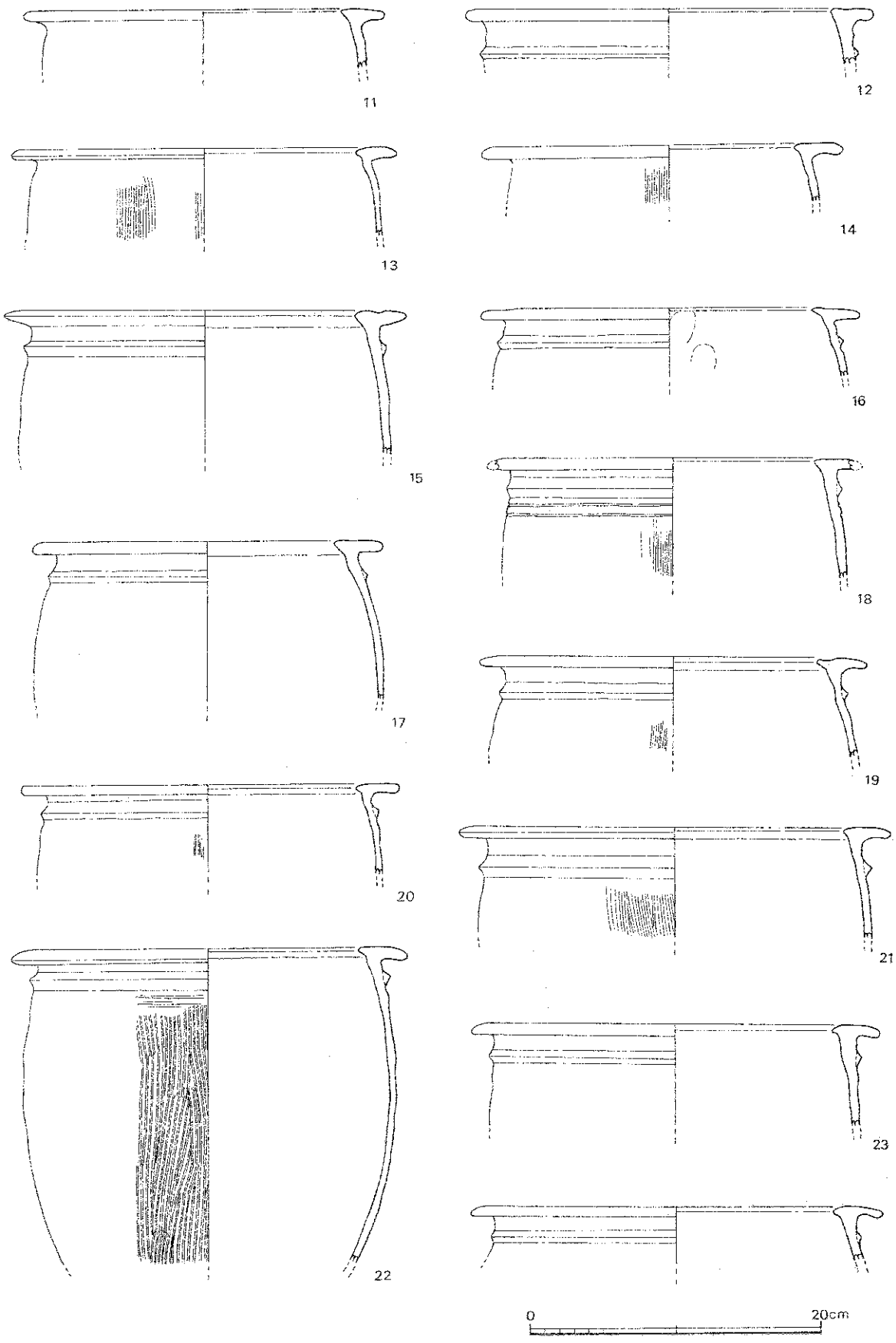
(3) 遺　物

①6区出土の土器（第27図1～第31図65）

1は口縁が逆L字形になりやや立ち上がる。外面はハケ，内面はナデで胎土には石英や長石を含む。色調はにぶい橙色で焼成は良好。2は1ほど口縁は立ち上がらないが，ややうすめに仕上げられ，表面はヨコナデされている。口縁部の裏側には小さな刻目が端部に施されている。外面は丁寧なハケ，内面はナデで一部に指頭痕が残る。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調はにぶい灰褐色で焼成は良好。3は鋤先状口縁で外側の端部は細くおさめられている。口縁直下の外面には断面三角形の貼付け突帯が巡る。胎土には石英や長石を含み色調は橙を呈する。4は口縁の内側に若干張り出し，外側に直線的に伸びるが，内側にわずかに傾いた所で浅く凹んでいる。口縁から頸部にかけてはナデ，外側胴部はハケ，胎土には長石，石英，金雲母を含み，色調は橙。5は口縁が外側に平坦に延びるが中央がわずかに凹んでいる。口縁直下外側に断面三角形の突帯をもち，胴部には細いハケ，内面には指おさえ痕が残る。胎土には石英，長石を含み，色調は橙。6は口縁がわずかに内側に傾斜するが，外側端部は下方に丸くおさめられている。胴部外面はハケ，胎土には石英，長石を含み色調は橙を呈する。7は口縁が鋤先状に尖り，外側端部は丸くおさめられ，肥厚している。口縁直下には断面三角形の突帯が1条巡る。胴部の張り出しは中央部で一番大きくなり，ハケ調整，胎土には石英，長石，金雲母を含む。色調はにぶい赤褐色を呈し，焼成は良好。8は口縁の内外の端部は丸くおさめられ，わずかに内傾している。断面三角形の突帯は，口縁よりわずかに下がった所に付されている。最大の胴張は上部に位置する。外面には丁寧なハケが施され，部分的にススが付着している。9，10は同じ形状であるが，9が胎土に石英，長石を含むのに対し，10はこの他に赤色土，金雲母を含み，色調はともににぶい橙を呈する。11は平坦口縁が外に向かって傾斜し，胎土には石英，長石を含む。風化を受けており，色調はにぶい赤褐色を呈し，器形はやや小ぶりである。12は口縁平坦面がやや凹み外側端部は肥厚して丸くおさめられる。口縁直下には断面三角形の突帯が付され，胎土には石英，長石を含む。13は口縁内面は尖るが，全体に押さえられ，浅い溝状になる。外面はハケ，内面はナデが明瞭に観察できる。器壁はうすく，胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調はにぶい黄橙を呈する。14は口縁がやや下がりながら長く伸び端部がやや肥厚している。外面にはハケ，胎土には石英，長石，金雲母を含む。15は口縁の内外面とも尖りぎみにおさめられ，直下に断面三角形の突帯をもつ。胴はあまり張らない。胎土には石英，長石を含み焼成は良好。色調は橙を呈する。17～24は口縁部が鋤先状を呈し，外側に端部が下がり肥厚する甕形土器である。口縁直下に断面三角形の突帯をもつことと，胴部のふくらみが胴部中央であることも共通している。また胎土にはすべて石英，長石，金雲母を含み，色調も赤褐色及びにぶい赤褐色である。口縁から頸部にかけては内外は横ナデで，19，21，22がハケ仕上げである。特に22は底部を欠失するのみで完形に近く，焼成も良好である。内外にススが付着している。25～31は口縁が外側に下がり，端部はわずかに肥厚し丸くおさめられている。また平坦面はわずかに内湾している。しかし27だけは外湾している。口縁直下には断面三角形の突帯をもち，胎土には石英，長石，金雲母を含む。また31は口縁は平坦であるが，端部は若干くびれている。外側は縦にナデが行われている。色調は明褐色を呈する。32～35は同じタイプのやや小ぶりな甕である。



第27図　原６区出土土器実測図①（１／４）



第28図　原６区出土土器実測図②（１／４）

口縁部は内側に短く尖るが，33のように，内側にくびれをもつものもある。外側には平坦ぎみに短く尖る。器表はハケ仕上げ，胎土には石英と長石を含み金雲母は含まれない。色調は明褐色やにぶい橙を呈する。36～38は口縁平坦部が外湾し，短く尖る。37，38は頸部がしまり壺状を呈する。また胎土には石英，長石，金雲母を含み焼成も良好である。38は内外面に丹が塗付してある。

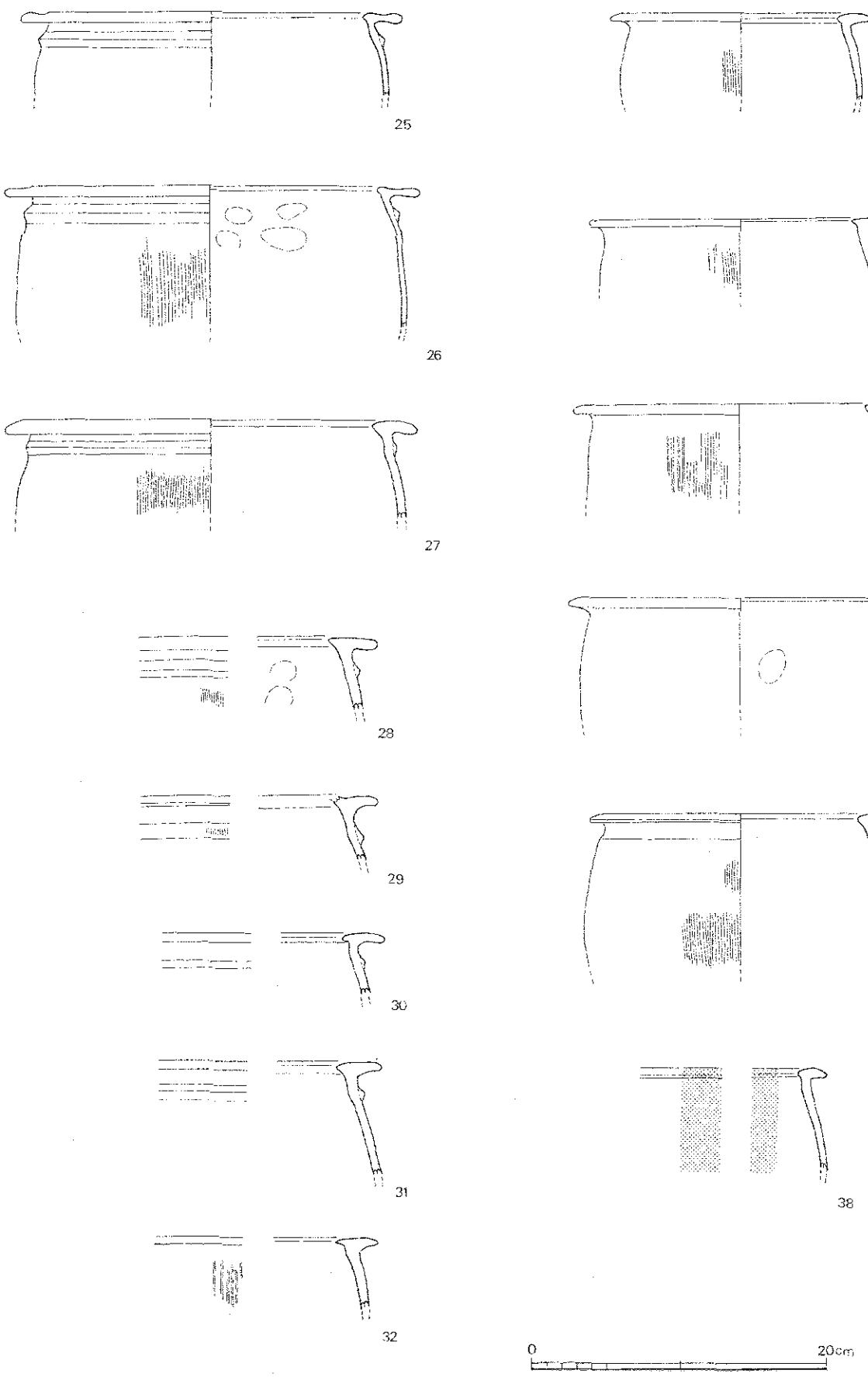
以上の土器の１・２については弥生中期須玖Ⅰ式の古段階，３～８については新段階，また11～21は須玖Ⅱ式の古段階，22～30については新段階にあたり，31～38のやや小ぶりな土器の一群は須玖Ⅱ式の古段階の資料と考えられる。

底部（第30図）

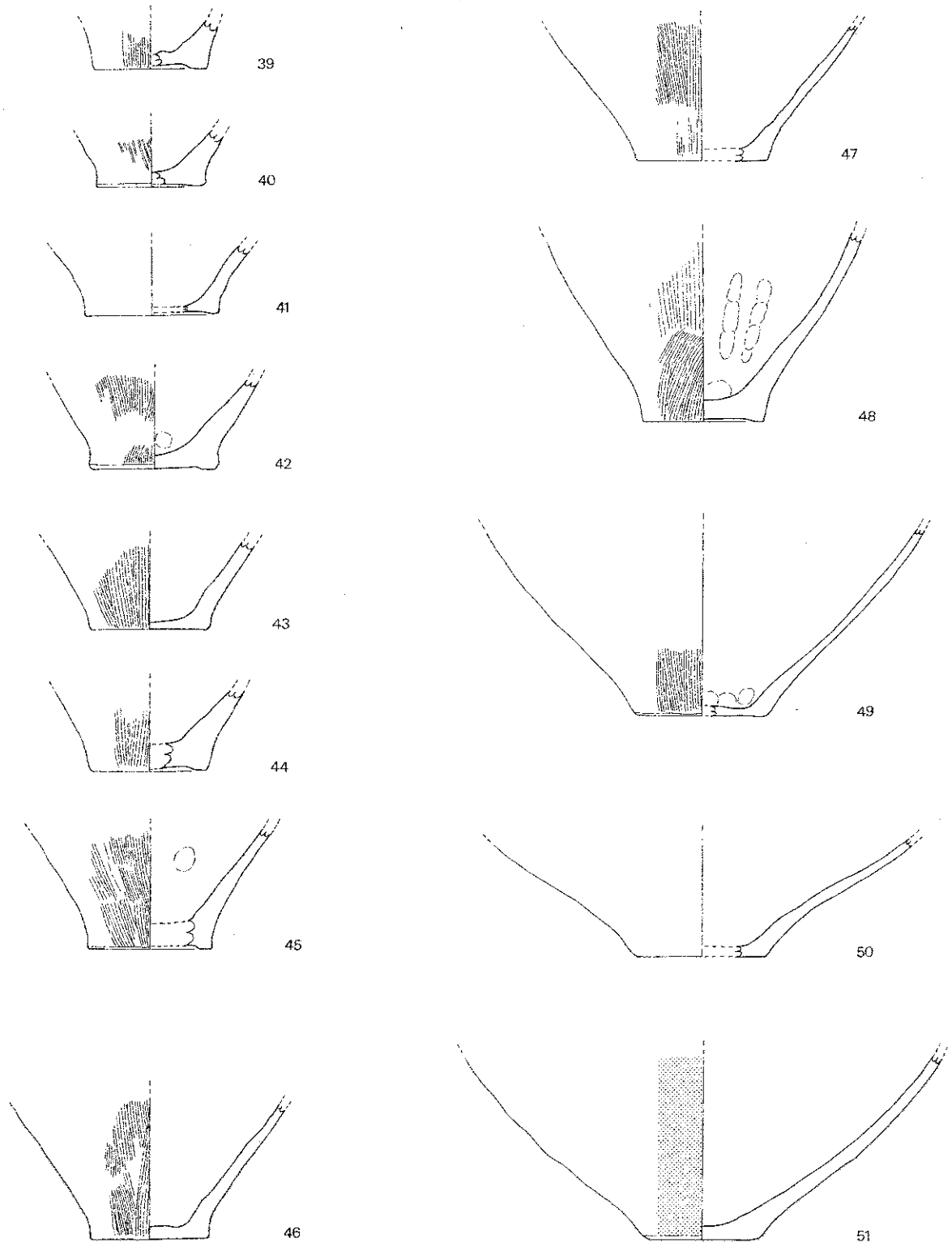
底部は39～51まで図示した。弥生中期初頭の段階に見られる厚手で顕著なあげ底をもった土器は見られない。殆どが底はうす手で，若干あげ底の特徴がある程度である。39～48は甕形土器の底部で，41以外はすべてハケ仕上げである。胎土に金雲母が含まれるものは39，40，44，48であり43は石英，長石の他に赤色土が含まれている。49～51は壺の底部である。立ち上がりから外に大きく開いている。49，51は器表に丹が塗付され，49はさらにヘラ状工具で丁寧に研磨されている。50はヘラ磨きだけ施されている。胎土は三者ともに精選され，焼成も良好である。

その他の土器（第31図）

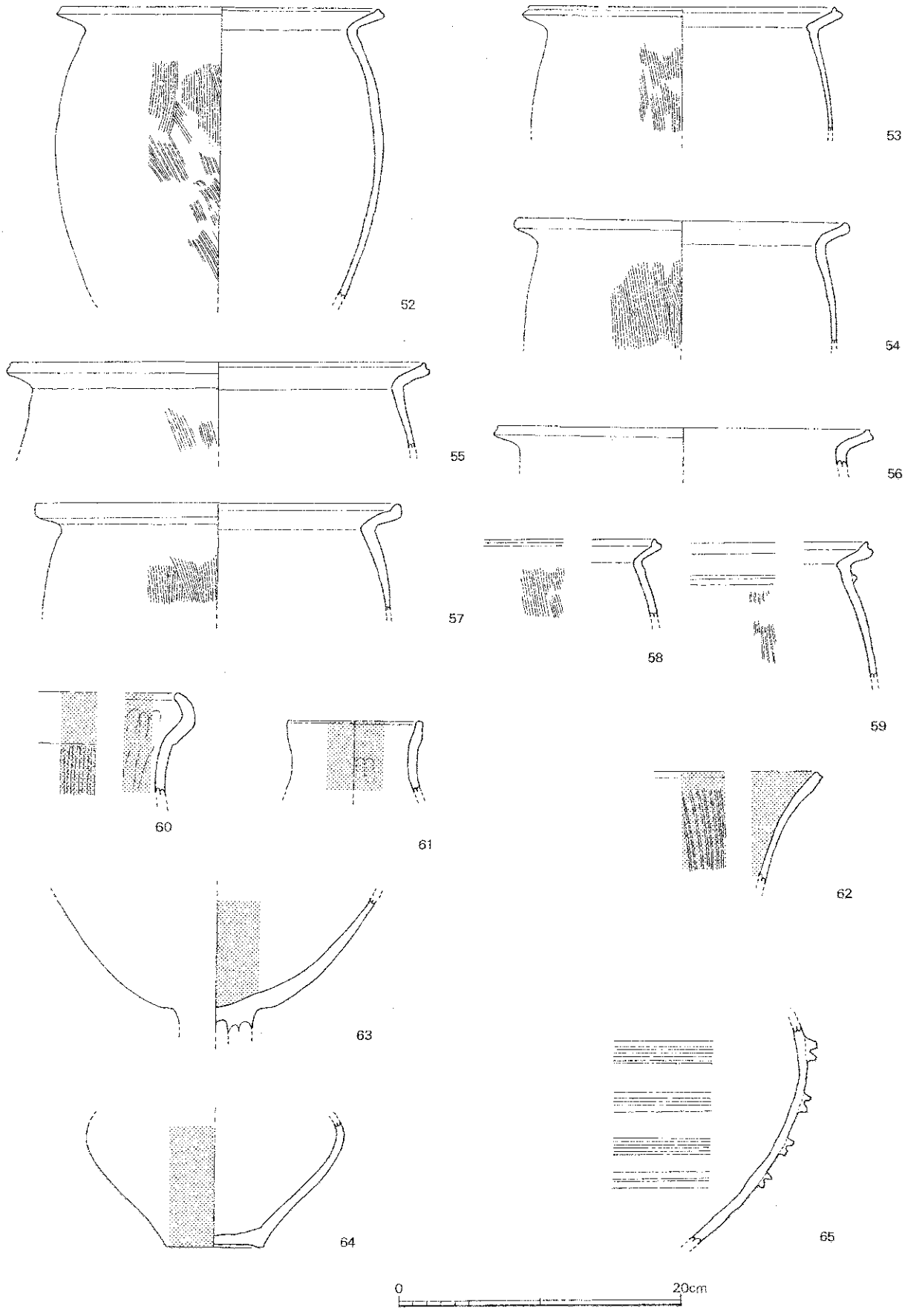
52～59は跳ね上げ口縁をもつ甕形土器である。口唇部に粘土をのせ，内側につまみ上げているのを特徴とする。52は比較的残りが良く口縁から胴部にかけ半分近く復原できた。口縁内面から外面にかけてはヨコナデ，胴部はハケ仕上げが施されている。胎土には石英や長石を含み，色調は灰黄褐色で全体が黒ずんでいる。53は口縁内側の端部がピンと跳ね上がり，頸部は直角に近く折れる。57はややくずれた跳ね上がりになっているが，胴部のハケは丁寧な仕上げになっている。59は跳ね上げ口縁の端部に明瞭な浅い溝が付く。また口縁直下には断面三角形の突帯が巡る。色調は暗褐色と橙を基調とするものがある。胎土に金雲母を含む土器は55や57である。時期的には中期後葉か。60は長頸の壺形土器で口縁端部は内湾し，袋状に丸くおさめられている。内外面ともに丹塗りであり頸部にはヘラで磨かれ暗文風になっている。胎土には石英，長石，金雲母を含む。61は口の開かない短頸壺の口縁と考えられる。内外面に丹が塗付され，頸部外面はヘラで磨かれている。62は外反する広口壺の口縁である。口縁端部は平坦におさめられ，内外面は丹が塗付されている。外面にはさらに暗文が施されている。胎土には石英，長石，金雲母を含み，焼成は良好。63は高杯の杯部で，口縁部と脚部を欠失している。内面は丹塗りのあと磨いている。外部は風化しているが，丹が塗ってあったものと思われる。胎土には石英や長石を含む。64は壺で胴部から底部にかけて残り，口縁部を欠く。外面は丹塗りのあと磨かれている。胴回りは18cm余りの小形である。65は推定で胴回りが30cm余りの壺破片である。断面四形の貼り付け突帯が４条残る。胎土には石英，長石，金雲母を含み焼成も良好で，色調は橙を呈する。以上の壺形土器と高杯は時期的には弥生時代中期後葉と考えてよいと思われる。



第29図　原６区出土土器実測図③（１／４）



第30図　原６区出土土器実測図④（１／４）



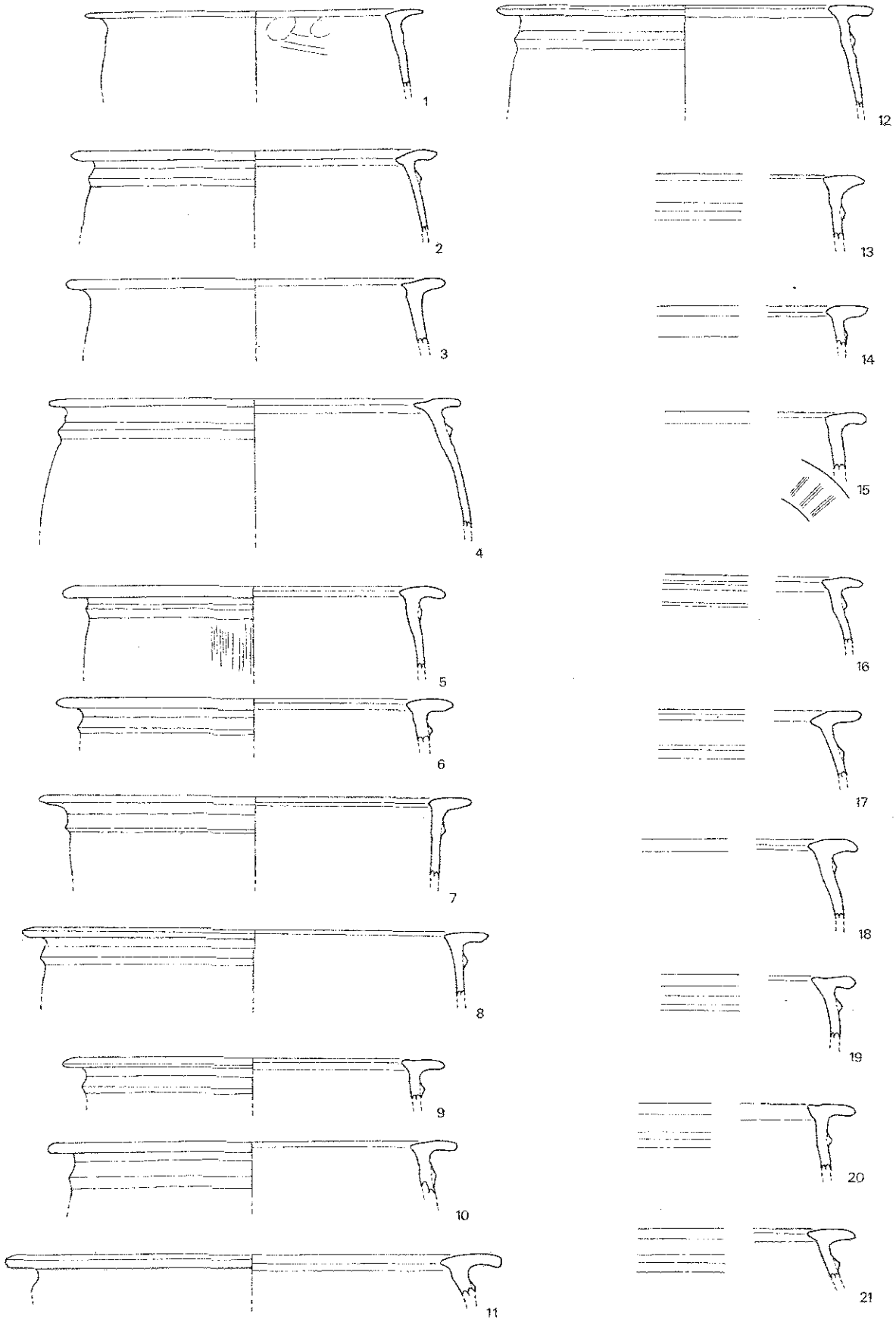
第31図　原６区出土土器実測図⑤（１／４）

②７区出土の土器（第32図～第34図）

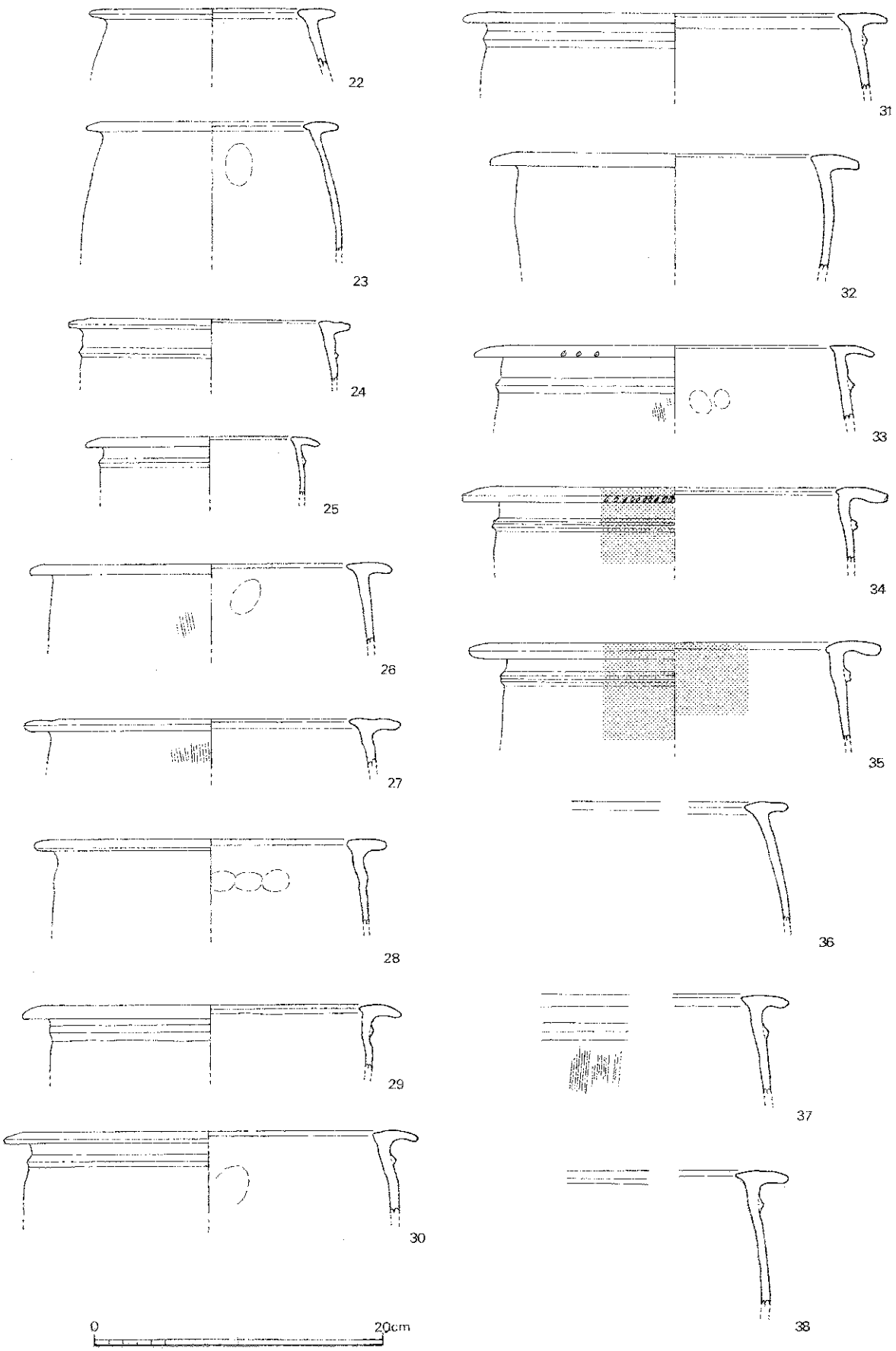
ここにとりあげた土器は，７区を５ｍごとに西から１～５の区域に分けた調査壙から出土したもので，平板実測のうえ取上げた。遺物は３・４・５区に集中する。すなわち土層が北側に傾斜して深くなる部分と，完全に深くなり溝状になった部分からである。また５区の地山層が平坦に削られた部分ではほとんど遺物は出土していない。時期的なものについては上面には弥生後期と古墳初頭のものが多く，溝の下方では弥生中期の土器が主体を占める。また朝鮮半島系の土器は４区の東側と５区の上面に集中して出土した。

以下個別の出土遺物について述べる。

１は甕棺口縁部外側の端部は細く尖り気味におさめられ，内側に傾斜するいわゆる逆「Ｌ」字型を呈している。胎土には，石英，長石，金雲母をふくみ，色調はにぶい橙である。２は平坦口縁は内側に傾斜し，尖り気味に張出す。外側端部はやや下に向き下端がふくらむ。口縁直下には断面三角形の突帯文を有する。胎土には石英，長石を含み，色調はにぶい黄橙を呈する。３は鋤先状口縁で外側端部は丸くおさまる。頸部は厚くなり胸部にかけて外反する。胎土には石英，長石，金雲母を含み色調は橙。器表は風化を受けている。４は大形の破片である。口縁部は鋤先状口縁の先端が内傾し，外側も細く突き出ている。口縁直下には断面三角形の突帯が巡り，頸部から胸部にかけて強く張り出す。胎土には石英，長石を含み，色調は橙を呈するが丹塗りの可能性もある。５・６は平坦口縁が内側につまみ出され尖り，外側端部は丸くおさめられ，口縁直下に断面三角形の突帯を有する。５の器表面にはハケ目が残る。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調は橙を呈する。７は平坦口縁から頸部，胴部が直線的にのびる。胎土には石英，長石，金雲母を含む。色調は灰黄褐色を呈する。９～11は口縁が平坦かあるいは10，11のようにやや内傾している。三者とも口縁直下に断面三角形の突帯が巡り，同様の形態を成す。９に金雲母を含む外は石英，長石が混じり，色調も橙を呈している。12は口縁が平坦で，外側端部がわずかに下に向き肥厚している。13は平坦な口縁が短く外に尖り気味におさめられている。内面にはナデ痕が明瞭に残り，胎土には長石，石英に混じって赤色粒を含む。色調はにぶい橙。14は平坦口縁の直下にわずかに突帯を付しており，胎土には金雲母を含む。15は逆「Ｌ」字型口縁を呈し，平坦部は内傾し湾曲している。口唇部には三本の沈線がヘラ状工具で浅く付けられている。胎土には長石，石英，金雲母が含まれ，色調は明灰褐色を呈する。16は口縁直下の突帯がやや垂れぎみに付けられ，胎土には金雲母を含む。17は口縁が外側の平坦部分と内側に傾斜する部分に分かれ，口唇部に丹が塗付されている。口縁よりやや下のほうに弱い突帯が付けられ，胴部は外に張る。18は口縁内側はわずかに引き出され，外側は平坦であるが，端部が下方に丸くおさめられている。口縁直下に断面三角形の突帯が付く。胴部の最大径は上部に位置する。19は口縁の平坦面は内湾し，端部が丸くおさめられ肥厚し直下に突帯が付く。胎土には長石，石英，赤色粒が含まれ，色調は赤褐色を呈する。20は９と同じような形態で胸部はわずかにふくらみ底部へ直行するものと思われる。21は平坦口縁の両端部が尖りぎみにおさめられている。頸部は外反しており，胴部は上部で張り出すと思われる。



第32図　原７区出土土器実測図①（１／３）



第33図　原７区出土土器実測図②（１／３）

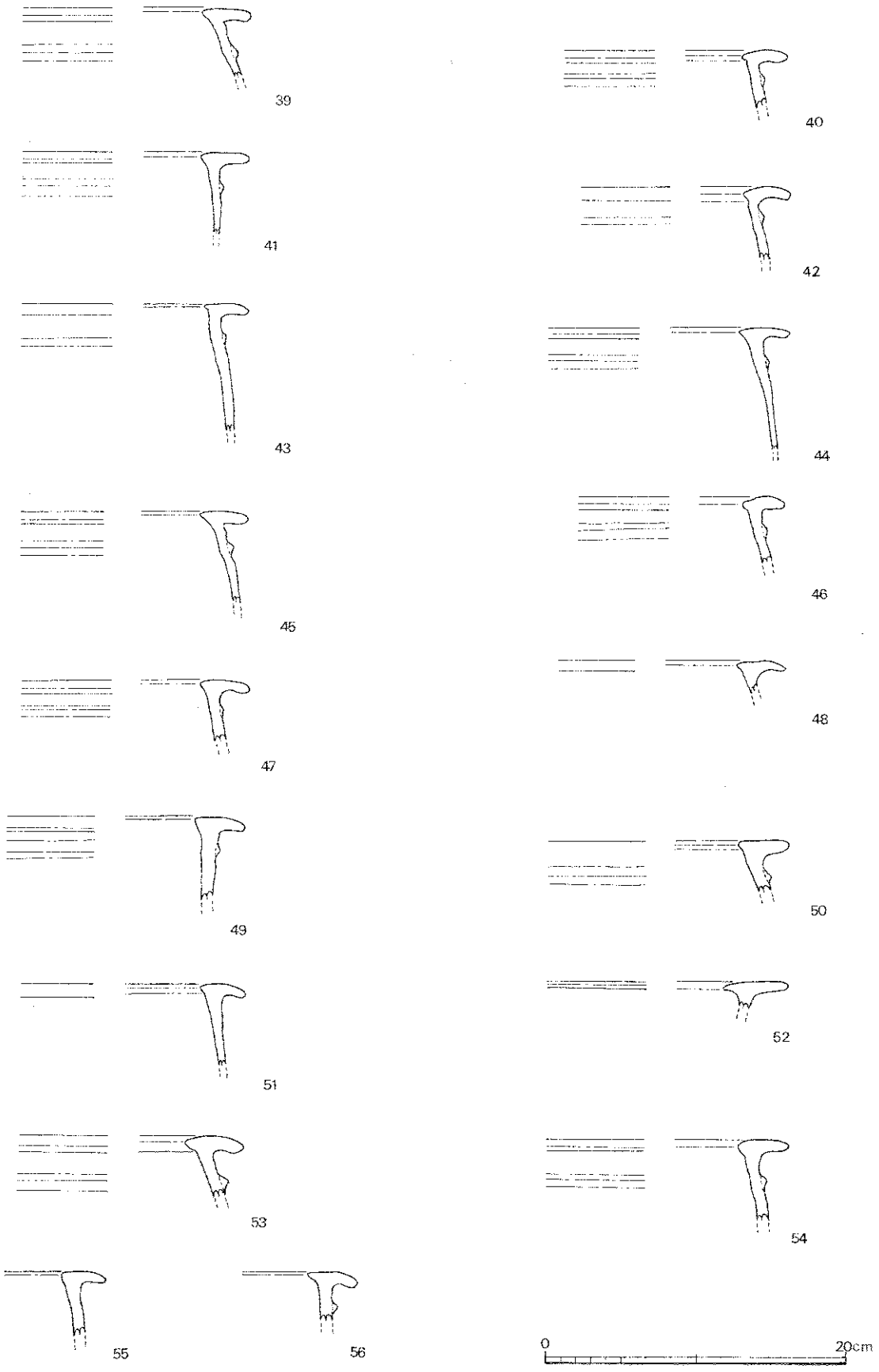
以上の土器は1～4が須玖Ⅰ式の古段階，5～21は新段階に属するものと考えられる。

22は平坦口縁の「T」字型を呈した径17cmの甕で外側は全面に丹が塗付され，内側は口縁部分だけに丹が塗られている。胎土には石英，長石を含む。31は口縁が外方向に下がり，外側の口縁直下には丹が残るが，かなり剥げ落ちている。内面には指おさえの跡がわずかに残る。胎土には石英，長石，金雲母を含む。24は逆「L」字型の口縁で平坦面は外側に傾斜し直下に弱い断面三角形の突帯がつく。25の口縁は外側の下に向かって丸く端部をおさえ，直下に突帯を付している。26・27は平坦口縁がやや下方に向き鋤先状を呈している。外側胴部にはハケで調整されているが，わずかにしか残らない。28はやや外傾した平坦口縁をもち，胴部にかけて直行するが，内側からの指おさえによる凹凸が見られる。29～31は口縁が外湾し，内側は尖るようにつまみ出されている。内側からの指おさえによりわずかに凹凸があり，この上面に断面三角形の突帯が付く。30・31は胎土に金雲母を含み，両者とも色調は石英，長石，金雲母を含み，色調はにぶい赤褐色。33は外側に傾斜したうすい口縁で端部は丸くおさめられている。また端部には刻目が3箇所残る。外側胴部には丹が塗られた形跡がある。34から35はほぼ同じ形態の甕である。両者とも口縁は内側にわずかにひき出され尖るが，外側は丸味をもちながらドり，肥厚している。端部は垂直におさめられ，そこに刻目が斜めに施されている。また口縁直下には断面M字型の突帯が付されている。34は外側全体に丹が塗られ，35は内外に丹が塗付されている。共に胎土には石英、長石，金雲母を含み，焼成も良好である。36は外側の口縁より内側が大きく尖り張り突した形で，胴部も全体的に丸みを帯びている。37～39の口縁は外側に下がり，端部も丸くおさめられ，突帯や胎土に金雲母を含むことも共通しているが，39は胸部の張りがきついようである。41，43はほぼ水平な平坦口縁，42，44，46は口縁がやや外湾するのを特徴としている。47～49，51は口縁外側端部を尖りぎみにおさめ，胴部にかけてうすい器壁となっている。52は口縁部だけであるが，内側に細く尖り内傾している。53～56は口縁外側がやや下を向き55以外は断面三角形の突帯をもつ。胎土には石英，長石を含むが，55だけは金雲母が混じる。

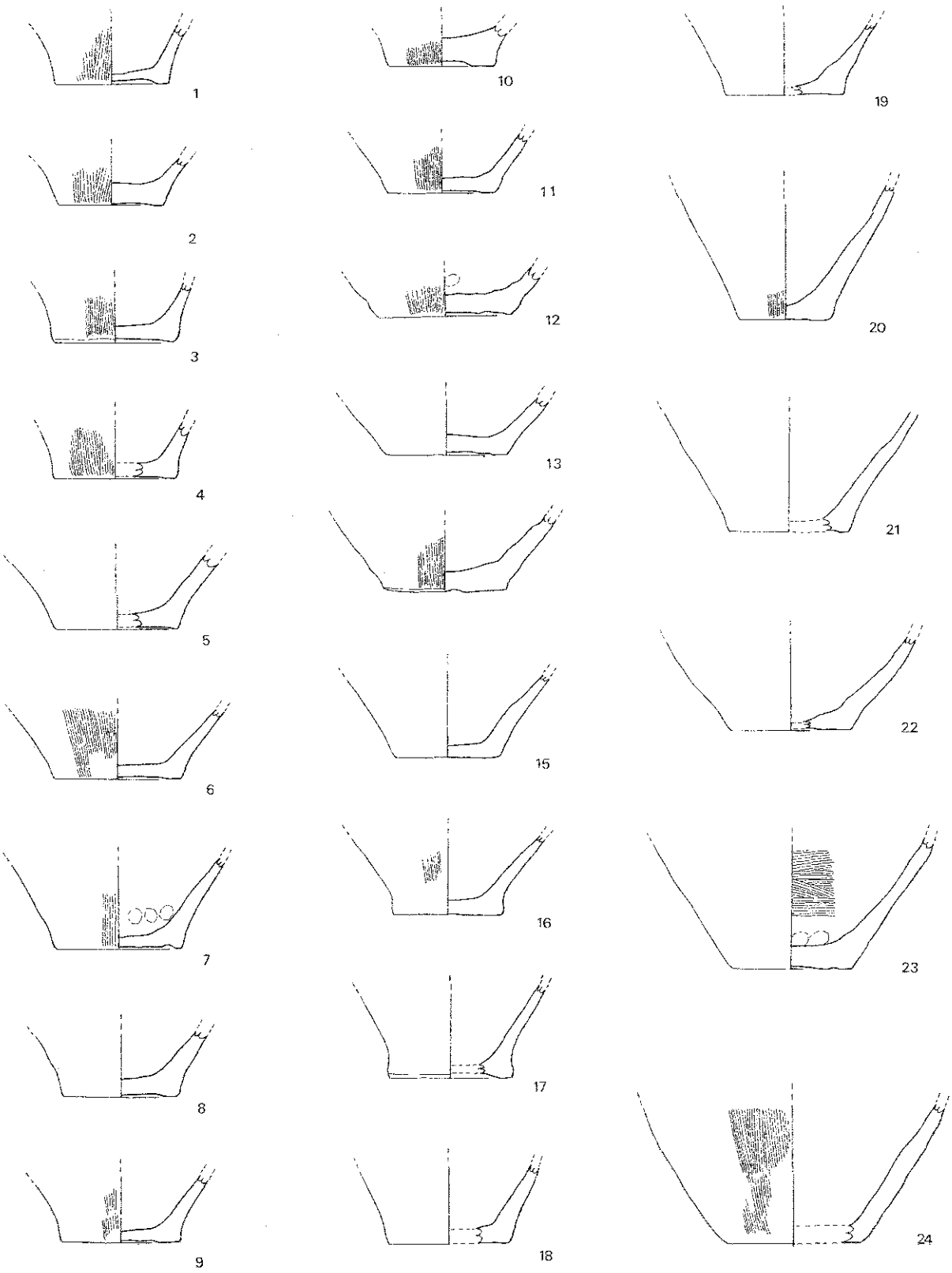
22から54の土器は須玖Ⅰ式の特徴をもつものが多いことから弥生中期中葉から後葉にかけての時期と考えられる。

底部（第35図1～24）

ここには甕の底部と思われるものをあげた。1～4は比較的小形で，底から外反して立ち上がる。外面には丁寧なハケ目調整が施されている。1はうす手のあげ底，胎土には金雲母を含む。他の土器はわずかなあげ底にとどまる。5～10は底からの立ち上がりが，やや直線的で前者ほど外反しない。底はわずかにあげ底である。胎土に金雲母を含むのは5・7～10の土器である。11～14は底から内湾した形で立ち上がる。11～13はわずかなあげ底となり，内側もそれに沿った形で弱く盛り上がっている。外側にはハケ目調整が施されている。胎土には石英，長石，金雲母が含まれる。15～21は底部は平坦である。17～21は底へ立ち上がりが上方に開きながらも直線的である。23～24は平坦な底部からの立ち上がりが内湾している。22，23は外側に粗いハケ目調整が斜め方向に施されているが，23は内側に横方向にハケが施されている。すべての胎土には石英，長石，金雲母が含まれている。



第34図　原７区出土土器実測図③（１／３）



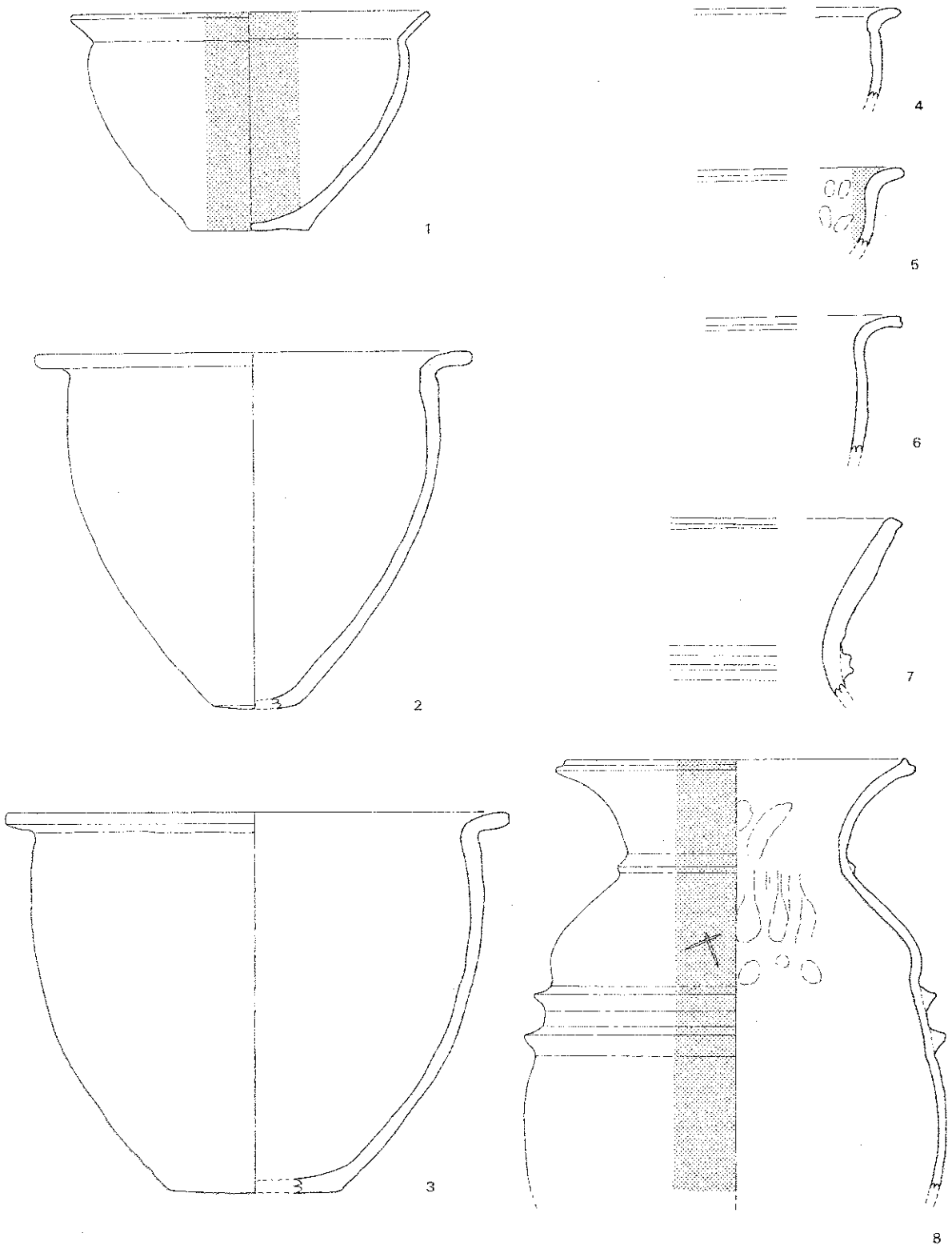
第35図　原７区出土土器実測図④（１／３）

その他の土器（第36図～第38図）

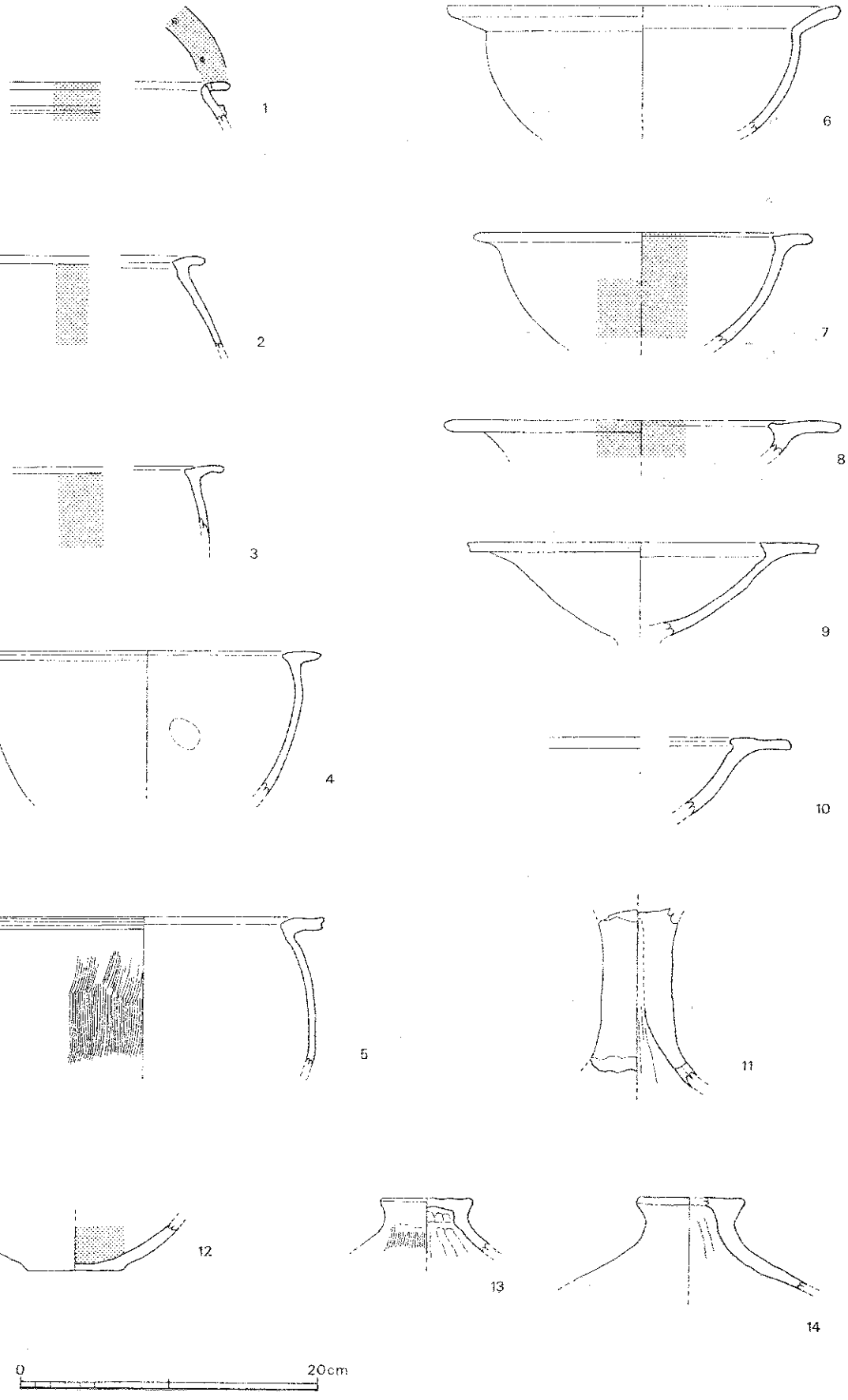
第36図１～６は鉢及び鉢形に近い土器である。１は口縁が「く」字形に開き，内外面に丹が塗られた鉢形完形土器で口径23.2cm，器高14cmを測る。外面はハケ目調整された上に丹が塗られている。胎土には石英，長石を含む。２は鉢と甕の中間に位置する器形で逆「L」字形の口縁が内側に傾斜している。胎土には石英，長石，金雲母を含む。復原口径は28.8cm，器高は23.4cmを測る。色調は灰褐色を呈する。３も基本的には２に類似するが，胴部の張りと底部が大きくなる。逆「L」字形口縁も同じである。内外の器表面には丹が塗付された可能性がある。復原口径33.2cm，器高25.2cmを測る。４～６は鉢口縁部片，５は内側に指押さえの跡が残り，そのうえに丹がわずかに観察される。外側は風化しており，丹の痕跡は不明である。７は壺形に近い口縁か，外反した口縁端部に斜行し，外につまみ出されている。内面にはハケが横方向に施されている。頸部はしまり，「M」字突帯が付く。胎土には石英，長石，赤色粒や金雲母を含み，色調は橙を呈する。８は甕箪形土器である。口縁は外反し端部は大きく凹む。頸部はしまり断面三角形の突帯が１条巡る。その下の肩はやや張り，胴部が大きく凹むが，この部分に上部より大きな突帯文が２条巡り，さらに胴部がふくらんでいる。内側の上部は指押さえが顕著に認められ，外側には全体に丹が塗られている。また肩の部分に斜めに十字のヘラ記号が付けられている。胎土はきめ細かく石英，長石，金雲母を含む。祭祀土器として使用されたと考えられる。以上の土器は弥生時代中期前葉から中葉の時期が考えられる。

第37図１～３は広口壺口縁である。三者とも外側には丹が塗付され，表面を丁寧に研磨している。１だけは口唇部に２個の小さな孔が認められる。胎土は鈍い橙で，石英，長石，金雲母が含まれる。これらの土器は弥生中期中葉頃かと思われる。４．５は甕の頸部がしまったもので５は広口壺とも考えられる。外面は細いハケ目が施されている。６～11は高杯である。６は口縁が逆「L」字形で内側に傾斜する。体部は丸く張る。内外とも丹塗りの痕跡をとどめる。ここでは杯としたが，鉢の類に入るかも知れない。７は内外の器表に丹が塗られている。杯部は深く外面の口縁および直下は丹が剥落している。胎土には石英，長石，金雲母を含む。８～９は鋤先口縁である。８は内外面に丹が塗付されている。９の平坦口縁の端部は角状になっている。杯部は７と比べると浅くなっている。11は高杯脚部である。上面は接合部ではずれ下端部は欠失している。穿孔は１個認められる。胎土には石英，長石とわずかな金雲母を含む。これらの土器は弥生中期前葉から中期にかけてと思われる。12は広口壺底部である。内側には丹が認められるが，外側は風化しており不明である。13，14は蓋である。つまみの部分はくびれて外に開く。開いた部分にはハケ目が付く。内側は指で整形された跡が残る。胎土には石英，長石，金雲母を含む。

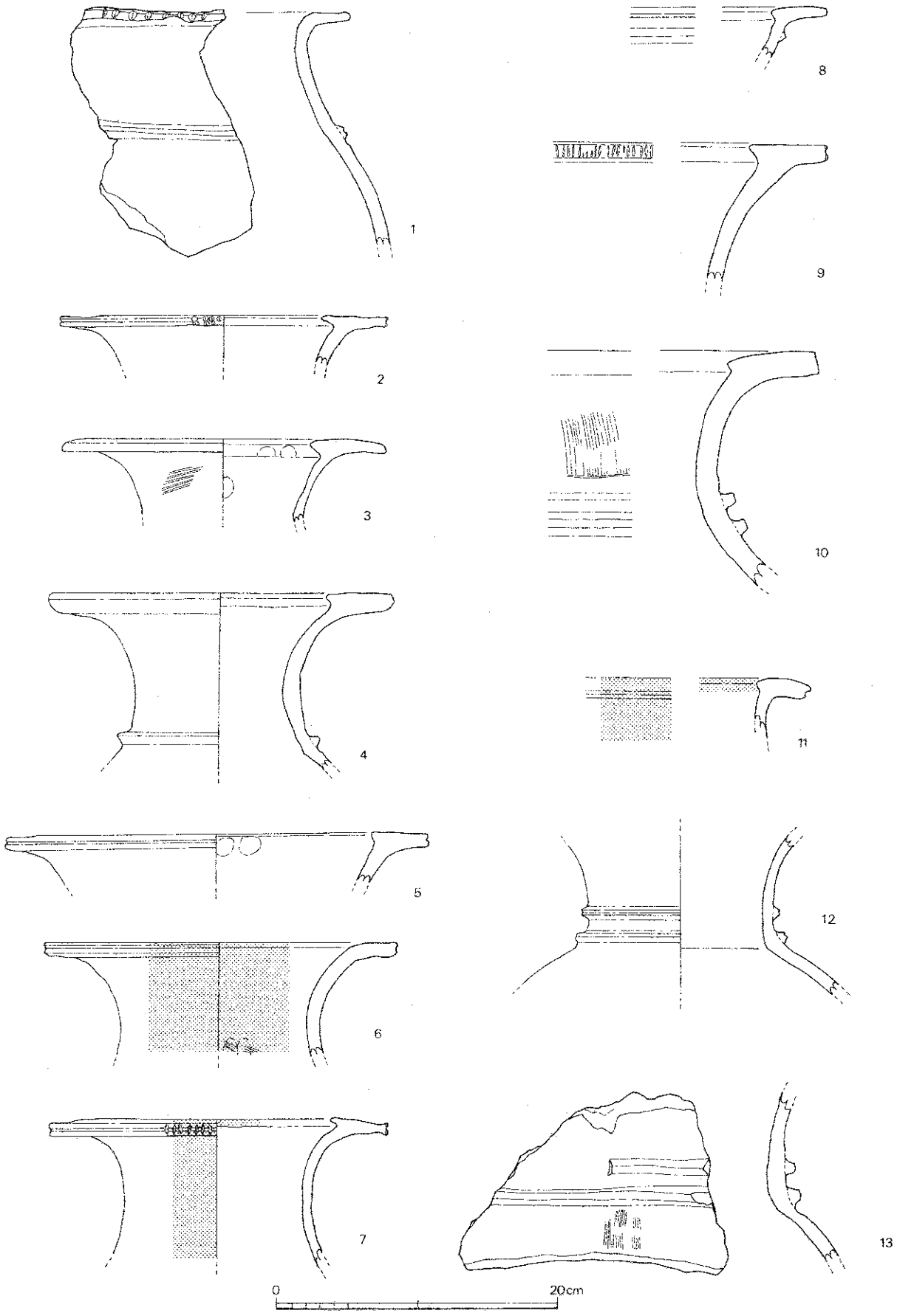
第38図１～13は比較的大型の壺類である。１は水平に折れた口縁でヨコナデされ，端部はやや上がりぎみに丸くおさめられ刻目が施されている。頸部から胴部にかけてはゆるやかにカーブし，胴部との堺に「M」字突帯が１条巡る。また頸部外側には丹塗りの跡がかすかに観察できる。２の口縁外側の端部には沈線が引かれ，その上下に刻目が施されている。口唇部と内側に丹塗りが残るが，外側は風化して不明。３は外側に丹がわずかに認められる。４は頸部に「M」字突帯が巡る。５は口縁外側



第36図　原７区出土土器実測図⑤（１／４）



第37図　原７区出土土器実測図⑥（１／４）



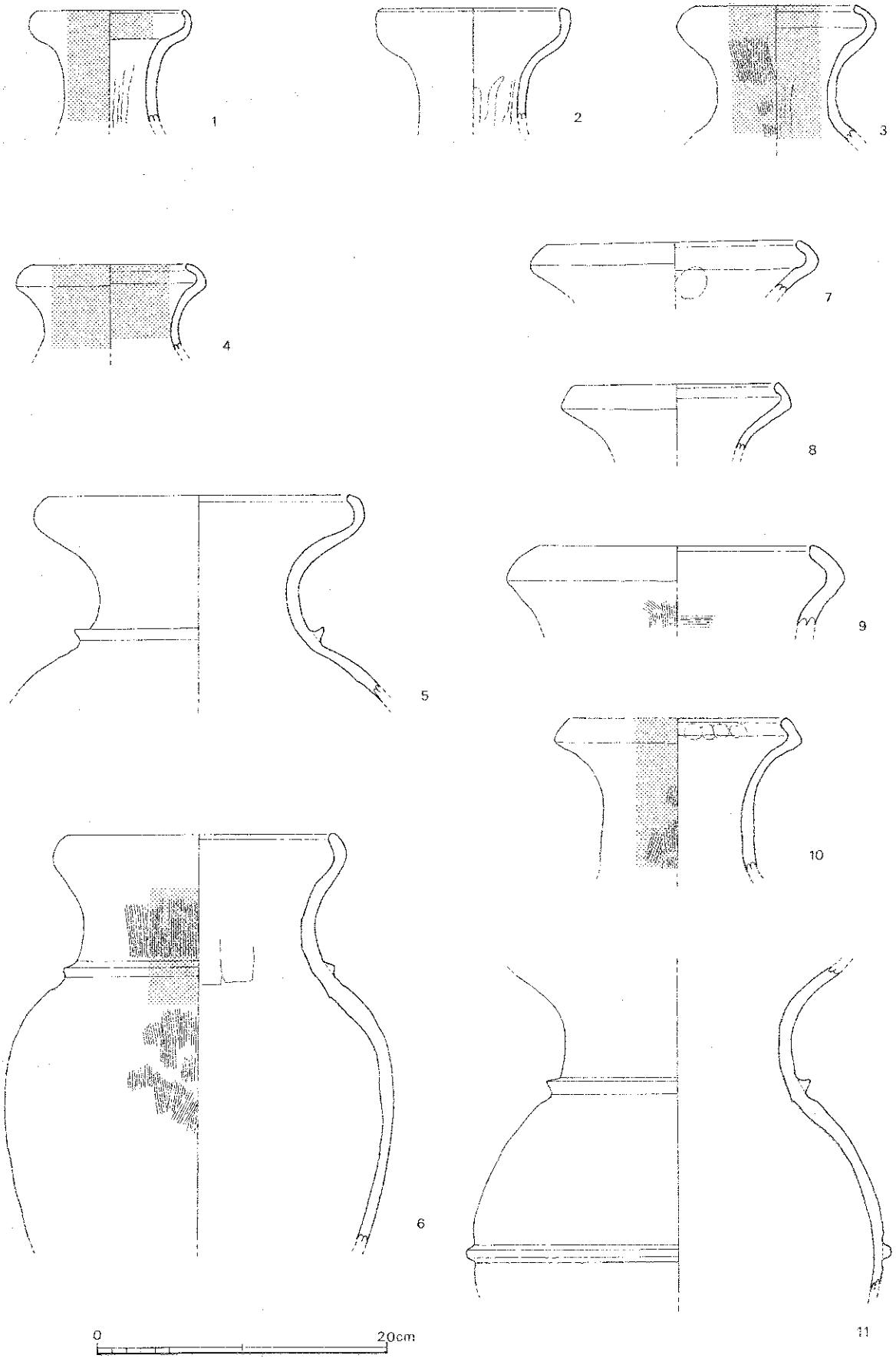
第38図　原７区出土土器実測図⑦（１／４）

端部に沈線が巡り，胎土には金雲母を含み，色調はにぶい橙を呈する。6はゆるく外反した口縁で，端部に弱い沈線が巡る。内外面には丹が塗付されている。胎土はきめ細かく，石英，長石，金雲母を含む。7は外に傾斜した鋤先状口縁で，端部は角張り弱い沈線が巡り，沈線を切るように刻目が施されている。口唇部と外側に丹が塗付されている。8は口唇部に丹が塗られている。9は平坦口縁の垂直になった端部に沈線が巡り，これを切るように細い沈線が不定形に施されている。10は内傾した平坦口縁の端部にわずかな刻目が観察されている。頸部はよくしまり，断面四角形の突帯が2条巡る。内外面に丹塗り，口縁端部には沈線が下から押されたように付く。12は口縁部を欠く頸部から胴部にかけての破片で，2条の「M」字突帯が付く。器表は全体にヨコナデ。13も頸部の大形破片，断面四角形の突帯が2条巡るが一部貼り付け部で剥げている。外面上部は細かいハケがヨコに，下面ではハケがタテに施されている。胎土には石英，長石，金雲母を含む。以上の壷形土器は1が古く，中期前葉か，その他は後葉まで続くと思われる。

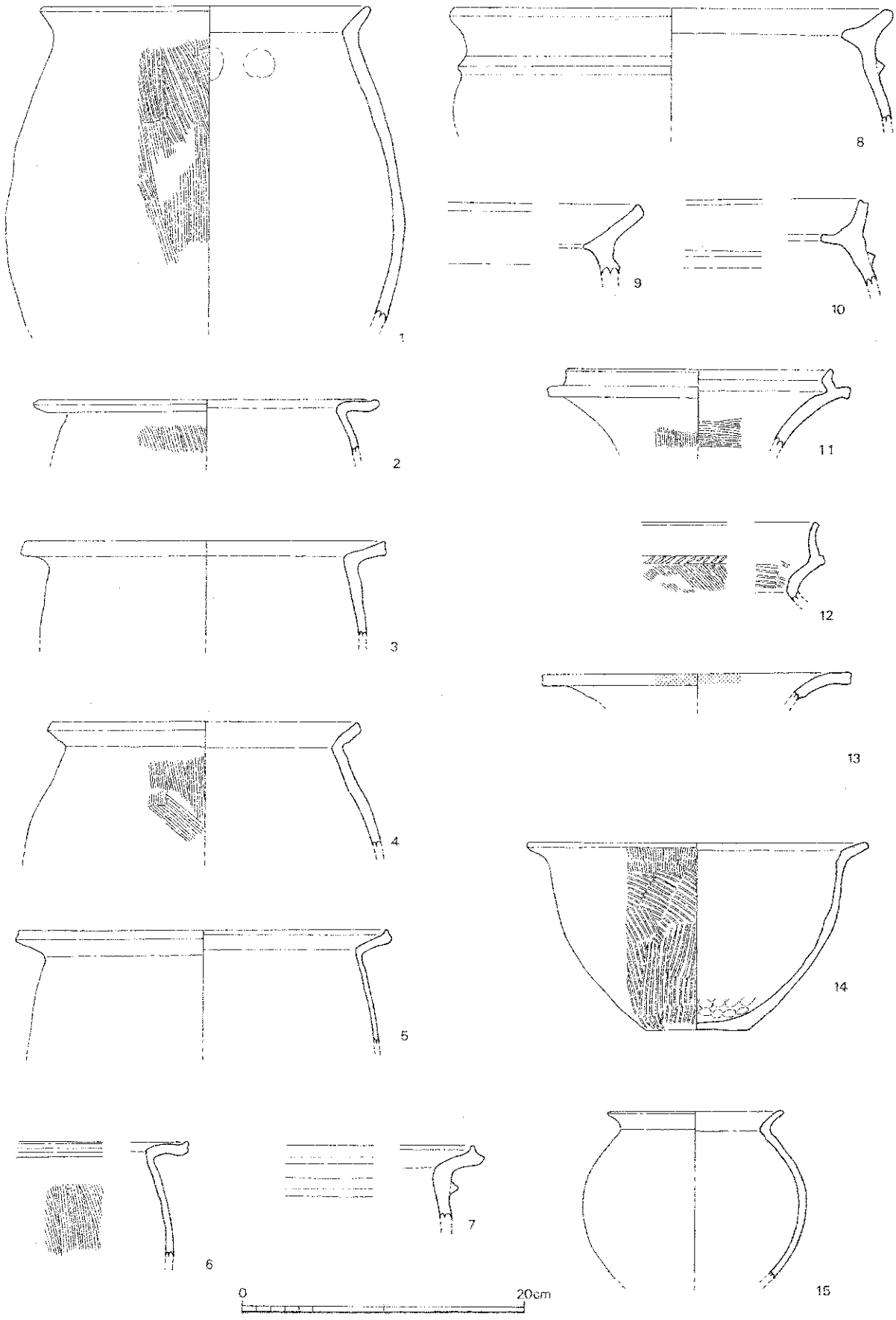
第39図1～11は袋状口縁壷で長頸と短頸がある。1は長頸で内外面に丹が塗付され，器表は丁寧に研かれている。頸部内側にはしぼり痕が見られる。2は袋状口縁がやや直行する。外面は風化しており丹塗りが不明。1，2ともに胎土はきめ細かく石英，長石，金雲母を含む。3，4はやや短径で内外面は丹が塗付されている。口縁は丸く内湾している。5はやや大形で短形の頸部に断面三角形の突帯を有する。口縁外側には弱い沈線が施されている。また頸部外側には丹塗りの跡がわずかに残る。胴部は球形を呈するので，11も同様の形態と考えられる。胎土には石英，長石，角閃石，金雲母を含む。6は弱い袋状口縁で頸部のしまりも弱く胴部も張らない。頸部には断面三角形の突帯をもつ。外面にはハケ目調整のあと，丹が塗付されている。胎土には石英が多く，金雲母が少し含まれる。8～10は口縁部が「く」字形を呈するが，屈曲部に若干の丸みを残している。10の外側には丹が塗付されている。

以上の袋状口縁が弥生中期中葉から後期初頭頃のものである。

第40図1は厚手のぼってりした甕で，口縁は「く」字形に外反し，ヨコナデされている。胴部は中央で丸くふくらみ，外側はやや粗いハケ目調整である。胎土には石英や白い砂粒が少し含まれる。全体の器形から擬無文土器と考えてよいのではないかと思われる。2は逆「L」字形口縁を呈するが形がいびつで焼きが甘く，色調は浅黄橙である。胎土には石英と金雲母が目立つ。3～7は，跳ね上げ口縁の甕である。口縁外側の端部には弱い沈線が入る。4，6は外側に細かいハケ目調整，5,6は器壁からうすく仕上げられている。7は口縁直下に断面三角形の突帯が1条巡る。全体的な色調は浅黄橙を呈する。8～10は口縁が内湾する比較的大形になる甕で口縁直下に断面三角形の突帯文が付く。口縁の内外はヨコナデされている。胎土には石英，長石を含み色調は浅黄橙を呈する。11，12は複合口縁壷である。口縁は「く」字形になり11は外側に大きく張り出す。内側はヨコに外側はタテにハケ目調整されている。胎土には石英，長石，金雲母が含まれ，色調は橙。12は口縁部が立ち上がり，「く」字形に屈曲するが，端部と屈曲部に縄目が斜めに施されている。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調は黄橙。13は広口壷口縁で丹塗りである。14は鉢形土器で外面はハケ目調整，底部内面は指押さ



第39図　原７区出土土器実測図⑧（１／４）



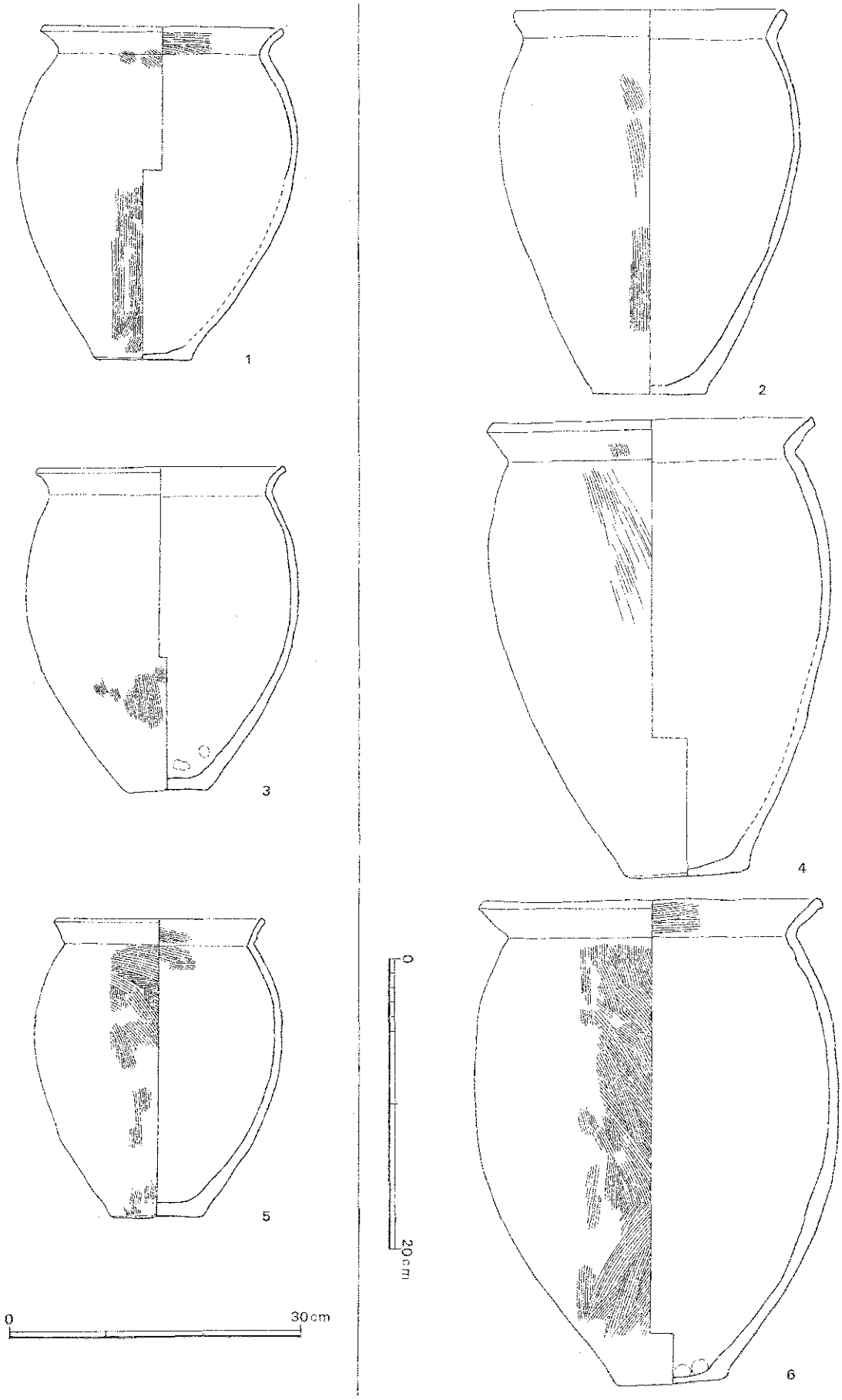
第40図　原７区出土土器実測図⑨（１／４）

えが残る。石英，長石，金雲母を含む。15は壺で口縁は外反する。石英，長石，角閃石，金雲母を含む。

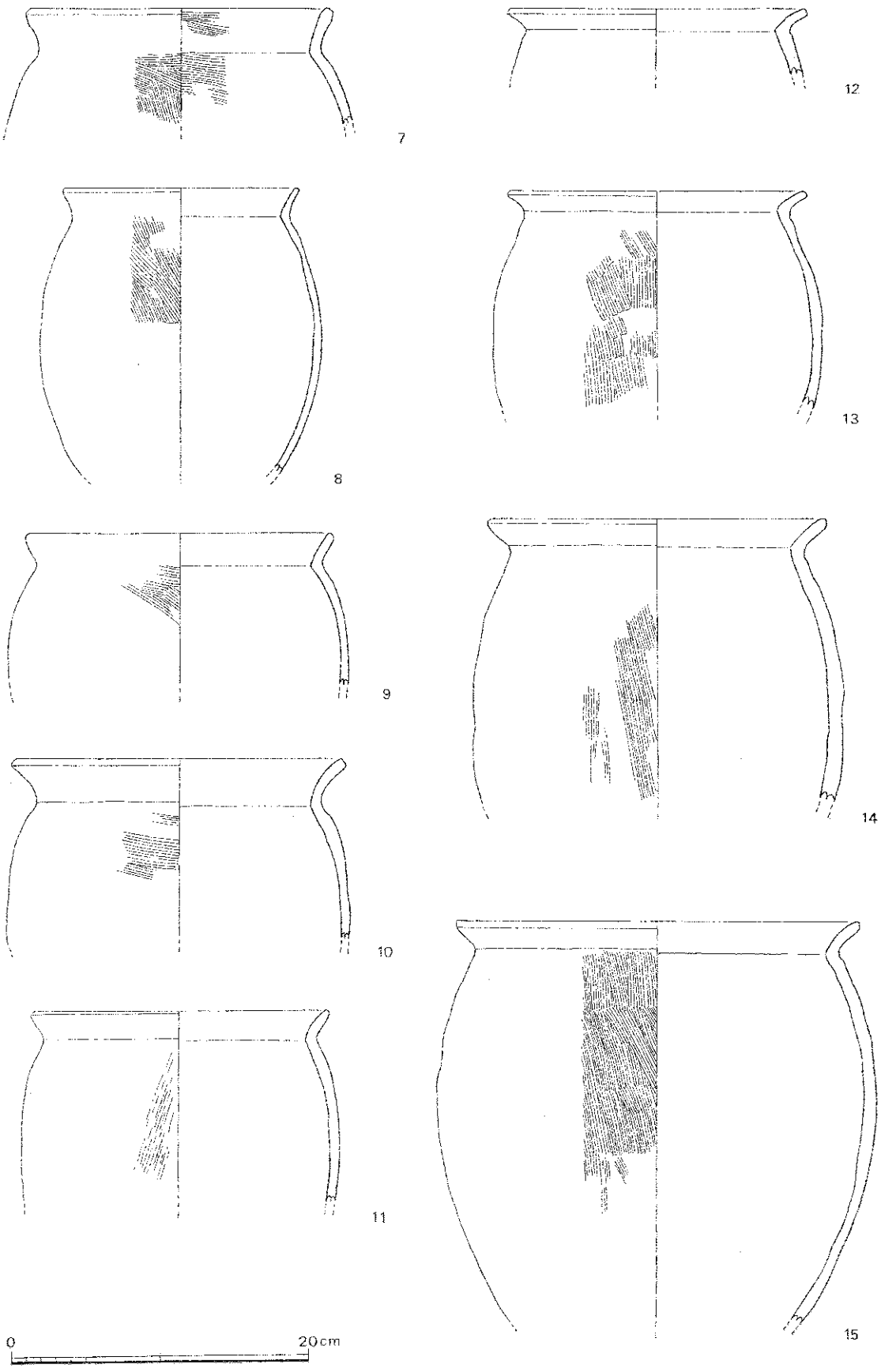
以上の土器は弥生中期中葉～後期終末頃の資料である。

③７区出土上層の土器（第41図～第44図）

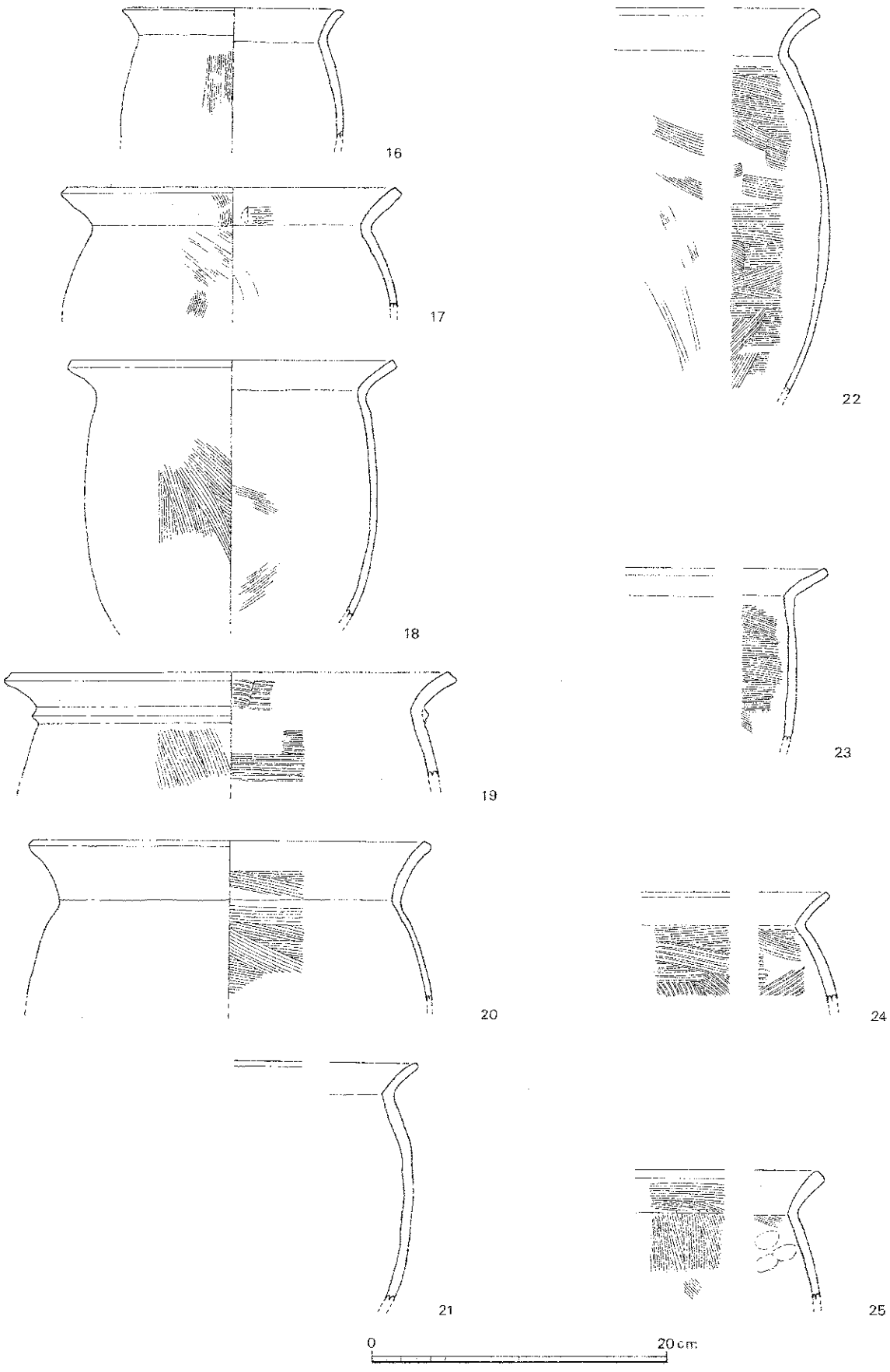
７区出土の４層暗褐色粘質土層から出土した土器群である。第41図１～第44図34は甕である。１～６は完形の甕で口縁は「く」字形に外反し，端部は平坦におさめられている。最大径は胴中位にあり長胴である。外側器面は丁寧なハケ目調整がタテ，あるいは斜め方向に施されている。また１，５，６の口径内面にはヨコ方向にハケ目，外側はヨコナデが施されている。胎土にはほとんどが石英，長石を含み，１，５を除いて金雲母が混じる。色調は灰褐色を呈する。口径は約22cmから高さ約35cm内におさまる。７～15は甕破片である。口縁は「く」字に外反し，端部は丸くおさめられ，内外はヨコナデされている。12を除いて外側はハケ目調整が施され，特に15は丁寧な仕上げである。色調は７，14がにぶい赤褐色，ほかはにぶい橙を呈している。胴部の張りは丸みをもつものが多い。16～25も甕破片である。16はやや小ぶりの土器で口縁は「く」字に外反し，端部は平坦でわずかにつまみ出されている。29は頸部に断面三角形の突帯が１条巡る。全体の外面にハケ目が施されているが，22～24は内面全体にわたってハケ目調整が見られる。最大胴囲は18，22が胴中位より下にあり，23は直線的である。胎土には石英，長石，金雲母が含まれ，焼成も良好である。色調はにぶい黄橙か黄褐色を呈するものがほとんどである。26～34も甕破片である。26は頸部がよくしまり，口縁が外反し，端部に弱い沈線がわずかに付く。27の口縁も26同様であるが，頸部に弱い突起が見える。器壁はうすい仕上げになっている。28は外側に粗いハケ目調整があり，内側口縁がヨコに，頸部が斜めに，またその下部にはヨコに付され，下位はまた斜めといった具合に，部位を替えて施されている。28，29は長胴になると思われる。30の口縁は若干短く，外反して口縁端部は平坦である。31は頸部外側はゆるくカーブし，全体がヨコナデされている。胎土には石英，長石，白い砂粒が含まれる。32は直線的に外反した口縁端部は丸くおさめられている。外側は斜め方向にハケ目が施され，その上をさらに斜めにハケが付されている。33は口縁外側はヨコナデ，胴部は斜め方向にハケ目調整。内側は口縁がヨコ方向，胴部がタテ方向にハケ目が付されている。34は口縁は内外ともヨコナデで，胴部は丸くふくらみ，ススが付着している。35はやや小ぶりの土器で，口縁は長く外反し，端部は平坦でヨコナデされている。外側の口縁から頸部にかけてわずかにハケ目の跡が残る。胎土には石英，長石，金雲母が含まれる。壺に近い器形である。36は頸部がゆるくカーブする。外側はナデ成形され，口縁内側にわずかにハケ目が残る。37は胴部が直線的に張り出す器形で，口縁内側にヨコにハケ目調整されている。38は外反した口縁端部が細くつまみ出されている。外側にはハケ目が粗く施され，内側には弱く付けられている。39は口縁が強く外反し，頸部はよくしまり，胴部は丸く張り出し壺的な感じがする。外側はヨコナデされた跡に粗いハケ目が施されている。胎土には石英，長石，金雲母を含む。40の口縁は直線的に外反し，端部は細く平坦である。胴部内側にはハケ目調整が見られる。41も口縁は短く，外反し，頸部はよくしまる。外側には細いハケ目調整で，口縁は内外ともヨコナデ仕上げ。40，41ともに胎土



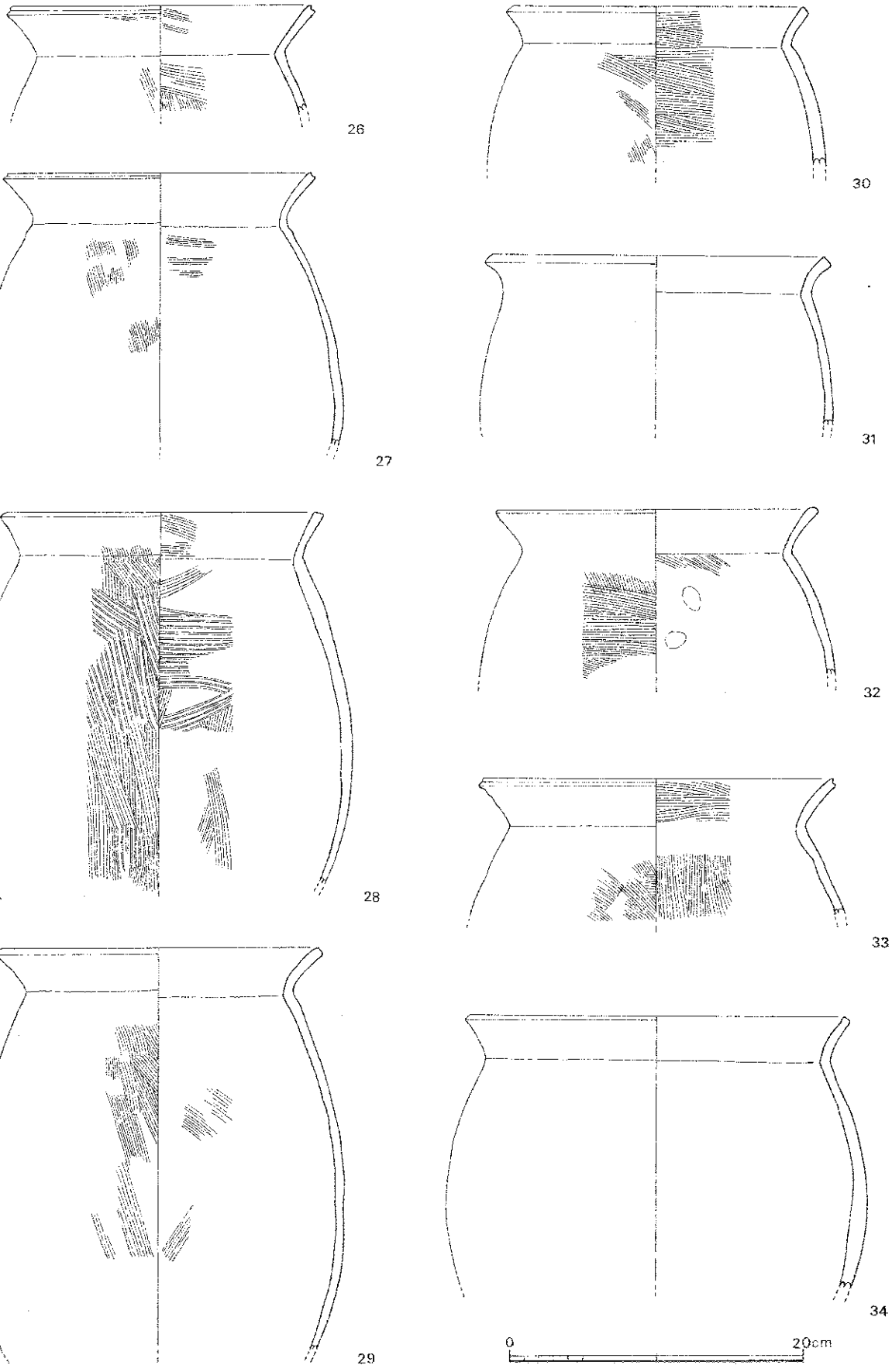
第41図　原７区出土土器実測図⑩（１／４・１／６）



第42図　原７区出土土器実測図⑪（１／４）



第43図　原７区出土土器実測図⑫（１／４）



第44図　原７区出土土器実測図⑬（１／４）

には石英，長石，金雲母を含み，色調は浅黄橙を呈する。

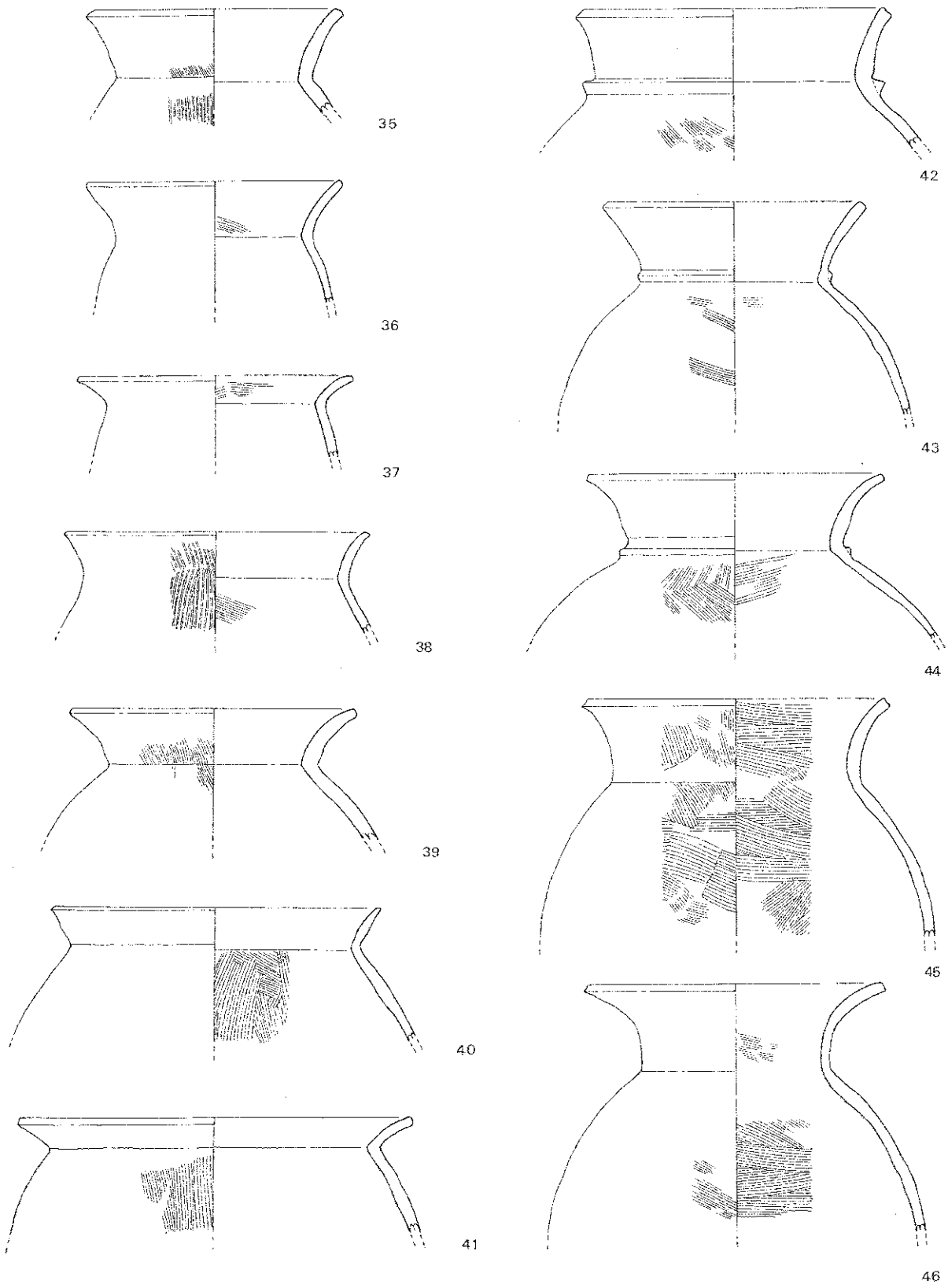
42～46は壷形土器である。42は口縁が外湾しながら延び，端部はわずかに凹んでいる。頸部には断面三角形の突帯が1条巡る。外側には細かいハケ目，内側には粗いハケ目で調整されている。胎土は石英，長石を含み色調は灰白色である。43は長い口縁が外湾し，端部は平坦である。頸部はよくしまり，断面三角形の突帯が1条巡る。器壁は風化しており，内外面にわずかにハケ目が残る。胎土には石英，長石，金雲母を含む。44は口縁が外に大きく開き，端部は平坦におさめられている。頸部に近い方はやや肥厚しており，その直下のくびれ部に断面三角形の突帯が1条巡る。口縁の内外はヨコナデ，胴部の内外面はハケ目調整されている。胎土には石英，長石を含み，色調はにぶい橙。45は外反する口縁端部は平坦で，わずかに凹んでいる。口縁から胴部までの内外面にハケ目調整が丁寧にされている。胎土には石英，長石，金雲母が含まれ，色調は橙を呈する。46は口縁が大きく外に開き，端部は弱い沈線が巡る。胴部の内外面にハケ目調整が見られる。胎土には長石，石英，金雲母を含む。以上の壷形土器は弥生後期中葉から終末頃にかけての資料である。

底部（第46図1～11）

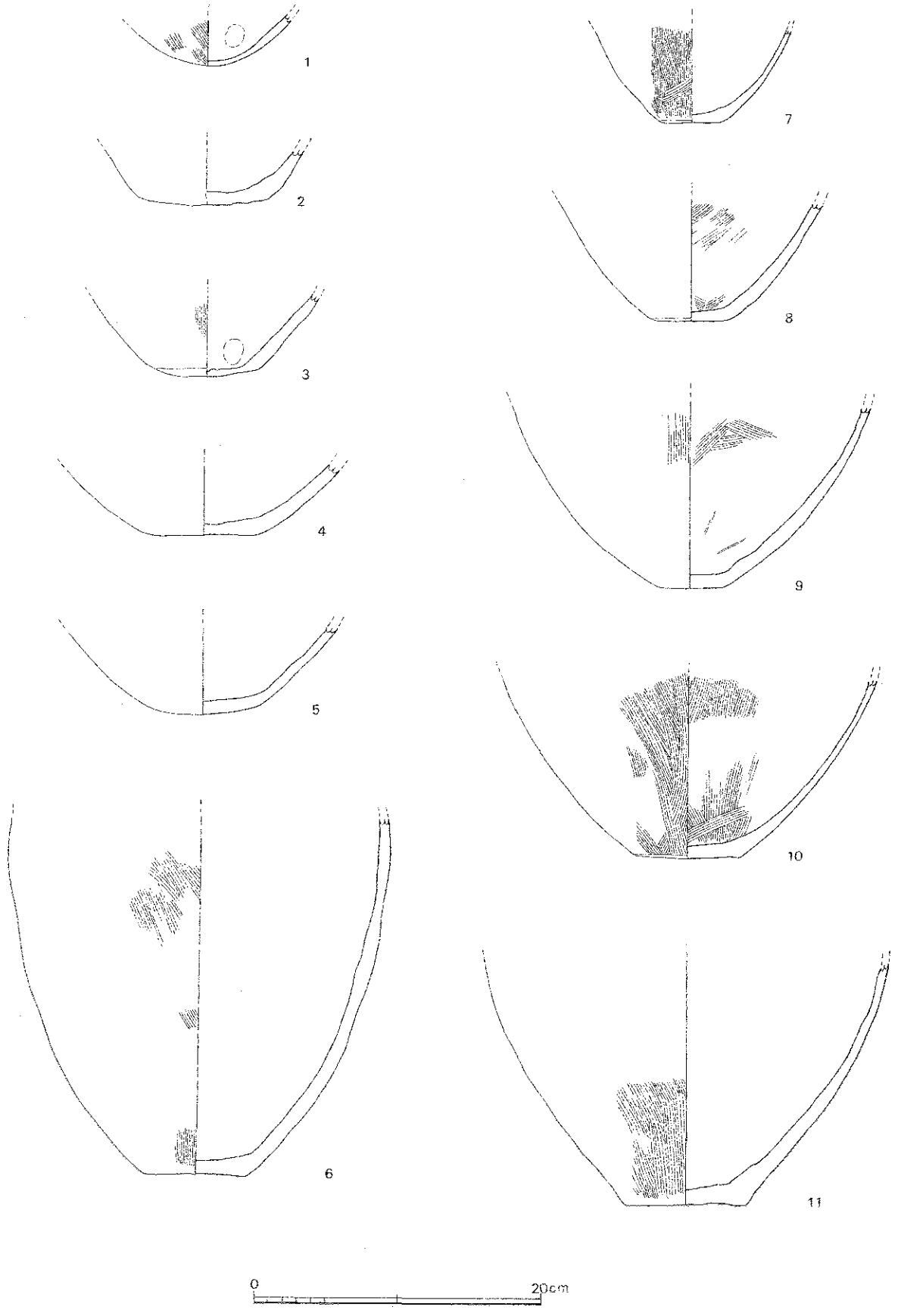
ここに図示した底部は甕の器形になるものである。1はやや尖りぎみの底で，外側にはハケ目が見られ，内側には指おさえが残る。2はわずかに平坦面が残り，隅丸の感じで立ち上がる。3，5は丸底になっているが，3は底部にヘラ押さえの跡が残る。4，6～11は平坦な底を有する胴長の甕を呈すると思われる。すべてにハケ目による調整が行われている。胎土には石英，長石を含み，6を除いて金雲母が混じる。色調も灰黄褐色を呈するものがほとんどである。

壷形土器（第47図1～第48図23）

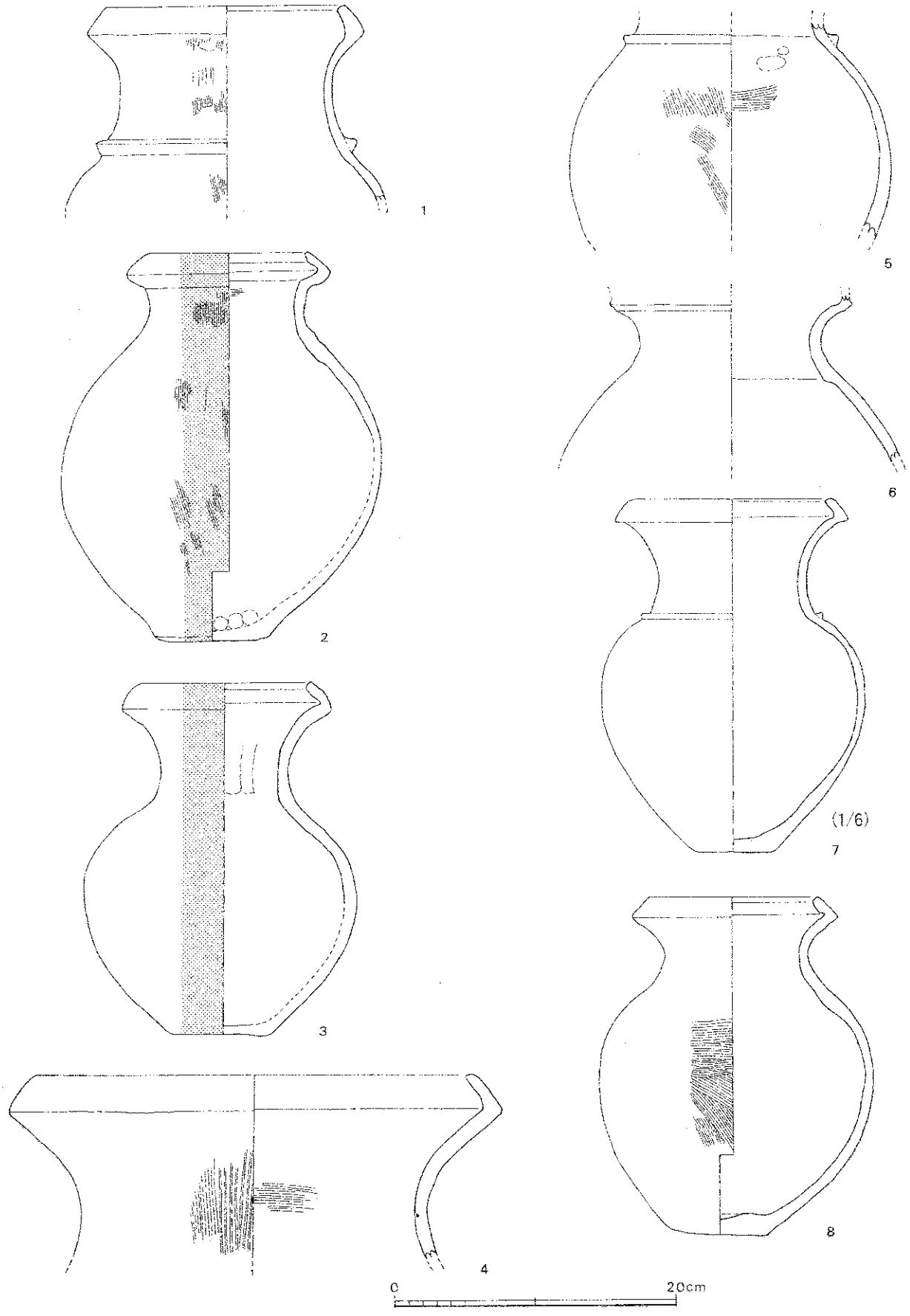
ここに図示した土器は複合口縁を有する壷形土器である。1は内湾ぎみに屈曲する複合口縁端部はやや丸くおさめられている。頸胴界には断面三角形の突帯が1条巡り，ハケ目調整である。胎土には石英，長石，金雲母を含み色調は橙を呈する。この土器の下部にあたる器形は5である。5は胴が球形を呈し，外側はハケ目で調整されている。2は完形で複合口縁端部が尖りぎみに，丸くおさめられている。やや短頸で，口縁の内面は鋭角になっている。胴部は球形で，底部の立ち上がりはわずかに外湾している。器表全体はハケ目で調整され，その上に丹が塗付されている。胎土には石英，長石を含む。高さ28cm，最大胴径22.8cm，口縁外径14.2cmを測る。3は完形で器表全体に丹が塗付されている。頸部内面にはしぼり痕が認められる。胎土には石英，長石，金雲母が含まれている。高さ24.8cm，最大胴径19.2cm，口縁外径14.8cmを測る。4は大ぶりな複合口縁で外側に粗いハケ目がタテに，内側には弱いハケ目がヨコに施されている。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調は浅黄橙を呈する。6は複合部上部口縁を欠いた土器で器形は2に近似するものと思われる。7はタテ半分が欠失した土器で大形である。頸部界に断面三角形の突帯が1条巡る。外側は風化を受けているが，内側には胴下位から底部に炭化したものがこびりついている。胎土には石英，長石が目立つ。色調は橙。器高は37.8cm，復原胴径28.2cm，口縁外径24.9cmを測る。8は完形で複合口縁部が直角に張り出し，端部は丸くおさめられている。胴部はほぼ球形で底部につながる。底は平坦であるがやや安定感を欠き内面は盛



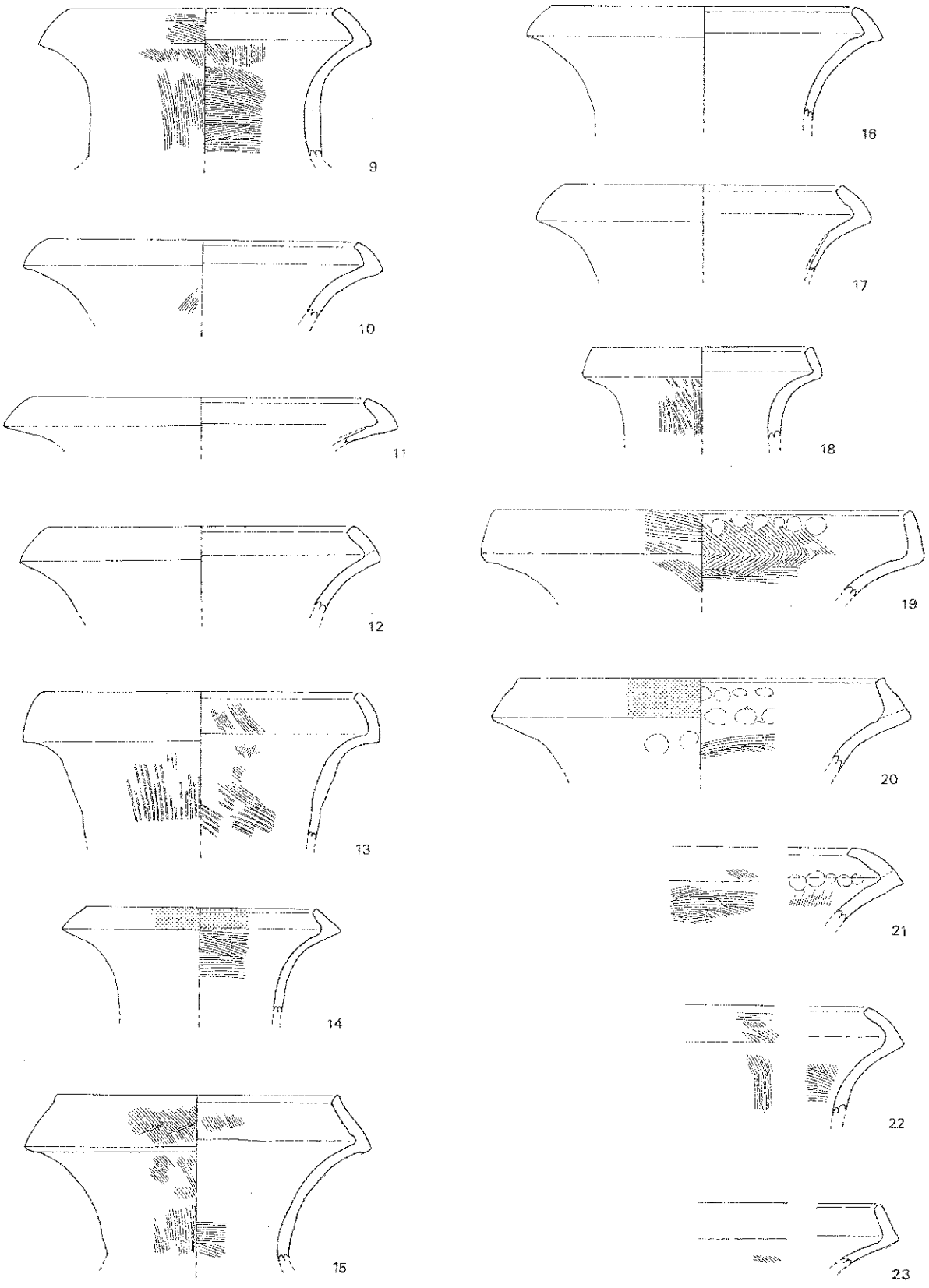
第45図　原７区出土土器実測図⑭（１／４）



第46図　原７区出土土器実測図⑮（１／４）



第47図　原７区出土土器実測図⑯（１／４）



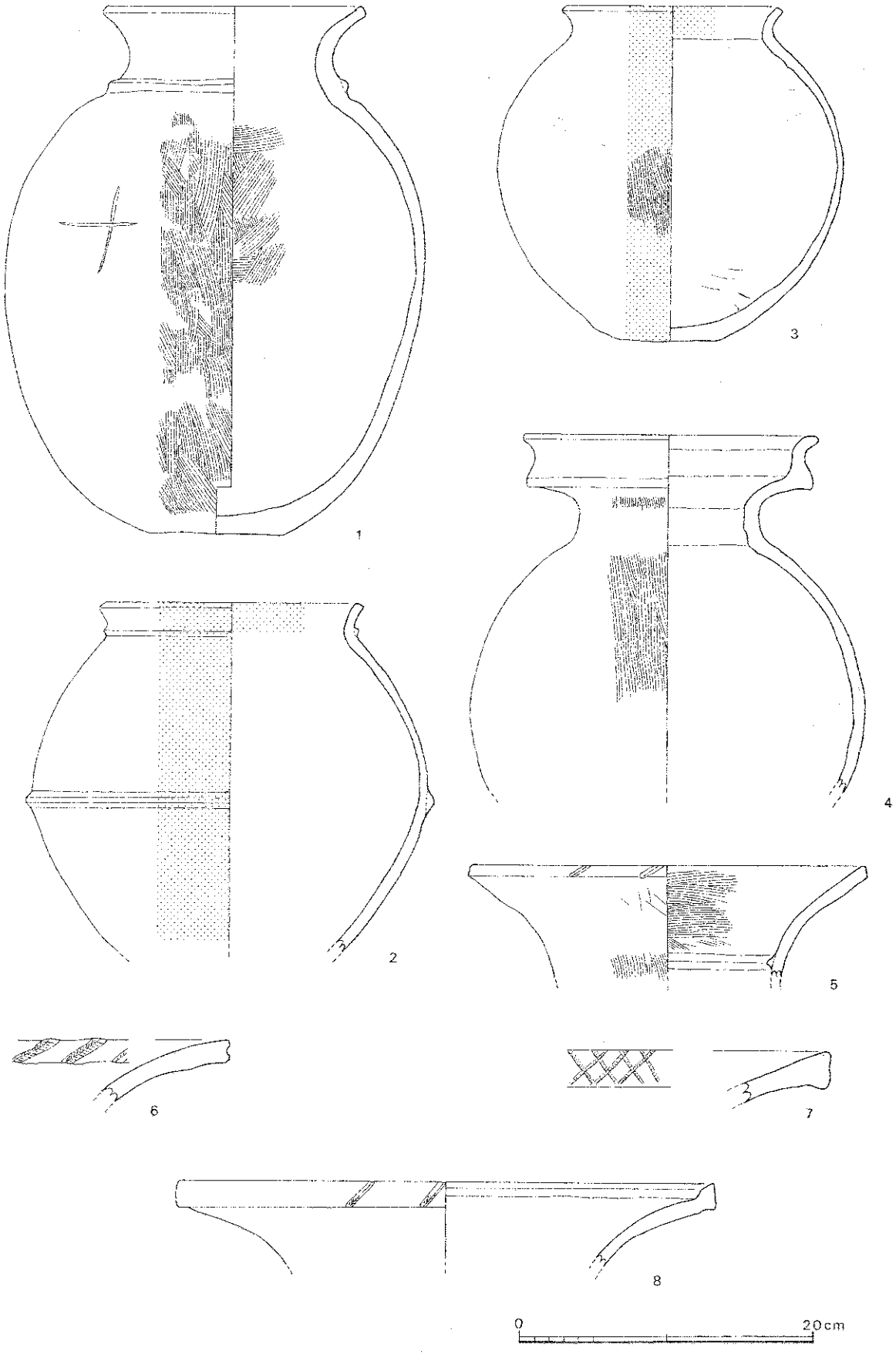
第48図　原７区出土土器実測図⑰（１／４）

り上がっている。胴部には細かいハケ目調整が行われているが，風化も受けている。わずかに丹塗りの痕跡をとどめる。器高22cm，最大胴径19.6cm，口縁外径14.6cmを測る。9～23は複合口縁長頸壺の破片である。ほとんどの口縁は内湾ぎみに屈曲している。9は内外面ともにハケ目調整。14は口縁の内外面に丹が塗付され，内面にはヨコにハケ目調整されている。15は複合口縁下部に段がつき，端部は外側につまみ出されている。内外面とも細かいハケ目調整の上に口縁部分だけ丹が塗られている。外側口縁部だけ丹が塗られているのは18，20で胎土には長石，石英，金雲母が含まれる。19の口縁は垂直に近い立ち上がりで内面から頸部にかけて綾杉状にハケ目調整が施されている。以上の土器群は後期中葉から終末頃までの資料である。

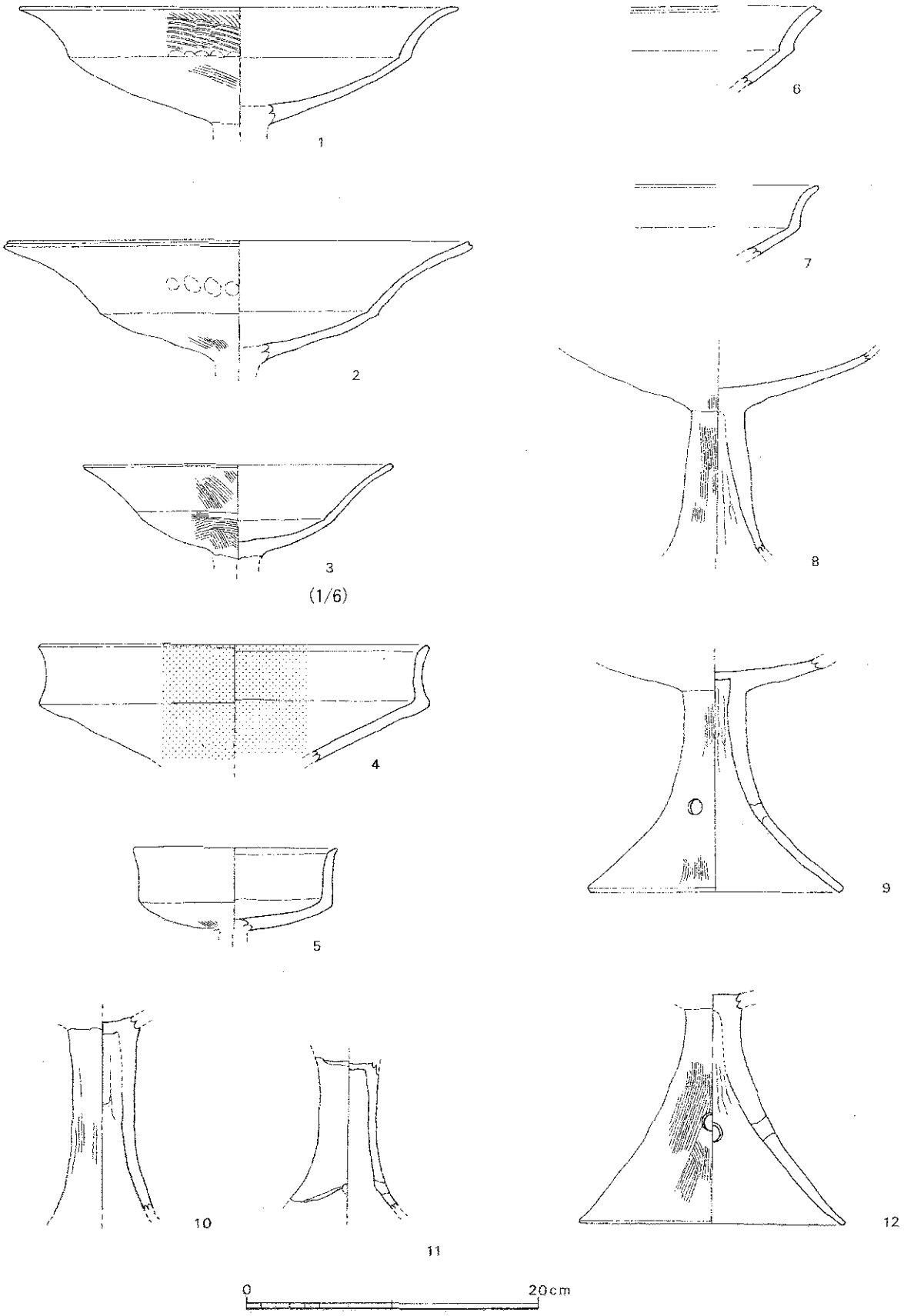
第49図1～3は短頸の広口壺である。1はほぼ完形品で器壁は厚くぼってりとして重量感がある。胴部は丸く張り出しているがやや長胴で平底になる。口縁の内外はヨコナデ，胴部の内外はハケ目調整が行われている。頸部には断面三角形の突帯が1条巡る。胴部上位には十字状のヘラ記号が2ケ所見られる。先ず，タテに上から切り込み長さは5.5cmを測る。ヨコは水平に6.5cmの長さで力強く引いている。もう1個は同じ仕上げであるがタテの長さは6.5cm，ヨコが5cmを測り，反対の長さになっている。胎土には長石，石英，金雲母が含まれ，色調はにぶい橙。器高は36.4cm，最大胴径28.8cm，口縁径18cmを測る。2はわずかに外反した短い口縁の端部に平坦におさめられている。頸部と球形の胴部張り出し部に断面三角形の突帯が巡る。口縁内側と器表全体には丹が塗付されている。胎土には石英，長石，金雲母が含まれる。最大胴径は27cmを測る。3は外反した短い口縁をもち，胴は球形を呈した平底になる。口縁内面と器表全体に丹が塗付されている。4は二重口縁で頸部はよくしまり球形の胴部へつながる。胴部上面には，斜め方向にハケ目調整が行われている。胎土には石英，長石，金雲母を含む。5～8は口縁が大きく広がる広口壺である。口縁は肥厚し，端部はヨコナデされ浅く凹んでいる。5，6，8は平坦な端部面に縄目状の刻目が施されている。7は格子状に入れられている。胎土には石英，長石，金雲母が含まれている。以上の土器は弥生後期中葉から終末頃までの資料である。

第50図1～12に図示した土器は高杯である。21はゆるく内湾しながら伸びる杯部は，口縁部で急に外反し，端部は丸くおさめられている。杯部内面はヘラ状のもので丁寧にナデている。外面は屈曲口縁部にハケ目調整，体下半部にもハケ目がわずかに残っている。脚部は欠失している。胎土は精選され，きめ細く，金雲母が含まれる。色調は浅黄橙。2は内湾する杯部よりも外反する口縁部の方が長くなっている。口縁部と杯部の堺には浅い段が付く。内外面は丁寧なナデ仕上げ。脚部を欠失している。3も2と同じ器形を呈している。4はほぼ直線的に開いた体部から垂直に口縁が立ち上がるが，わずかに外反している。内外面は丹が塗付されている。5は小ぶりな杯部であるが，口縁が垂直に立ち上がり，端部がわずかに外反する。内面にハケ目，杯部下部にもわずかにハケ目が残る。6，7は外反する口縁部が短い高杯になるもので，前者に先行する土器である。8～12は胴部で，外に開く部分に穿孔があるもの9，12などがある。以上の高杯は弥生後期後葉から終末にかけての資料である。

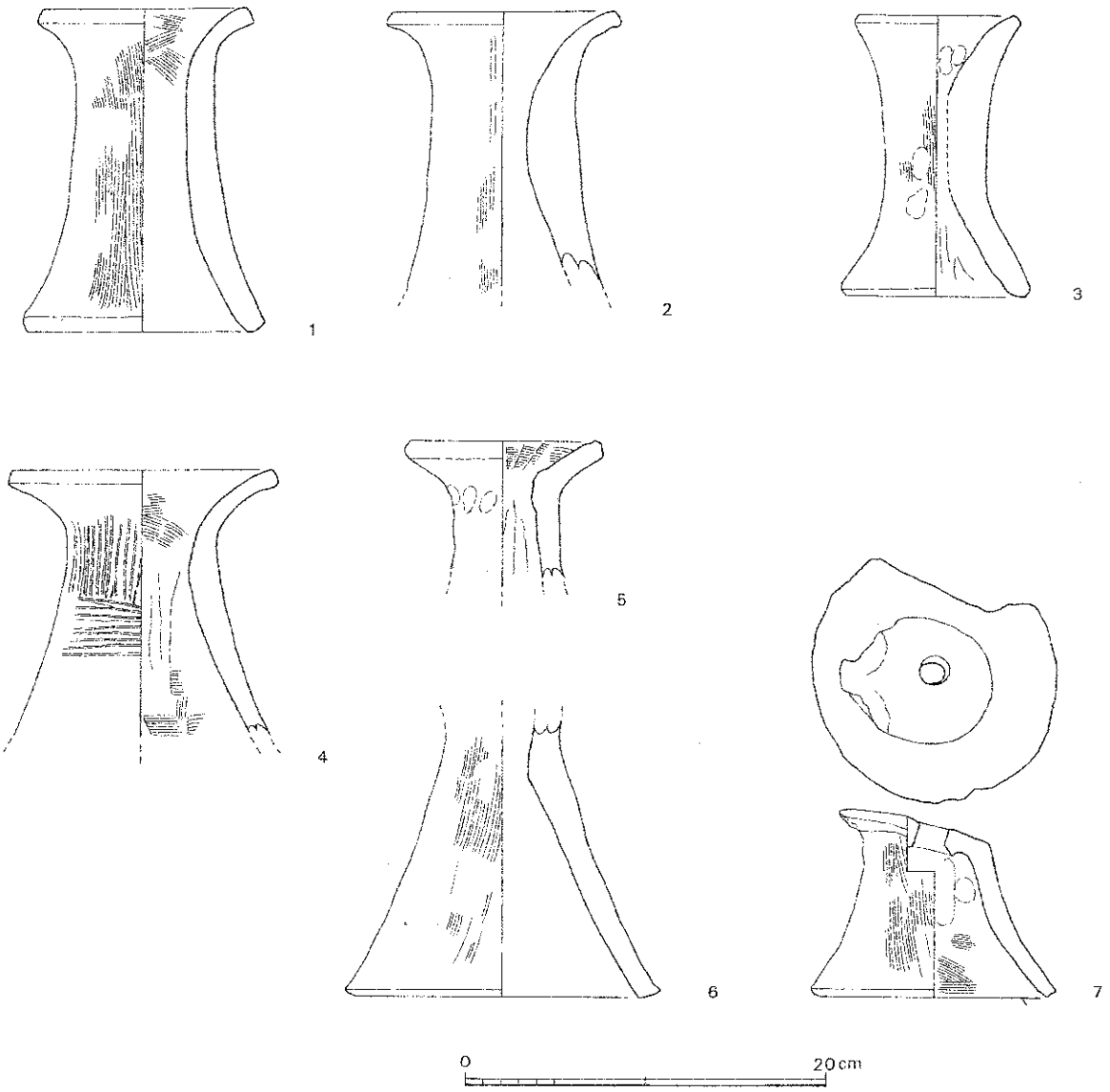
第51図1～7に図示した土器は鼓形の形態をもつ器台と支脚である。1と3ははぼ完形。1は外側



第49図　原７区出土土器実測図⑱（１／４）



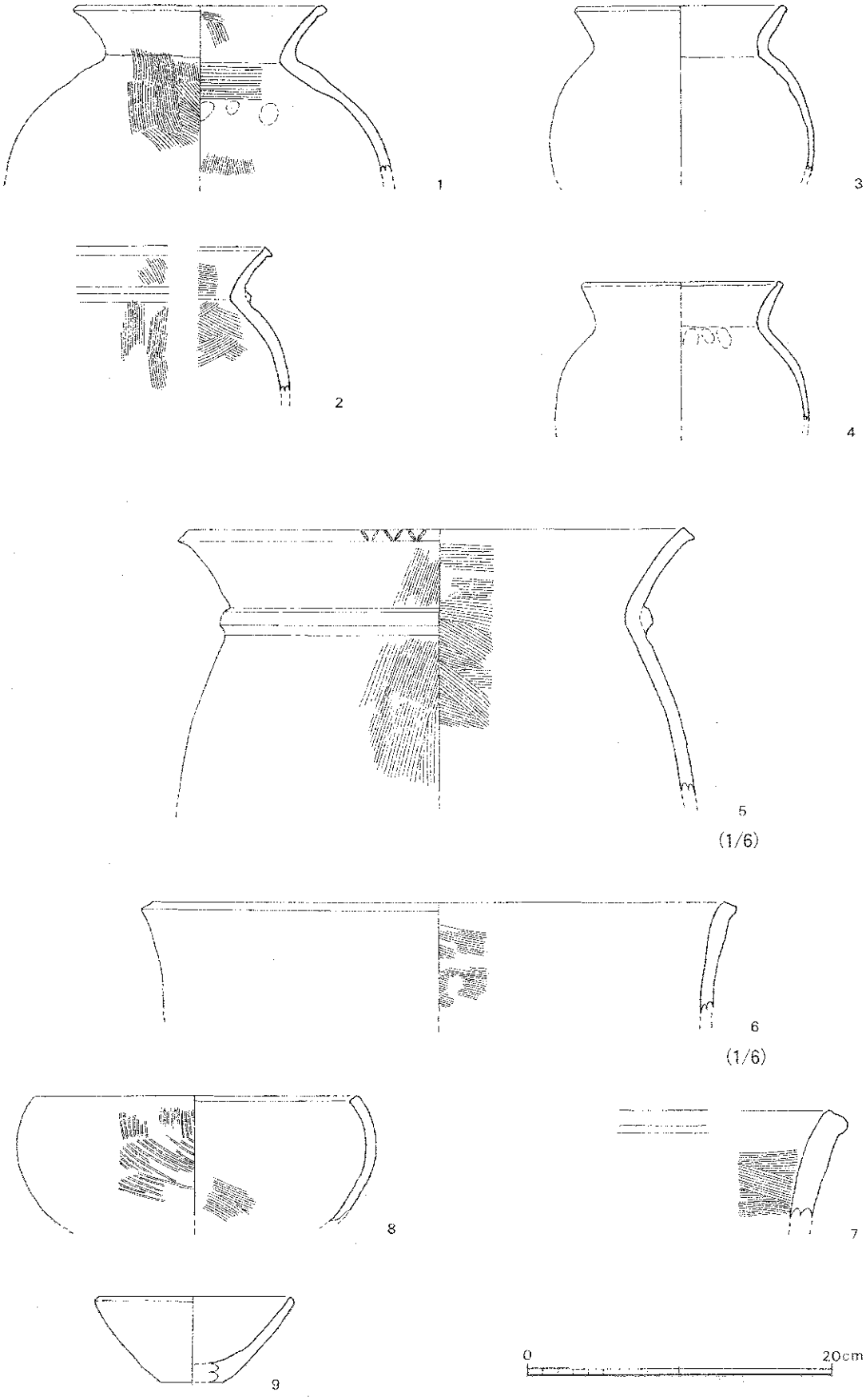
第50図　原７区出土土器実測図⑲（１／４）



第51図　原７区出土土器実測図⑳（１／４）

にタテの粗いハケ目，上部内側にもハケ調整が行われている。胎土には石英や金雲母が含まれる。色調は黄褐色。２は１と類似器形。３は胎土も粗く作りも粗略で，下端部は楕円形を呈している。４は丁寧に作られているが下端部を欠失している。胎土には石英，長石，金雲母が含まれ，色調は黄褐色。６も５と類似器形である。７は完形の支脚である。上部に嘴形の突出部をもち上面はわずかに湾曲し，中央に楕円形の穿孔が焼成前にあけられている。外に開く脚部には全体にタテにハケ目が調整されている。

第52図１～４は口縁が「く」字形に外反する広口壷である。１は頸部がよくしまり，口縁端部は若干肥厚し，丸くおさめられている。胴部は丸く張り出し，ハケ目調整され，内側も同様である。胎土には石英，長石，金雲母が含まれ，色調は浅黄橙を呈する。２は口縁端部が面取りされ頸部に断面三角形の甕破片で，復原口径は51cmを測る。口縁は外に開き端部は平坦に成形され，その上にヘラ状工具で「ハ」字状に刻目が施されている。頸部には幅２cmの断面方形の突帯が巡る。胴部は長く伸びる



第52図　原７区出土土器実測図㉑（１／４）

と思われ，甕棺として利用された可能性もある。胎土には石英を多く含み長石，金雲母が混じる。色調は明褐色，この資料は西新式として捉えられるものである。6，7は大型甕の口縁。6の復原口縁径は58.5cmを測る。図示したよりも外に開くと思われる。両者とも内側に丁寧なハケ目調整が行われている。胎土は6に石英，長石，赤色粒子を含み，7は石英，長石，金雲母を含む。8は鉢で口縁端部は平坦で内傾し，わずかに凹んでいる。外面は粗いハケ目調整，内面は弱いハケ目調整が行われている。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調はにぶい黄橙で，下部にススが付着している。9は小形の鉢で復原口縁径13.2cm，器高5.8cmを測る。底部は平坦で外に開くよう立ち上がり，口縁端部は外に傾く。内面には炭化状のものが付着している。胎土には長石，石英，金雲母を含み，色調は灰白色。

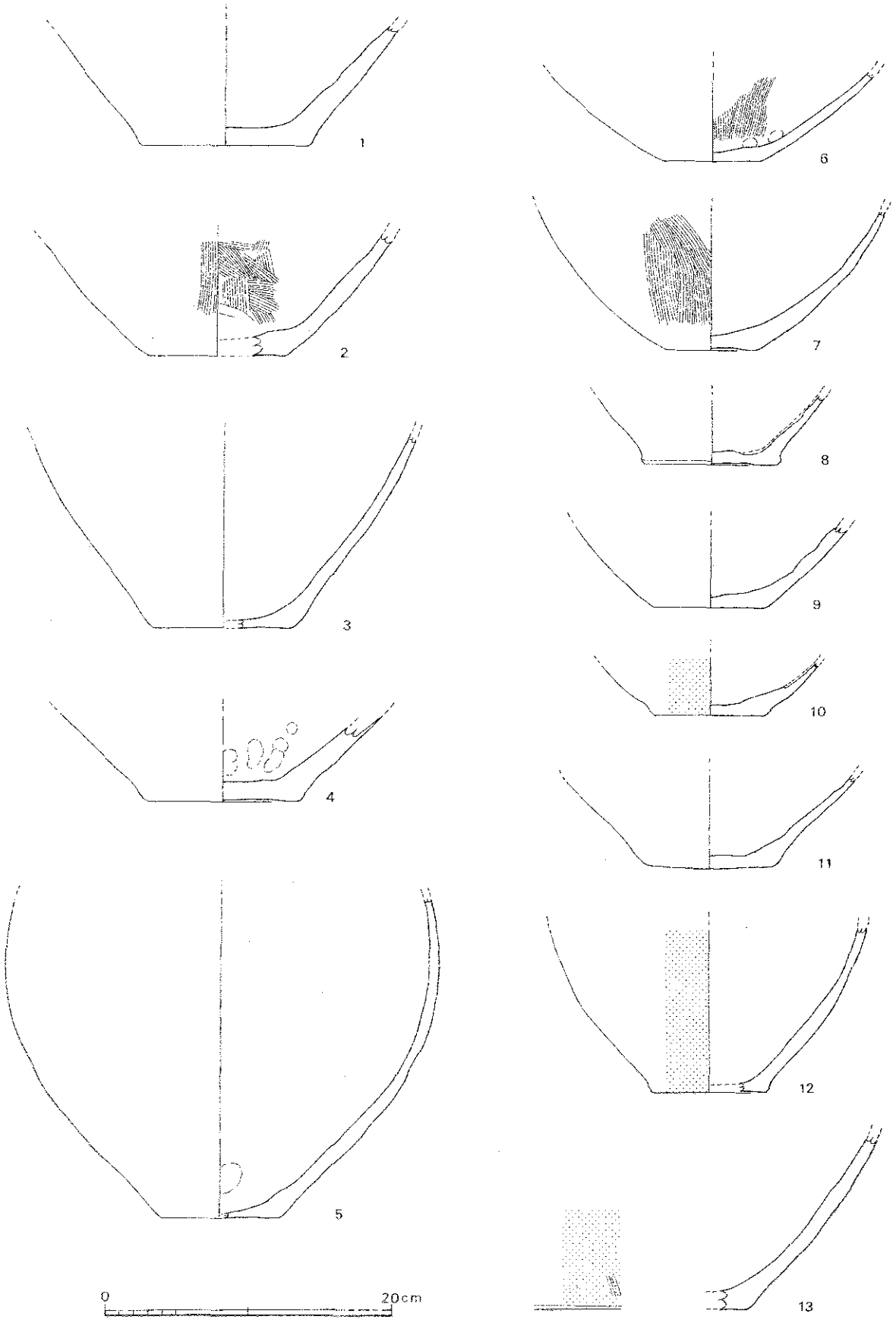
底部（第53図1～13）

ここに図示したのは壺の底と考えられるものである。ほとんどが平底で，4と7がわずかにあげ底である。丹塗りの土器は10，12，13である。ハケ目による器面調整は1，2，6，7で2，6は内側で行われている。これらの底の胎土は，全体的に精選されきめ細かく，石英，長石，金雲母が含まれている。

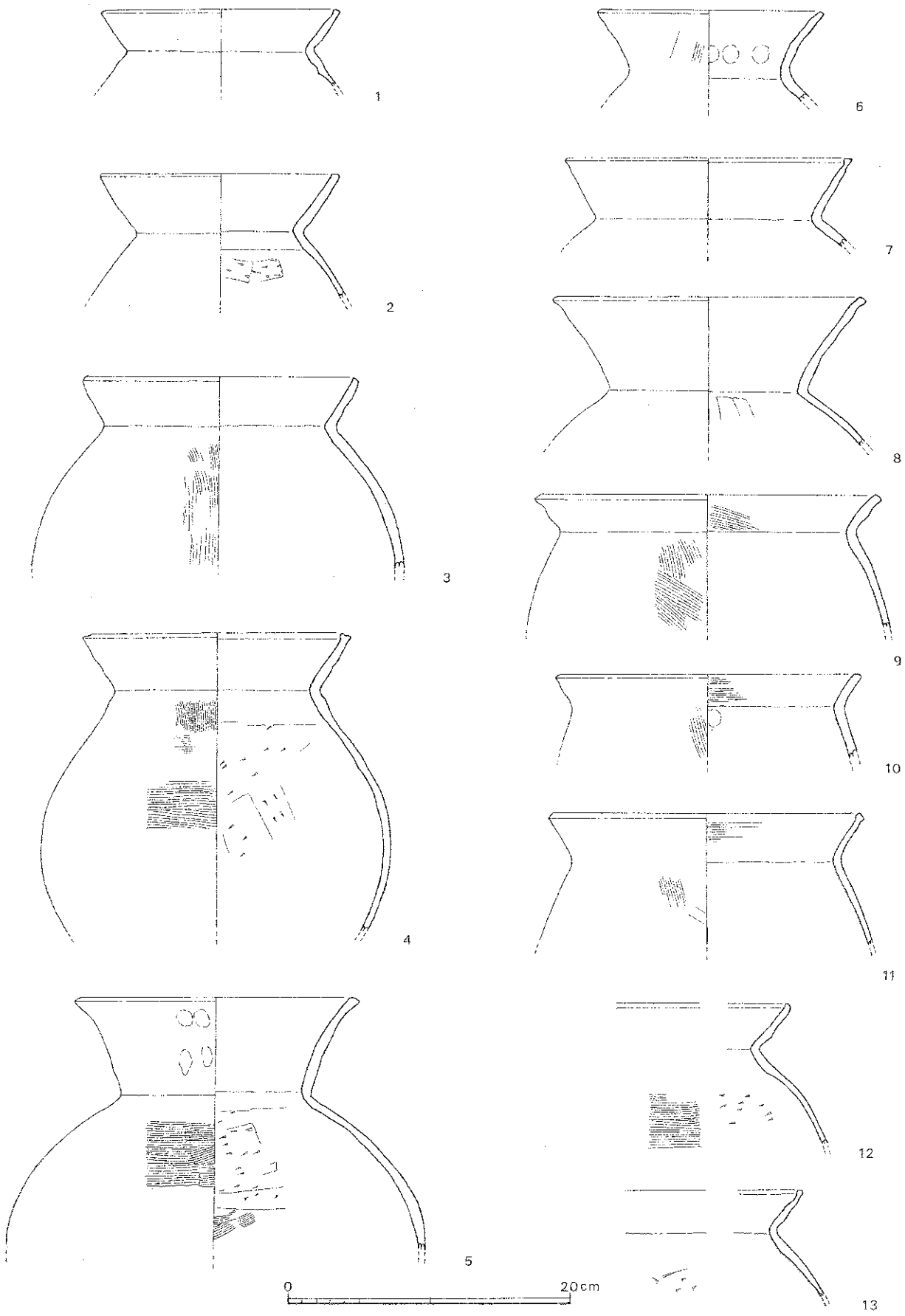
古墳時代初頭の土器（第54図～第56図）

第54図1～13は布留式系の甕である。口縁端部が内湾しながら平坦に摘みぎみにおさめるものと，外湾しながら摘みぎみにおさめるものとに分けられる。1・2は「く」字形に開いた口縁は胴部にかけてヨコナデされ，頸部から胴部内面はヘラケズリが行われている。胎土には石英，長石，金雲母が含まれる。3は外側にハケ目調整。4は口縁端部は弱い凹線が入り，胴部は丸く張り出す。頸部はタテに胴部はヨコに細いハケ目調整され，内側はヘラケズリが行われている。5は口縁部が長く大きく外に開きヨコナデ。外側胴部はヨコにハケ目調整。内側はヘラケズリが行われ，その下にハケ目調整が行われている。胎土には石英，長石，角閃石，金雲母が混じり，色調は浅黄橙。6～8も類似形態である。9，10は口縁が短く外反した形態で内側面はハケ目調整が行われている。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調は黄橙。在地系の土器か。12，13は4と類似形態である。

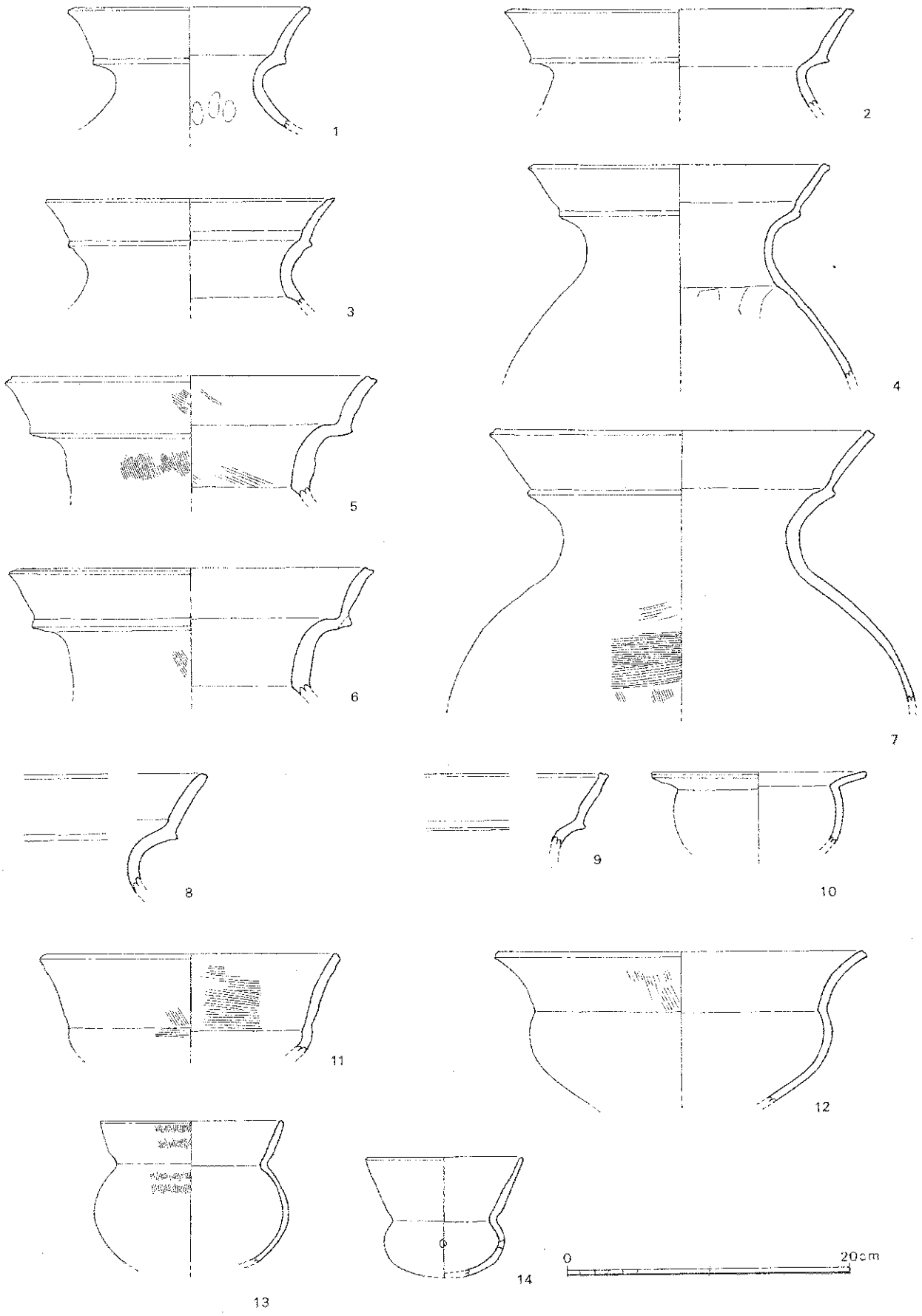
第55図1～9は山陰系の二重口縁壺である。口縁の内外及び外側胴部はヨコナデされる。胴部内側はヘラケズリで調整されている。胎土にはほとんどに石英，長石，金雲母が含まれ，色調はにぶい橙を呈する。5，6は頸部が他の土器と違ってぼってりとして厚くなっている。10～12は浅鉢である。10は口縁が大きく外に開き端部は弱い凹みが付く。端部はよくしまり胴部は丸く張り出す。内外ともナデ仕上げ。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調はにぶい黄橙。11は口縁がわずかに外反し，端部はやや丸くおさまる。内外にハケ目調整。12は11よりも口縁が外反する形で内側はヨコナデ，外側にはわずかにハケ目が付く。胎土には石英が多く，金雲母が少し含まれる。13は口縁が内湾し端部は丸くおさめられている。外側口縁から肩部にかけて細いハケ目調整が施され，一部ヨコ方向にナデ消している。頸部内側には接ぎ目が明瞭に残る。胎土は精選され，砂粒と金雲母が混じり，浅黄橙を呈する。坩としてもよい形態である。14は小形である。直線的に外に開いた縁端部は尖りぎみにおさ



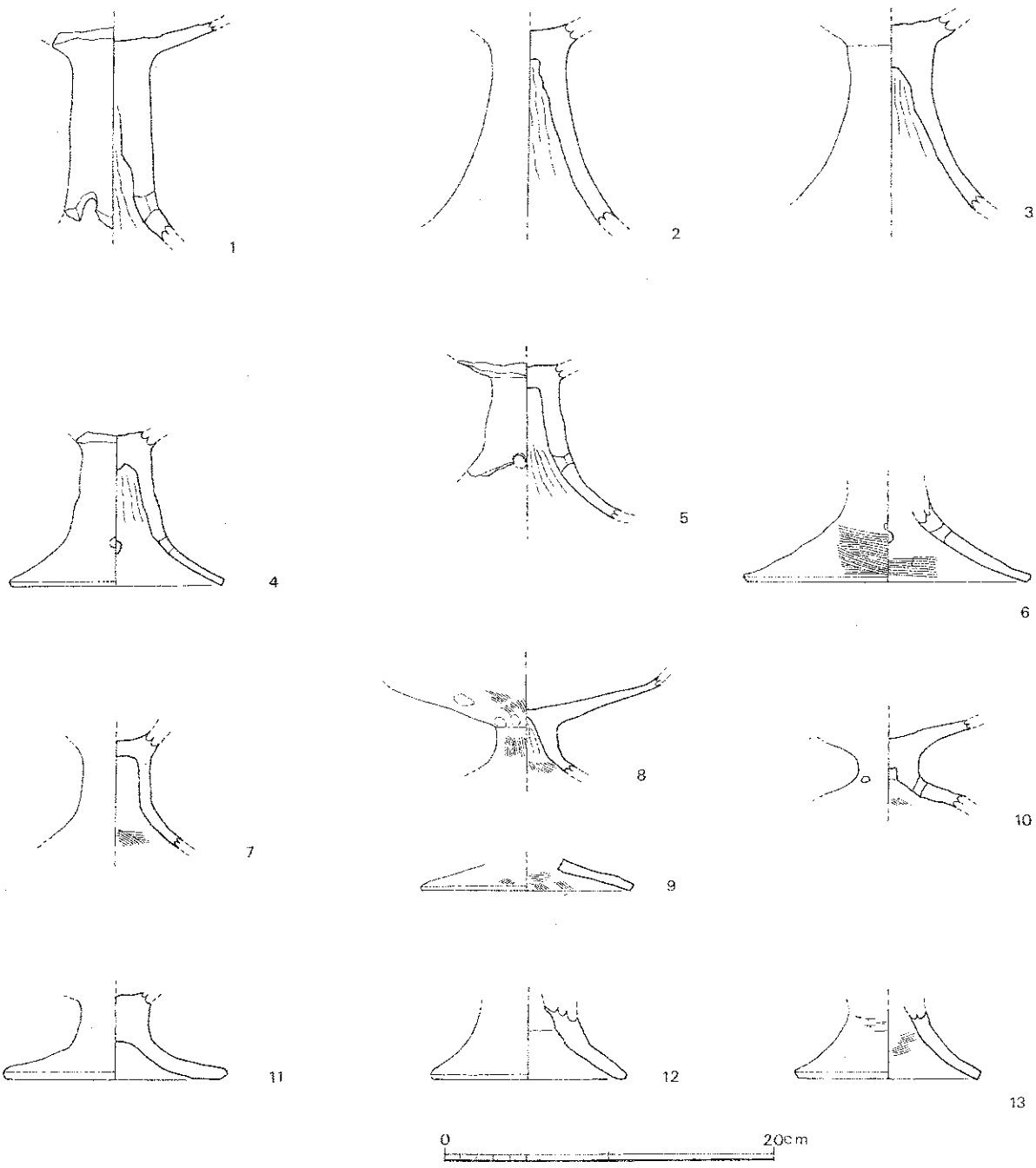
第53図　原７区出土土器実測図㉒（１／４）



第54図　原７区出土土器実測図㉓（１／４）



第55図　原７区出土土器実測図㉔（１／４）



第56図　原７区出土土器実測図㉕（１／４）

められている。内側に化粧土がかけられたようになっているが風化が著しい。胴部には１個の穿孔が見られる。胎土には石英と赤色粒が目立ち金雲母も少し混じる。

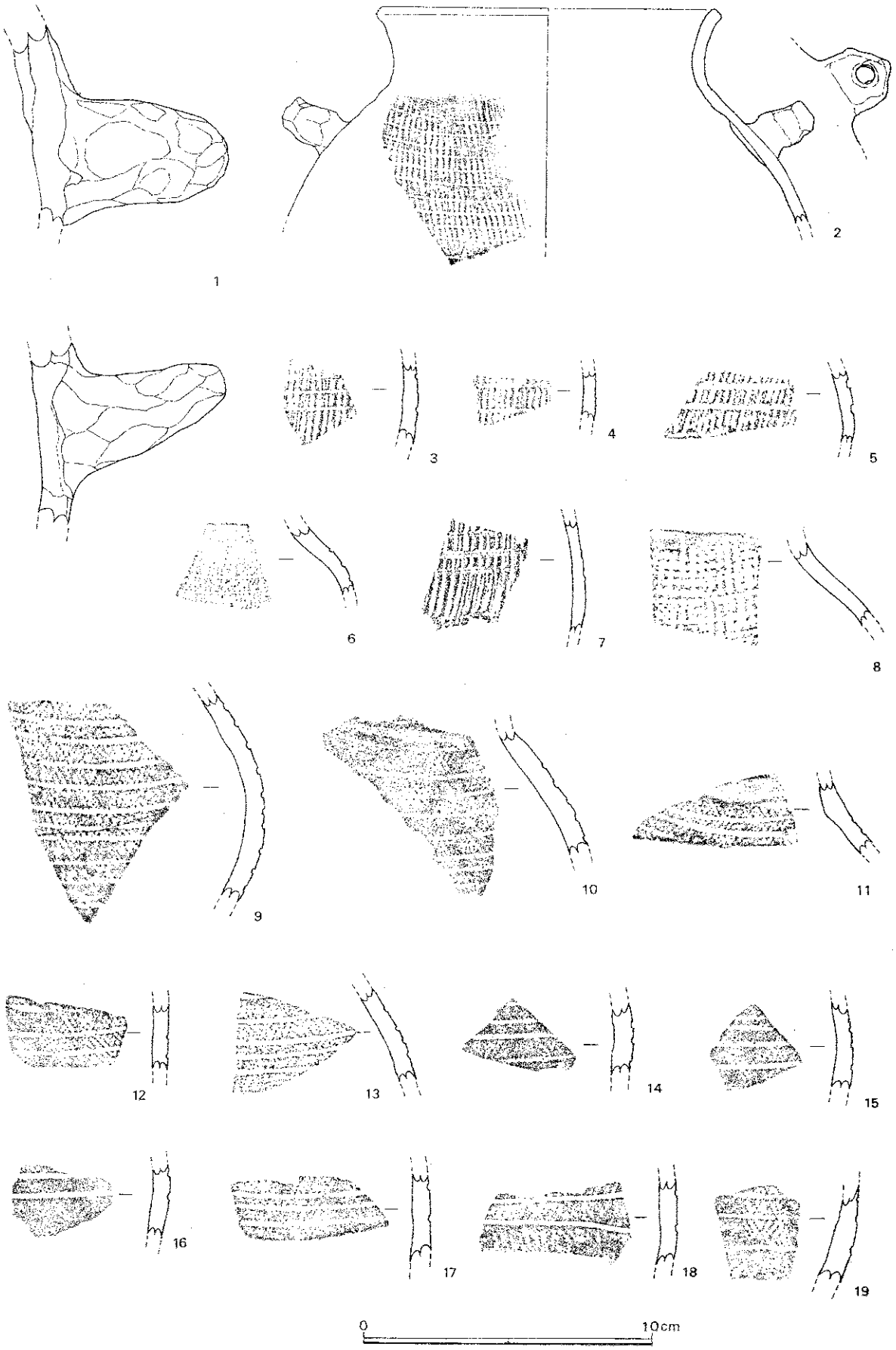
第56図１～13に図示した土器は高杯脚部である。１～３は比較的長い脚部である。１は穿孔が三個付される。器表面は風化著しく，柱状内部はしぼり痕が見られる。胎土には石英，長石，金雲母が含まれる。４～７は前者より脚部が短く，脚端部は外反するように開き穿孔も２～３箇所もつと思われる。４は内外面に細かいハケ目調整が入る。４，５の柱状部内側にはしぼり痕が見られる。８～13は

脚部が短い一群である。8，10，11でその特徴が観察される。胎土は精選され，石英，長石，金雲母を含み色調は橙が多い。以上の資料は古墳時代初頭のものである。

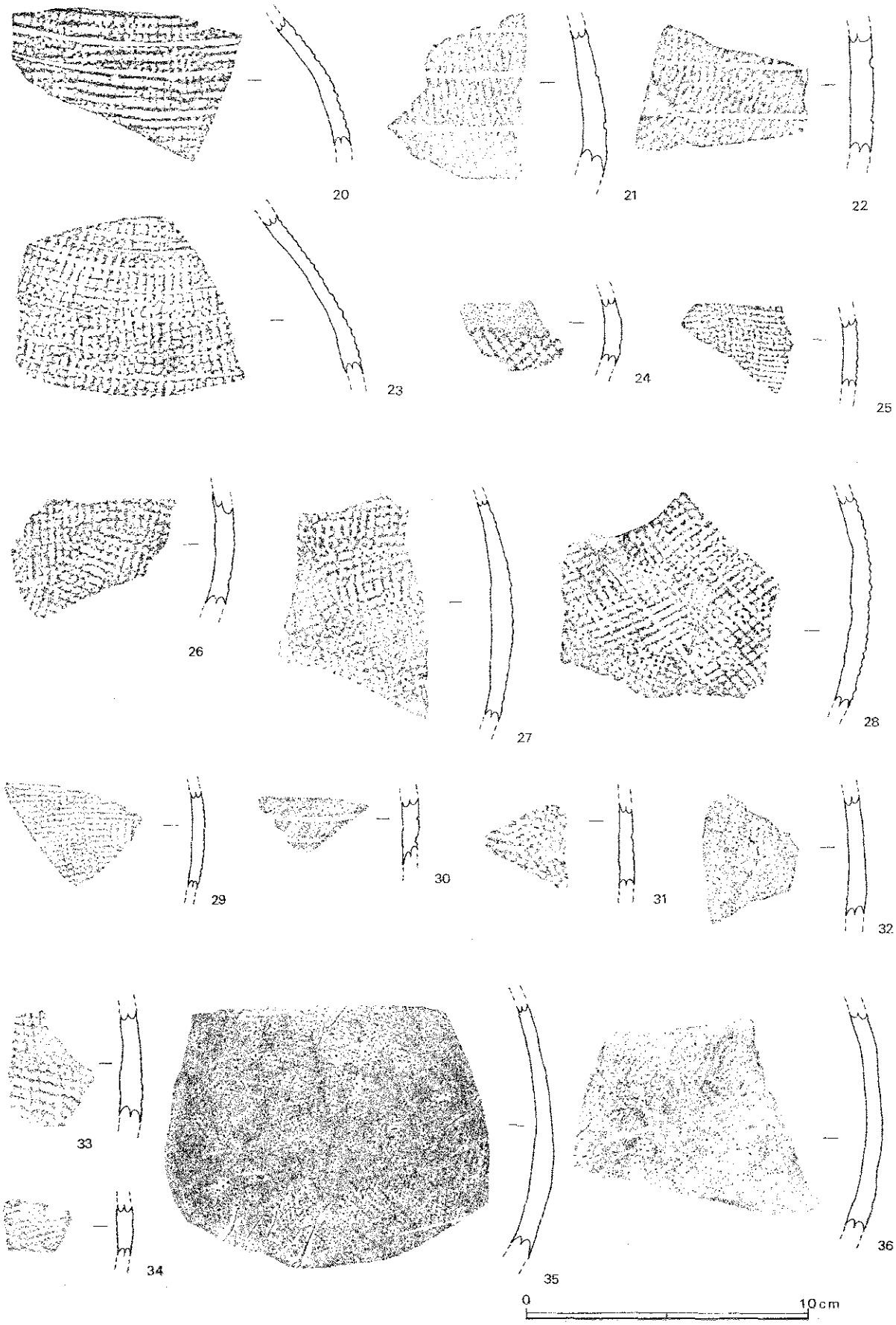
④原地区出土の朝鮮半島系の土器

7区では朝鮮半島系の土器は50点以上出土している。1は無文土器系の土器で把手の部分である。約5cm程張り出した角状は手ずくねで形成され，表面に凹凸があり，やや上方に内湾している。胎土には石英や金雲母が含まれ，色調は外側が橙。内面は灰黒色を呈する。2は三韓系瓦質土器の壺である。口縁は短く外反し，端部は丸くおさめられている。外側の口縁直下はヨコナデされ，弱い沈線が見られる。頸部もヨコナデ，胴部にかけては平行タタキ目で成形し，0.4～0.5mm幅の横沈線を密に巡らしている。肩部に耳を貼り付け平坦にした上で，タテに穿孔している。内側にも貼り付け跡が盛上がって残る。3～5も平行タタキに横沈線が入る破片であるが，これらは前者よりも沈線の幅が少し広くなっている。6は頸部のつけ根にあたり，細かな縄蓆文が施され，その上に横沈線が巡る。7は縄目タタキがタテに施され，沈線を巡らせている。色調は灰色で軟質。この土器は陶質土器の可能性。8は頸部付け根に，格子目のタタキを施し，その上に細い沈線を巡らしている。色調は灰色で軟質。9～19は細かな格子目状のタタキを基調に横沈線が施されている。9は胴部であるが密に巡っている。これらの土器の胎土には，白い砂粒や金雲母が含まれ，焼成は軟質で色調は灰白色を呈する。18は器表面は焼成甘く黒色である。第58図20～36も三韓系の瓦質土器である。ほとんどが格子目タタキを基調にしている。沈線をもつものは20，21，23で，20は縄蓆文か。35は球形胴部に細かな格子目タタキが施され，石英や白い砂粒，金雲母を含み，色調は灰白色を呈する。第59図27は滑石を多量に含んだ楽浪系土器である。口縁は平坦に外に張り出し鉢状に内湾する。この種の土器はこれまでの調査でも数例が出土している。38は小形の鉢で，口縁が外反し，平坦で胴部はわずかに丸みをもつ。胴部には約1cm間隔で横沈線が巡る。胎土は精選され，赤色粒子が含まれる。色調は外面は灰色，内面は黒色を呈する。39は原4区出土の壺口縁である。外反した端部は斜行し，浅い凹線が入る。40も原4区出土で頸部付け根から胴部にかけての部位で，細かな縄蓆文の上に細い横沈線が巡る。焼成は良好で軟質に仕上がっている。42から45は高元1区出土の平行タタキに沈線が巡るもの。43は平行タタキの組み合わせになっている。焼成は甘く器壁は黄褐色を呈する。楽浪系土器か。44は格子目タタキで焼成は甘く黄褐色。45は縄目タタキに細い横沈線が入る。内面はヨコナデ．焼成は良好で軟質。内外面とも灰色。46は原2区出土で瓦質無文である。

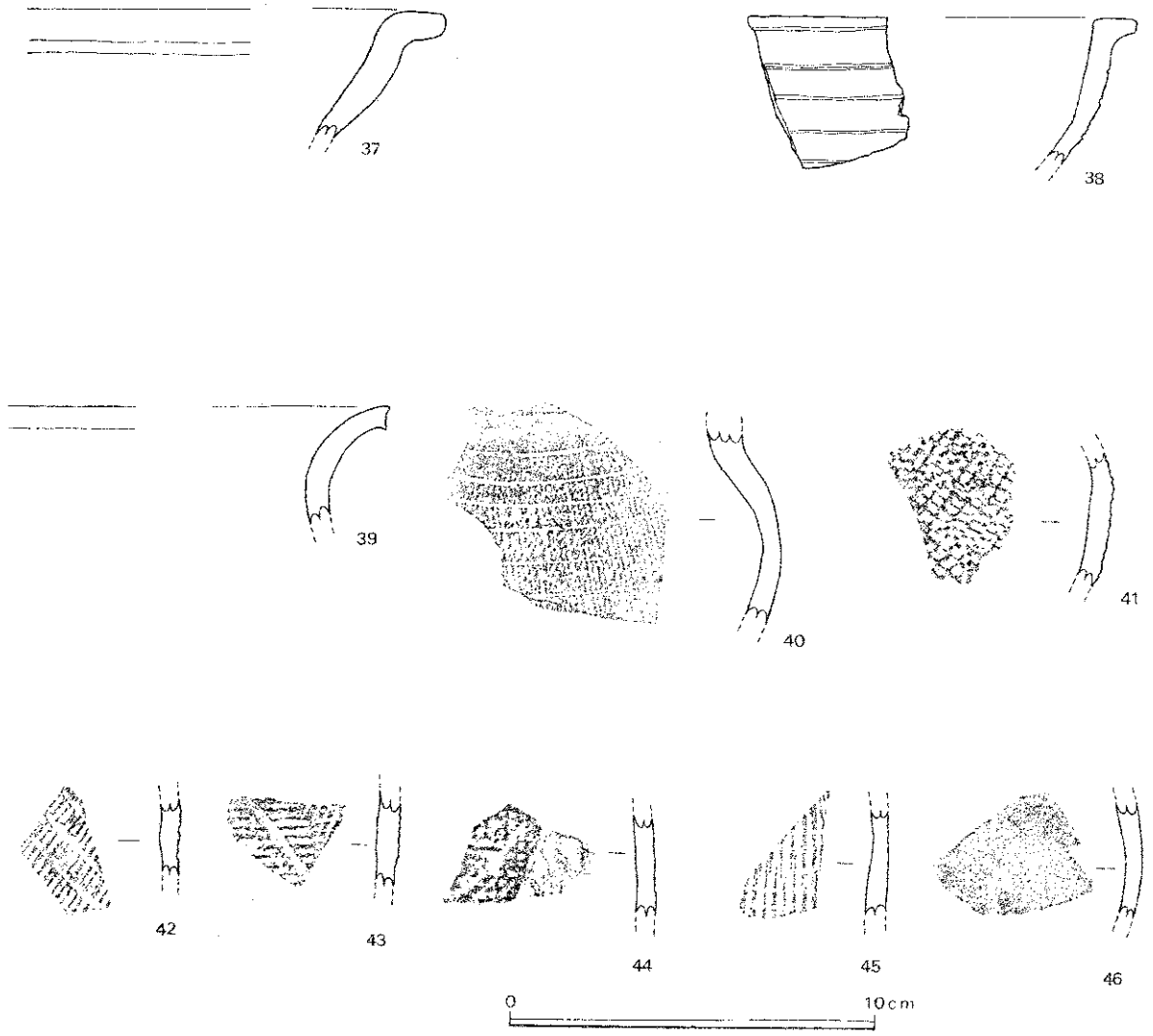
以上の土器は原7区を主体に1区および他の区からもわずかながら出土し，広い範囲に分布することを示し，時期的には弥生中期後葉から後期にかけてであり，陶質土器は古墳初頭まで併行して出土するものと考えられる。



第57図　原地区出土朝鮮半島系土器実測図①（1／2）



第58図　原地区出土朝鮮半島系土器実測図②（1／2）

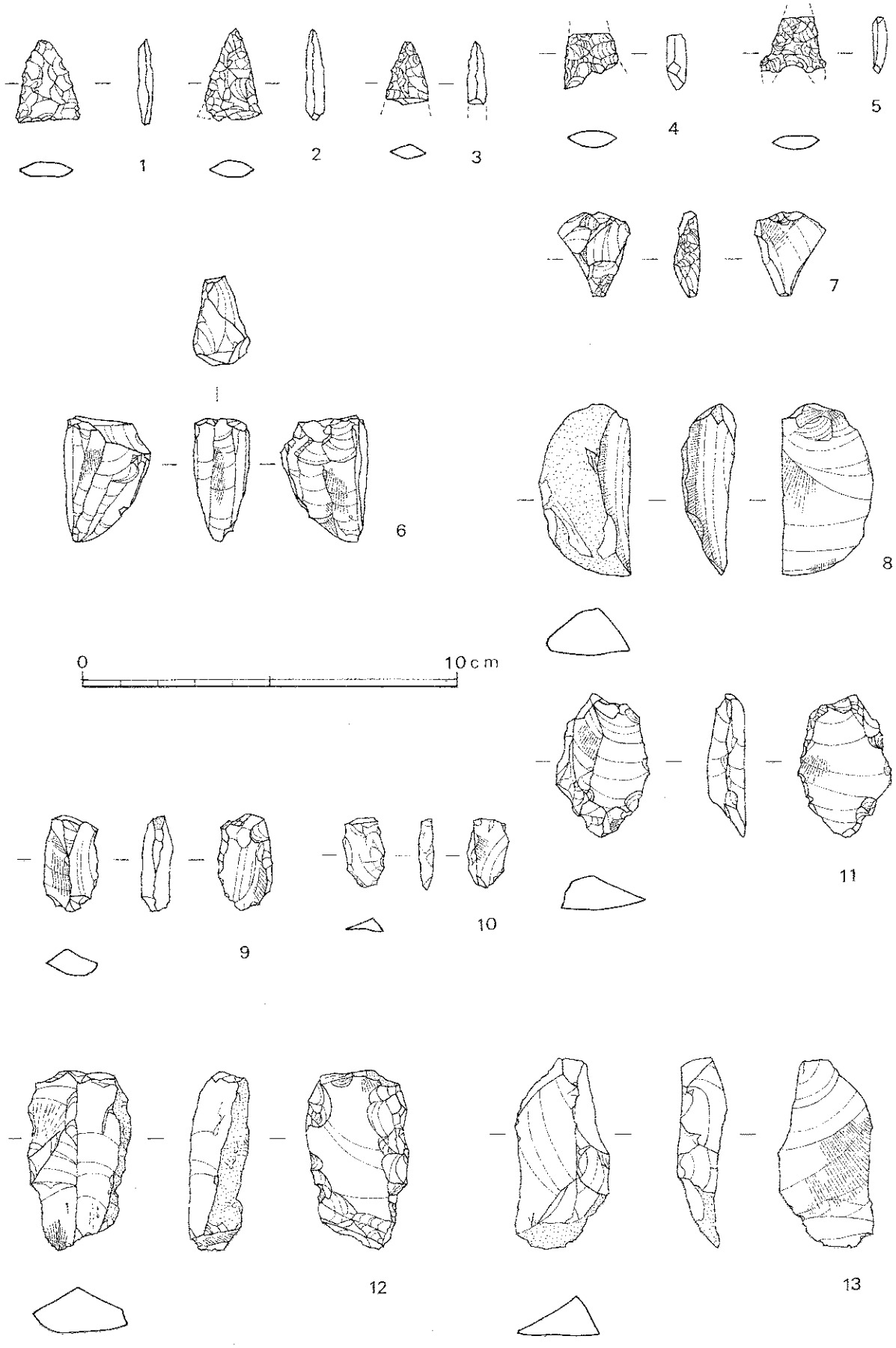


第59図　原地区出土朝鮮半島系および楽浪系土器実測図（１／２）

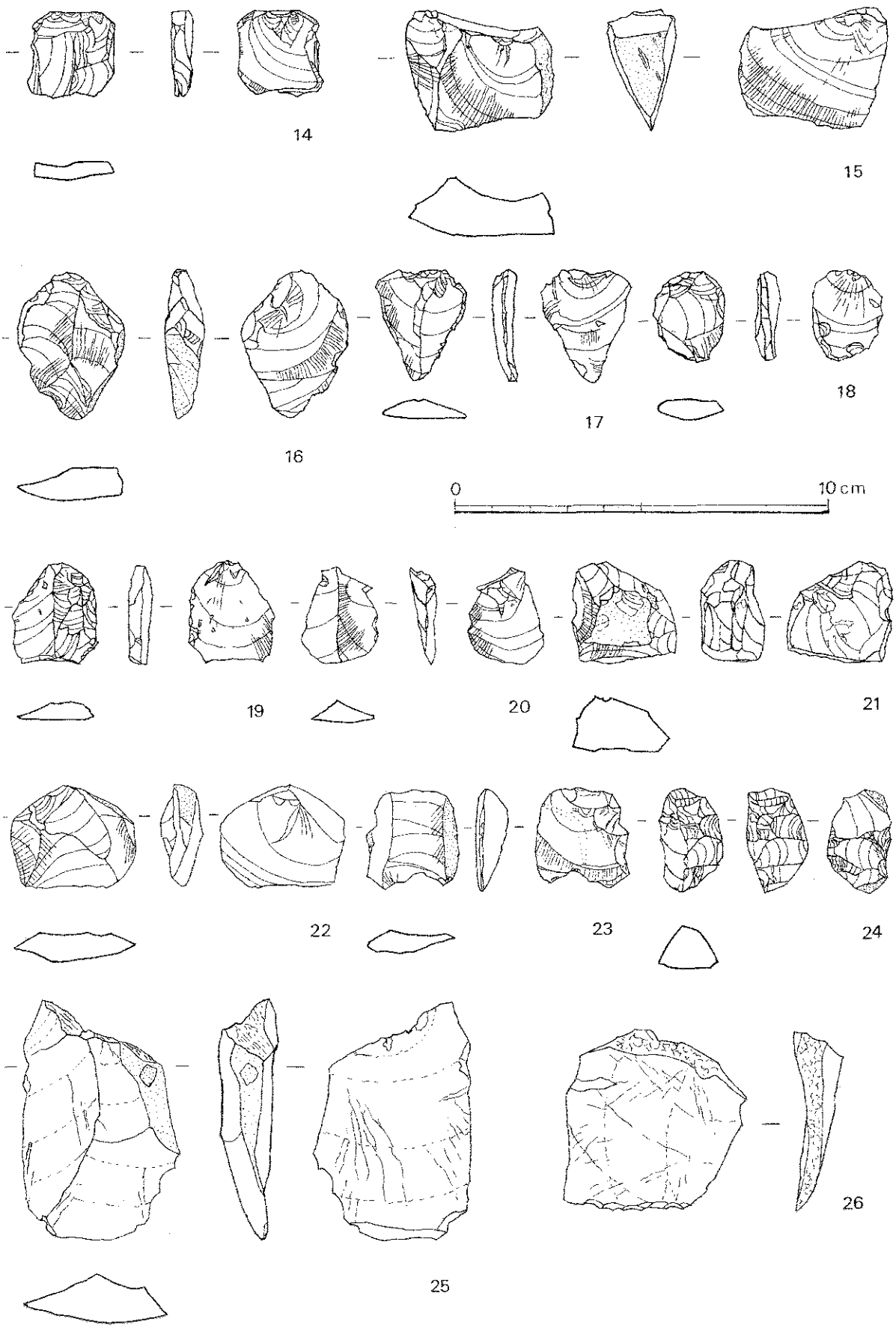
⑤原地区出土の石器（第60図１～第61図26）

ここに図示したのは原地区の各調査壙から出土した石器である。１～４は石鏃である。１は２区４層からの出土で平基式。押圧剥離で丁寧に仕上げている。２も平基式の二角鏃で良質の黒曜石を用いている。３は基部を欠失し，尖端部だけ残る。７区８層の出土。４は上と下端部を欠失するが，抉り入りの基部を有する。良質の黒曜石を用いている。５は７区出土。この鏃も両端部を欠くが，抉りが入り丁寧な仕上げとなる。黒曜石には不純物が含まれ，島内産の原石を使用か。以上の石鏃はいずれも弥生の遺物に混じって出土したものであるが，縄文時代の所産と考えられる。

６は細石核である。良質の黒曜石を素材として，片側面から剥離調整を行い，頂部に傾斜した打面を形成している。両側部を調整し，船底状に作り出し，細石刃の剥離を行っている。樋状剥離痕は３本残っている。７は台形様石器か。右側面は丁寧な剥離を加えているが，左側面は２回の打撃で調整している。刃部は形成されているが，やや厚みをもっておりシャープさがない。１区表土からの出土である。３～26は剥片類である。８～13は縦長剥片である。小形の黒曜石円礫を利用してるものが多



第60図　原地区出土石器実測図①（2／3）



第61図　原地区出土石器実測図②（2／3）

く石質から見ても島外産と考えられる。14～24は不定形な剥片である。24は両面に調整痕が残るが，厚みがあり，未整品と思われる。25，26はサヌカイトの剥片が縦に剥離されている。側面に自然面を残す。26は下端部が認められ刃部として使用されている。サヌカイトは島内に原産地は認められず，島外から搬入品であろう。

7区出土の石器（第62図～第66図）

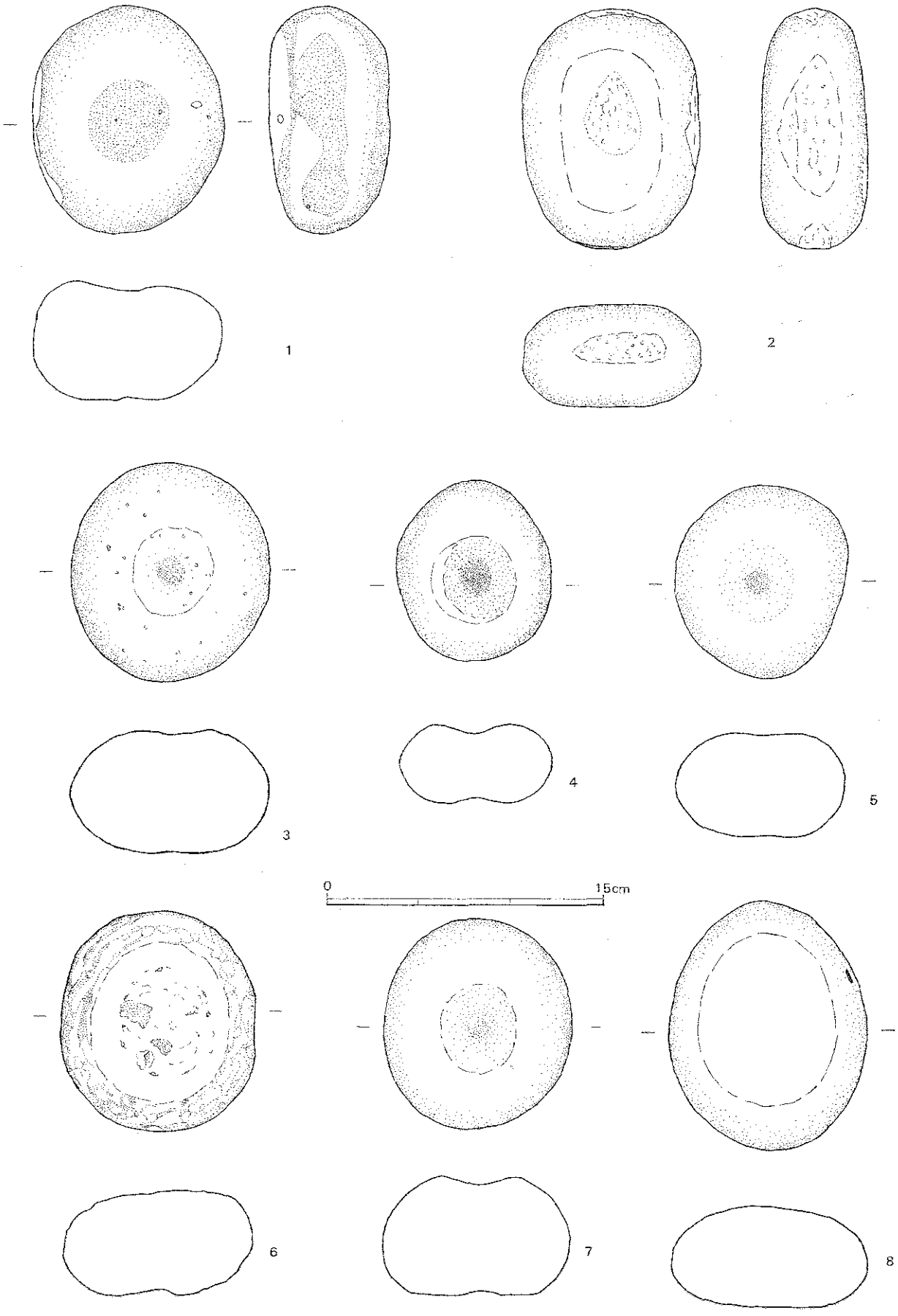
ここに図示したのは凹石と磨石である。ほとんどの石材は島内に産出する玄武岩を使用している。1は両面が凹み，側面も研磨痕が見られる。重さ126ｇ。2は磨石として利用しているが，長側面の両端部を敲石として利用している。重さ1180ｇ。3～7は凹石で両面を利用している。4が560ｇのほかは1120ｇ前後の重さである。9は両面が凹んでいるが，短側面と長側面の一面を敲石として使用している。重さ1170ｇ。10は両面が凹み側面は敲石としての使用痕が認められる。1000ｇ。11は磨石で1170ｇ。12はやや不整形であるが凹石と側面が敲石として使用されている。760ｇ。13は凹石で620ｇ。14は円形の棒状の石を利用しているが途中で折れている。上端部は凹石として使用され，下端は打ち欠き痕が見られる。15は三角形状の石を敲石として使用している。887ｇ。16，17は磨石を長側面の一端だけ敲石として使用している。16は920ｇ，17は1220ｇである。18，19は大形の凹石で，素材は玄武岩である。18は半欠品で，短側幅は28cm，厚さ15cmを測り，重さ17.75kg。19は長側面30cm，短側面25cm，最大厚12cmを測り，重さ17.45kg，調理道具の石皿と考えられる。

20～23は砥石で，素材は砂岩を使用している。20，21は扁平小形で折れている。20は三方が面取りされている。22は長側面と短側面が欠失し，斜行して三面が残る。断面は方形に近い。23は完形品で長方形を呈する。4面とも砥石として利用され，一面には玉砥石として利用された痕跡も見られる。長さ24cm，厚さ8cmを測る。

24～26は凝灰岩製の支脚である。島内の弥生時代の遺跡からは普遍的に出土しており，古くからクド石と呼ばれてきた。40は内側に火を受けた跡が観察される。重さは3.66kgである。25，26は三角形状を呈し，長面は多孔質である。25は重さ2.18kg，26が2.06kgである。

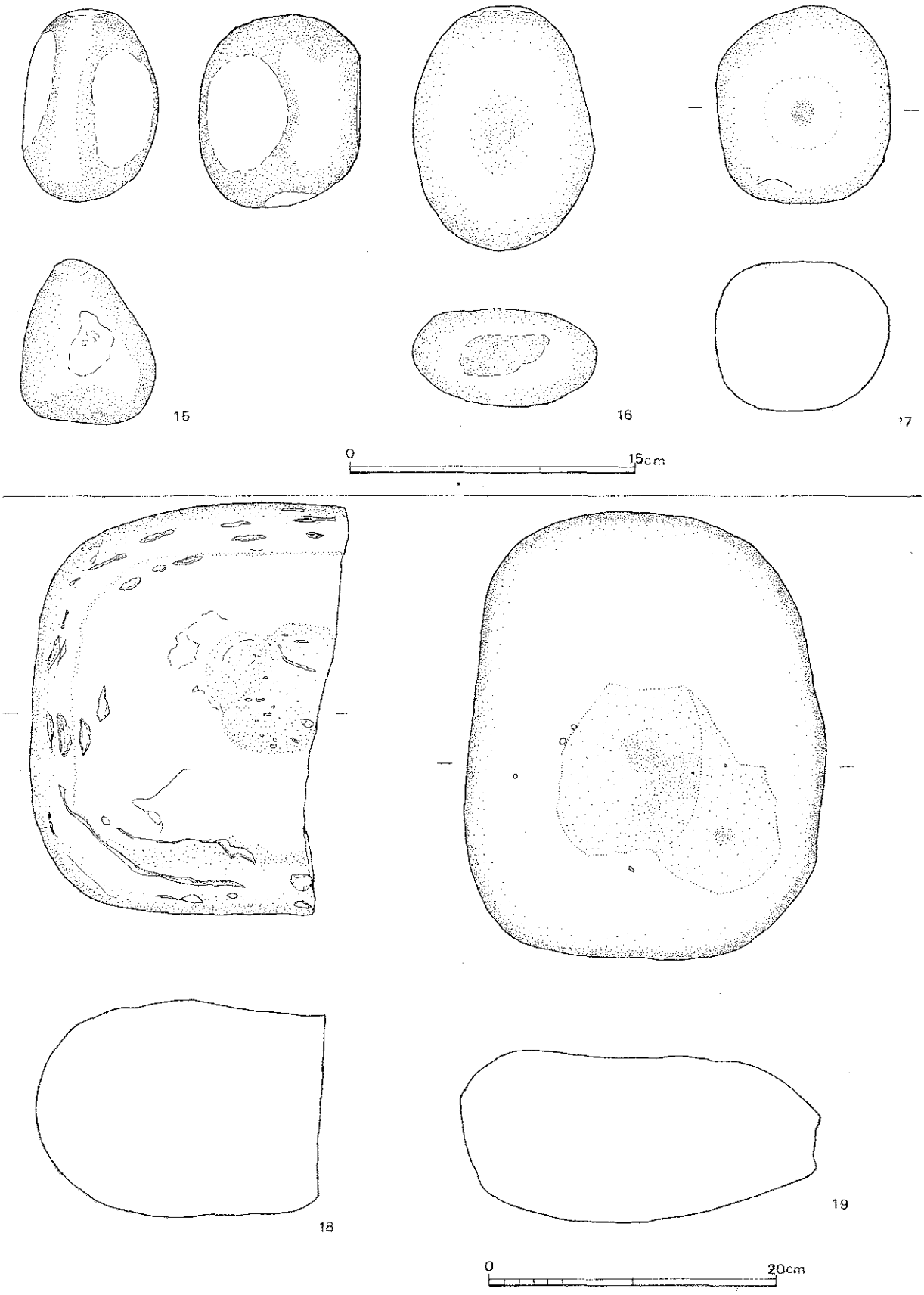
27～31は石庖丁である。27は長方形の頁岩を加工している。両面からうすく研き上げ，刃部は片刃に仕上げられる。端部は半月形に仕上げられているが，片面を欠く。穿孔は両面から開けられ2個付く。28は安山岩質を両面から研磨し，半月形を呈するが，半分以上を欠失する。3も半月形を呈し，両面から研ぎ刃部は両刃となる。穿孔部がわずかに残り，半分以上を欠失する。石質はあずき色をした安山岩で立岩産と考えられる。30，31は両面から研かれた頁岩質の破片である。石鏃の可能性も考えられる。32～35は，安山岩をうすい板状に剥ぎ，周縁に打撃調整を加えている。一見扁平打製石斧の感もあるが，磨製石器の未製品の可能性が高い。36は頁岩製で全体が扁平に研磨され，片面は凹んでいる。側面も丸く面取り仕上げされている。砥石としての用途も考えられるが，一応，不明石器とする。37は細長い扁平な砂岩を利用している。上端部は丸く，下部は両刃仕上げになり，ノミ型石斧とも考えられる。

38～41は石錘である。38は軟質の扁平楕円形の安山岩で短側部に，両面から打撃を加え剥離してい

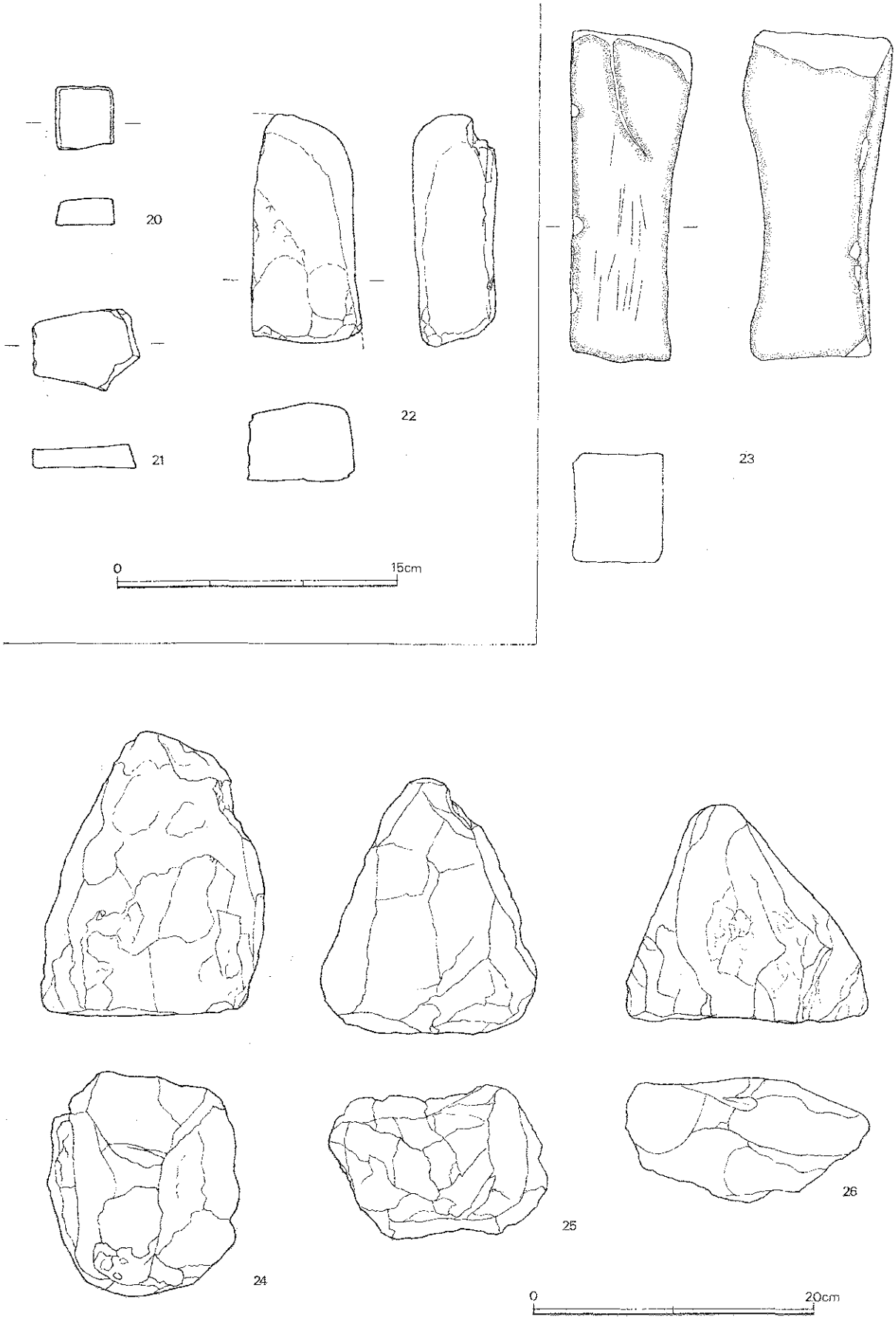


第62図　原７区出土石器実測図①（１／３）

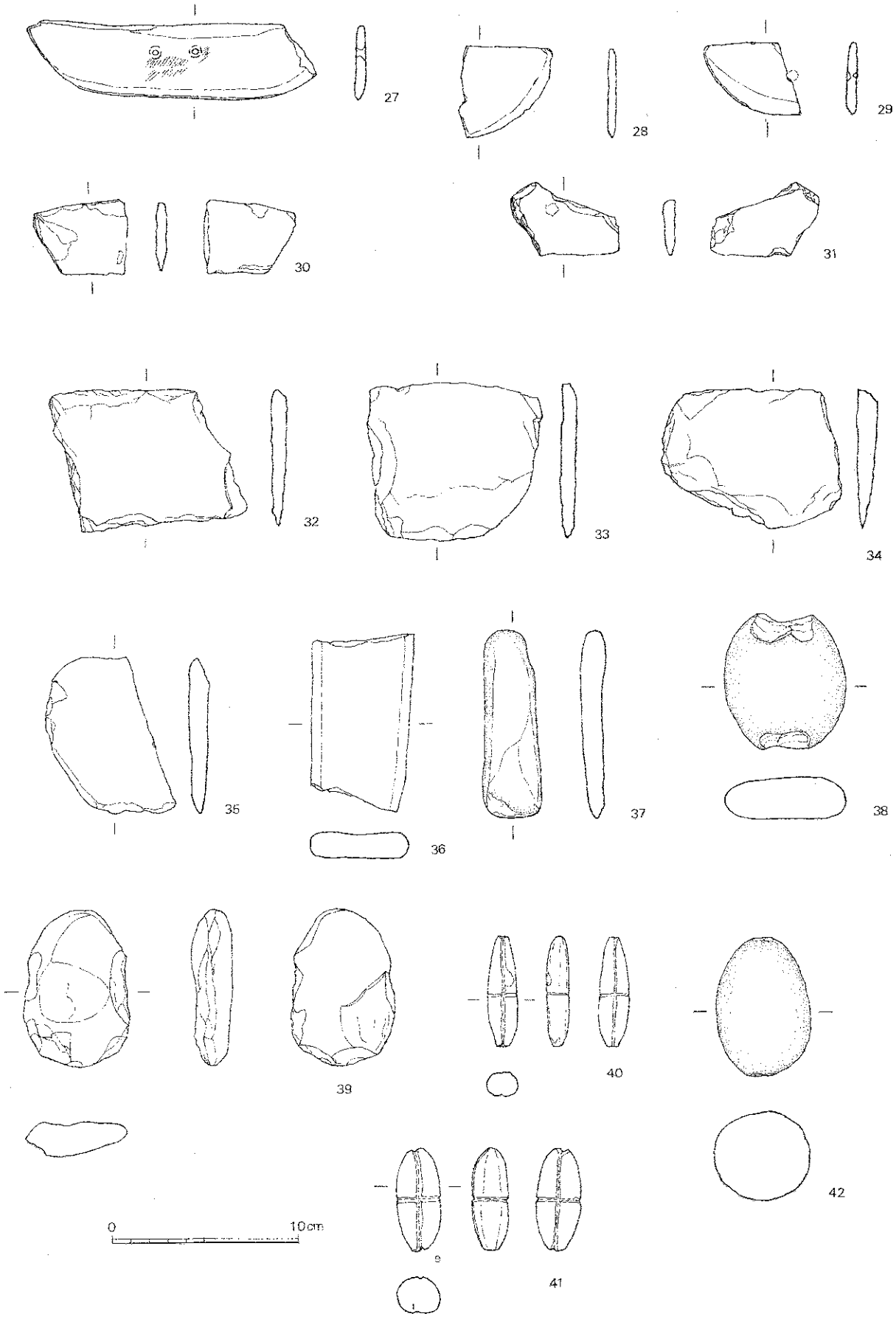
第63図　原７区出土石器実測図②（１／３）



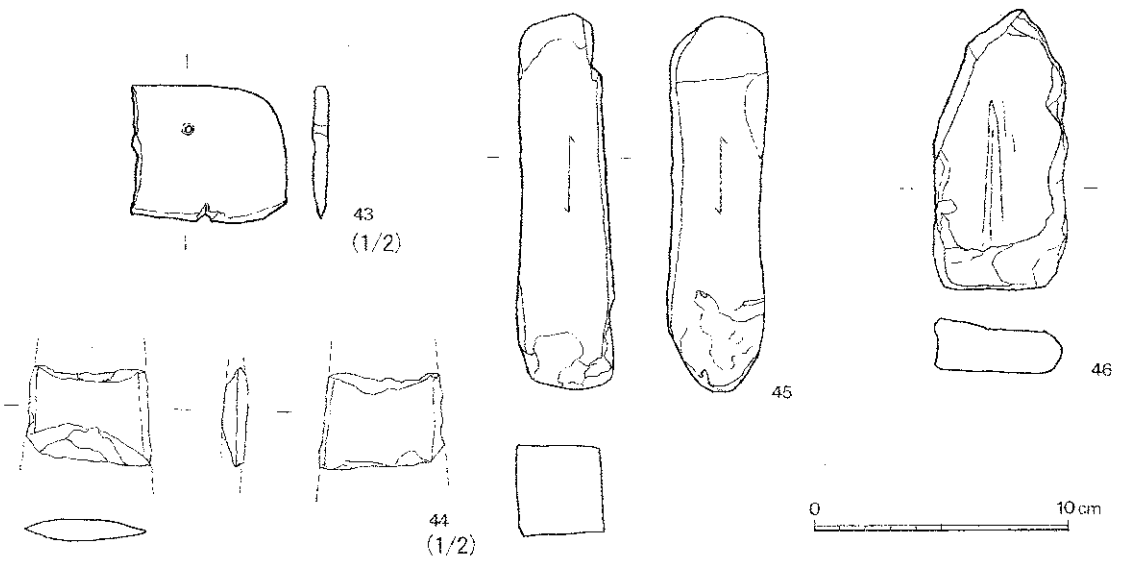
第64図　原７区出土石器実測図③（１／４）



第65図　原７区出土石器実測図④（１／４）



第66図　原７区出土石器実測図⑤（１／３）



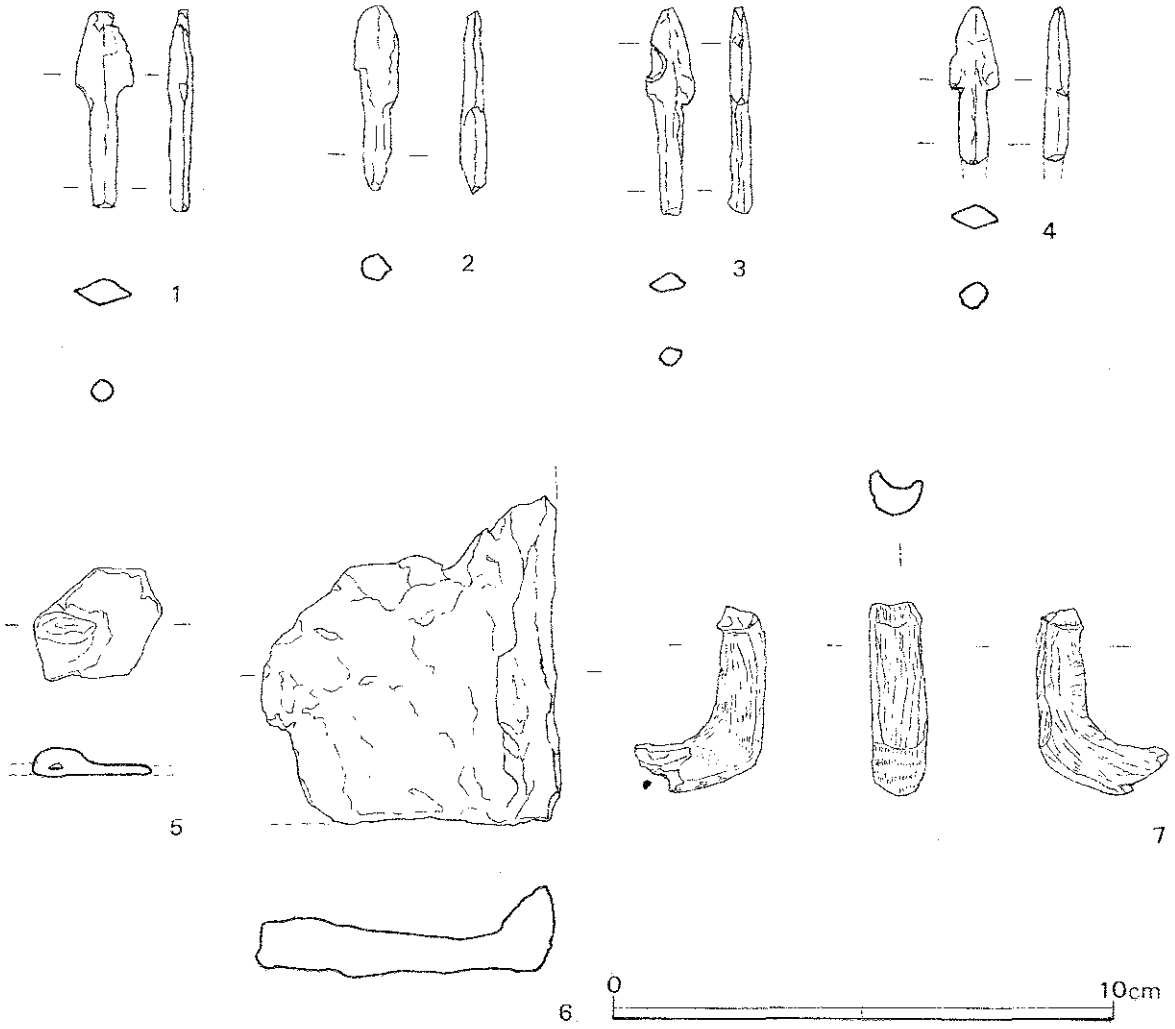
第67図　原地区出土石器実測図（１／２，１／３）

る。重さ165.4ｇである。39はやや厚みをもつ楕円形の安山質石錘で，長側面に粗い剥離を行っただけである。40，41はともに全体を細長い楕円形の研磨整形した上に，十字形に細い溝が刻まれた切目石錘である。石質はきめ細かく，中にキラキラ光るものが含まれていることから，片岩の一種ではないかと思われる。42は砂岩をラグビーホール状に仕上げ，長軸の両端部を敲石状に使用している。重さ199.4ｇである。

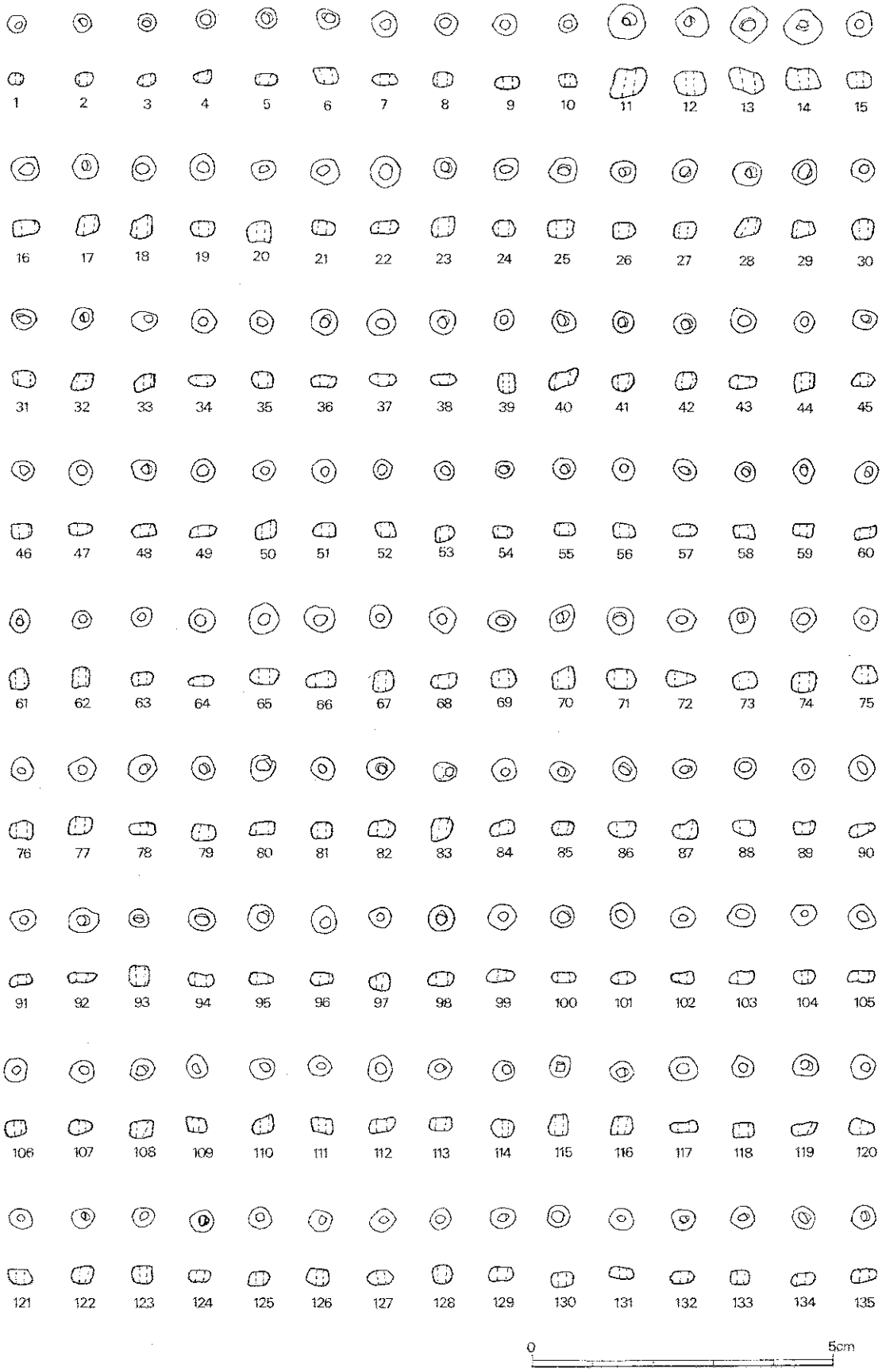
第67図は原５，６区出土の石器である。43は砂岩質の石庖丁破片で，穿孔が１個見られる。断面はうすく，刃部は両刃に仕上げられ，形は隅丸方形を呈する。５区表土層からの出土。45は砥石で黄白色の粘板岩を方形に整え，４面を使用している。長さ14.5cm，厚さ3.3cmを測り砥石としては小形である。46も砥石であるが，大形の砥石の割れたものを再利用している。裏面にその砥跡が横方向に残る。表面は中央が凹んでいるが，沈線状に研がれた跡も見られる。44は石剣の一部である。両側は，両面から研磨されレンズ状を呈する。石質は頁岩でこれまで原の辻遺跡で出土する石質と一致する。

⑥その他の遺物（第68図１～10）

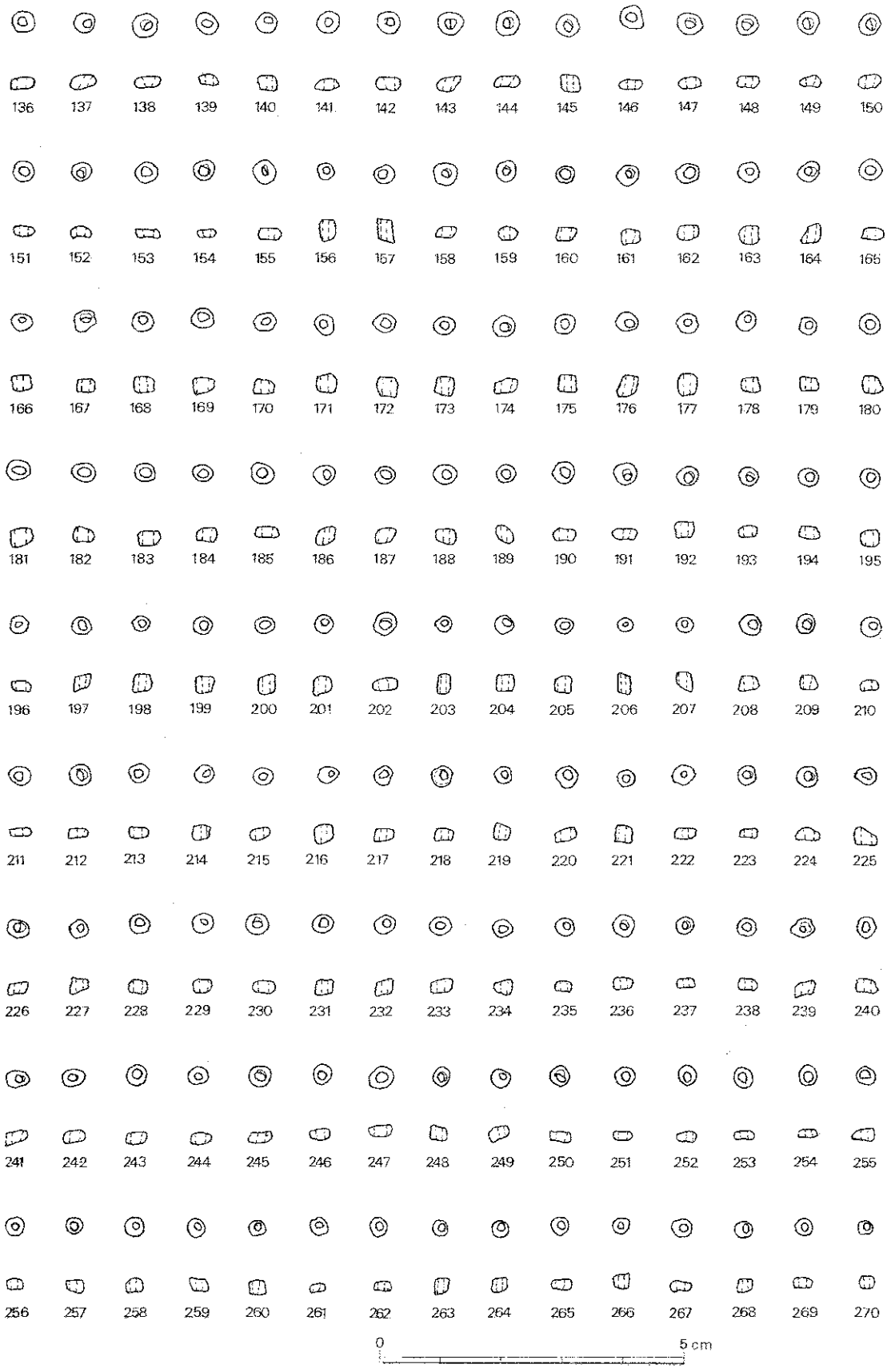
１～４は有茎の銅鏃で，身に鏑がつく。１は長さ３cm，重さ2.3ｇ。２は磨耗して鏑は消えている。長さ3.7cm，重さ3.5ｇ。３は尖端部をわずかに欠失するが，長さ4.3cm，重さ2.6ｇ。以上３点は７区からの出土。４は２区からの出土で下端部が折れている。長さ3.2cm，重さ1.7ｇ。５は青銅鏡片で，紐の部分が残っている。孔は貫かせずつぶれている。おそらく小形仿製鏡と思われる。６は鍛造鉄斧と考えられるが，端部が厚いので，他の用途も考えられる。側面は折れ曲げられている。７区表土からの出土である。７は鹿角を利用したつり針と思われる。「Ｌ」字形に整形され，全体が面取りされている。糸巻の部分は削り出されている。６区貝層出土。８，９は土製投弾。８は楕円形。９はラグビーボール状で両端が尖る。10は土製で，そろばん玉形に近く，張り出し部と反対方向から穴が貫通



第68図　原地区出土その他の遺物（２／３）



第69図　原７区出土ガラス玉実測図①（１／１）



第70図　原７区出土ガラス玉実測図②（１／１）

する。重さ50ｇである。

ガラス小玉（第69図，70図）

ここに図示したガラス小玉は７区３の，溝状に落ち込む部分からの出土で，１ｍ以内の範囲から275個が集中している。甕棺らしきものも見当たらないことから，祭祀に関係することも予想される。色調は青緑色が多く，暗青色やくすんだ緑青色となっている。

1948（昭和23）年米軍撮影空中写真

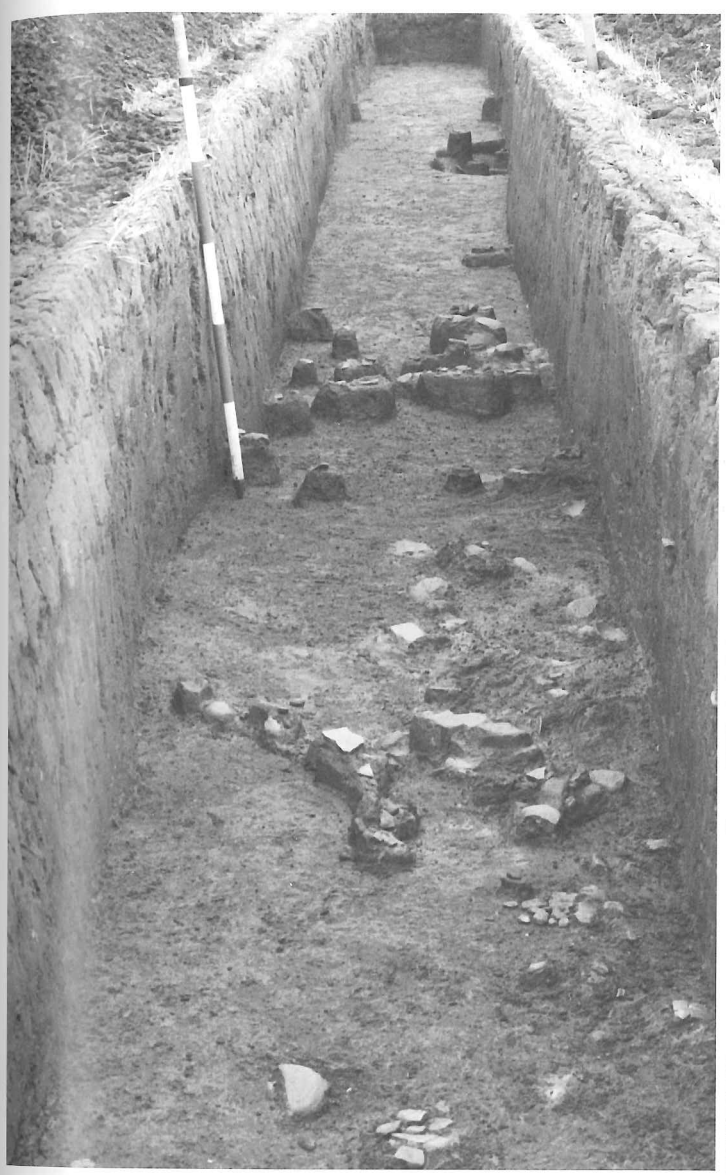
原の辻遺跡遠景（北から）

大川地区調査区遠景

大川１区２区調査区近景

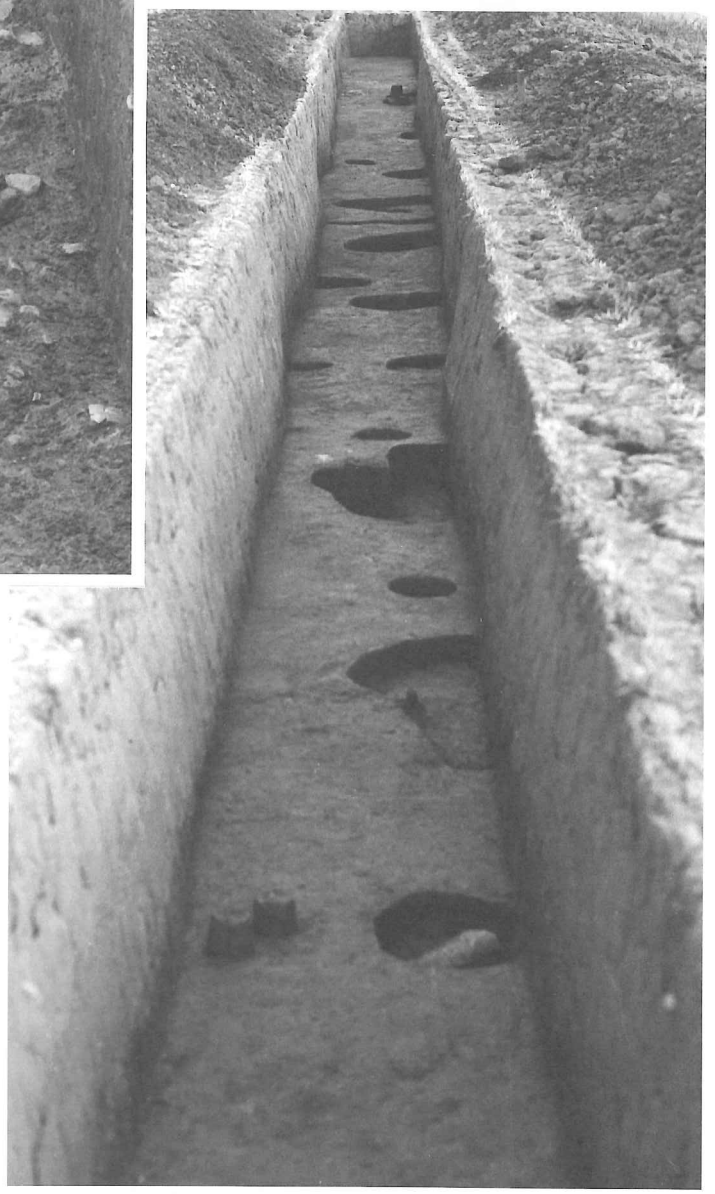
大川 1 区土壙遺物出土状況

大川 1 区遺物出土状況



大川 1 区遺物出土状況

大川 1 区遺構出土状況

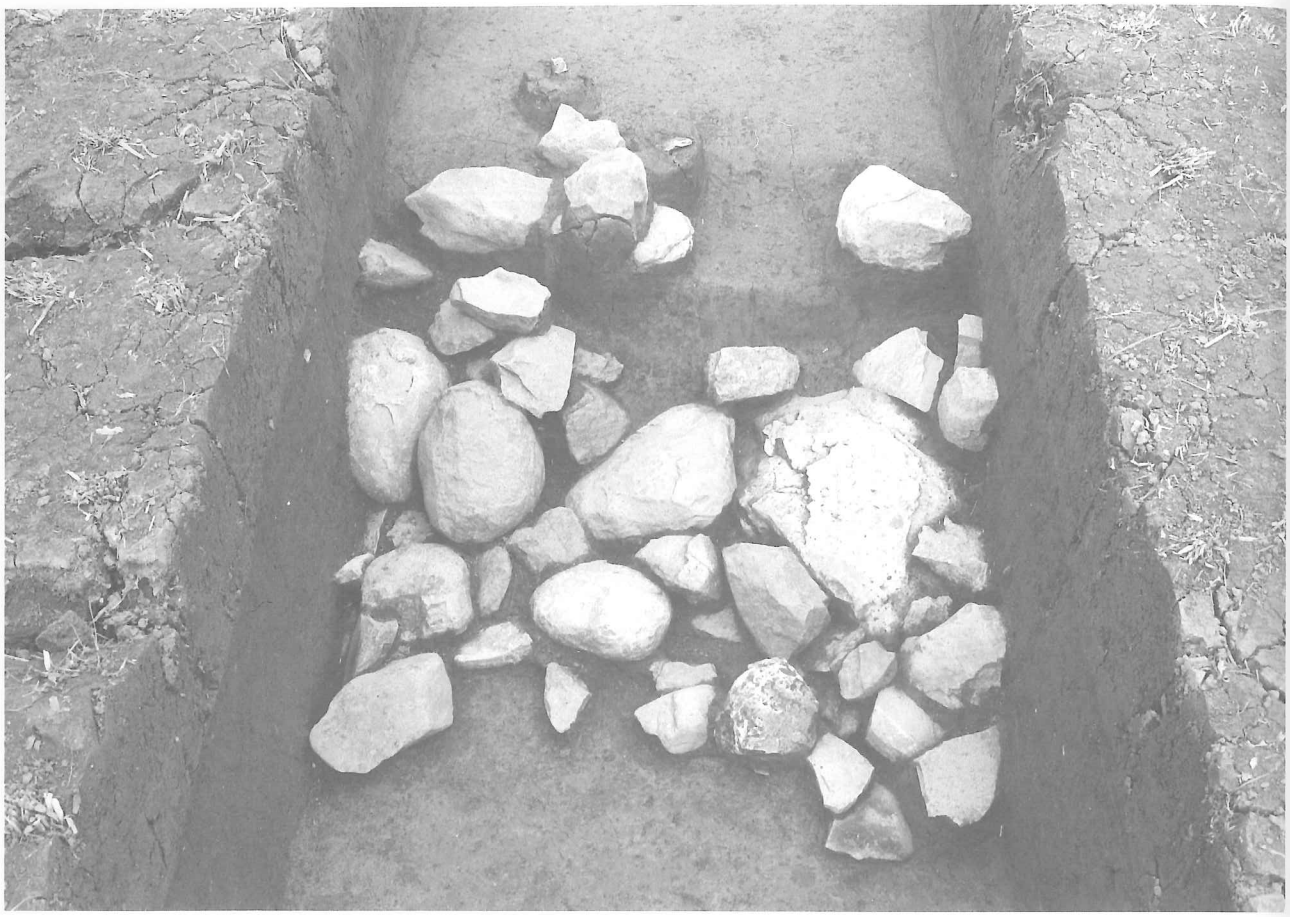


大川 1 区遺物出土状況

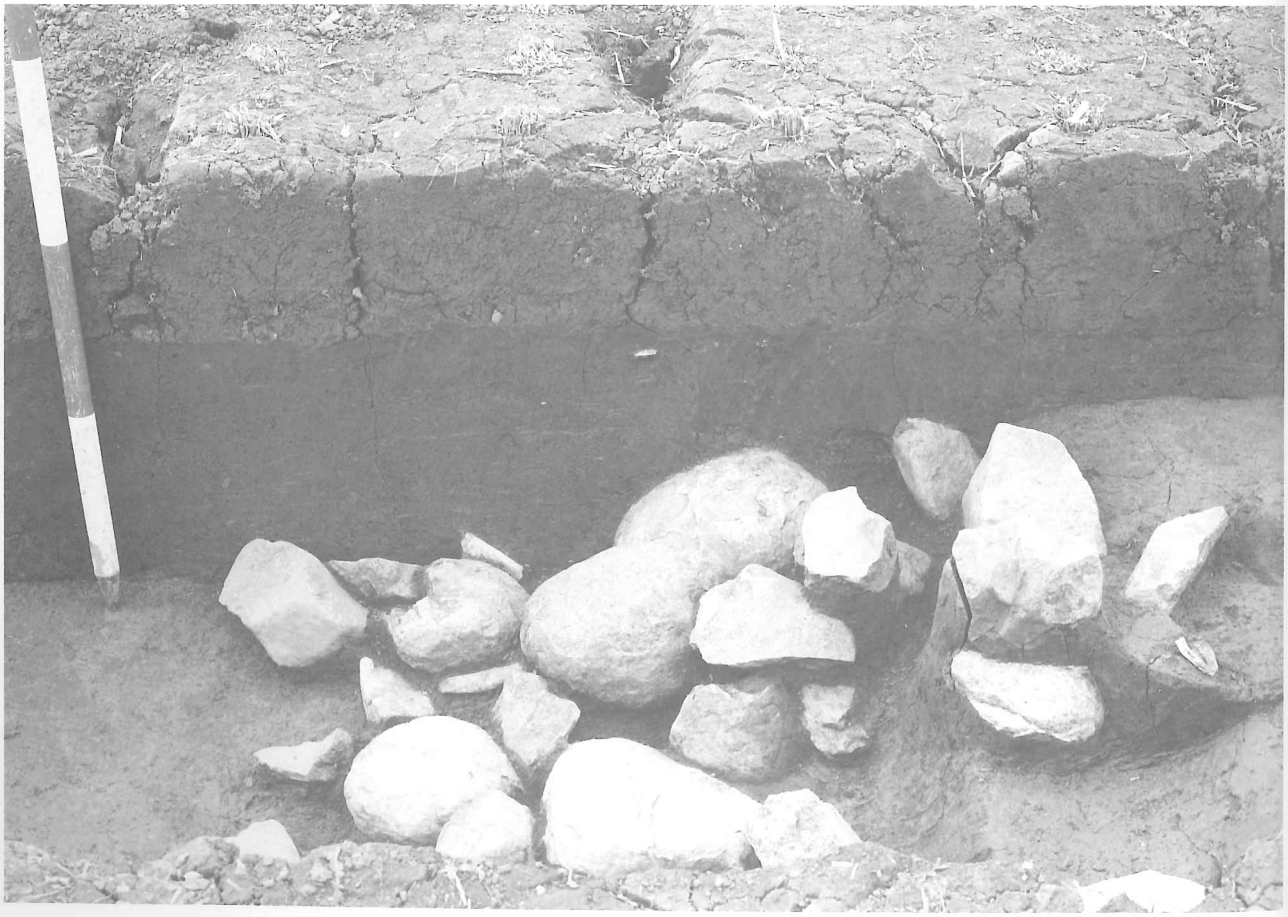
大川 2 区遺物出土状況

大川 8 区 5 小児甕棺出土状況

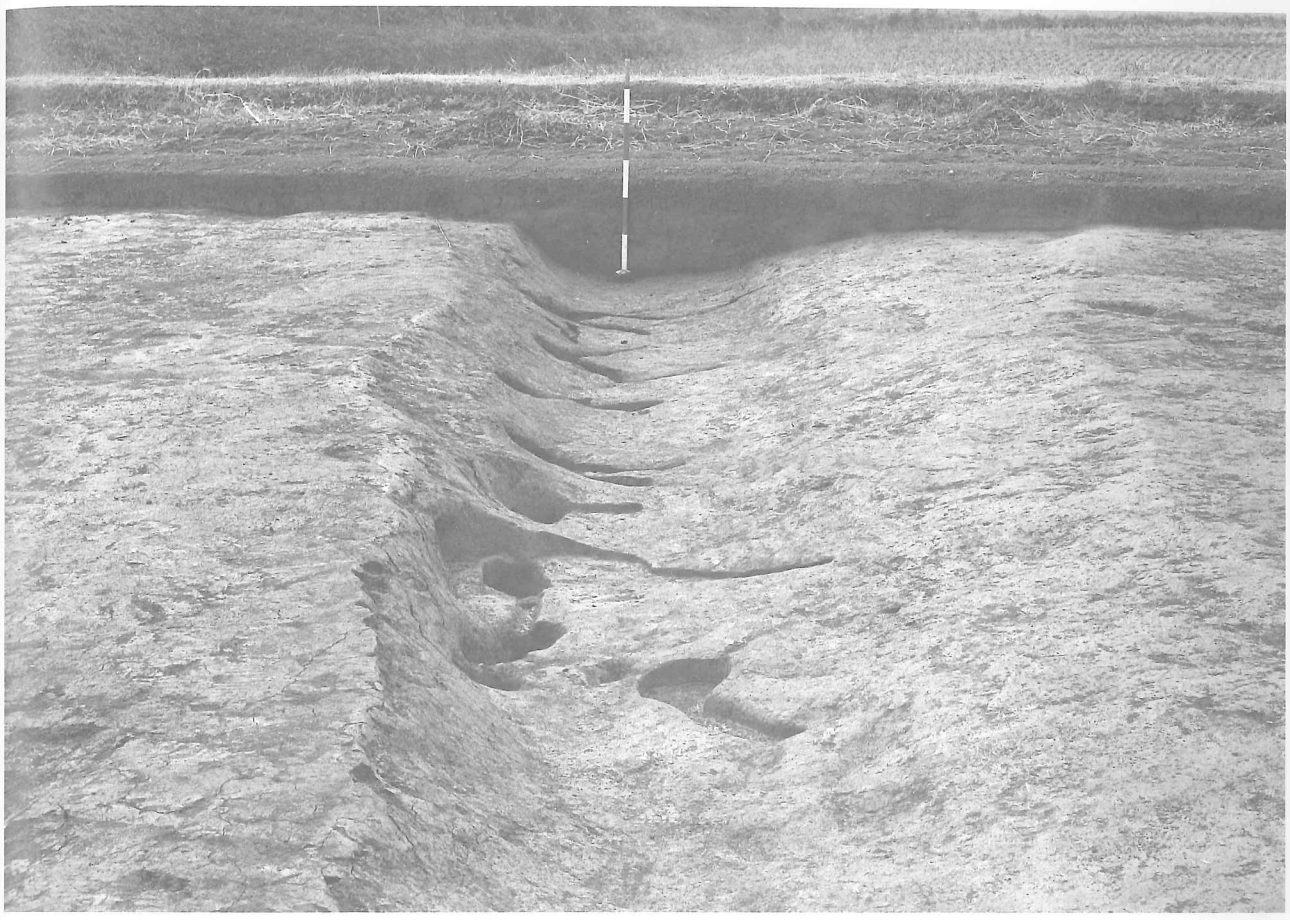
大川 8 区小児甕棺調査状況



大川 8 区 5 N遺構出土状況

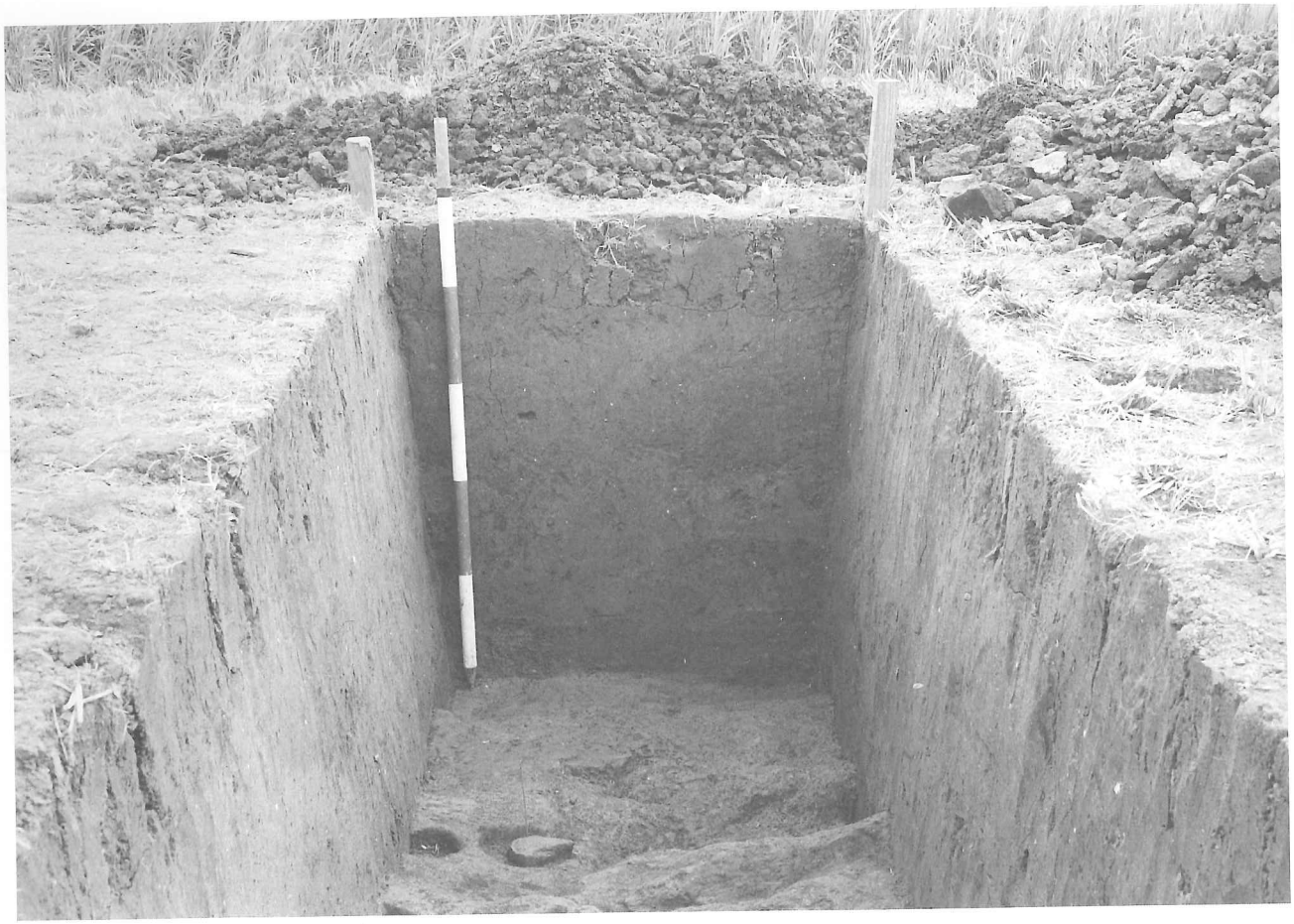


大川 8 区 5 N遺構側面出土状況

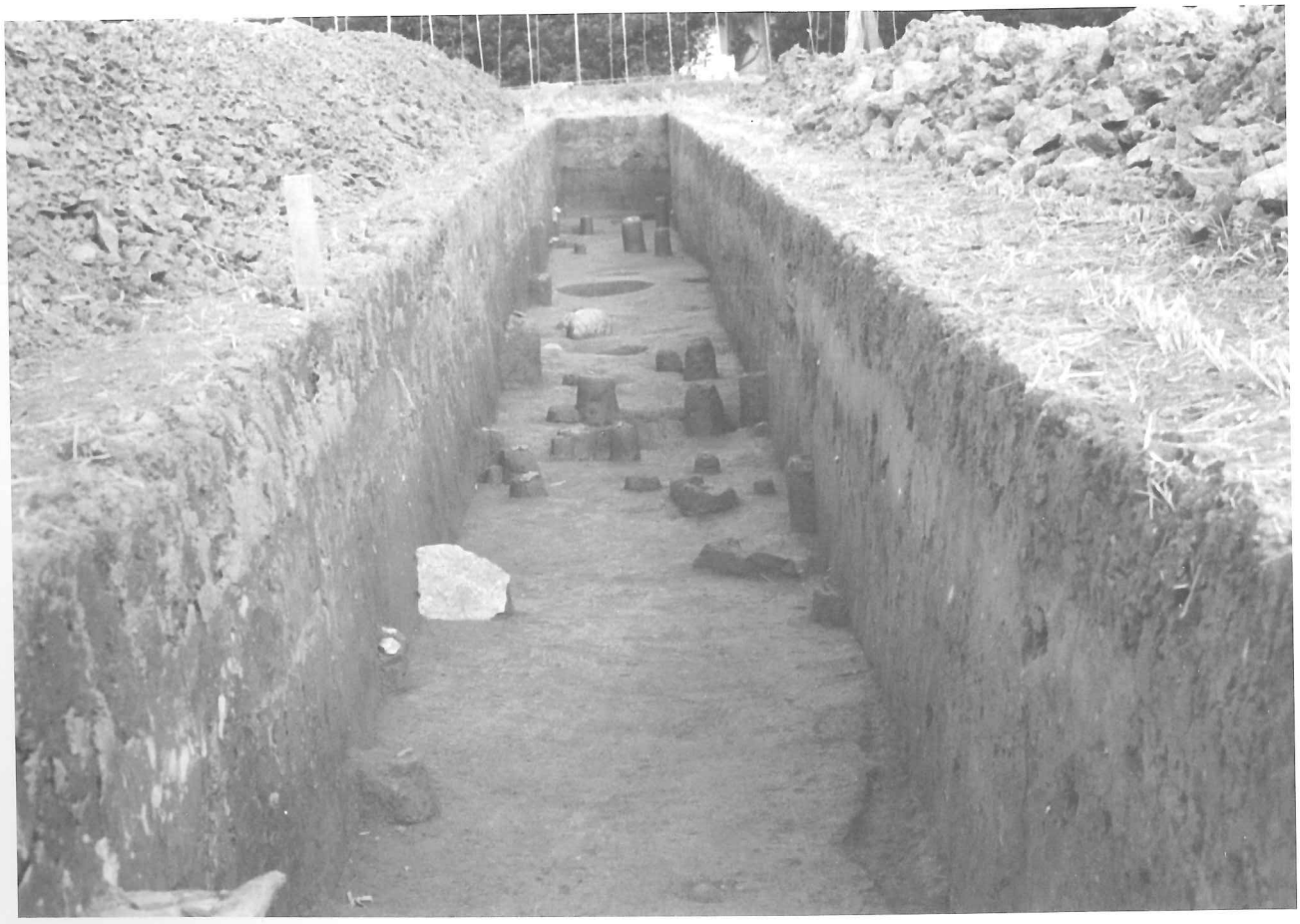


大川14区南側土層

大川14区遺物出土状況



大川８区４Ｎ土層



大川13区土層

原ノ久保A２区遺構出土状況

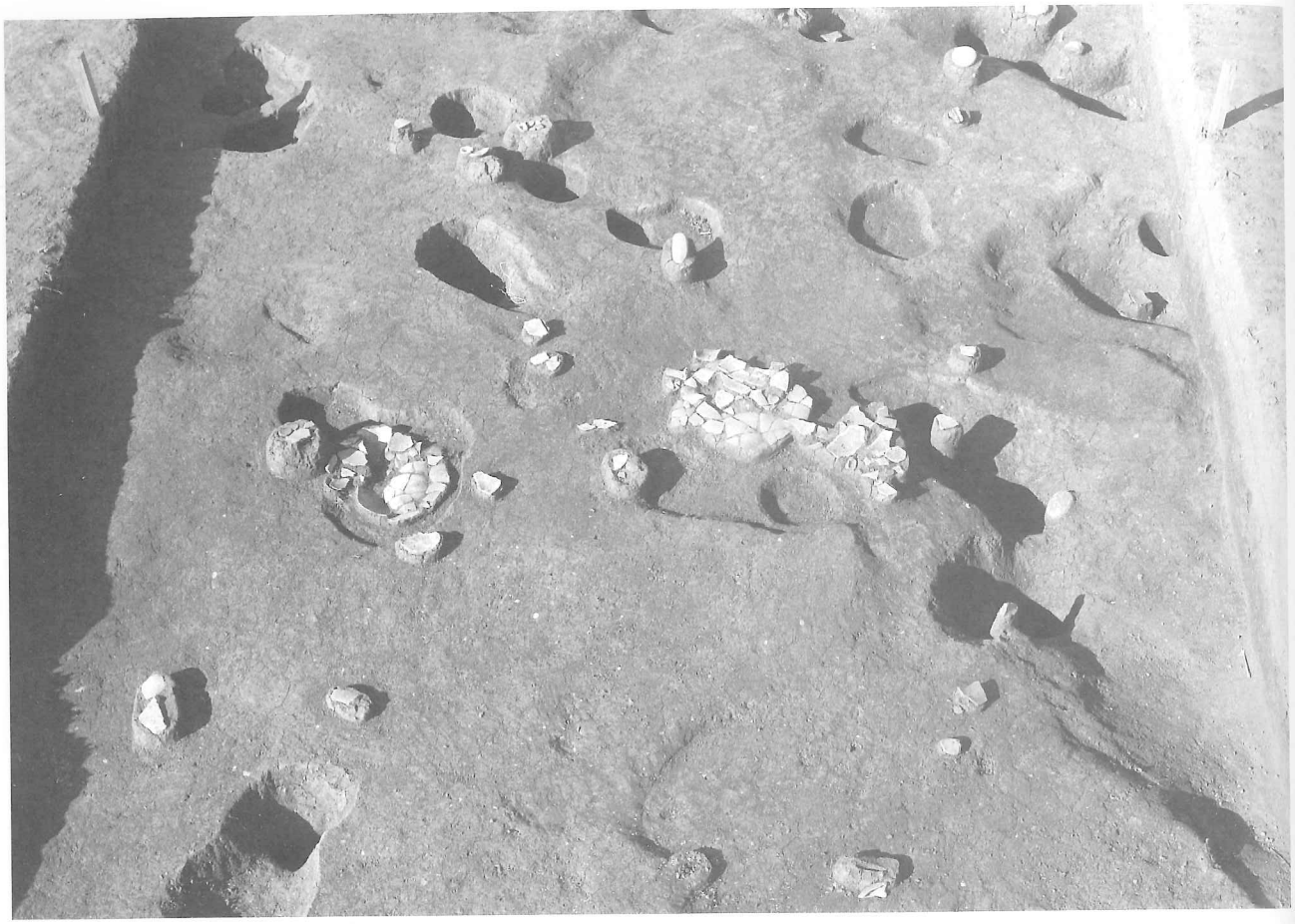
原ノ久保A２区遺構出土状況

原の辻遺跡調査区遠景（東から）

高元１区遺構出土状況

原2区調査区遠景

原2区調査区近景



原2区遺構出土状況

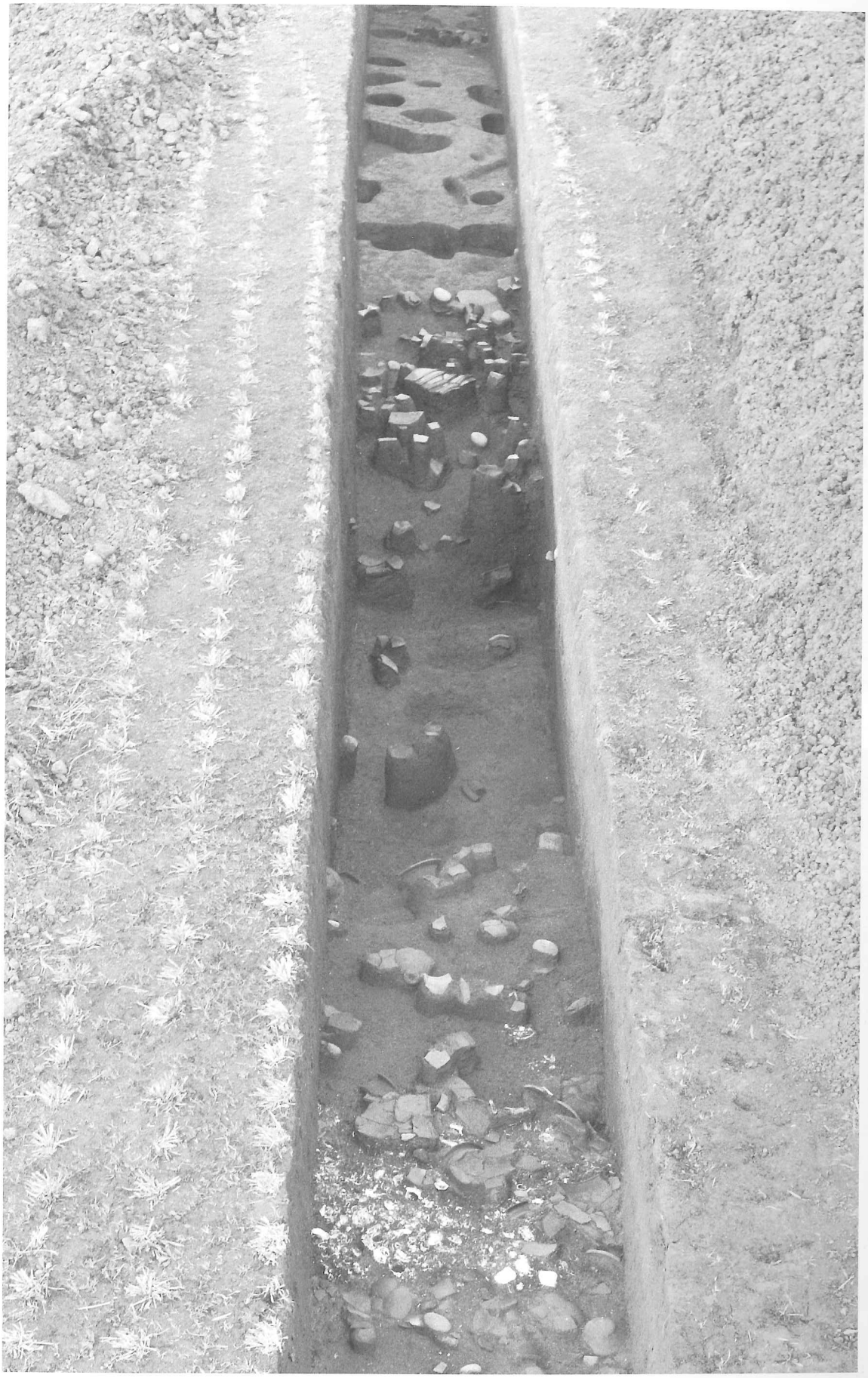
原3区遺構出土状況

原4区遺物出土状況

原4区遺物出土状況

原 4 区遺物出土状況

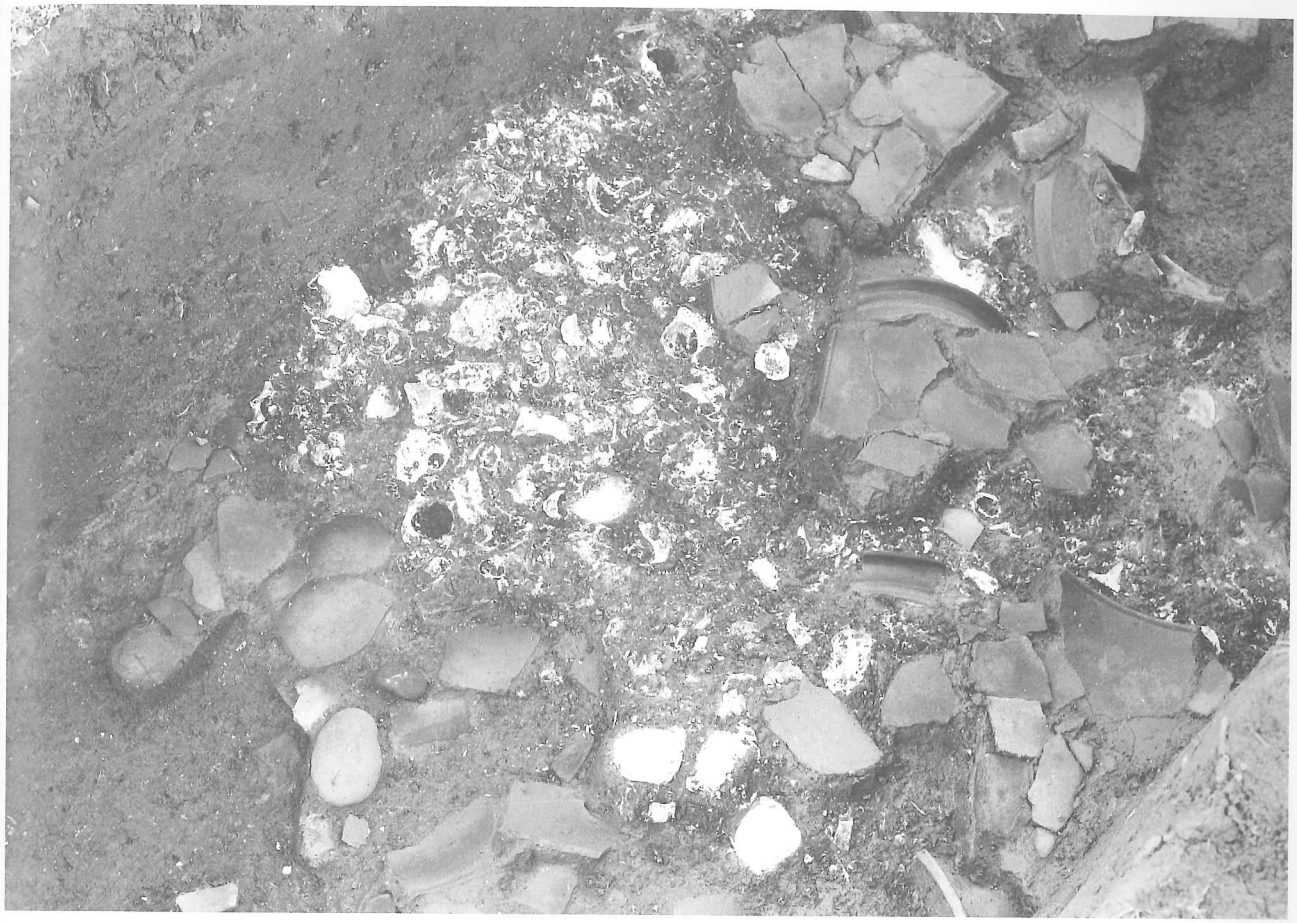
原 4 区ー 3 銅鏃出土状況



原6区遺構及び遺物出土状況（西から）

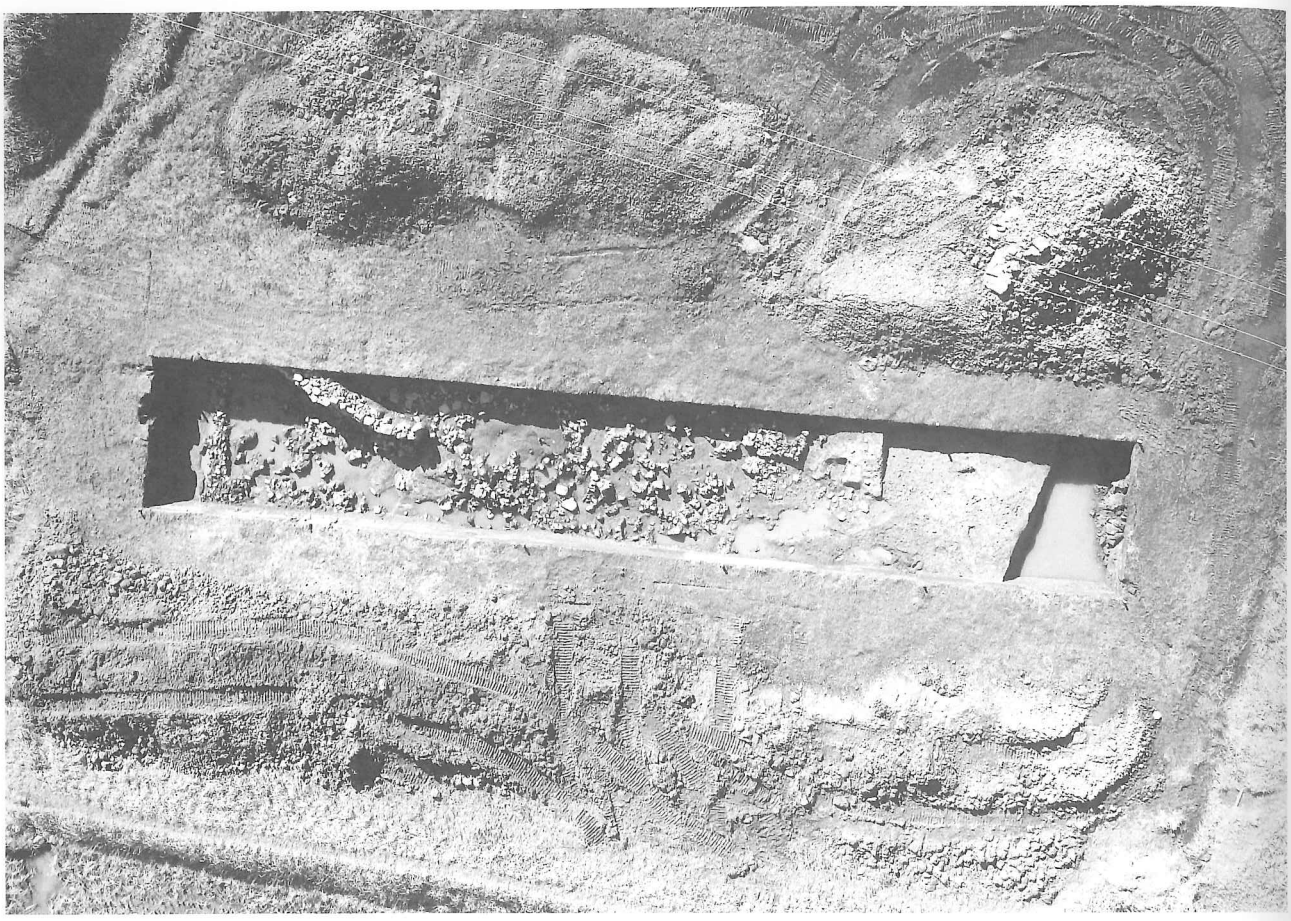
原 6 区遺物出土状況

原 6 区遺物出土状況



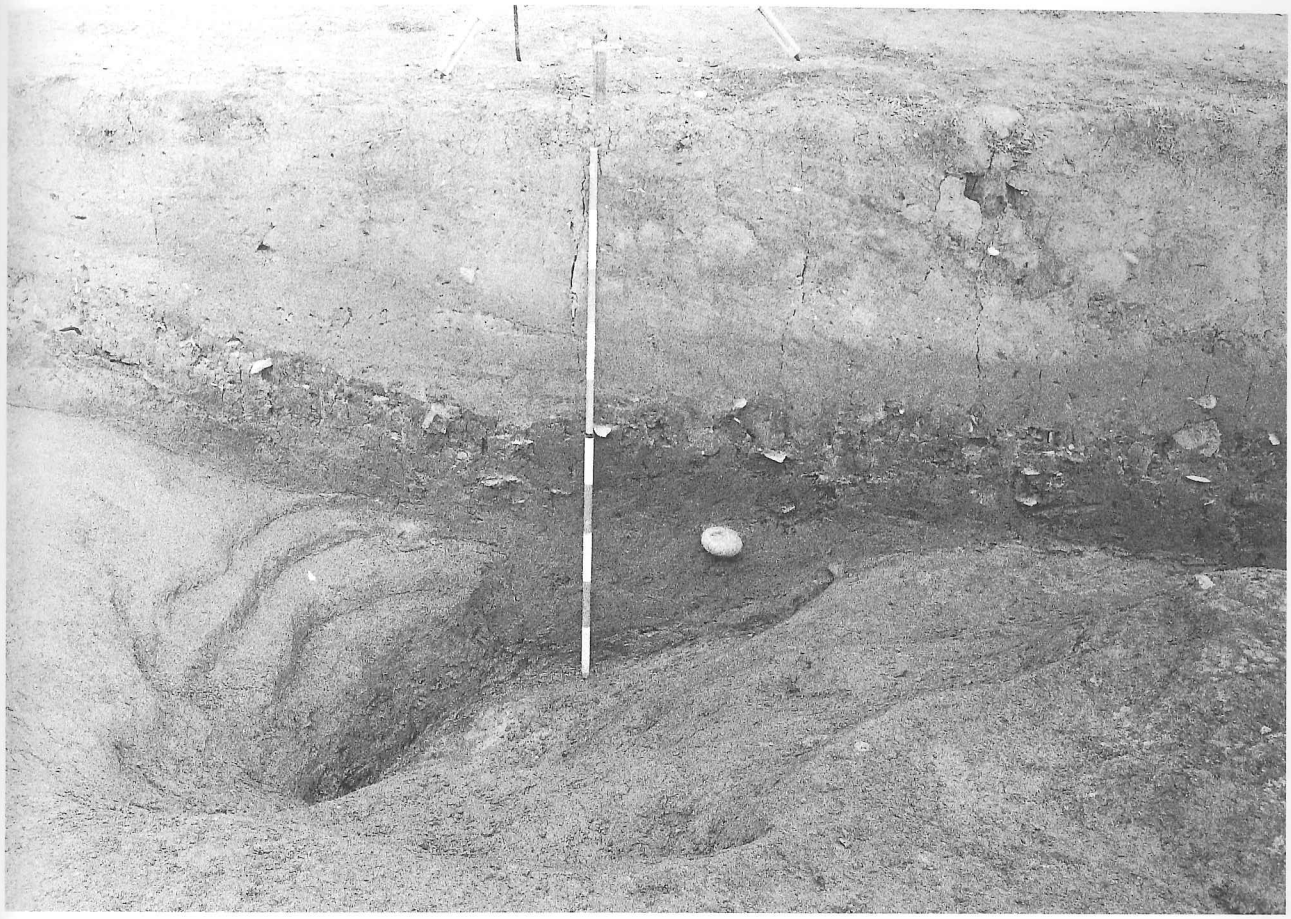
原6区貝層出土状況

原6区遺物出土状況



原 7 区調査壙全景

原 7 区北側土層



原7区4土層

原7区5土層

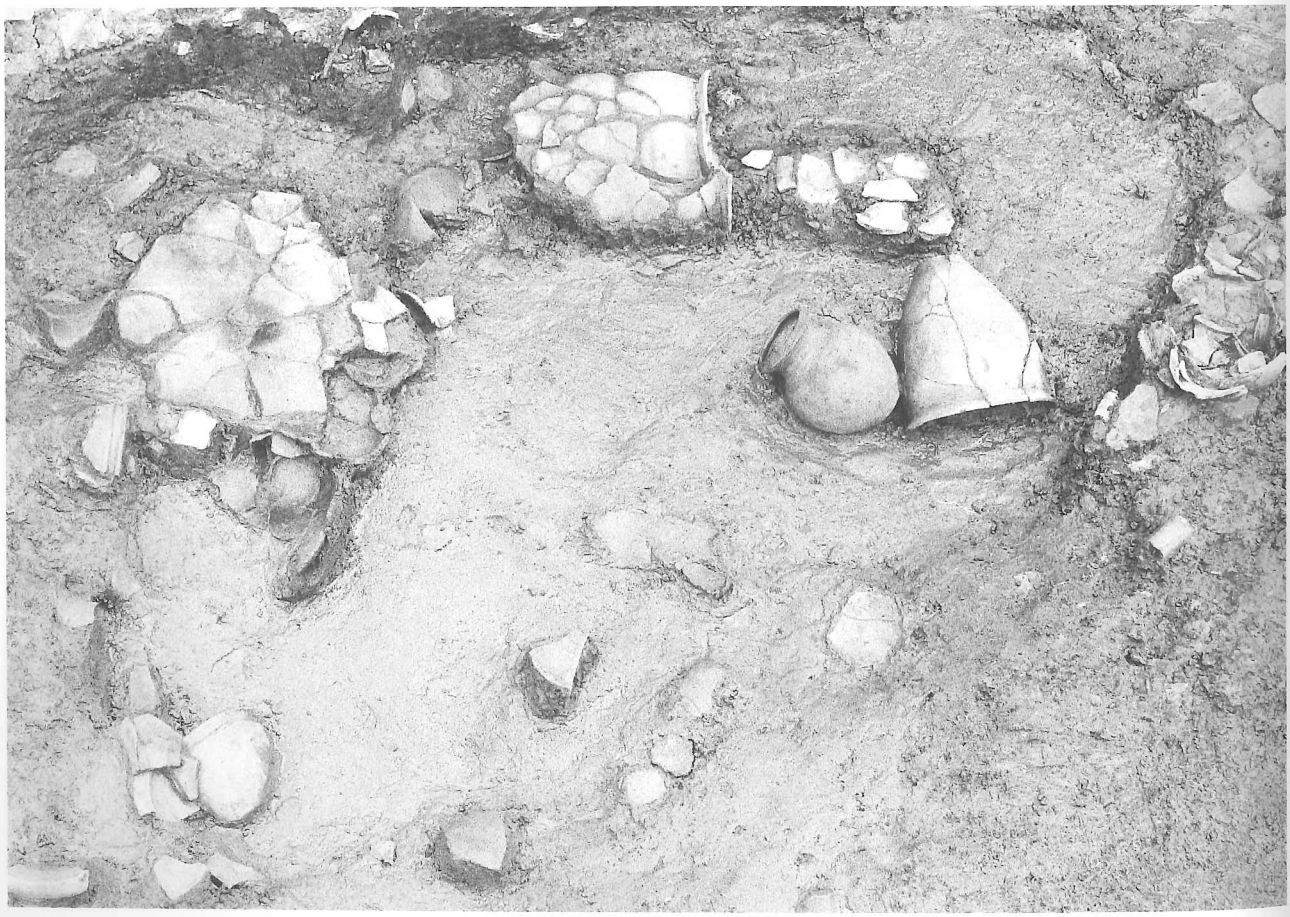
原 7 区 5 遺物出土状況

原 4 区 5 遺物出土状況

原 7 区 3 遺物出土状況

原 7 区 3 遺物出土状況

原 7 区 4 遺物出土状況



原 7 区 4 遺物出土状況

原 7 区 3 遺物出土状況

原 7 区 3 遺物出土状況

原 7 区 5 朝鮮半島系遺物出土状況

原 7 区 5 遺物出土状況

4．平成11年度不條地区の調査

(1) 調査概要（第71図，第72図）

平成10年度の船着き場付近水路等状況調査では，遺跡の中心に位置する台地の北西部下の低地において，多重環濠のうちの１本を確認した。この結果を受け，さらに環濠とこの地区の状況を確認するため，平成11年６月21日～平成11年７月13日に範囲確認調査を実施した。調査区は10m×30mを設定し，300㎡を調査した。

基本土層は，１層はにぶい褐色の現在の水田作土層である。２ａ層は灰褐色で現在の水田の下層土である。２ｂ層は近世から近代にかけての水田の下層土と考えられ，にぶい赤褐色をしている。東側ほど多くの小礫の混入が見られたが，これはこの層の下に存在する弥生時代中期に掘られた環濠による落ち込みを防ぐための工夫であると思われる。２ｃ層は小礫の混入はほとんど無く，暗褐灰色をしている。３ａ層は淡褐灰色の粘質土で中世に埋め立てられた水田と考えられる。３ｂ層は古代の水田で褐灰色粘質土である。３ｃ層は暗灰色粘質土で古墳時代の水田である。５ａ層・５ｂ層は旧河道跡作られた，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての水田で，５ａ層は灰黄色粘質土，５ｂ層が暗灰黄色粘質土である。５ｃ層は旧河道河床部のにぶい黄橙色をした砂礫層である。

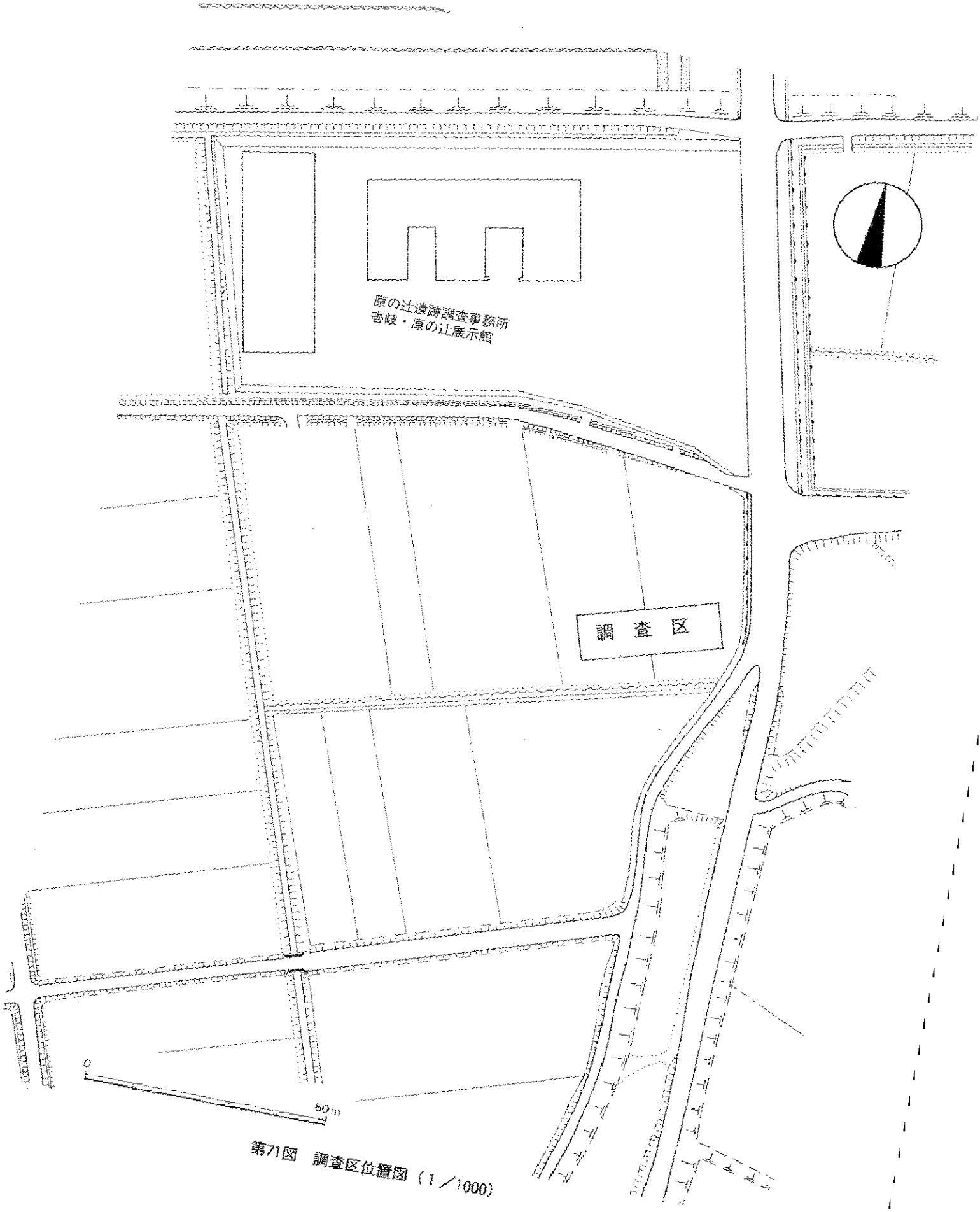
(2) 遺　　構（第73図）

①旧河道

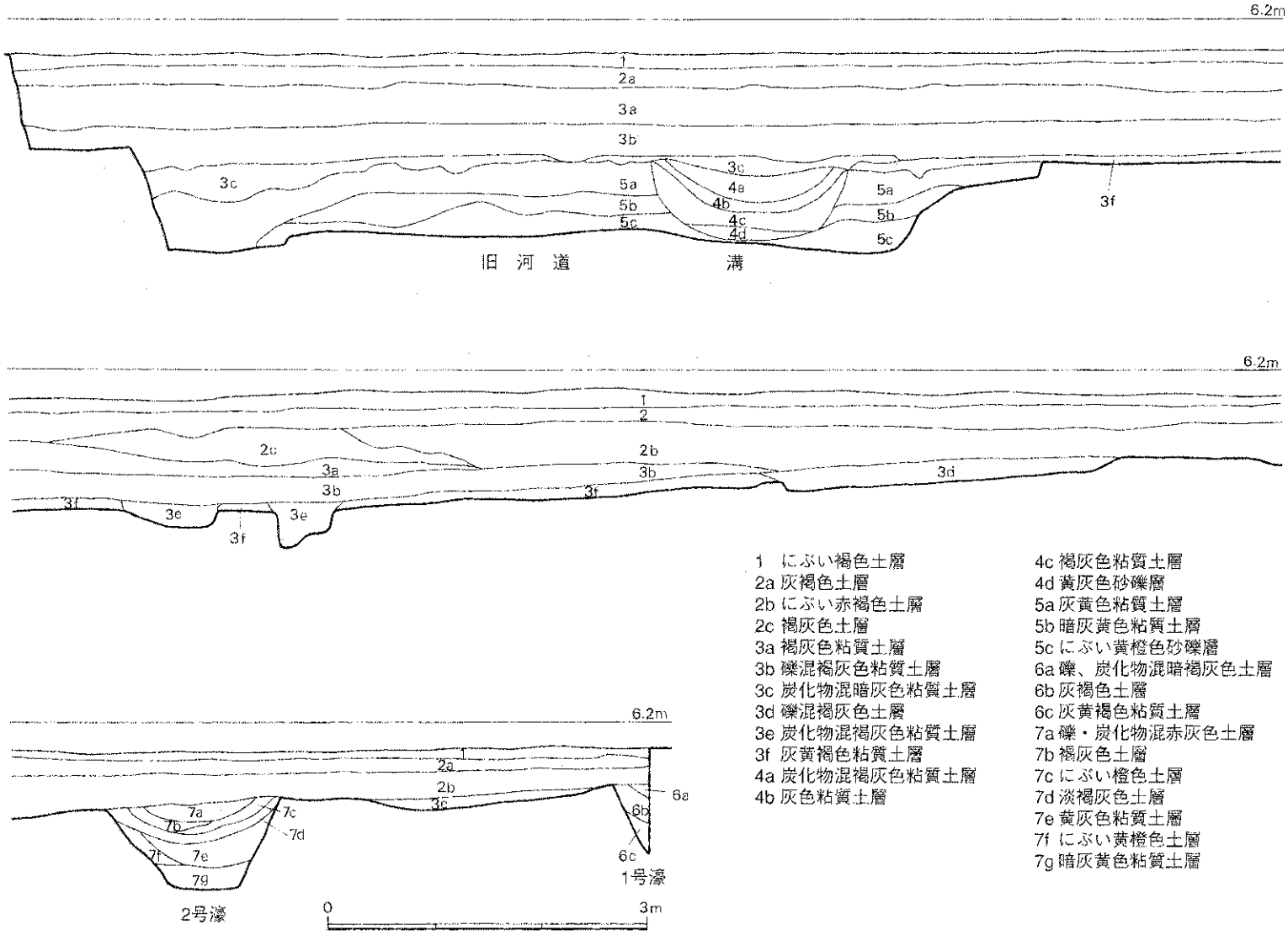
旧河道は，１条検出した。現在の幡鉾川の支流に相当し，南から北に向かって流れていたものと思われる。確認できた最深部で深さ約１mである。平成10年度の船着き場付近水路等状況調査Ｃ区・Ｄ区で確認した河道に繋がるものであり，本調査区においては東岸から河床部分の一部を検出したが，西岸は確認できなかった。平成10年度の調査では，東岸付近から弥生時代中期の遺物，河床中央部と思われる河床部で弥生時代後期の遺物を確認し，この旧河道は中期以降自然埋没していき，後期には中央部のみ河道が残っていたと考えられた。今回，河道内の中層・上層からは弥生時代後期の土器や布留式土器が出土している。また，河床中央寄りを除いて基本的に水平堆積を見せ，礫等の混入物もないため，河道は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて埋め立てられて，水田が営まれていたと考えられる。さらには中層は東岸からしばらく水平堆積をした後，河床に向かって落ち込むが，この落ち込みは水田の用排水のため，護岸の作為はないが，故意に河床を埋め残した可能性が考えられる。

②濠（第74図）

濠は，２条を確認した。１号濠は，調査区の東端をかすめて北から南へ走る。幅約３m，深さ約60cmを測り，長さ約12mを確認した。２号濠は，１号濠の西側を２m～３m離れて同じく北から南へ走る。幅約２m50cm，深さ約90cmを測り，長さ約10m50cmを確認した。深さの差は，原地形が東の台地から西の旧河道に向かって傾斜していたことの表れと考えられる。現在は，昭和30年代の圃場整備による削平を受け，２条上場のレベル差はほとんどないが，掘られた当時は１号濠がより高い位置から



第71図　調査区位置図（1／1000）



第72図　調査区北壁土層図（1／60）

掘り込まれていたものと思われる。

２条ともに下層から須玖Ⅱ式土器が出土し，１号濠の上層と２号濠の中層から弥生時代後期の土器が，１号濠の上層の一部と２号濠の上層からは弥生時代終末期や布留式土器が出土している。また土層の状況からみて，この２条の濠は弥生時代中期に掘られて一旦埋没した後，弥生時代後期に掘り直され，弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて再び埋没したものと考えられる。

さらに位置からみて遺跡の中心である台地を防御するために掘られた弥生時代中期の多重環濠の一部であり，１号濠が内濠，２号濠が中濠にあたり，平成10年度の船着き場付近水路等状況調査Ｃ区で確認した弥生時代中期の濠が外濠にあたると考えられる。

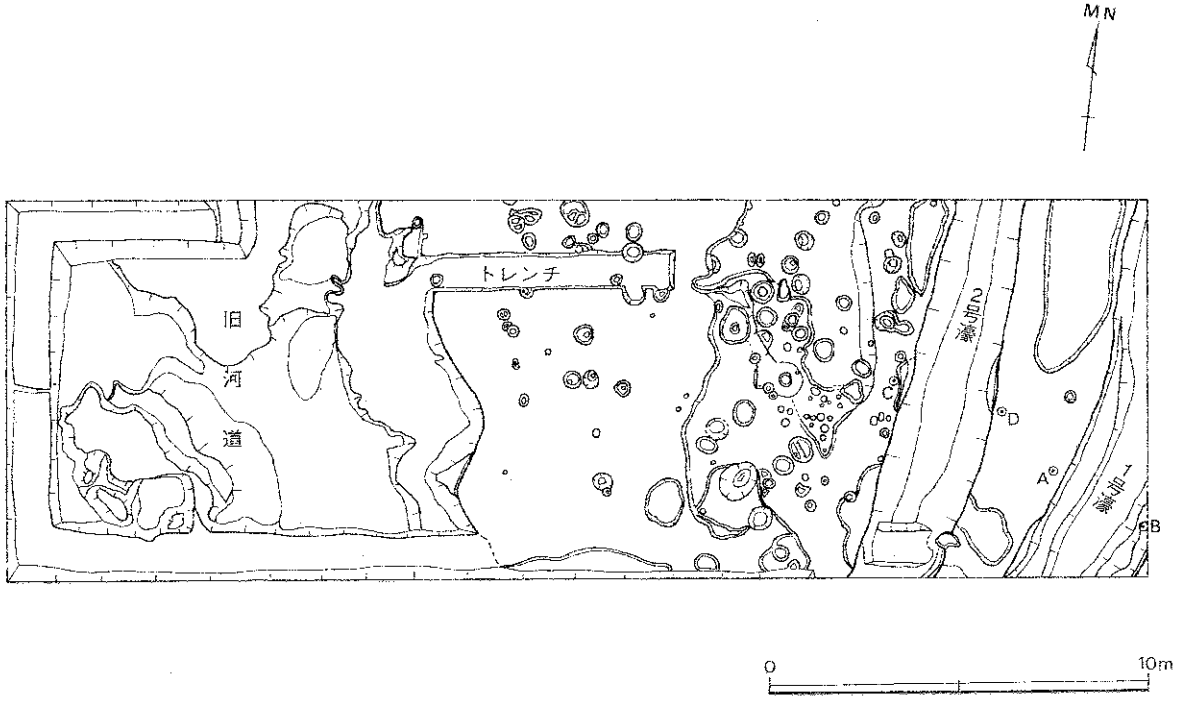
③溝（第73図）

溝は，１条検出した。幅約190cm，深さ約80cm，長さ約10mを確認した。旧河道内を河道の東岸に沿うような形で，北北西から南南東に７mほど直進した後，東に向って３m走る。平成10年度の船着き場付近水路等状況調査Ｃ区で確認した，古墳時代前期の溝に繋がるものである。

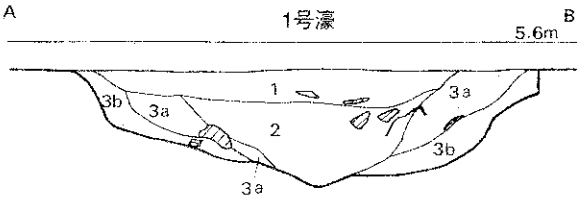
溝の東岸南端付近から古墳時代前期の甕が据え置かれたような状態で出土した。何らかの祭祀行為が行なわれたものと思われる。また，この溝は旧河道内の弥生時代後期から古墳時代前期に旧河道内を埋め立てて営まれた水田面から切り込んで造られているので，この水田のための用排水路として掘られ，同じく古墳時代前期に埋没したものと考えられる。

④その他（第73図）

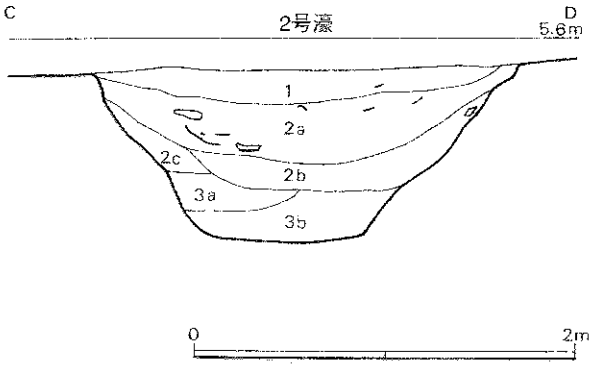
旧河道と２号濠に間を中心に，弥生時代中期から後期のものと思われる柱穴状小穴群を検出した。



第73図　遺構配置図（１／200）



1　砂礫・炭化物混　黒褐色土層
2　砂礫・炭化物混　暗褐色土層
3a 炭化物混　淡褐灰色土層
3b 炭化物混　灰褐色土層



1　炭化物混　赤灰色土層
2a 暗褐灰色土層
2b 淡褐灰色土層
2c 灰褐色土層
3a 黄灰色粘質土層
3b 灰色粘質土層

第74図　濠土層図（1／40）

(3) 遺　物

今回の調査では，コンテナ52箱分17,756点の遺物が出土した。この数量的な内訳は，土器・陶磁器17,127点，石器・石製品627点，金属器２点，その他木片，獣骨等が出土している。遺物の大半を占める土器・陶磁器から説明を行う。

①土器・陶磁器

１号旧河道出土土器（第75・76図）

１～10は甕である。１～４は，「く」字形口縁の在地系甕である。１は，胴部が胴中位に張りをもつ倒卵形をなし，凸レンズ状底が痕跡的に残るもので，外面はハケメを胴中位以下をナデツケ状のケズリ行っている。２は、１より長めの胴部で上半に最大径をもち，丸底をなす。外面は胴上半までナデツケ状のケズリを施し，底面もケズリの後ナデ仕上げしている。胴上半にみられるハケメは横位方向であり，外来系甕の影響と考えられる。３・４は，胴下半部を欠失する甕で，外面は胴上半にハケメが残るが，下半部はナデツケ状のケズリを施している。４は，胴部に強い張りをもっている。１・２・４が灰黄褐色，３がにぶい橙色の色調で，胎土に２・３が石英・長石・金雲母，４が石英・長石・金雲母・角閃石，１が石英・長石・金雲母・角閃石・赤色砂を含む。いずれもⅣａ層から出土。

５～10は，外来系の甕である。５は，左下がりの細かいタタキをもつ甕で，胴下端はタタキをナデ消し，内面は口縁部と胴部の屈曲部までケズリが施されている。庄内式の新相の甕であろう。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。６・７は，布留式傾向甕である。外面は，６が細かいハケメをナデ消し，７は平滑に仕上げている。６が灰白色,7がにぶい橙色の色調で，胎土に６が石英・長石・赤色砂，７が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。９～10は布留式甕である。胴上半に８が３条，９が２条，10が１条の沈線がはいる。８が灰黄褐色，９がにぶい黄橙色，10がにぶい橙色の色調で，胎土に８・10が石英・長石・金雲母，９が石英・長石・金雲母・角閃石を含む。５～10は，いずれもⅣａ層から出土した。

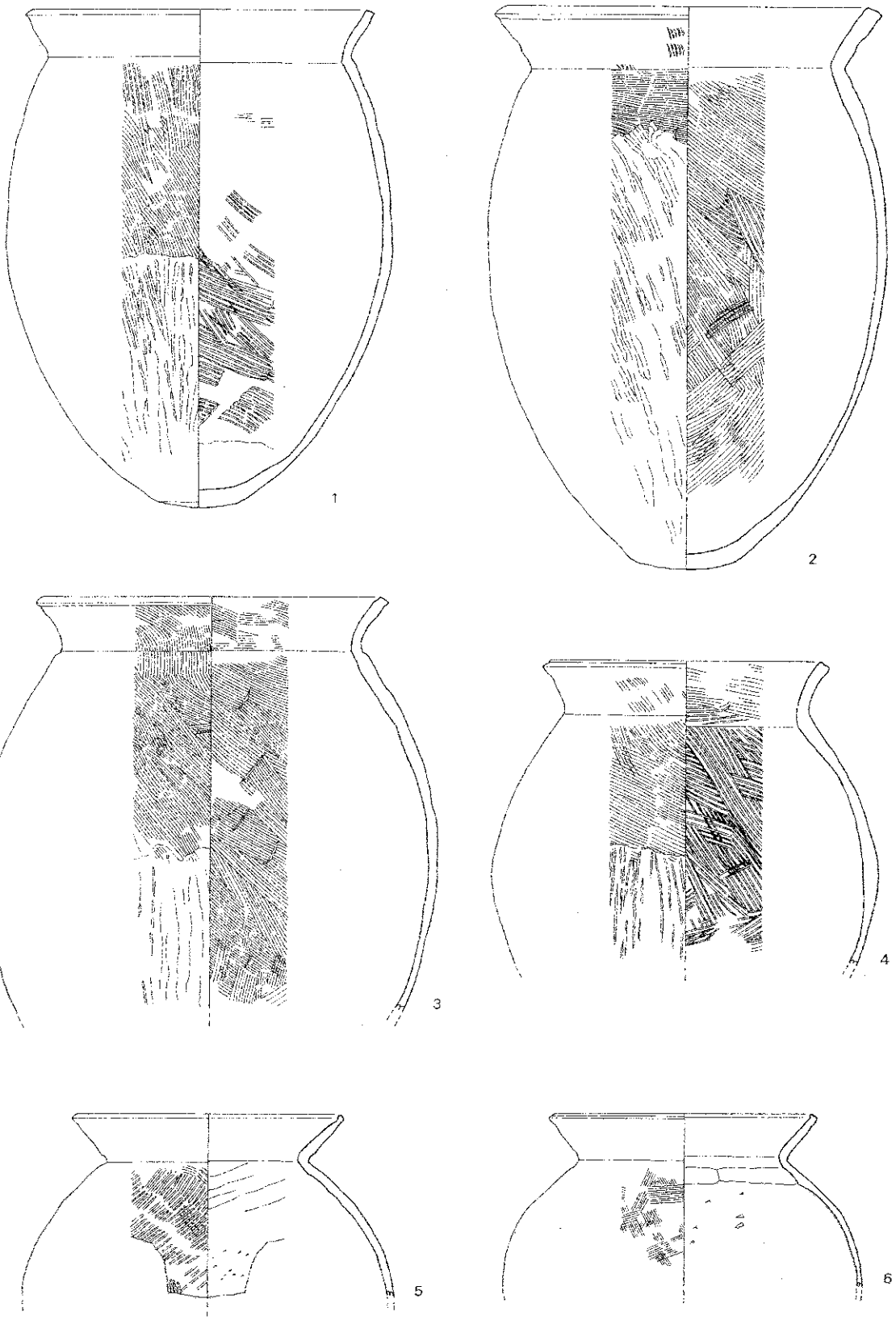
11・12は壺である。11は，球形の胴部の広口壺で，口縁部を欠失し，底部は凸レンズ状底をなす。灰黄褐色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。Ⅲｃ層出土。12は，球形の胴部の広口壺で，底部は凸レンズ状底をなす。底面は，ケズリの後ナデ仕上げされる。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。Ⅳａ層出土。

13は，平底で椀形の鉢である。灰黄褐の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・角閃石を含む。Ⅳａ層出土。14は，椀形の杯部をもつ高杯で，柱状部の裾付近を欠失している。平滑に仕上げているが，杯外面はわりとでこぼこしている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。Ⅳｂ層出土。

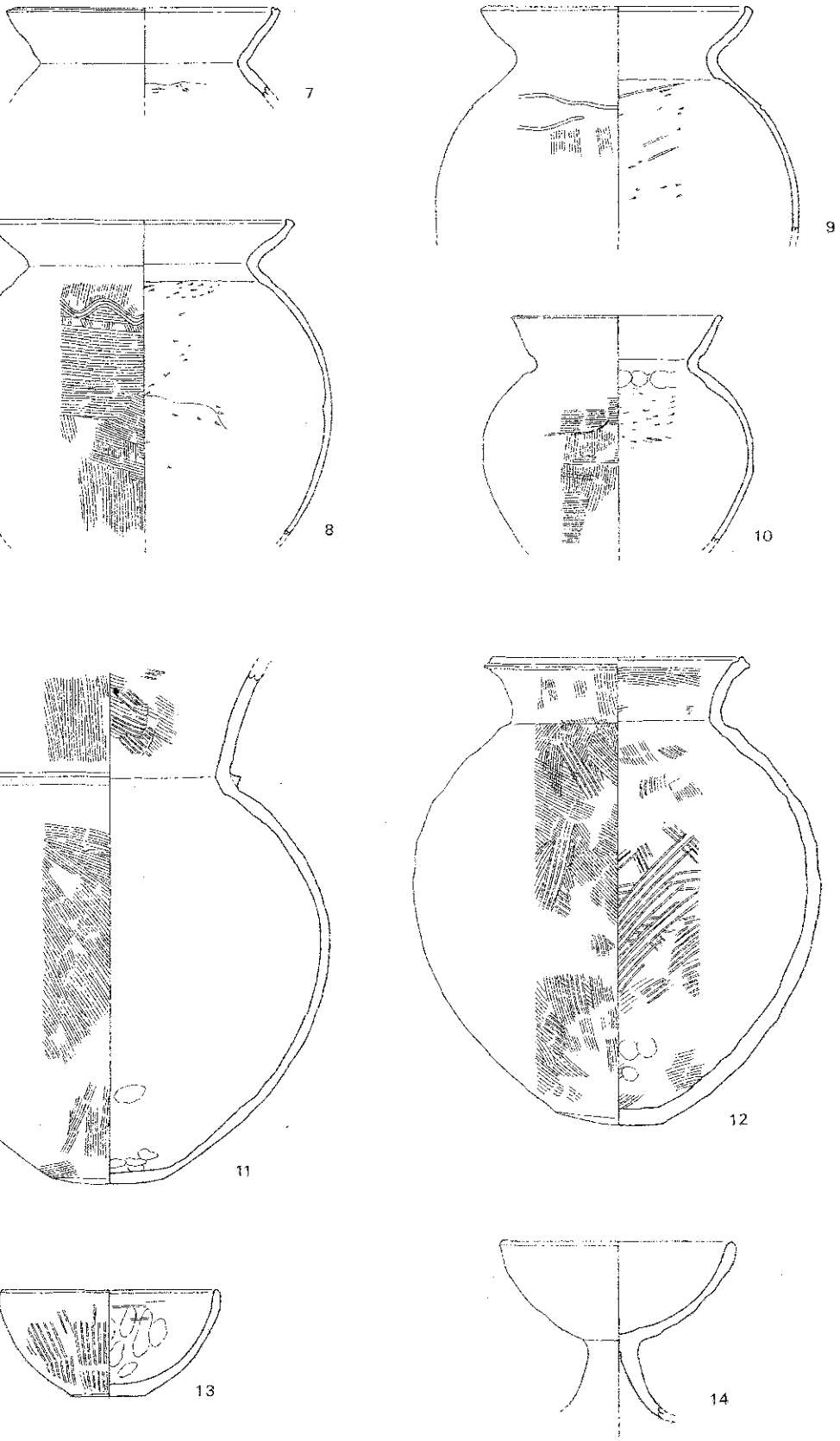
以上の１号旧河道出土土器は，Ⅳａ層に古墳時代初頭期の土器がまとまって出土していて，何らかの祭祀がなされた可能性をもっている。

１号濠出土土器（第77・78図）

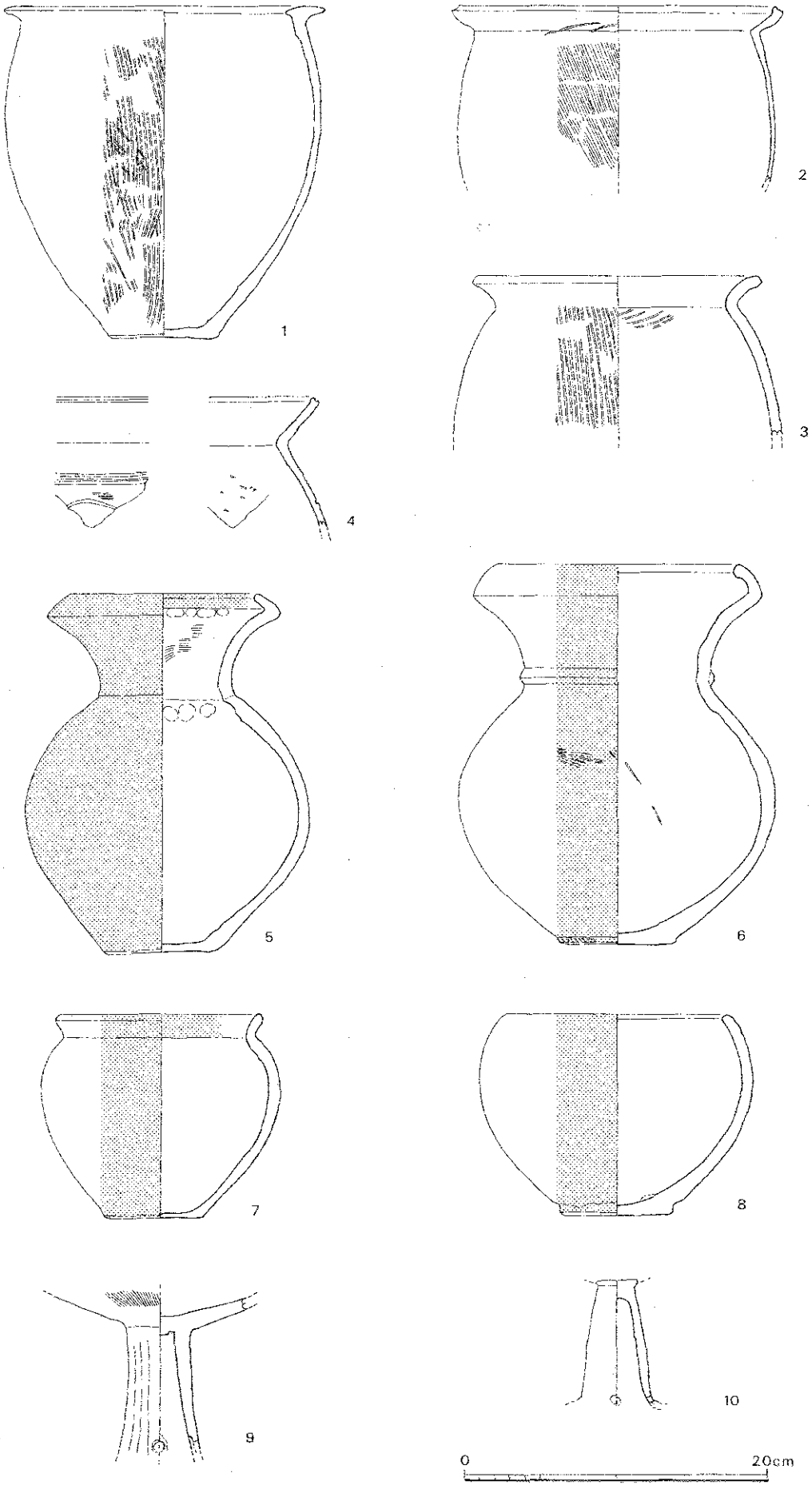
１～10は，Ⅰ層出土土器である。１～４は甕である。１は，鋤先形口縁の須玖Ⅱ式の甕で，張りをもつ胴部に対して器高が低く，ずんぐりとした形状をなす。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石



第75図　1号旧河道出土土器実測図①（1／4）



第76図　1号旧河道出土土器実測図②（1／4）



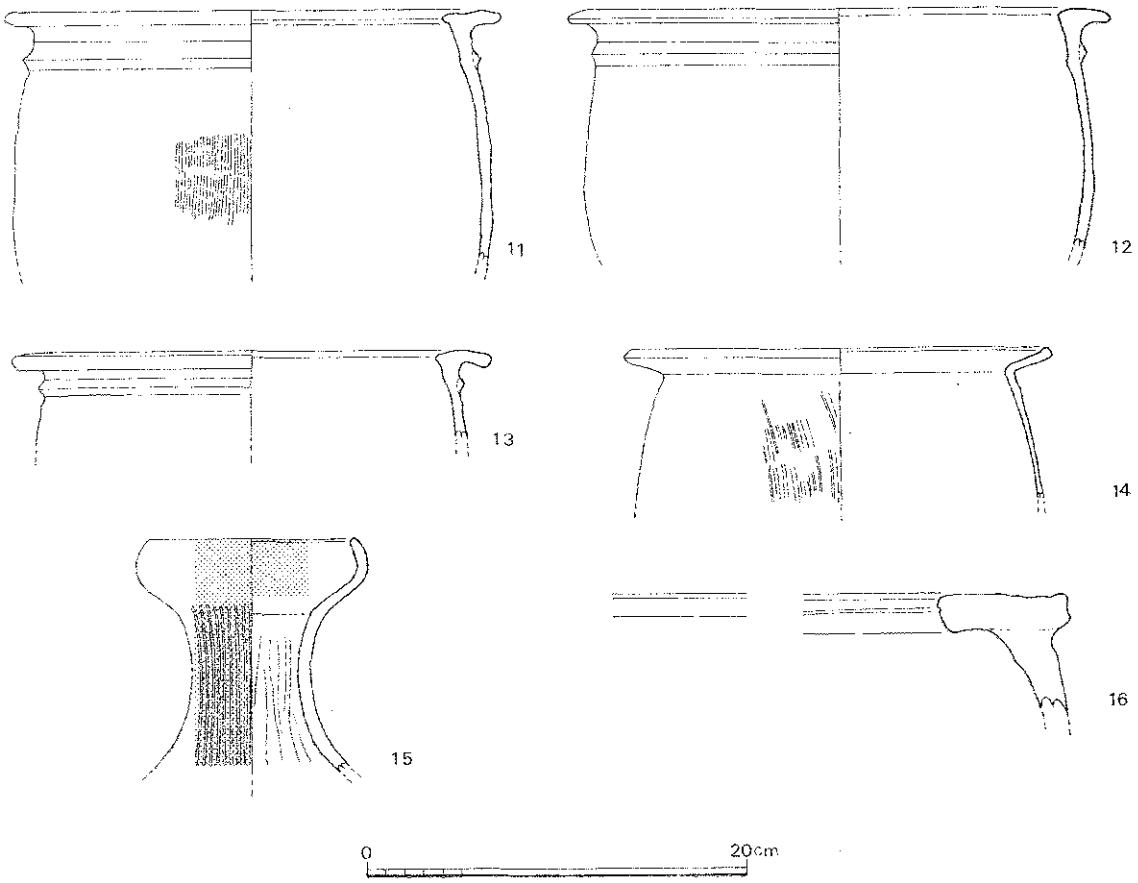
第77図　１号濠出土土器実測図①（１／４）

・金雲母を含む。2は，跳ね上げ口縁の甕である。薄手つくりで，口縁外方にヘラ痕が残る。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。3は，外湾する「く」字形口縁の甕で，後期前半期のものであろう。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂を含む。4は，布留式の甕である。胴外面に沈線が1条はいる。橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。

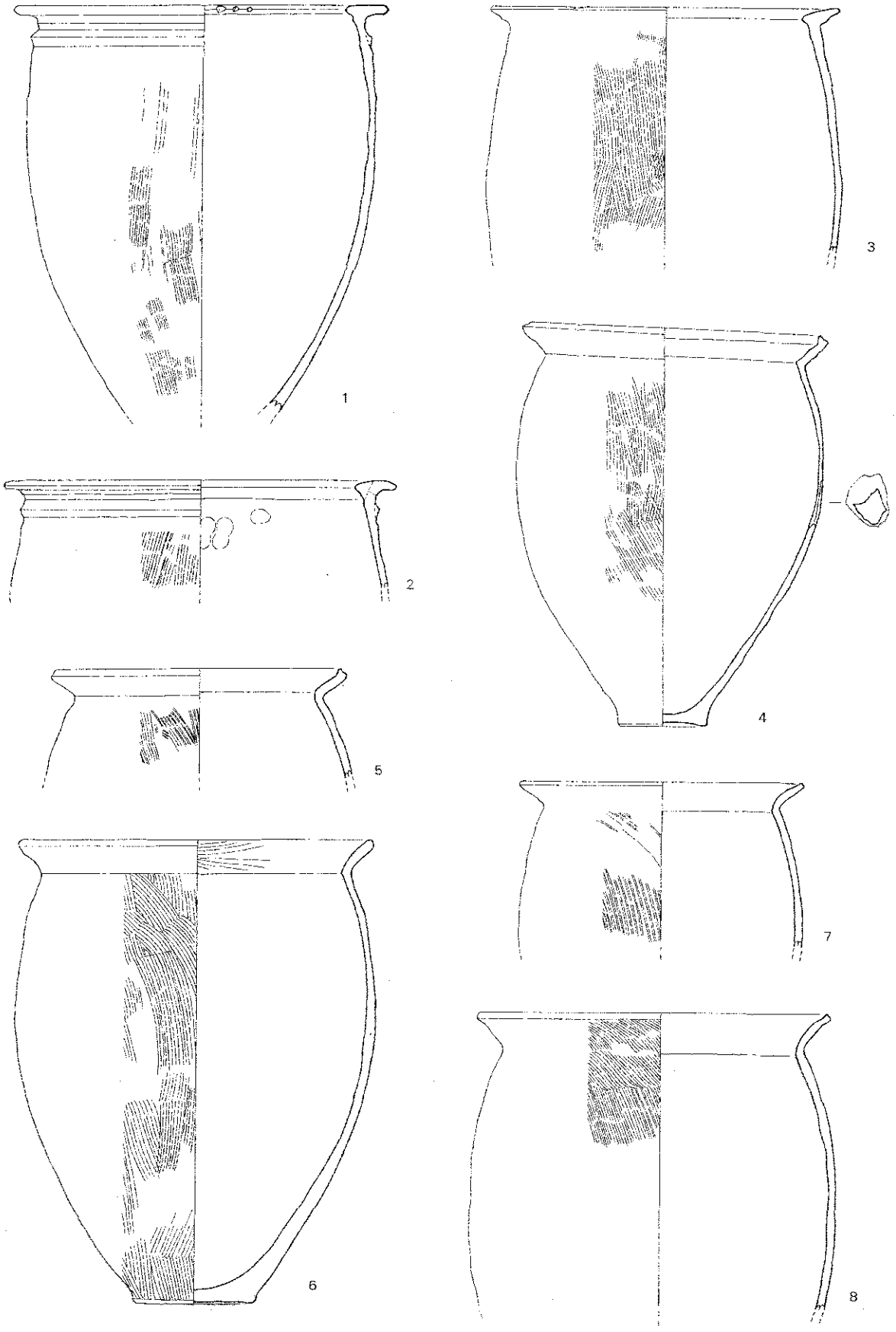
5～6は丹塗壺である。5・6は，口縁が内湾ぎみに強く屈曲する複合口縁壺である。6は，頸胴界に断面三角形の突帯をつける。5がにぶい黄橙色，6がにぶい橙色の色調で，双方ともに胎土に石英・長石・金雲母を含む。7は，口縁が「く」字形に外反する広口壺で，口縁端部を丸くおさめている。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。8は，無頸壺である。球形の胴部に円盤状の底部がつく。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石を含む。これらの壺は，後期前葉段階の資料である。

9・10は，高杯である。9は，杯部下半から柱状部上半の破片である。杯部外面はハケ・柱状部はタテミガキされる。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石・赤色砂を含む。10は，エンタシス状の柱状部片で，強く屈曲する裾部を欠失している。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・赤色砂を含む。9は弥生後期後半，10は布留式に伴う資料である。

以上の1号濠I層出土資料は，弥生中期後半～古墳前期までの資料を含むが，後期になって掘り直されて，古墳前期の布留式の段階に埋没したことが考えられる。



第78図　1号濠出土土器実測図②（1／4）



第79図　2号濠出土土器実測図①（1／4）

11～16は，Ⅱ層出土土器である。11～13は鋤先形口縁で，口縁下に断面三角形の突帯をつける須玖Ⅱ式の甕である。11・13がにぶい黄橙色，12がにぶい橙色の色調で，胎土に12・13が石英・長石・赤色砂，11が石英・長石・金雲母を含む。14は，跳ね上げ口縁の甕である。薄手つくりで，胴部外面はハケメをナデ消し仕上げ，内面は平滑なナデ仕上げされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。15は，丹塗の袋状口縁壺の口頸部片である。頸部外面は縦位に暗文を施し，内面にはしぼり痕がみられる。16は，口縁内方が突出する汲田式の甕棺口縁片である。器面はナデ仕上げされ，橙色の色調を呈し，胎土に石英・長石・金雲母を含む。

以上の1号濠Ⅱ層出土土器は，弥生中期後半の資料であり，濠が掘削されて埋没して後期に掘り直した際に残存した遺物と考えられる。

2号濠出土土器（第79・80図）

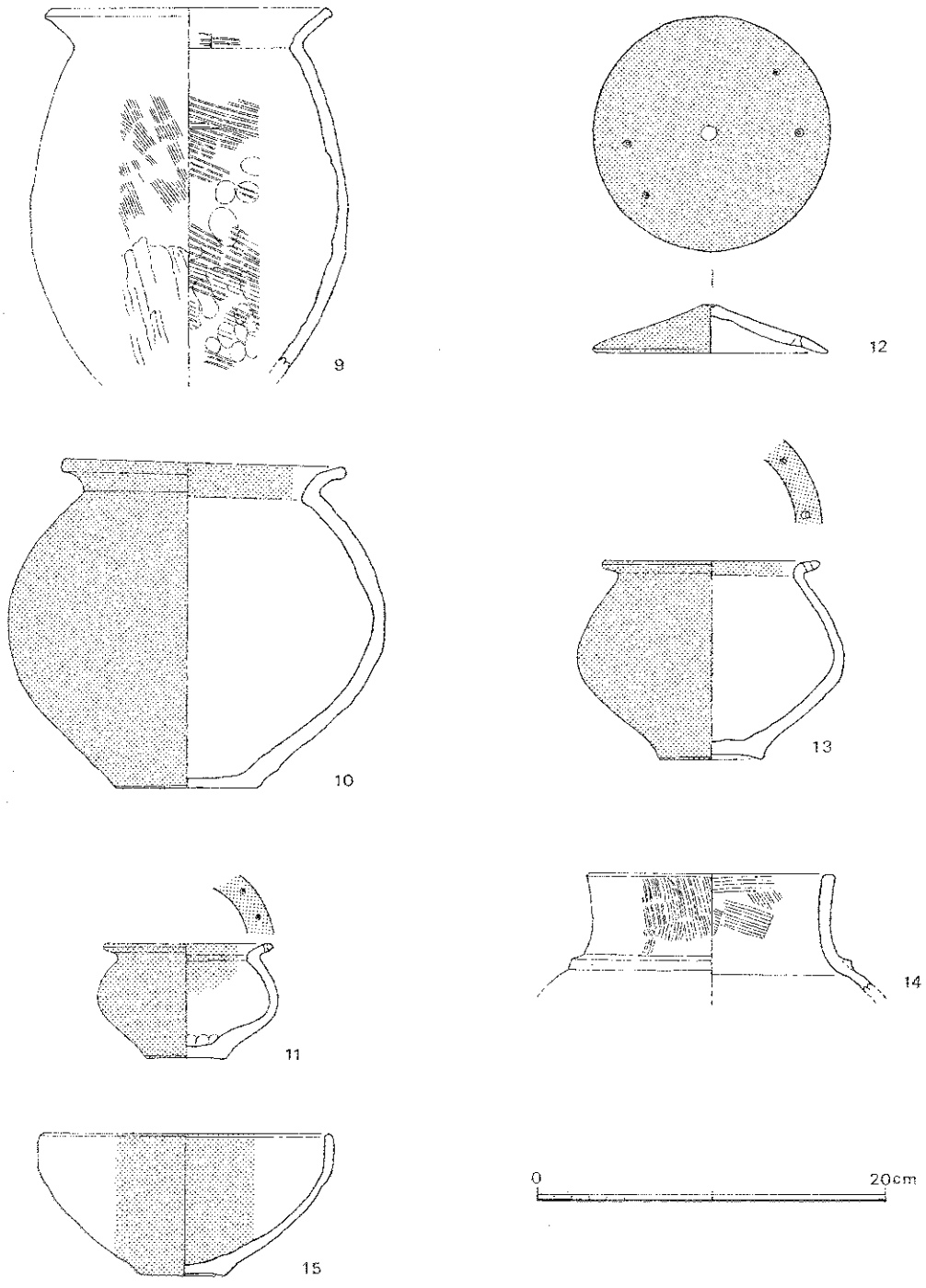
1～9は，甕である。1・2は鋤先形口縁の甕で，口縁下に断面三角形の突帯をつける。1は，口縁内方の突出部に3箇所の刻目を施している。両者ともににぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。1は須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階，2は須玖Ⅱ新段階の資料である。3は，先端が尖った変形の鋤先形口縁をなすが，胴部はハケメ，内面は平滑なナデ仕上げされる。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石金雲母赤色砂を含む。擬無文土器と考えられる。4・5は，跳ね上げ口縁の甕である。4は，薄手つくりのほぼ完形の甕で，胴部に焼成後の穿孔が認められる。胴部外面はラフな整形で凹凸がみられ，板ナデのような調整がなされている。上半にはハケメが残るが，下半部は二次的な火熱によって風化し赤化している。内面は平滑に仕上げられる。底部は器体に対してやや小さく，下底面は少々あげ底になっている。5は上半部片で，外面はハケメ，内面は平滑ナデ仕上げ。4・5ともににぶい橙色の色調で，胎土に4は石英・長石・金雲母・暗褐色砂，5は石英・長石・角閃石を含む。6～9は，「く」字形に口縁が外反する甕である。6は，胴上位に胴部最大径をもち，口縁端部を丸くおさめ，平底の底部である。外面はハケ，内面は平滑なナデ仕上げされる。後期前葉の資料である。7・8は，胴部上半の破片で，口縁端部は面取りし平坦におさめている。後期前半期の資料であろうか。9は，胴部がラグビー球形をなす小形甕である。胴部外面はハケメを下半部がナデツケ状のケズリを施し，内面はハケ調整の後に指オサエおよびナデ仕上げされている。9が後期後半～古墳前期の資料である。6・7がにぶい黄橙色，8が灰褐色，9が灰白色の色調で，胎土にいずれも石英・長石・金雲母・角閃石を含む。

10・11・13は丹塗広口壺で，12は13とセットになる蓋である。10は「く」字形口縁の壺で，胴部中位に張りをもつ。口縁端部は丸くおさめ，内方の屈曲部は尖りぎみである。胴部中位には一部黒塗りの痕跡が認められる。ぶ厚いつくりで，手取りは重い。胴上半はヨコミガキ，胴下半はタテミガキを施す。11・13は口縁が「く」字形に外湾しているが，13は上方を平坦にしており古い様相を持っている。口縁上方には2個ずつ対に細かい穿孔が焼成前に空けられている。両者ともに，外面にはヨコミガキを施す。10が灰黄褐色，11・13がにぶい黄橙色の色調で，いずれも胎土に石英・長石・金雲母を含む。11・13が弥生中期後半の須玖Ⅱ式，10が後期初頭の資料であろう。14は，直口壺上半部片であ

る。上方は面取りされて平坦におさめている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。後期後半～古墳前期初頭の資料であろうか。

12は，13とセットになる丹塗蓋である。陣笠状をなし，2個ずつ対に小さな穿孔が焼成前に空けられている。にぶい黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母・赤色砂を含む。

15は，椀形の丹塗鉢である。にぶい橙色の色調で，胎土に石英・長石・金雲母を含む。



第80図　2号濠出土土器実測図②（1／4）

以上の２号濠出土土器は，Ⅰ層から14，Ⅱ層から７・８・９・10，Ⅲ層から１～６・15，Ⅳ層から11～13が出土している。出土土器からみると，Ⅳ層が中期後半，Ⅲ層が中期後半～後期初頭，Ⅱ層が後期前半～古墳前期初頭の時期に包括される。したがって，Ⅲ層のなかで後期の掘り直しの境界ラインが推測できる。

１号溝出土土器（第81図）

ほぼ完形の在来系甕である。口縁はやや外湾し，外方に突出ぎみにおさめる。胴部は倒卵形をなして，底部は丸底である。外面は，胴上半のハケを下半部がナデツケ状のケズリを施している。内面はハケ調整されている。灰黄褐色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。古墳前期初頭の資料であろう。

朝鮮半島系土器（第82図）

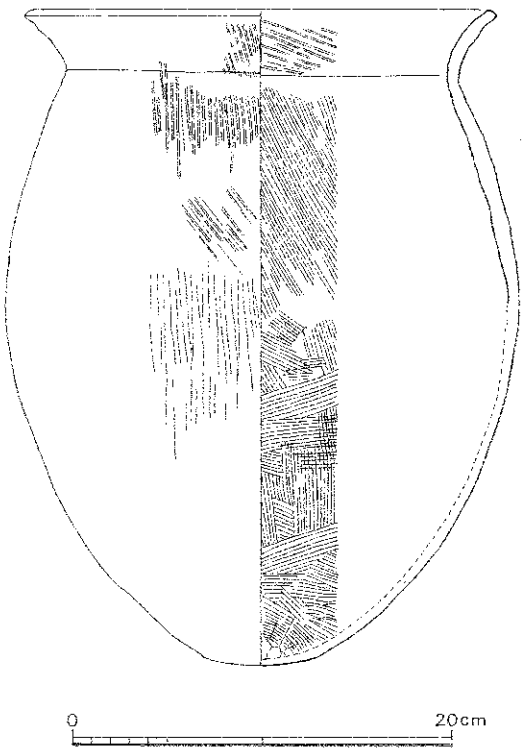
１は，断面円形の粘土紐をつけた無文土器口縁部片である。器面は平滑に仕上げられ，上方はやや平坦に整形されている。浅黄橙色の色調で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。Ⅰ３区の旧河道のⅣｂから出土している。２は，瓦質土器壺の胴部片である。外面には縄席文のタタキが施される。灰白色の色調を呈する。Ⅰ11区Ⅱ層出土。

３～11は，陶質土器壺の破片である。３～５は外面に細かい平行タタキが施され，６～11は平行タタキに沈線を施す。11は，格子目タタキの上に自然釉がかかる。縦方向の耳が欠損しているが，上端に一部残っている。色調は，灰色を呈するが，器肉が３・46・９がにぶい赤褐色，５が灰褐色をなす。３・６が２号濠Ⅱ層，４・５が２号濠Ⅰ層，７がⅠ３区Ⅳｂ層，８がⅠ12区Ⅱ層，９区Ⅰ12区Ⅱａ層，10がⅠ10区Ⅱｂ層，11がⅠ９区Ⅱｂ層出土。

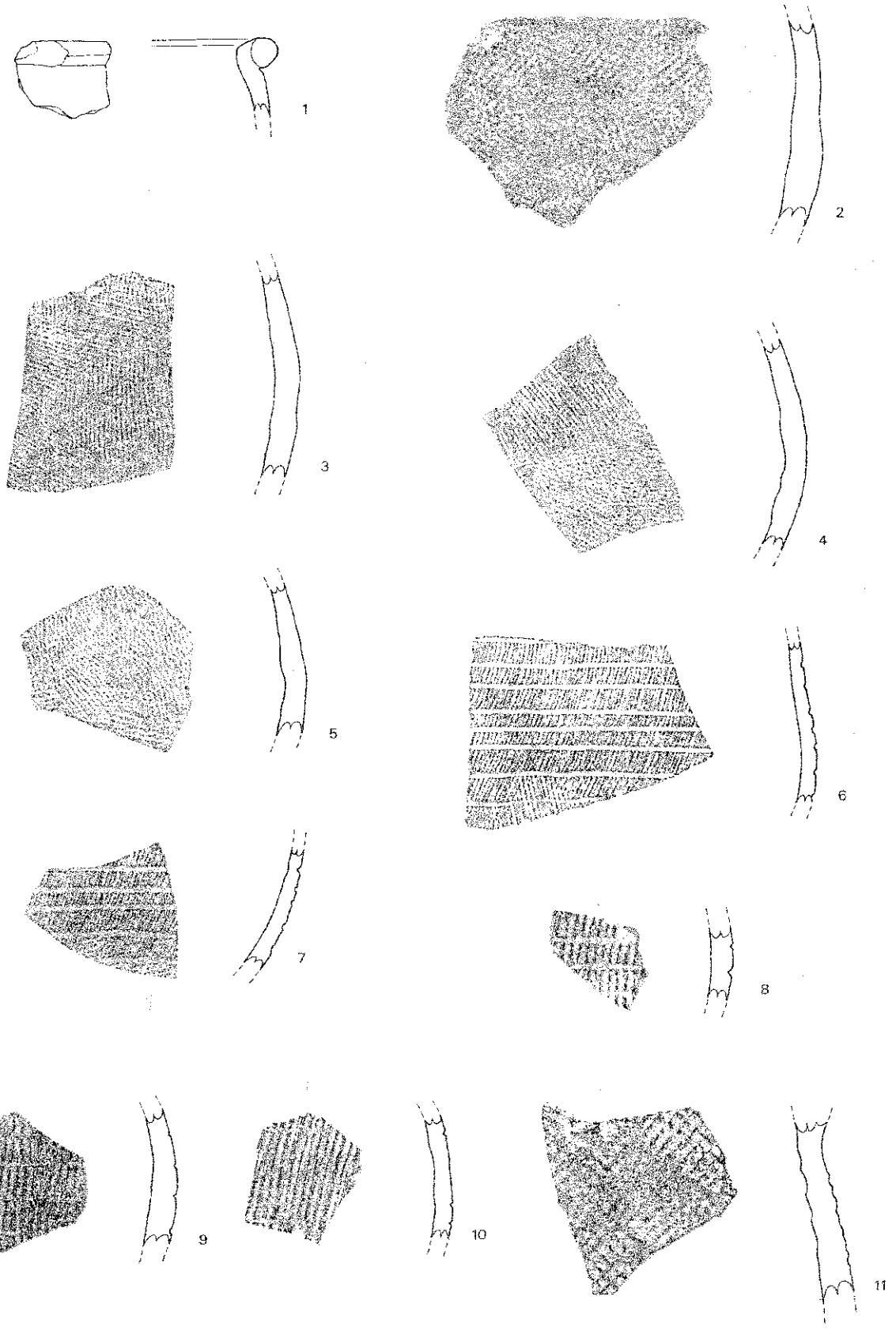
無文土器は，１の他に，擬無文土器甕が２号濠Ⅲ層から出土している。（第５図３）。

三韓系瓦質土器は２の他に，Ⅰ３区Ⅲ層から鉢片が出土している。

陶質土器は，３～11の９点の他に，無文壺片がⅠ６区Ⅱ層，Ⅰ10区Ⅱ層と無文壺底片がⅠ11区Ⅱ層から出土していて，合計12点が出土している。



第81図　１号溝出土土器実測図（１／４）



第82図　朝鮮半島系土器実測図（1／2）

②石器・石製品（第83図～第88図）

1～7は，黒曜石製の遺物である。6を除いて旧石器時代から縄文時代の遺物と考えられる。1は，三稜形尖頭器で3b層から出土した。13gを計る。2は台形様石器で，溝の1層から出土した。5.15gを計る。3と4はナイフ形石器で，3は1号濠1層，4は2b層から出土した。3は3.2g，4は10.6gを計る。5は石核で，2a層から出土した。9.8gを計る。石核は他に5個出土している。6は無茎打製石鏃で，3a層から出土した。0.4gを計る。7はピエス＝エスキーユ（楔形石器）である。上下からの剥離が見られ，上下の打面（刃部）は線状をなす。裏面は広範囲に自然面を残している。2a層から出土した。29.1gを計る。

8は有茎磨製石鏃である。粘板岩製で2層から出土した。5gを計る。9と10は無茎磨製石鏃である。ともに粘板岩製で，2号濠3層から出土した。9は3.2g，10は3.8gを計る。11は胡部や孔が確認できないため磨製石剣と考えられるが，断面等の形状から磨製石戈の可能性もある。2号濠2層から出土した。頁岩製で78.7gを計る。

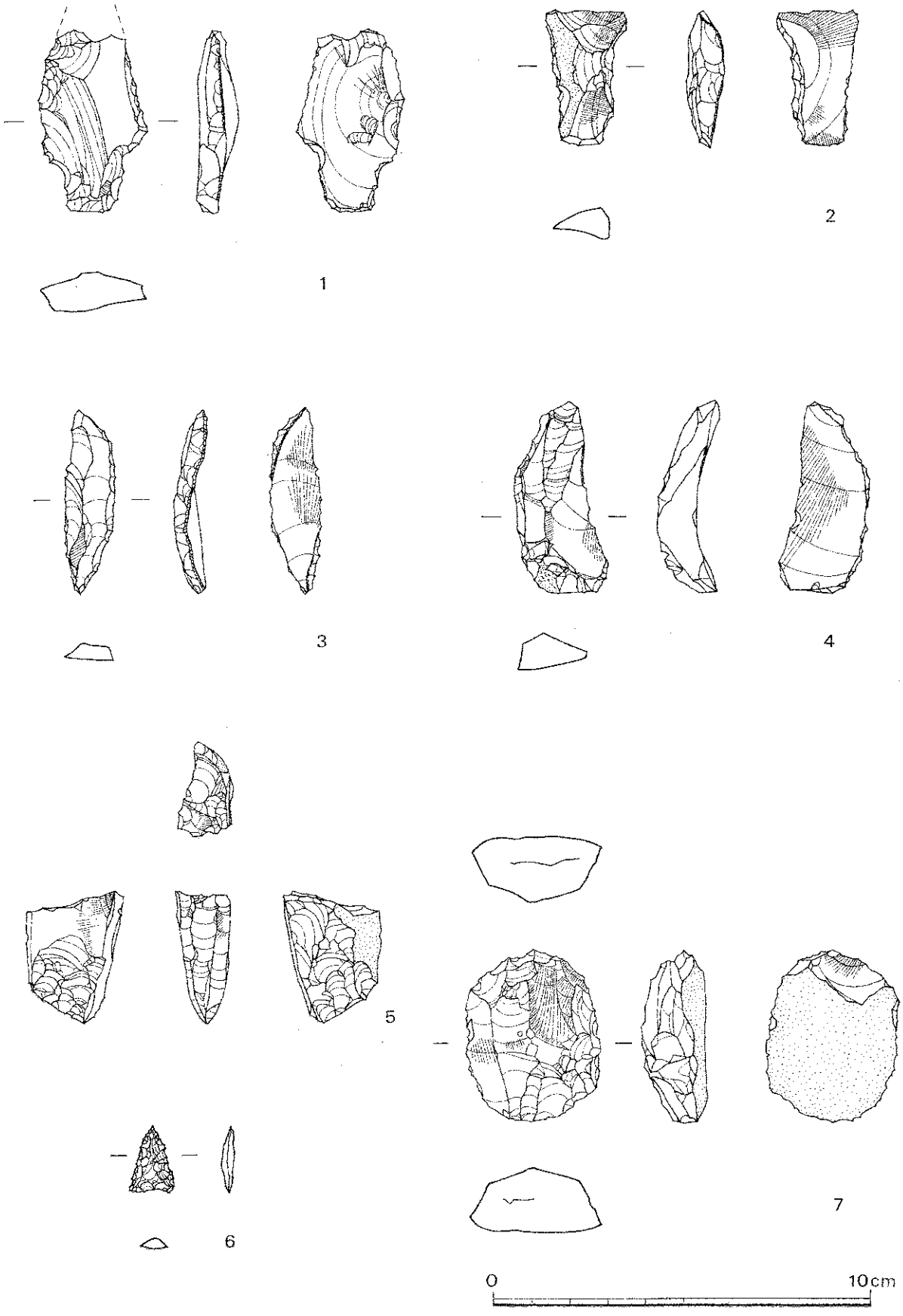
12は蛤刃石斧である。頁岩製で241gを計る。4c層から出土した。13は小型の蛤刃石斧である。表面はかなり風化を受けている。頁岩製。220gを計り，2b層から出土した。14～19は石錘である。素材はすべて頁岩を使用している。14が1号濠2層，15・16が4c層，17が4a層，18が1号濠1層，19が2a層から出土した。重さは14が40g，15が49g，16が90.4g，17が40g，18が16.7g，19が43.2gである。

20から47は敲石・磨石・凹石である。20・22・24・25・26・27・30・31・32・33・34・35・36・37・38は中央に使用痕が見られる。また，21・23・24・25・26・27・28・29・30・32・33は敲石の機能をもち，35・36・38は敲石と磨石の，34・37・39・40・41・42・43・44・45・46・47は磨石の機能をもつ。25は上下左右に，27はやや上部左右に抉りが入れられている。石錘に転用，もしくは転用するために加工したものと考えられる。素材は全て玄武岩の円礫を使用している。20・28・29・31・45・46が4a層，21・22・23・25・37・43・44が1号濠1層，24が2号濠3層，26・32・38が2号濠2層，27が3a層，30が1層，33・35・36・39・41・47が4c層，34がpit35，40，42が1号濠2層から出土した。重さは，20が320g，21が277g，22が700g，23が280g，24が1,400g，25が820g，26が940g，27が740g，28が240g，29が252g，30が660g，31が330g，32が900g，33が650g，34が850g，35が820g，36が526g，37が957g，38が1,960g，39が415g，40が680g，41が645g，42が1,240g，43が460g，44が740g，45が367g，46が580g，47が620gを計る。

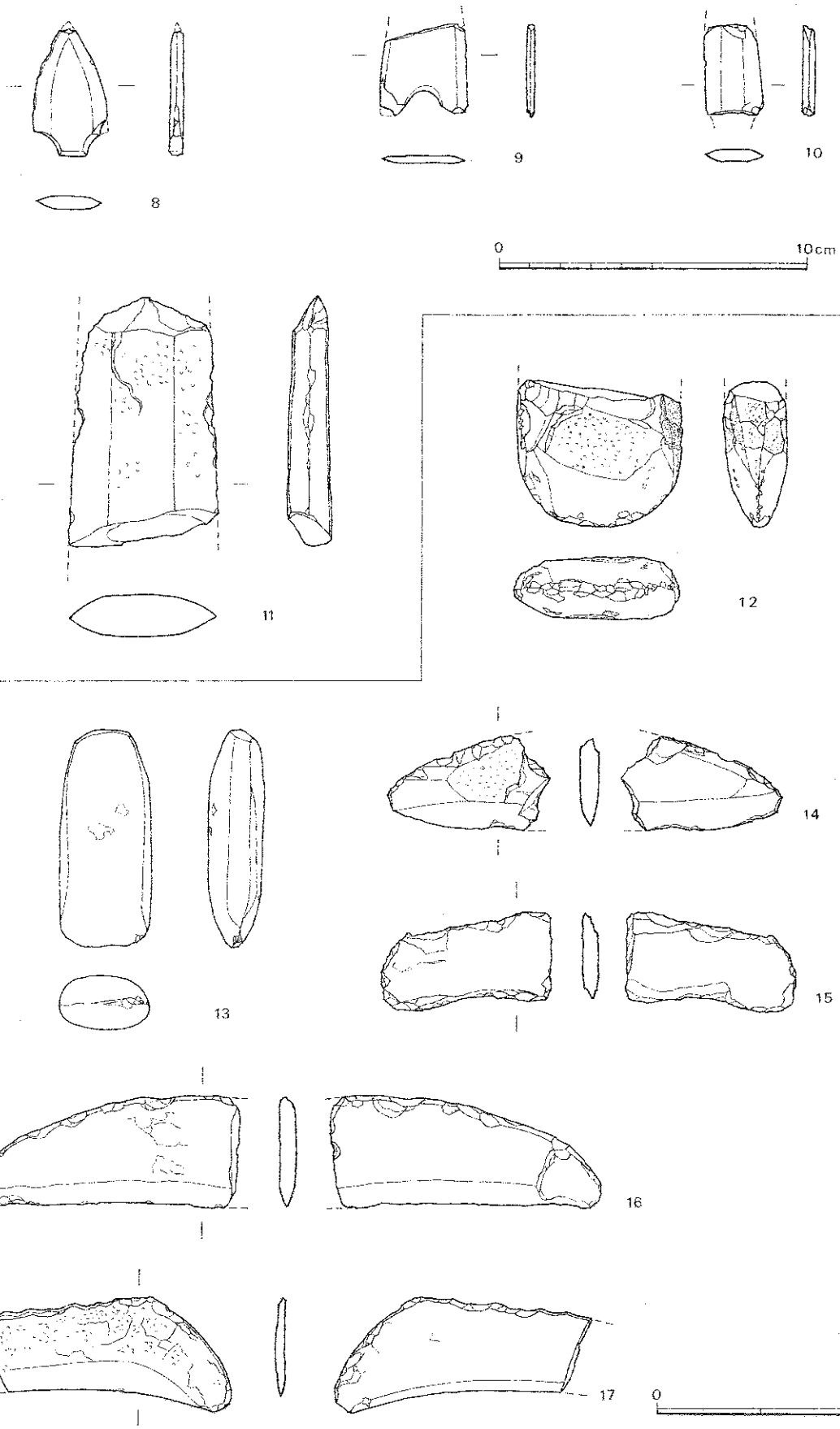
48は凝灰岩製の石錘である。上部が一部破損しているが，鑿跡や磨き等の加工調整痕が残っている。4a層から出土した。重さ1,700gを計る。

49は凝灰岩製の烏帽子形をした支脚形石製品である。地元では「クド石」と呼ばれる。2a層から出土した。重さ3,400gを計る。

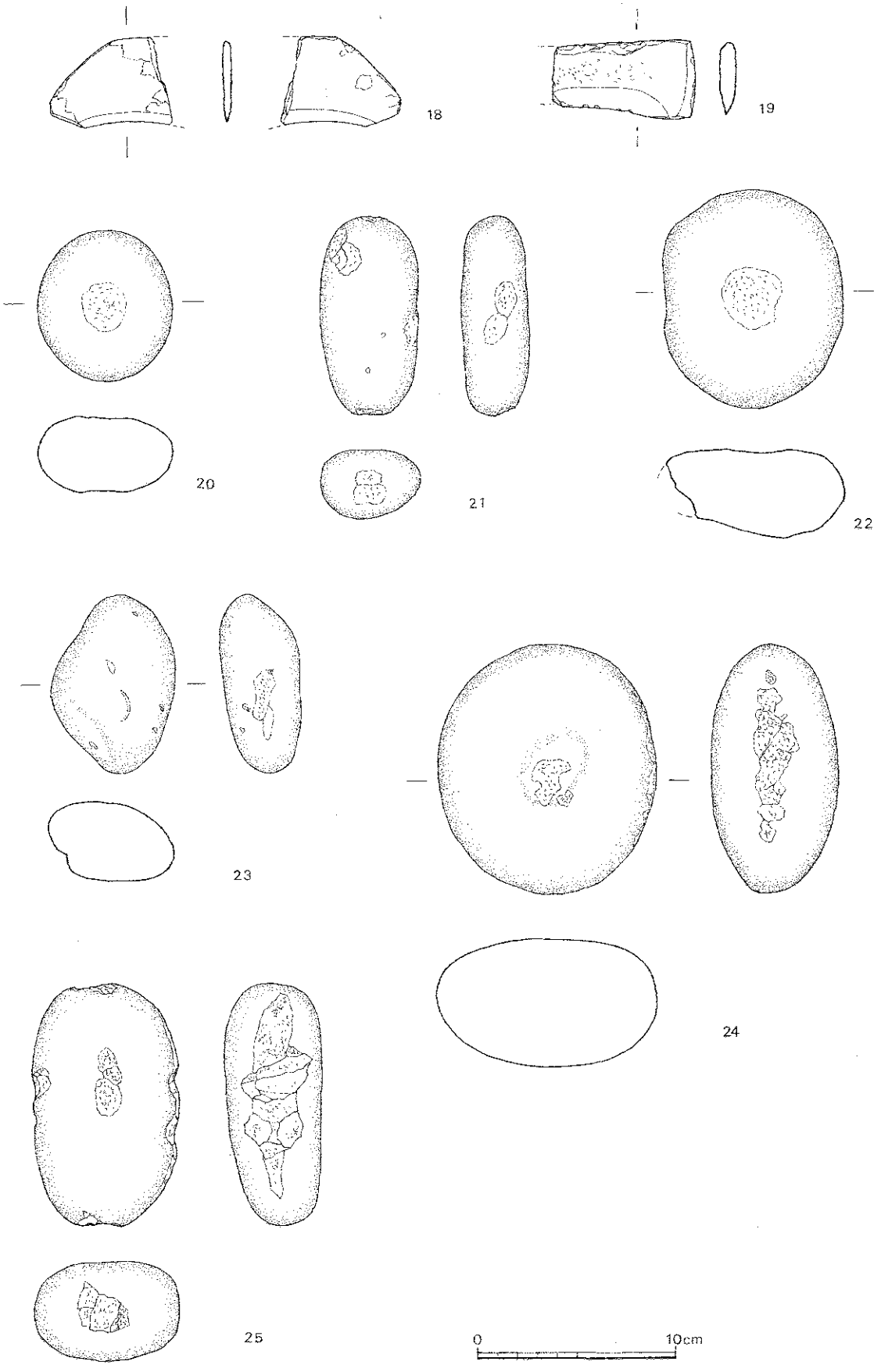
50は中砥の砥石である。砂岩を素材とし，3,380gを計る。4a層から出土した。3面を使用している。



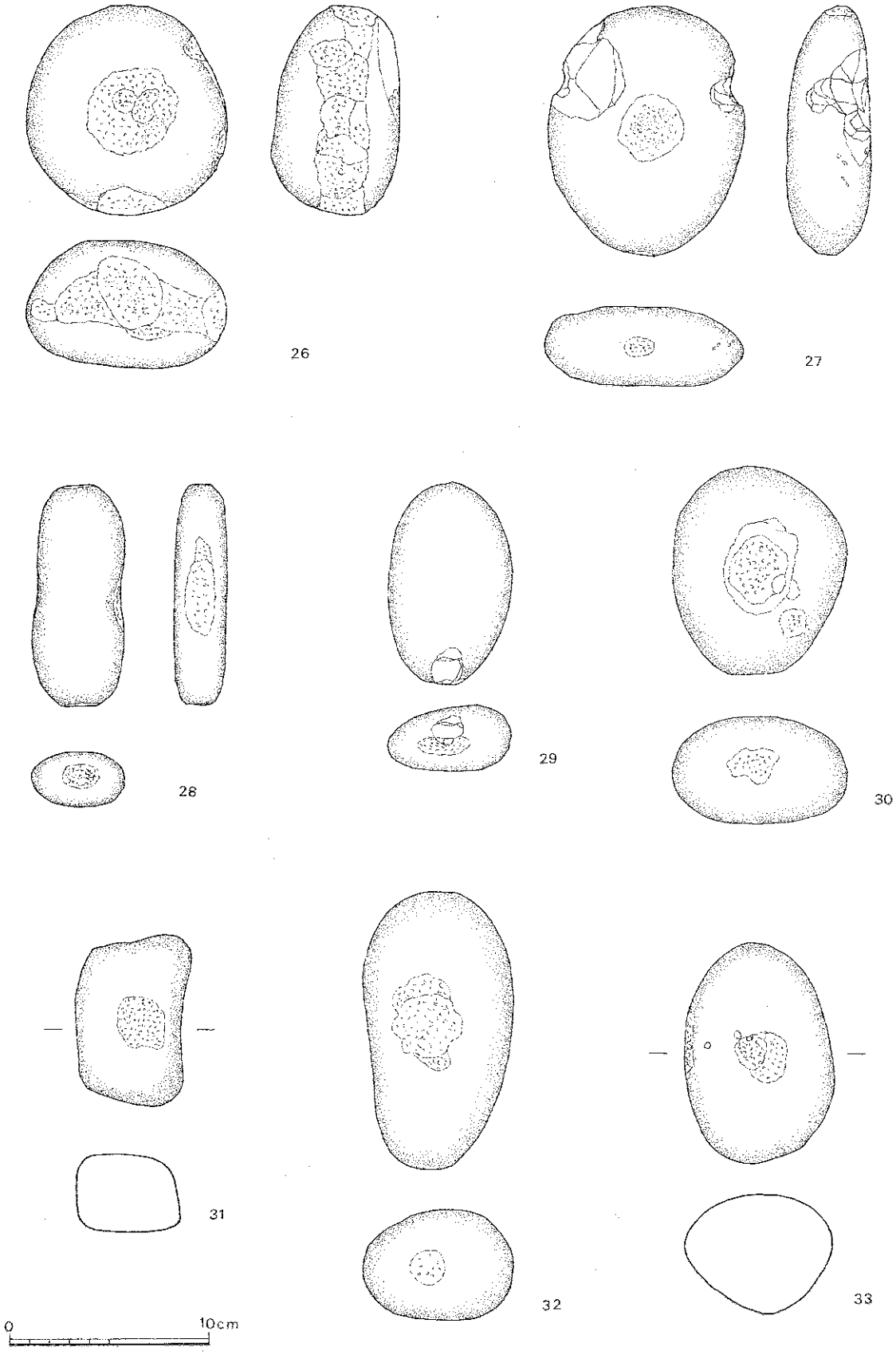
第83図　石器実測図①（2／3）



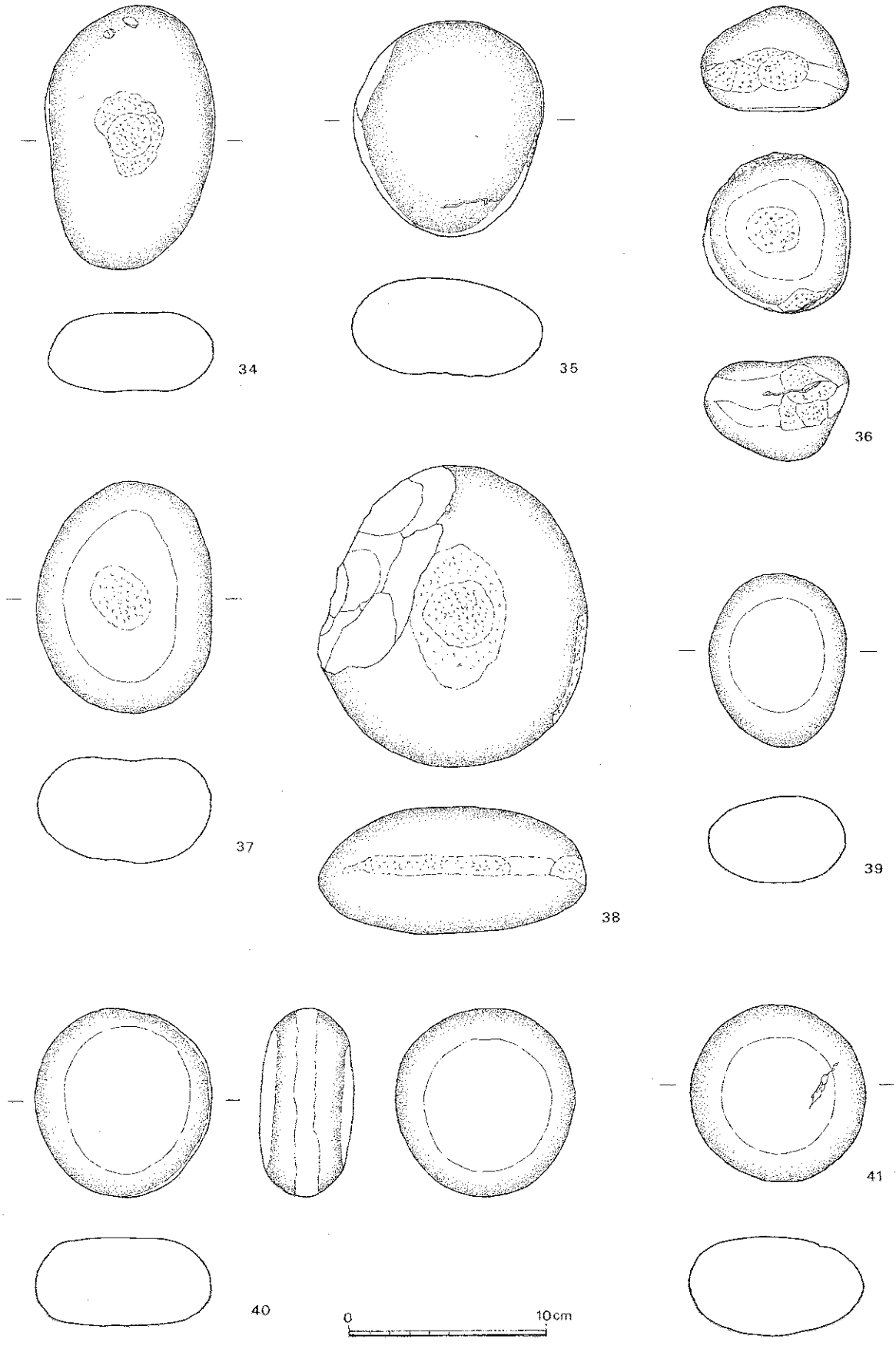
第84図　石器実測図②（1／2，1／3）



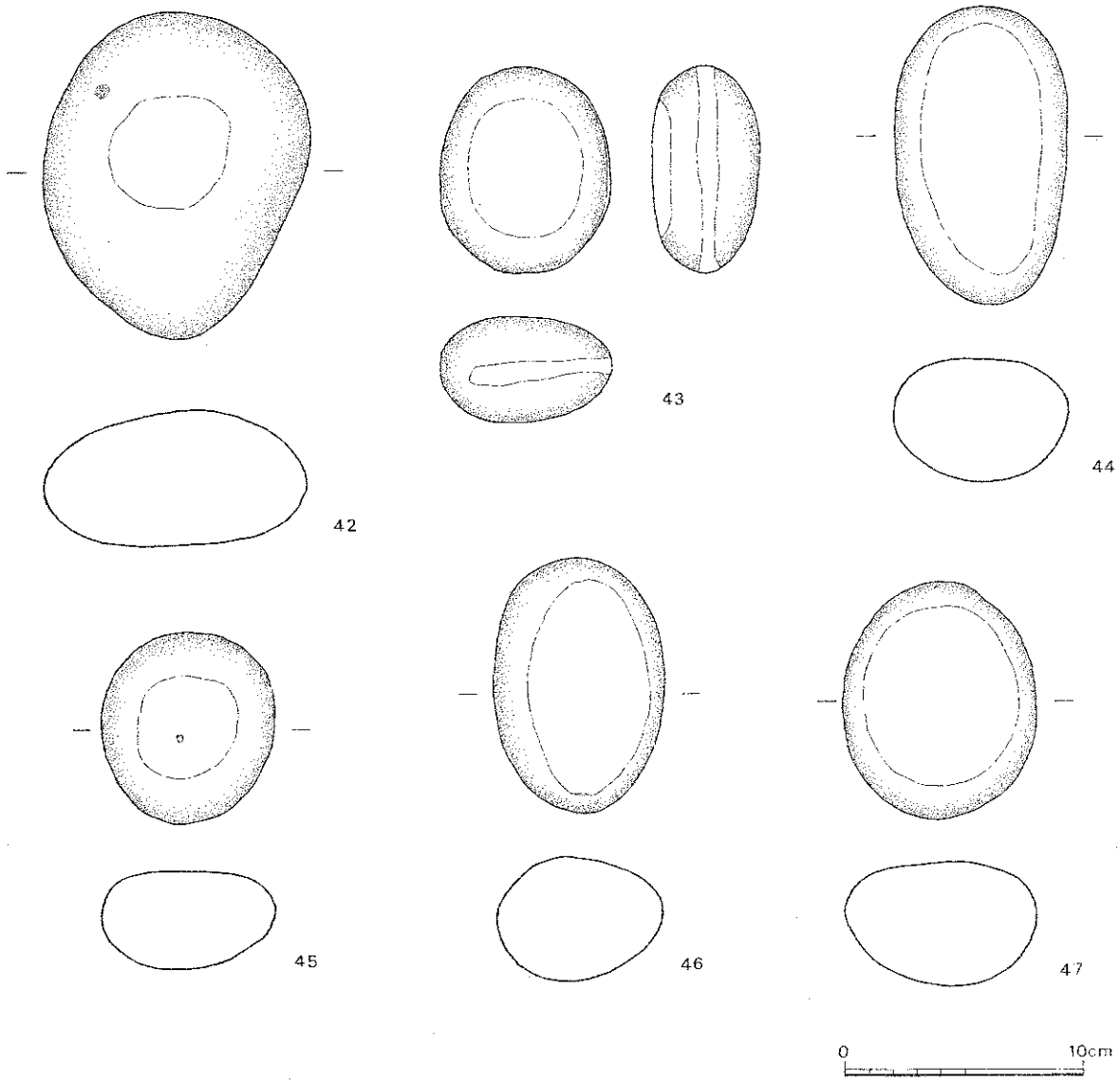
第85図　石器実測図③（1／3）

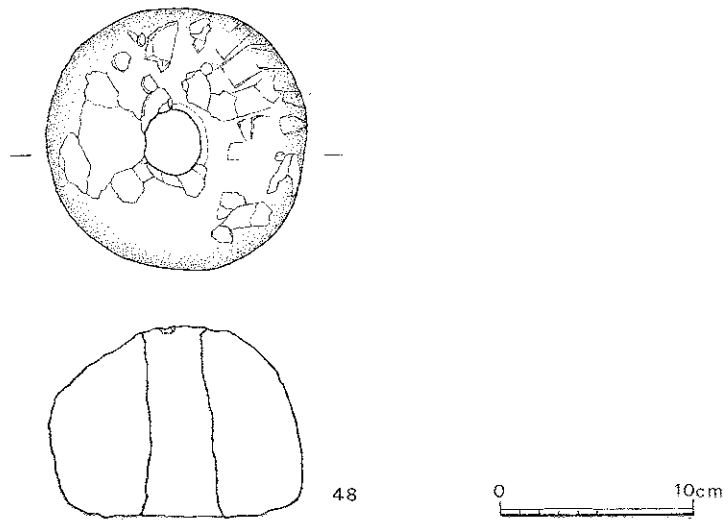


第86図　石器実測図④（1／3）



第87図　石器実測図⑤（1／3）





第88図　石器実測図⑥（1／3，1／4）

③金属製品（第89図）

1は有茎の銅鏃である。鏑，返刺ともに明瞭に残っている。現存長51㎜，最大幅10㎜，最大厚5.5㎜，重さ7.3ｇである。２ｂ層から出土した。

2は袋状基部を持つ鍛造鉄鑿である。基部途中から破損しており，袋状基部には木製柄の一部が残ったままになっている。現存長64㎜，最大幅17.5㎜，最大厚16㎜，重さ20.4ｇである。１号濠の１層から出土した。

(4) 小　結

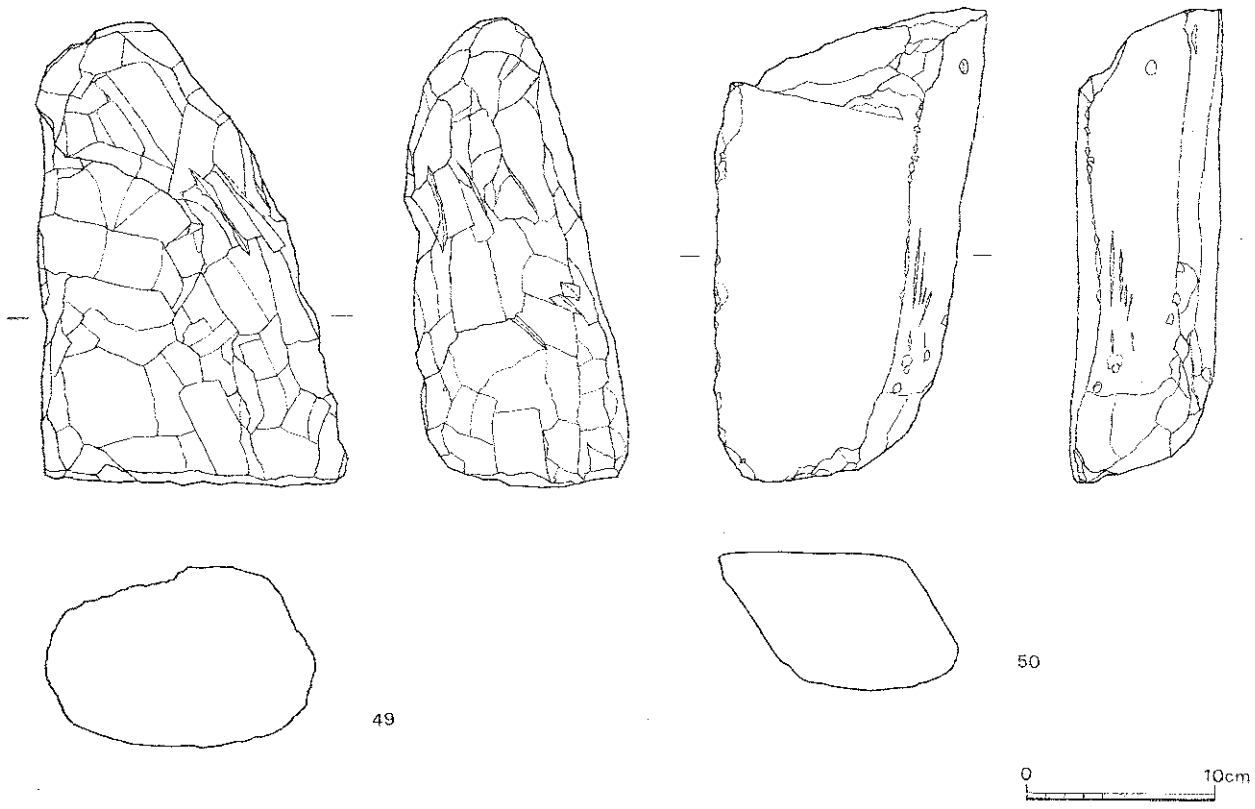
最後に，今回の範囲確認調査の調査成果を簡単にまとめてみたい。

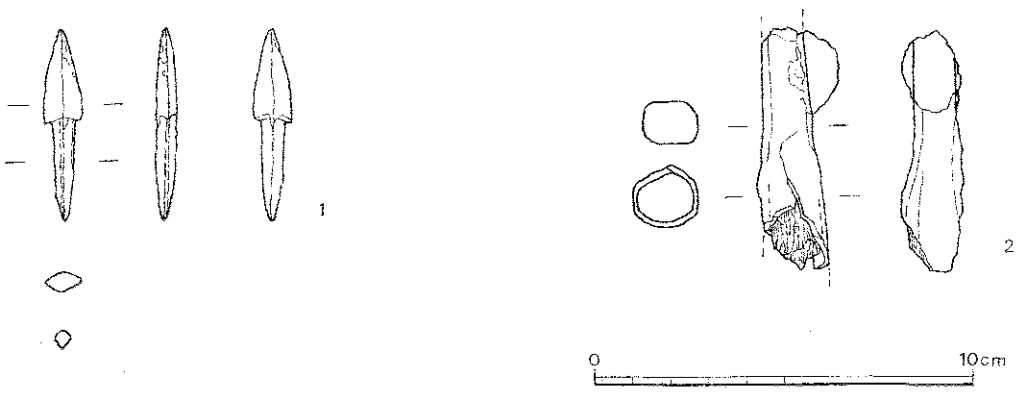
今回の調査では，調査区の東側，遺跡の中心に位置する台地の裾部分において２条の濠を確認した。この２条の濠は台地の裾に添った形で北から南に走る。弥生時代中期の多重環濠の内の内濠，中濠と考えられる。これまでの調査で，台地の東側における弥生時代中期から後期の環濠は広範囲に確認されていたが，平成10年度に続いて環濠を台地西側部分において確認することができた。平成10年度の船着き場付近水路等状況調査Ｃ区において確認された弥生時代中期の濠も，今回の２条の濠より遠巻きではあるが台地に添うように走っており，これが同じく弥生時代中期の多重環濠の内と外濠にあたると考えられる。

この２条の濠は，弥生時代中期に掘られて後自然埋没していったと思われるが，弥生時代後期に掘り直された形跡も確認した。平成11年度までの調査で，原の辻遺跡の低地部においては，弥生時代前期末に居住が始まり，弥生時代後期初頭には終わって台地に集住することが明らかになっている。さらに平成10年度の船着き場付近水路等状況調査では，少なくとも台地北西部下の低地においては，居住が行なわれなくなった後，５条もの濠が張り巡らされて防御強化していることを確認した。弥生時代後期の，おそらくは「倭国大乱」の前哨戦から大乱に至る軍事的緊張の高まり等に起因とすると思われるこのような状況下，環濠の掘り直しについても同じ原因が考えられる。

また，平成10年度船着き場付近水路等状況調査Ｃ区で検出したものに繋がる旧河道と，古墳時代前期の溝を検出した。旧河道は，平成10年度船着き場付近水路等状況調査Ｃ区においては東岸寄りの部分から弥生時代中期の遺物が河床の中央部分と思われた場所から弥生時代後期の遺物が出土した。このため，弥生時代中期から始まる河道が岸部より自然埋没していく過程で中央部が弥生時代後期まで残存していたものと考えられた。今回の調査区では，弥生時代後期から古墳時代前期にかけて水田にするため埋め立てたと考えられる層，５ａ層・５ｂ層を河道内の土層で確認することができた。５ｂ層は河道東岸から６ｍほどは水平堆積した後，河床に向かって落ち込む。この落ち込みの部分は，護岸等の人為的な跡は確認できなかったが，水田の用排水のために故意に埋め残している可能性が考えられる。そのために５ａ層によりこの落ち込みを埋め立てると，水田の用排水のために新たに溝が掘削されたと考えられるからである。

このような背景もあって，この古墳時代前期の溝は旧河道の一番東岸寄りに掘り易さと保水性も考慮して，水田造営に伴ってつくられたものと考えられる。





第89図　石器実測図⑦・金属製品実測図（1／2）

調査区遠景（北西より）

調査区遠景（北より）

調査風景

調査風景

調査風景

調査風景

調査風景

調査風景

調査風景

調査風景

1号濠・2号濠遺物出土状況（北から）

1号濠・2号濠遺物出土状況（西から）

1号濠遺物出土状況

1号濠遺物出土状況

1 号濠遺物出土状況

1 号濠遺物出土状況

1号濠遺物出土状況

1号濠遺物出土状況

1 号濠遺物出土状況

2 号濠遺物出土状況

2 号濠遺物出土状況

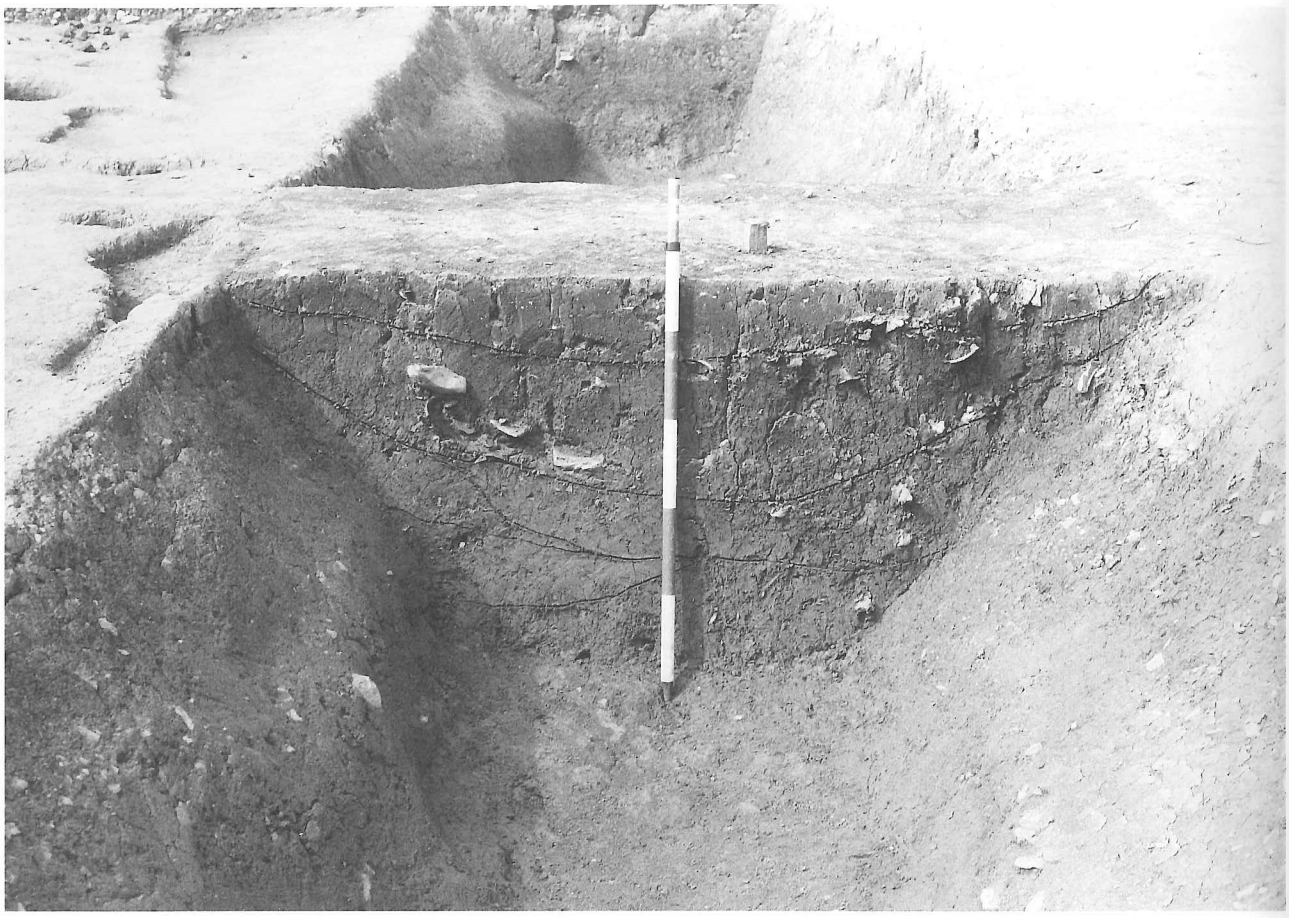
2 号濠遺物出土状況

2 号濠遺物出土状況

2 号濠遺物出土状況

2 号濠遺物出土状況

1 号濠横断土層



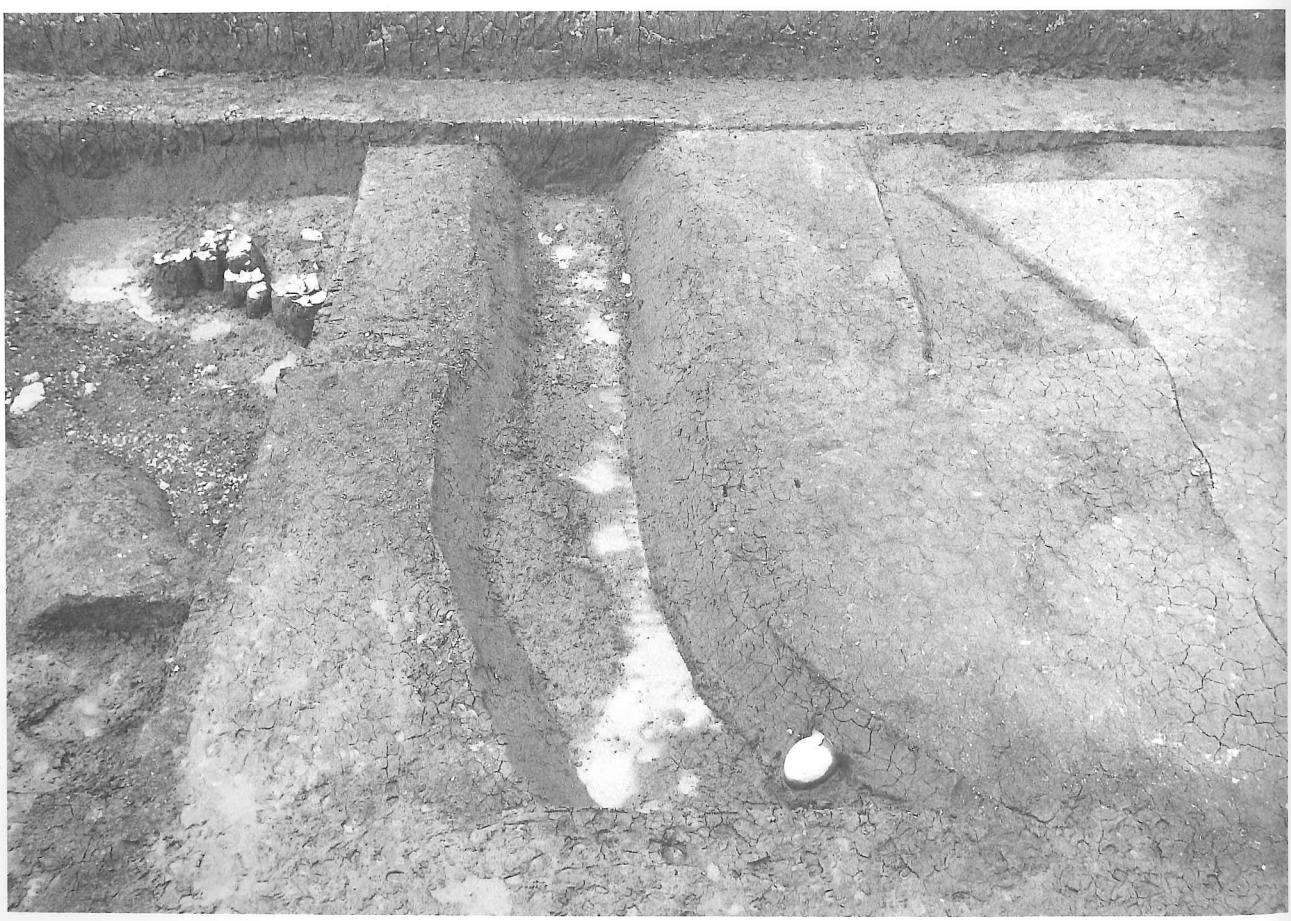
2 号濠横断土層

1 号濠・2 号濠完掘状況（南から）

1号濠・2号濠検出状況（北東より）

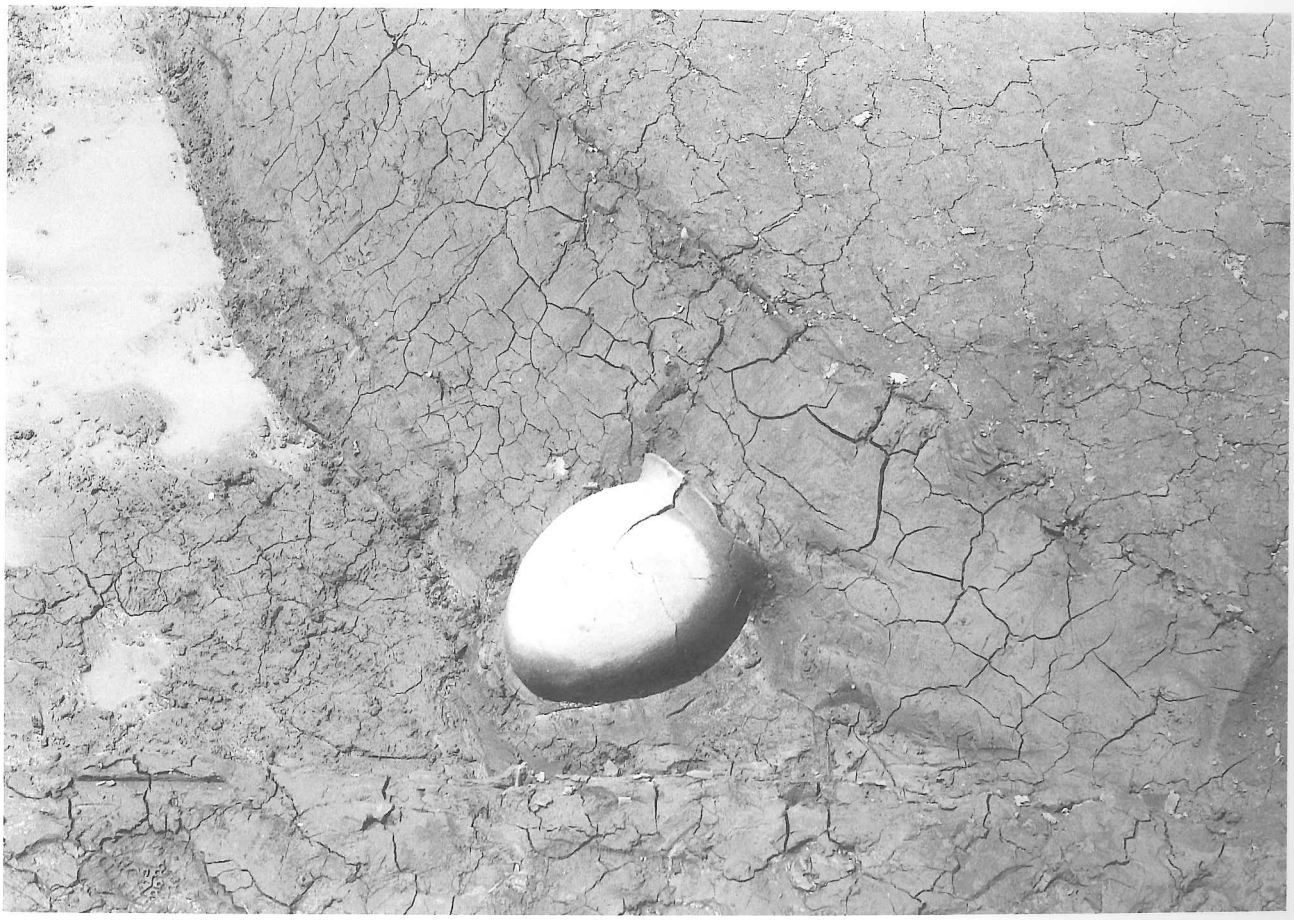
1号濠・2号濠検出状況（南東より）

１号溝検出状況（北から）

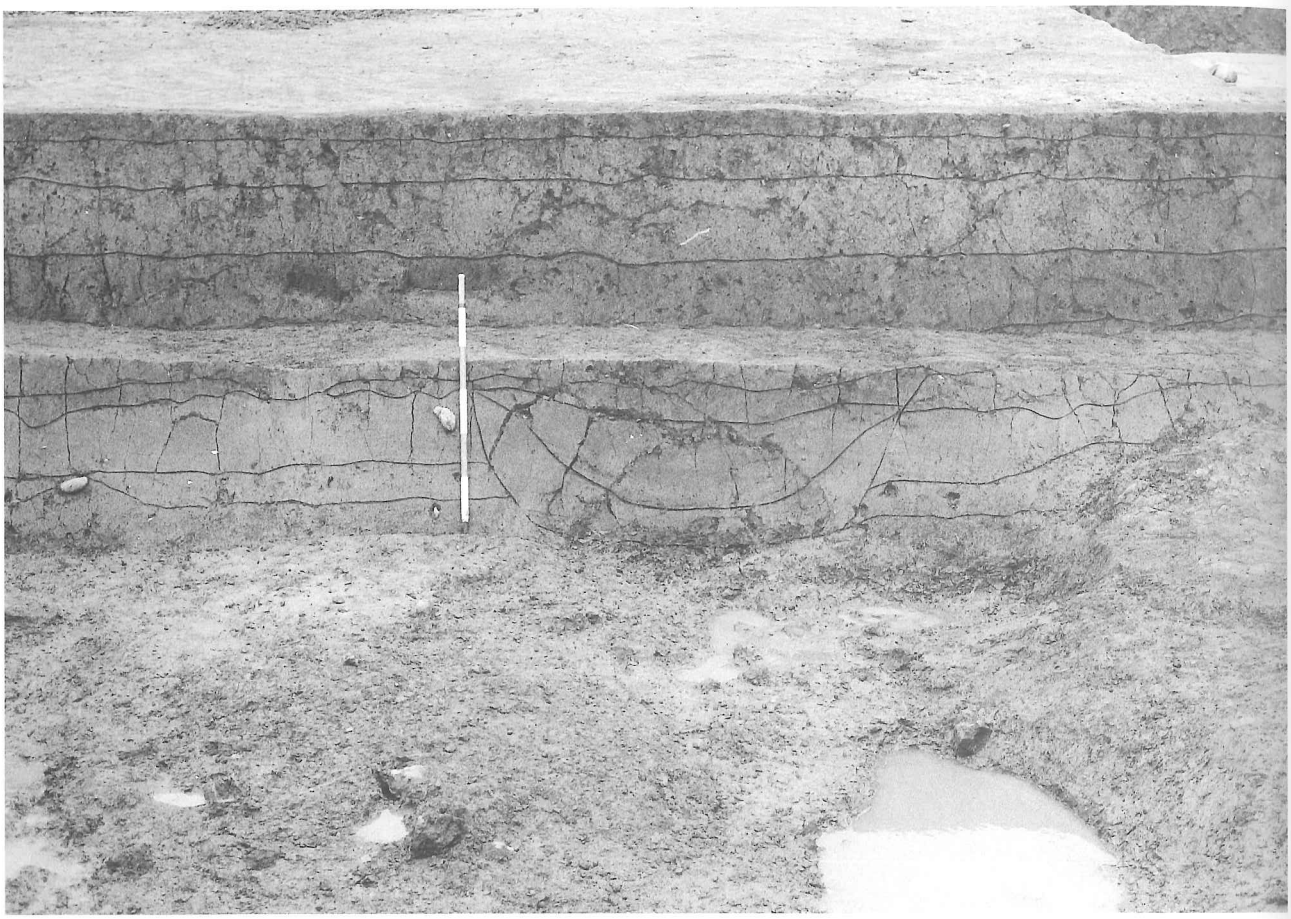


１号溝検出状況（南から）

1号溝検出状況（西から）



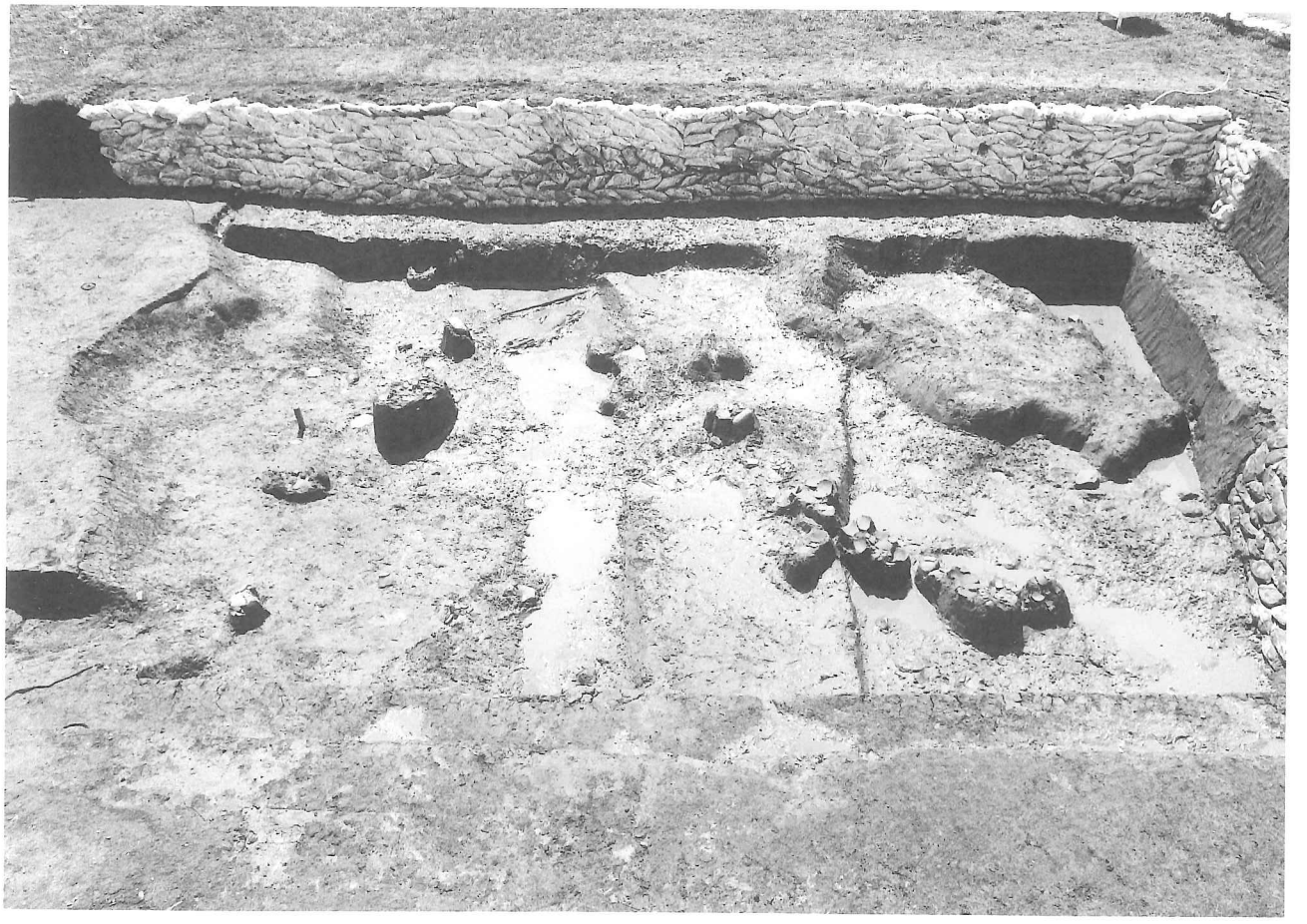
1号溝遺物出土状況



1号溝横断土層

1号旧河道調査風景

1号旧河道遺物出土状況（南から）



1号旧河道遺物出土状況（北から）

1 号旧河道遺物出土状況

1 号旧河道遺物出土状況

1 号旧河道遺物出土状況

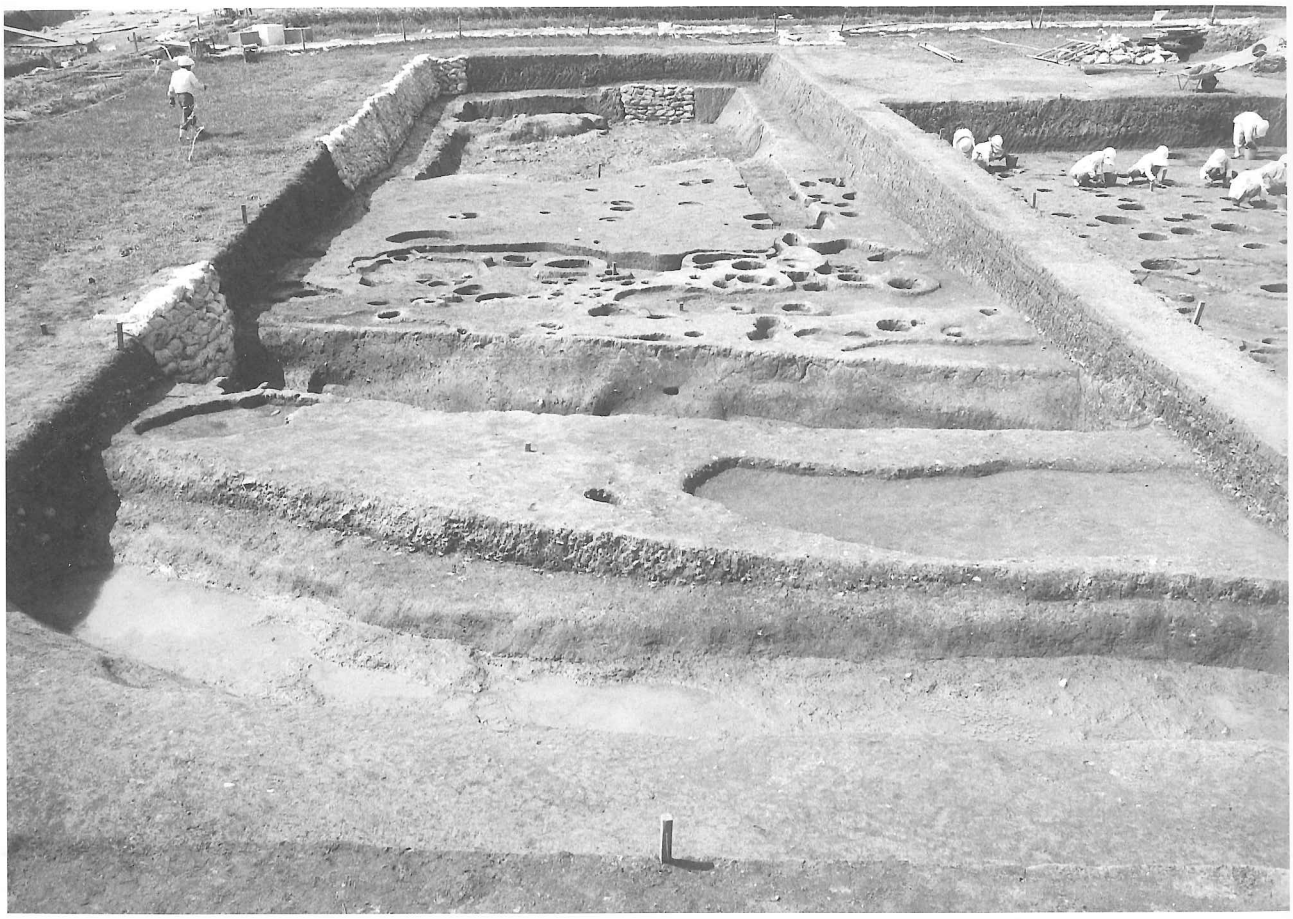
1 号旧河道横断土層

1号旧河道検出状況（北から）

1号旧河道検出状況（南から）

1号旧河道検出状況（西から）

調査区全景（西から）



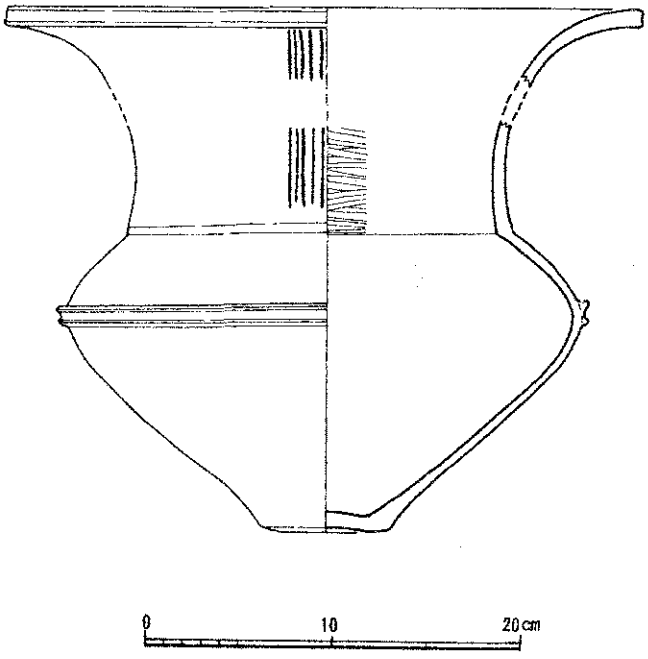
調査区全景（東から）

5．平成11年度柏田・苣ノ木地区の調査

(1) 柏田地区の調査概要

柏田地区は遺跡の南東部に位置し，石田町域にあたる。北側には大川地区墓域が，西側にはイスラム陶器や初期中国貿易陶磁器が出土した地区に接している。

調査壙は５箇所設定した。１区は比較的饅頭畑として原型をとどめている畑に10m×20mの面積で設定した。掘ってみると，２次的な畑の造成を受けており，遺物包含層は削平されている。その攪乱層からは，弥生土器や須恵器の小破片が出土した。２区は東から西に向かってゆるやかに傾斜し，ほぼ平坦面をなす畑に５m×20mの面積を設定した。この畑は，昭和51年度の範囲確認調査の際，第90図に図示した弥生中期の広口壺が１個，ほぼ直立する形で出土した第20試掘壙が含まれる。調査の結果，この土器に関する遺構は確認されなかったが，柱穴が周囲に検出された。全体的に弥生時代の包含層である黒色土層は見られなかった。



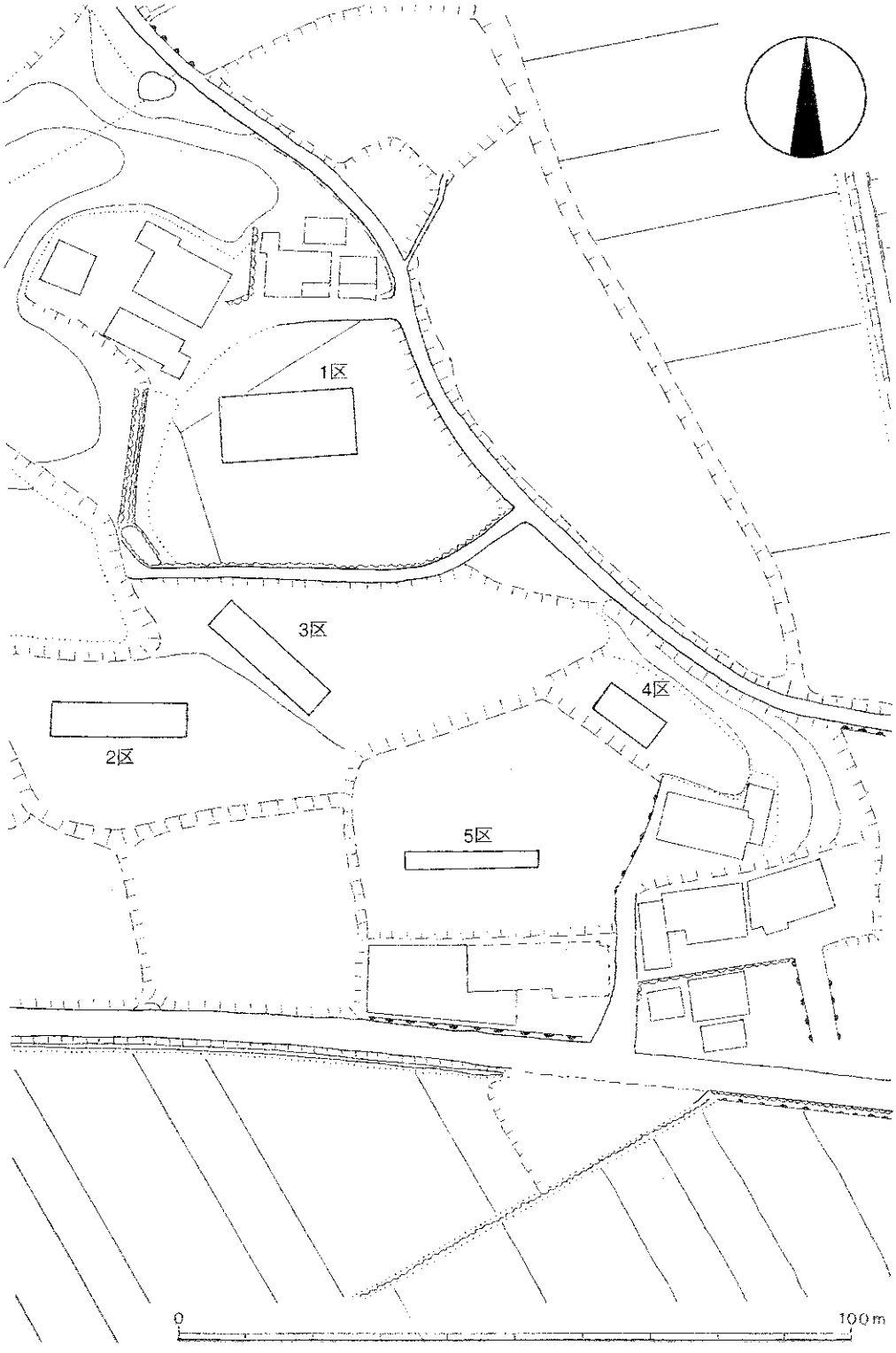
第90図　昭和51年度第20試掘壙出土の土器（注１より）

しかし，褐色粘質土層からは，台形様石器や剥片石器など旧石器時代の遺物が出土した。３・４区はゆるい斜面の畑で４区が一番高い部分である。耕作土層の下は埋め土，もしくは地山となっており，遺物包含層は存在しない。

５区は安川建設に隣接した水田に２m×20mの面積で設定した。地主の話によると，この水田は昭和35年頃までは２枚の饅頭畑であったのを１枚に造成したという。また平成５年に安川建設で宅地造成を行った際に，発掘調査を実施しているが，この時には弥生中期の小児用合口甕棺墓１基が検出されている。今回の調査区は，前回の調査区よりも５m程北側にあたり，甕棺の出土が期待されたが，確認できなかった。しかし，調査壙の西側寄りに部分的に黒色土層が見られ，弥生土器数点と柱穴が検出され，住居跡の可能性が高い。

①土　　層（第92図）

遺物が層として確認されたのは２区と５区である。２区は先にも述べたように耕作土層の下にすぐ褐色土層があり，この層に旧石器の遺物が包含されるが，出土位置は西側半分に集中する。また３層が地山層である黄褐色粘質土層を掘り込んで不定形な土壙が見られたが遺物は出土しない。５区は１層が耕作土で２層は埋め土，３層は黒色土層がブロック状に入るが，住居跡と考えられる。４層は暗褐色粘質土層で，遺物はほとんど含まれないが，黒曜石製打製石鏃が１点出土している。５層は黄褐



第91図　柏田地区調査区域図（1／1000）

第92図　柏田２・５区土層及び遺構実測図（１／80）

色粘質土層で地山層となり，この層は東から西へ傾斜している。

(2) 苣ノ木地区の調査概要（第93図）

苣ノ木地区は石田町域であり，遺跡の南西部にあたる。調査区の南には小川川が位置し，西からは丘陵が伸びる。また南西側は小さな谷状地形となっている。この区域には９箇所の調査壙を設定した。１・２区は同じ水田である。２ｍ×25ｍの面積を２本設定した。昭和52年の調査では２ｍ×４ｍの調査壙から旧石器の資料が得られている。１区は弥生時代の包含層が削平され，表土直下に褐色粘質土層があり，旧石器時代の黒曜石フレイク類が出土する。東側は一部最近の造成による削平を受けている。２区は２層の黒色土層から弥生土器の小破片が数点出土した。３層の褐色粘質土からは１区同様，旧石器時代の台形様石器やフレイク類が出土している。

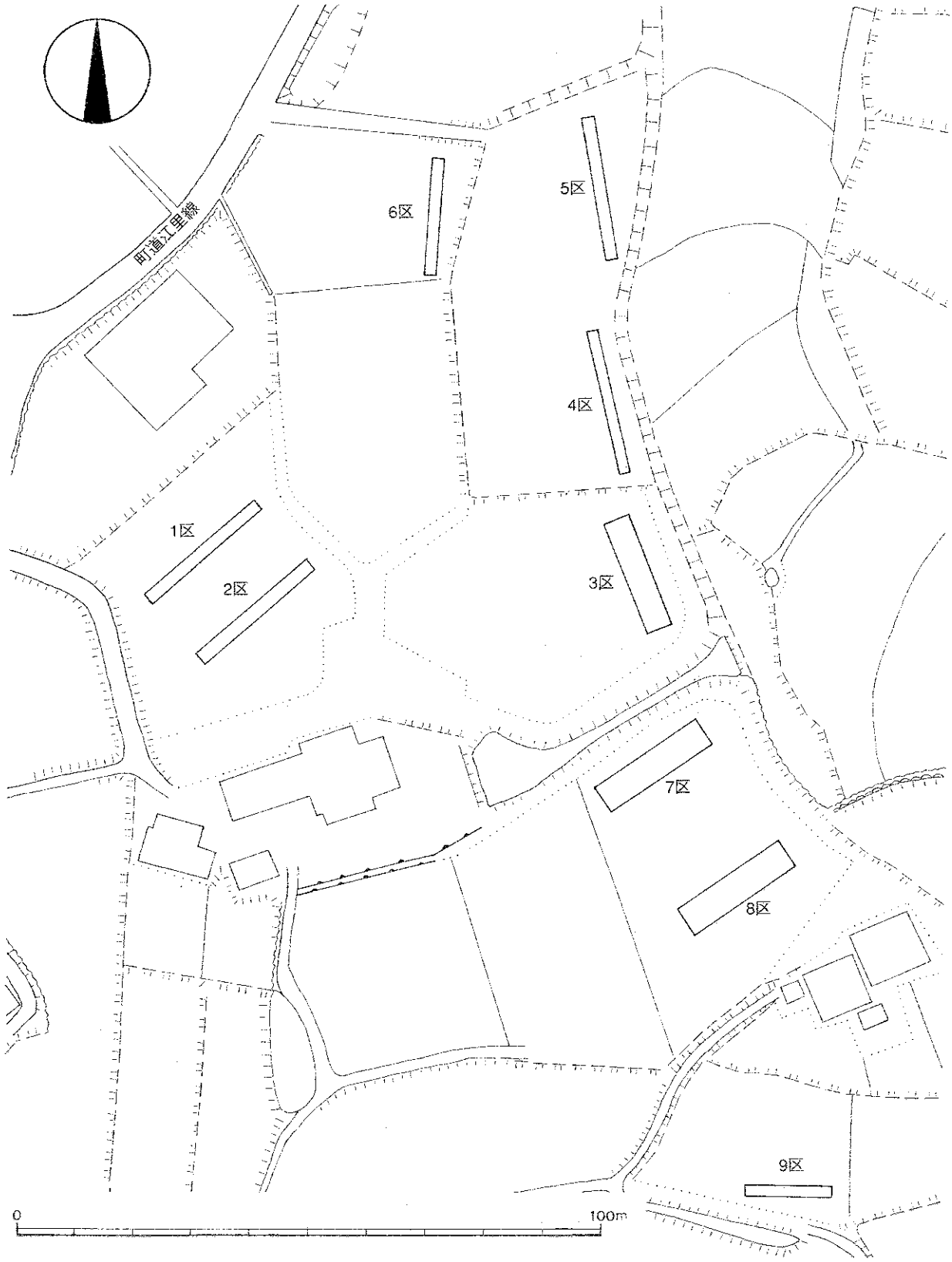
３区は浅い谷状地形の西側に５ｍ×20ｍの面積を設定した。この区も畑の２次的な造成を受けている。厚い埋め土の下に，弥生時代の層と考えられる黒褐色土層が堆積する。調査区の南寄りでは，西から東へ傾斜した溝状の遺構が確認された。西壁では浅く，東壁ではＶ字状になるが，出土遺物もなく，人工的な遺構になるのか不明である。

４・５は同一の水田に２ｍ×25ｍの面積で２本設定した。４区では北から南へかけて傾斜し，黒色土層の堆積も見られるが，遺物は包含されない。５区も同じような状況であるが，北側は黒色土層も削られ，地山がすぐ現れる。６区は一段高い標高約14.5ｍの水田に２ｍ×20ｍの面積で設定した。この区もほとんどが埋め土で包含層が見られない。遺物は旧石器から近世陶磁まで出土する。この水田の北側では昭和52年，濠が確認され，その内側では箱式石棺墓が検出されている。

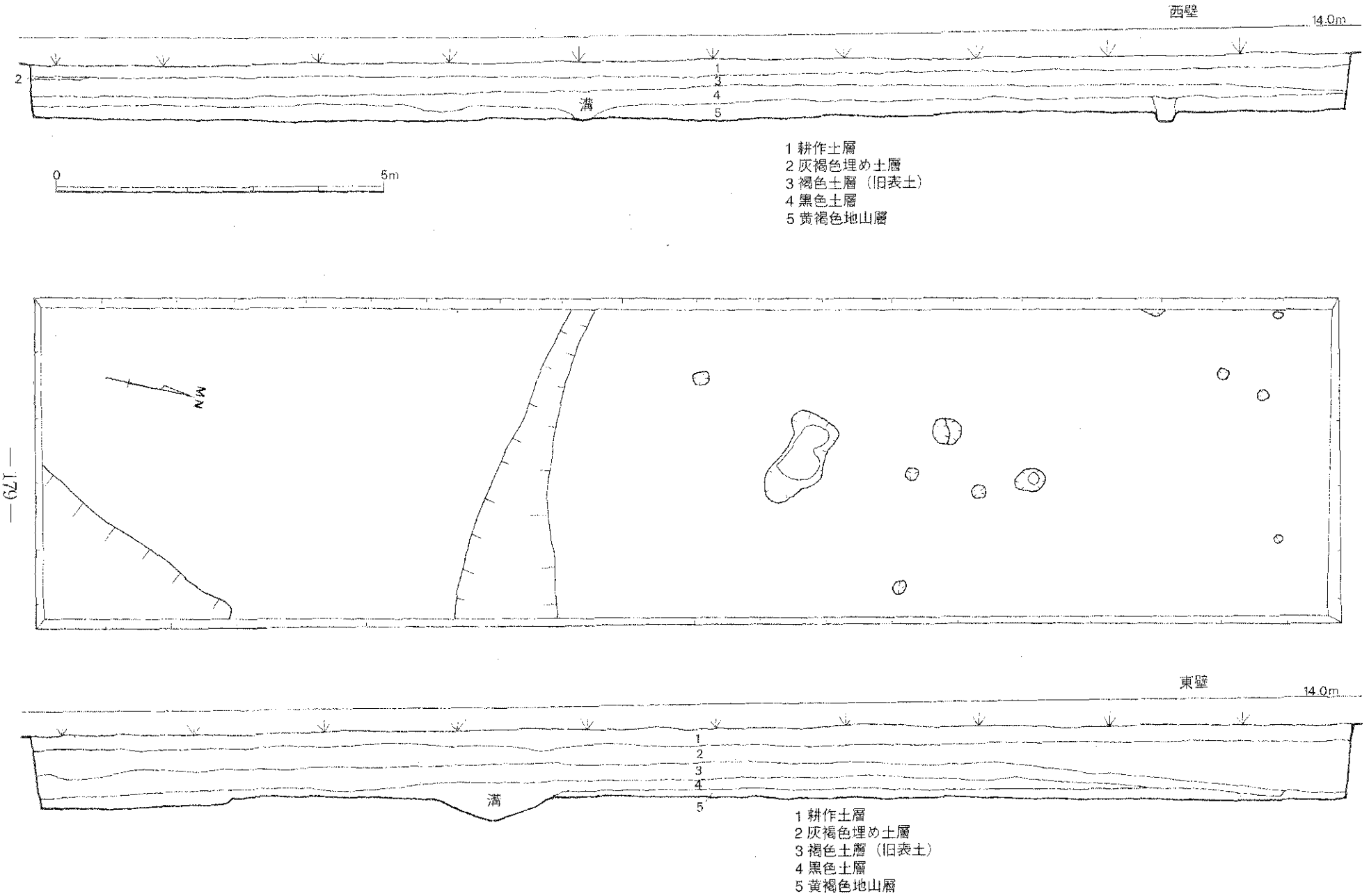
７・８区を設定した畑は現在では一枚に整地されているが，以前は三枚の畑に分かれている。平成７年度の石田町の緊急調査では４箇所の試掘壙が西側に設定され，古代から近世の資料が得られている。７区は土層が４層に区分けされるが，埋め土から近世陶磁が出土するのみである。８区は約１ｍ下の３層である青灰色粘質土層から湧水した。さらに４・５層と掘り進めたが，遺物は得られなかった。ただ２層の埋め土からは，内面に丹が塗付された弥生終末の甕棺破片が出土した。地主の話によると以前に畑の造成中に土器の破片が出たことを親から聞いた記憶があるということで，甕棺墓存在の可能性も考えられる。９区は８区の南約70ｍの所に設定したがここも２次的な造成を受け遺物は出土せず良好な結果は得られなかった。

①土　　層（第94図）

苣ノ木地区では基本土層がない。今回調査した区域ではほとんどが２次的造成を受けているためである。その中で遺物は出土しなかったものの，溝と思われる遺構が３区で確認された。この東壁では１層の耕作土層の下に２層の埋め土のパターンであるが，３層は褐色土層が入り，４層に黒褐色土層が堆積するが，本来ならば，これが弥生の包含層である。そして５層の暗褐色粘質の地山層へと続く。また，１，２区で見られた石器を含む褐色土層はふんわりとした感じの層で３区の褐色土層とは違っている。

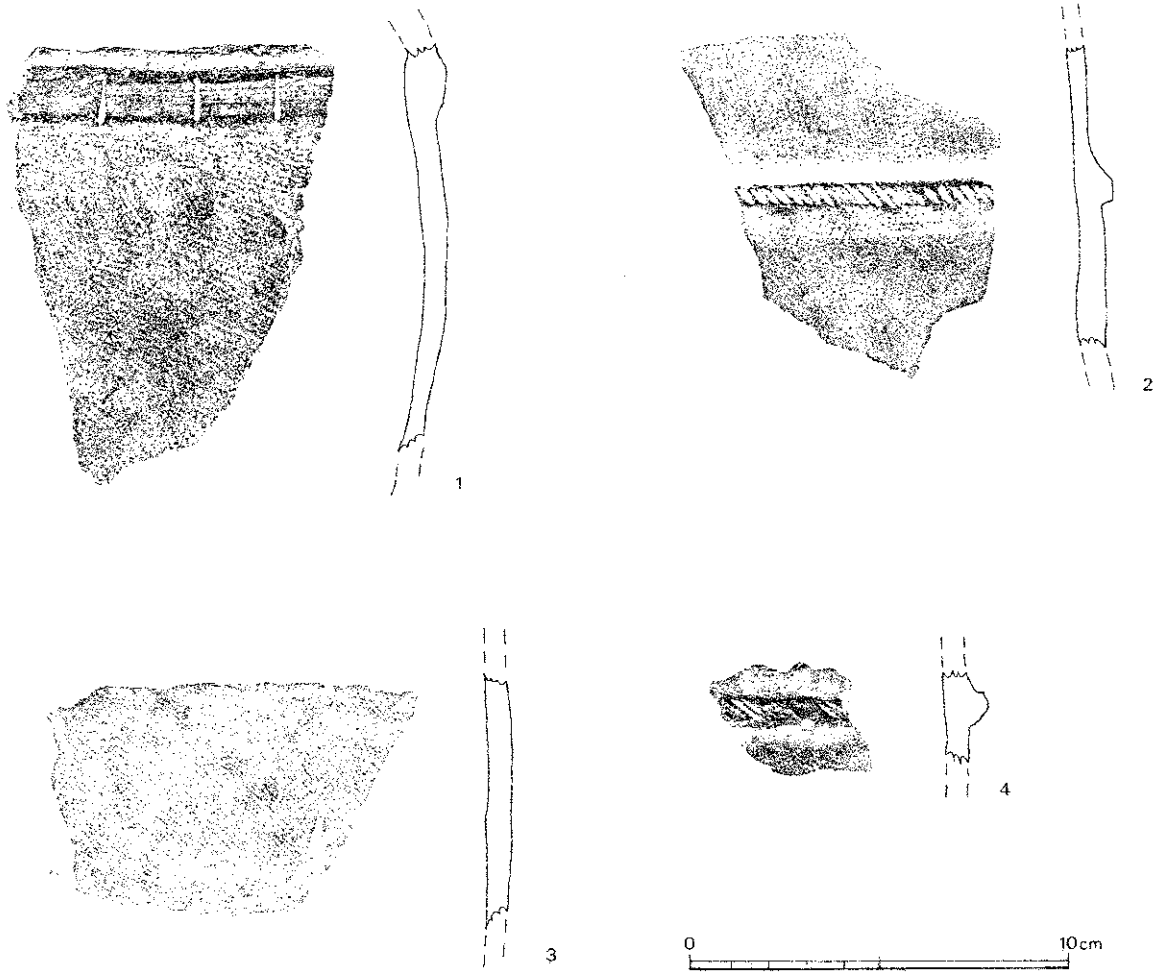


第93図　苣ノ木地区調査区域図（1／2000）



第94図　苣ノ木３区東側及び西側土層

いずれにしても，この地区では旧石器が広い範囲で表面採集されており，今後良好な包含層が検出されることが期待されよう。



第95図　苣ノ木８区出土の土器実測図（１／２）

②苣ノ木８区出土の土器（第95図）

１～４は８区埋め土の中から出土した土器で２個体分と思われる。１は大型の甕で頸部に断面方形の平坦な貼り付け突帯を巡らしている。突帯は凹むようにナデ調整が行われ，約４cm間隔に刻目がタテに施されている。外面には粗いハケ目が斜方向に付され，内面は上部が横方向に，胴部は斜方向に付されている。内面にはかすかに丹塗りの跡が残る。胎土には石英，長石，金雲母を含み，色調は茶褐色。２～４は同一個体と思われる。２は胴部に断面方形の貼り付け突帯を巡らし，斜めに刻目を付けている。内外面にはハケ目調整を丁寧に行っている。胎土には石英と金雲母が目立って含まれている。色調は２が黄橙から一部黒色，３は外面が全体的に黒色で一部ススの付着がある。２，３の内面にはわずかな丹塗りの跡が観察できる。

この一群の土器は甕棺の破片で，時期的には弥生終末に比定できよう。

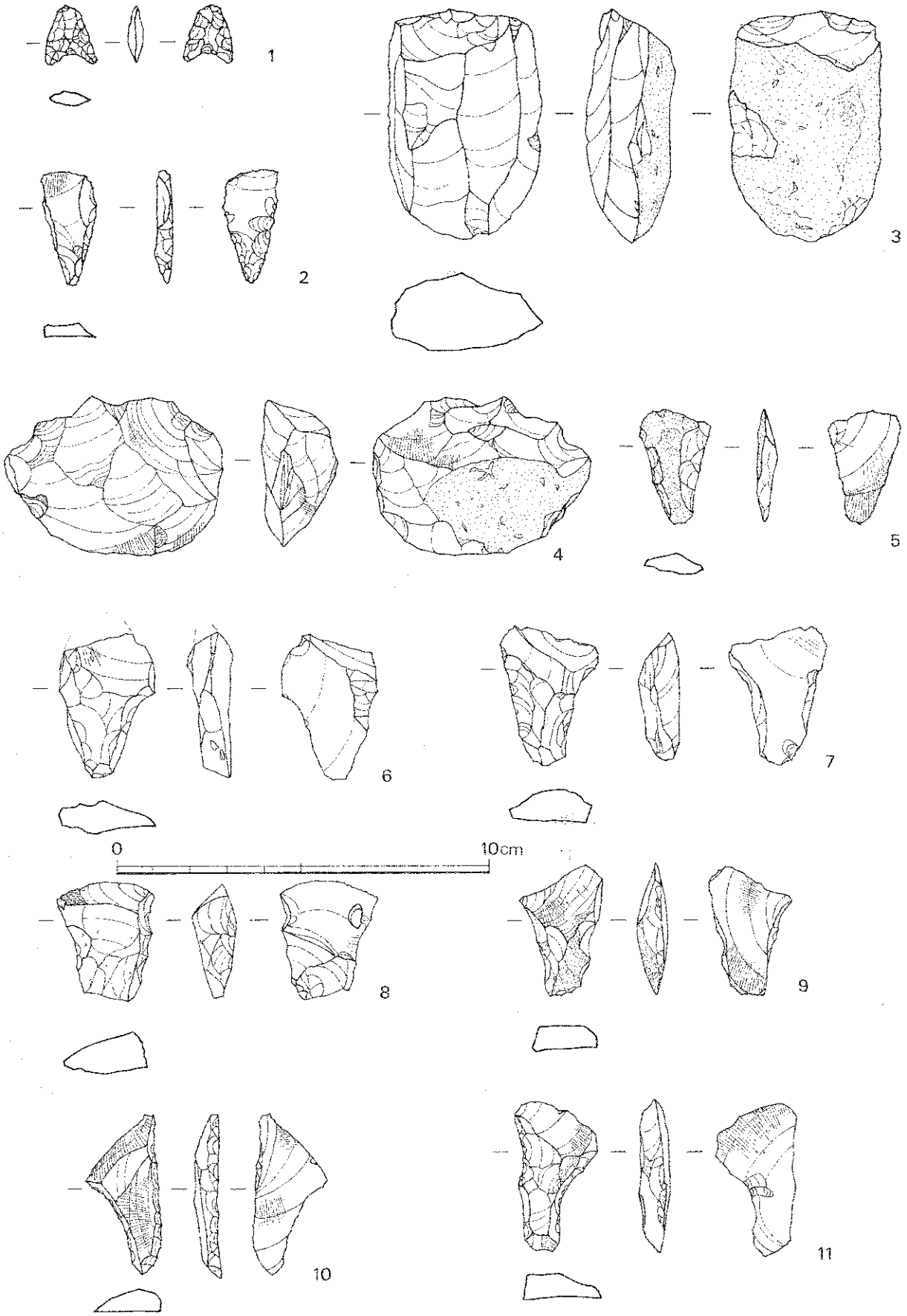
③苣ノ木地区出土の石器（第96図～第98図）

1は3区3層からの出土で黒曜石を利用した抉り入りの打製石鏃，縄文時代の所産と思われる。2はナイフ形石器の先端部が欠失したもの。基部は尖り，両側には刃潰しのブランティングが行われている。良好の黒曜石を利用。3は楕円形の円礫の一端を半割し，片面に自然面を残す。上面に打撃調整を加えながら縦長剥片を剥離している。石質は灰色がかった黒曜石である。2区4層からの出土。4は漆黒の黒曜石円礫を利用した石核である。上面は斜めに打撃剥離を行い，横長に剥離している。従って形状は不定形で，一部に自然面を残す。5は台形様石器と思われ，両側面には刃潰し加工が施してあるが，自然面が残っており未製品かもしれない。6～13は台形および台形様石器である。6は1区1層出土。灰色の黒曜石を利用。基部は丁寧な剥離を行い，刃部が細くなる所で欠失している。7はわずかに不純物を含む黒曜石で，剥離の際に段差が生じている。原の辻型といわれるものに近い形態である。8は台形型を呈し，表面は刃部方向を1回と基部を3回に分け剥離している。基部の一方はうすく，片面は厚いが，丁寧に刃潰しが行われている。石質は灰色の黒曜石で不純物を含む。9は黒曜石の表面に近い部分を利用しているため基部片側面に自然面が残る。刃部は斜行し，使用痕が認められる。3区1層出土。10は漆黒の良質の黒曜石を利用。刃部は急角度で傾斜し，切り出し形ナイフとしてよいかもしれない。刃潰しは基部両側に丁寧に行っている。6区2層出土。11は刃部がやや斜めに内湾する感じに仕上げられ，基部は長く断面台形状を呈し，刃潰しも剥離が行われている。3区4層出土。12は10と形態的に類似している。良質の黒曜石を利用し，刃部もシャープである。ナイフ型石器として捉えられるか。6区1層出土。13は基部で刃の部分が欠失している。しかし残っている部分は丁寧な剥離が行われている。

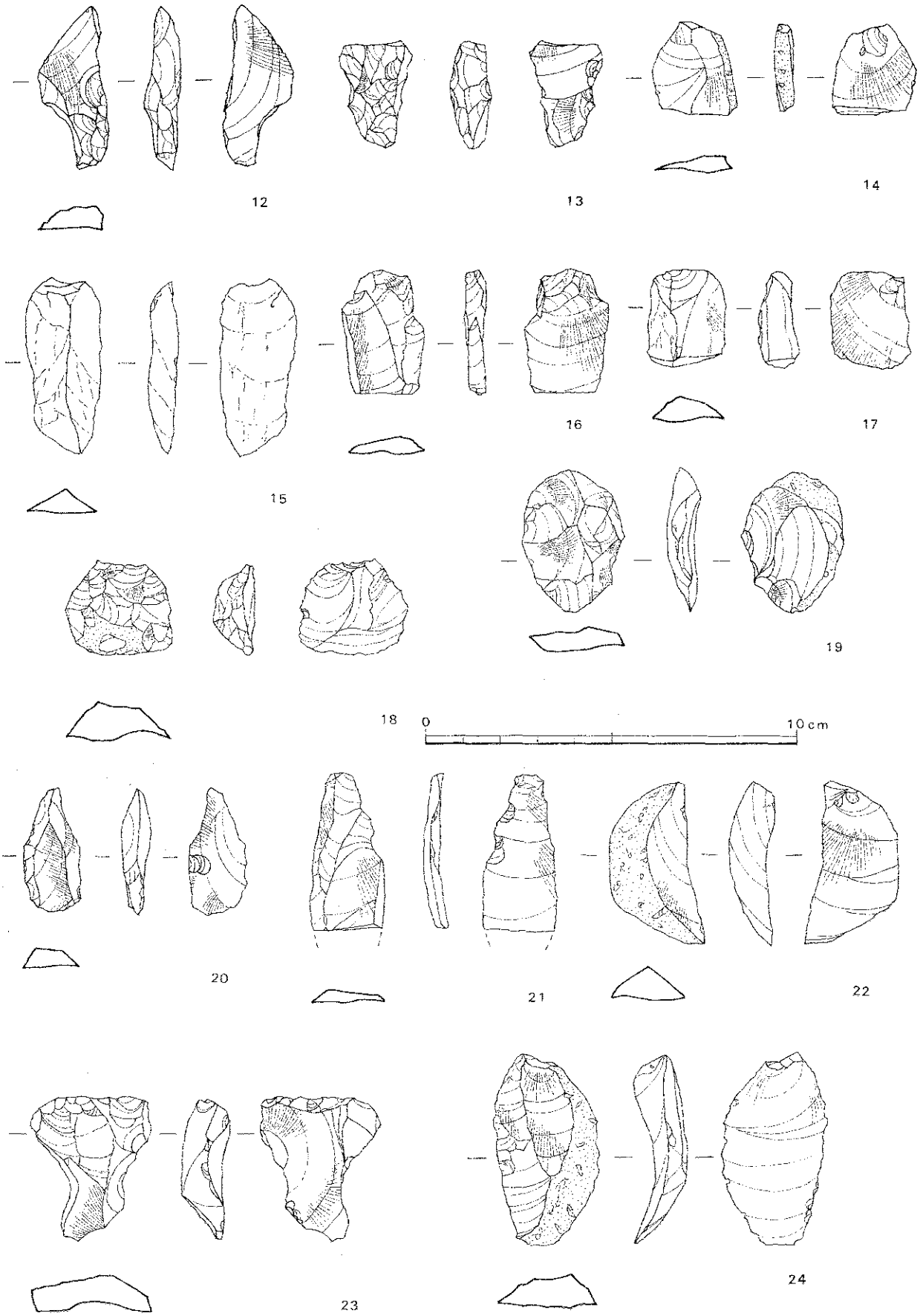
14～29は剥片類である。剥片が一番まとまって整層状態から出土したのは1・2区である。全体的には良質の黒曜石円礫が利用され，19，22，24のように自然面が残る。縦長利用の剥片が多い中で，18，19は円形に剥離加工され，ランドスクレパーとして使用されている。23は上面に数回の打撃が加えられているが，裏面は横から剥離され，不定形である。サヌカイト製の剥片も見られる。15，25～29がそうである。25は片面に自然面を残し，1回の打撃で縦長に剥離されている。使用痕は確認されない。28は片面は1回の打撃で剥離され，もう1面は数回の打撃で剥離され，一部に自然面が残る。この剥片には左側面に使用痕が認められる。29は厚みのある剥片で，主要剥離面は横剥ぎである。側辺には数回の打撃で剥離が行われているが，石器の呈をなしていないので未製品と思われる。

以上の石器群は1～6区の範囲で出土したものであり，旧石器の遺物が広い範囲に分布していることが確認されたが，プライマリーな層からの出土は1・2区に限られた。また，石質の点では良質な黒曜石とサヌカイトが利用されており，島外産のものを搬入したと考えられる。

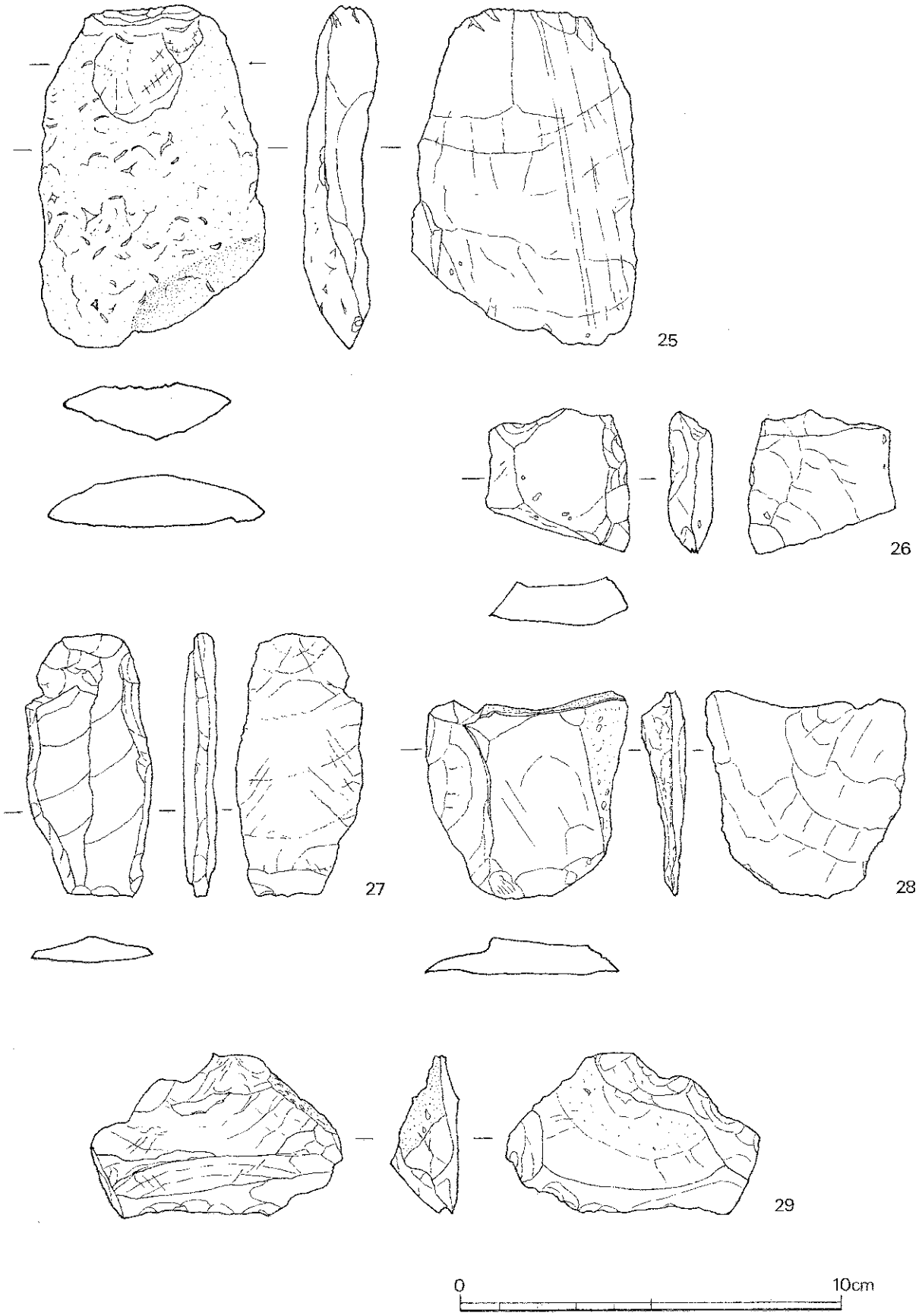
注1　長崎県文化財調査報告書第31集『原の辻遺跡』長崎県教育委員会　1977



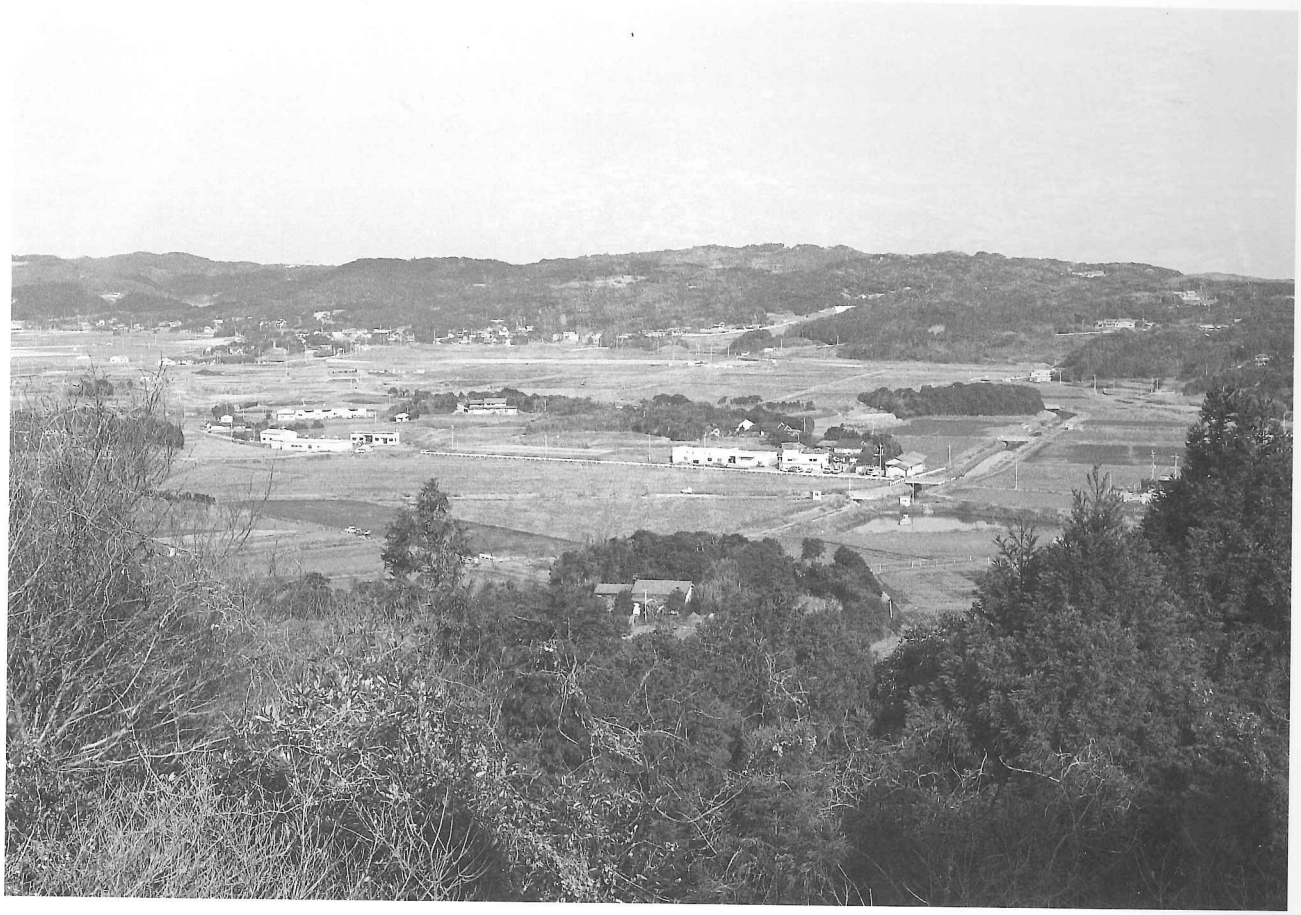
第96図　苣ノ本地区出土石実測図①（1／2）



第97図　苣ノ木地区出土石器実測図②（2／3）



第98図　苣ノ木地区出土石器実測図③（２／３）



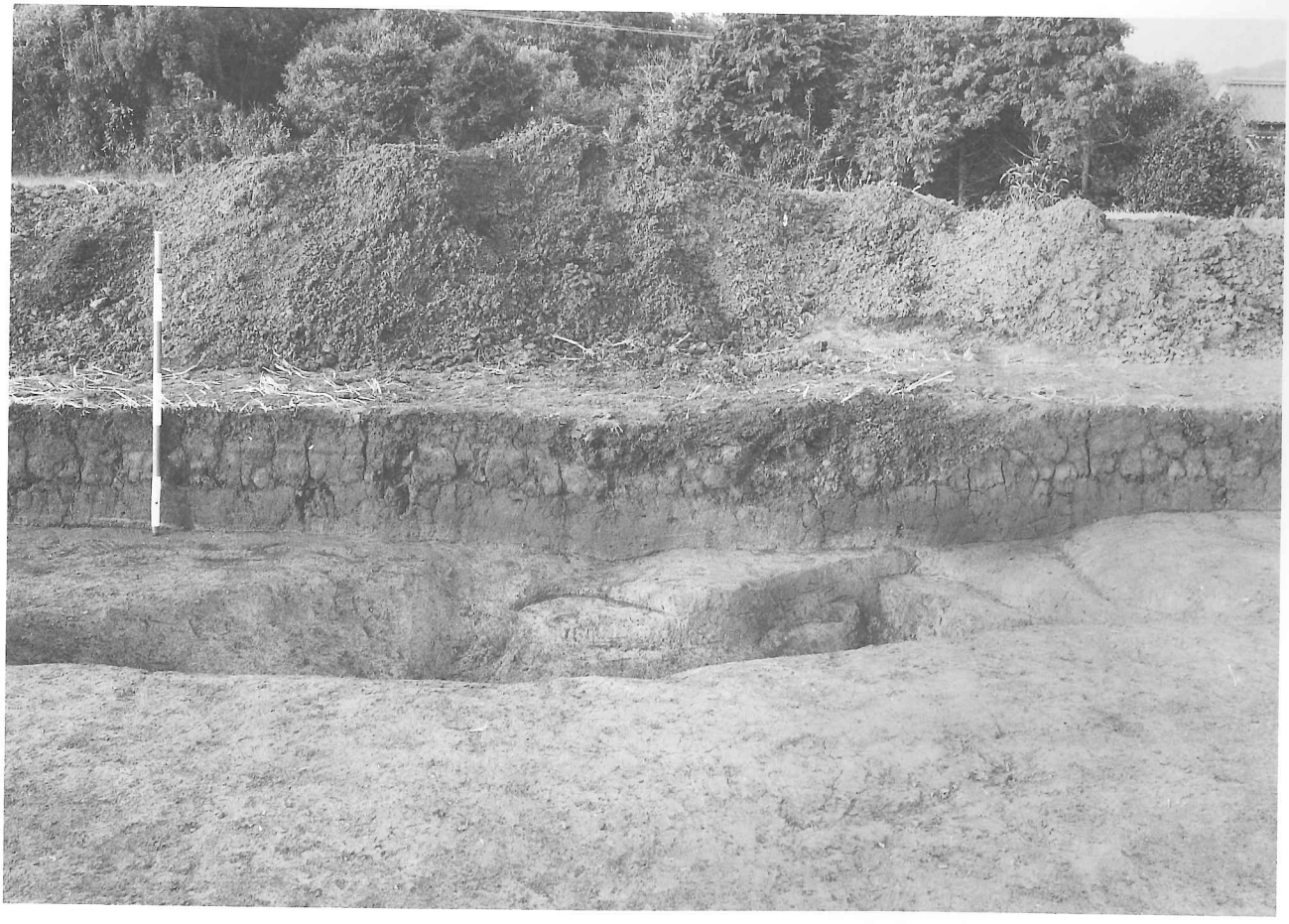
柏田地区遠景（南東より）

柏田１区東側土層

柏田２区遺物出土状況

柏田２区遺物出土状況

柏田 2 区遺構出土状況



柏田 2 区北側土層

柏田５区南側土層

柏田５区東側土層

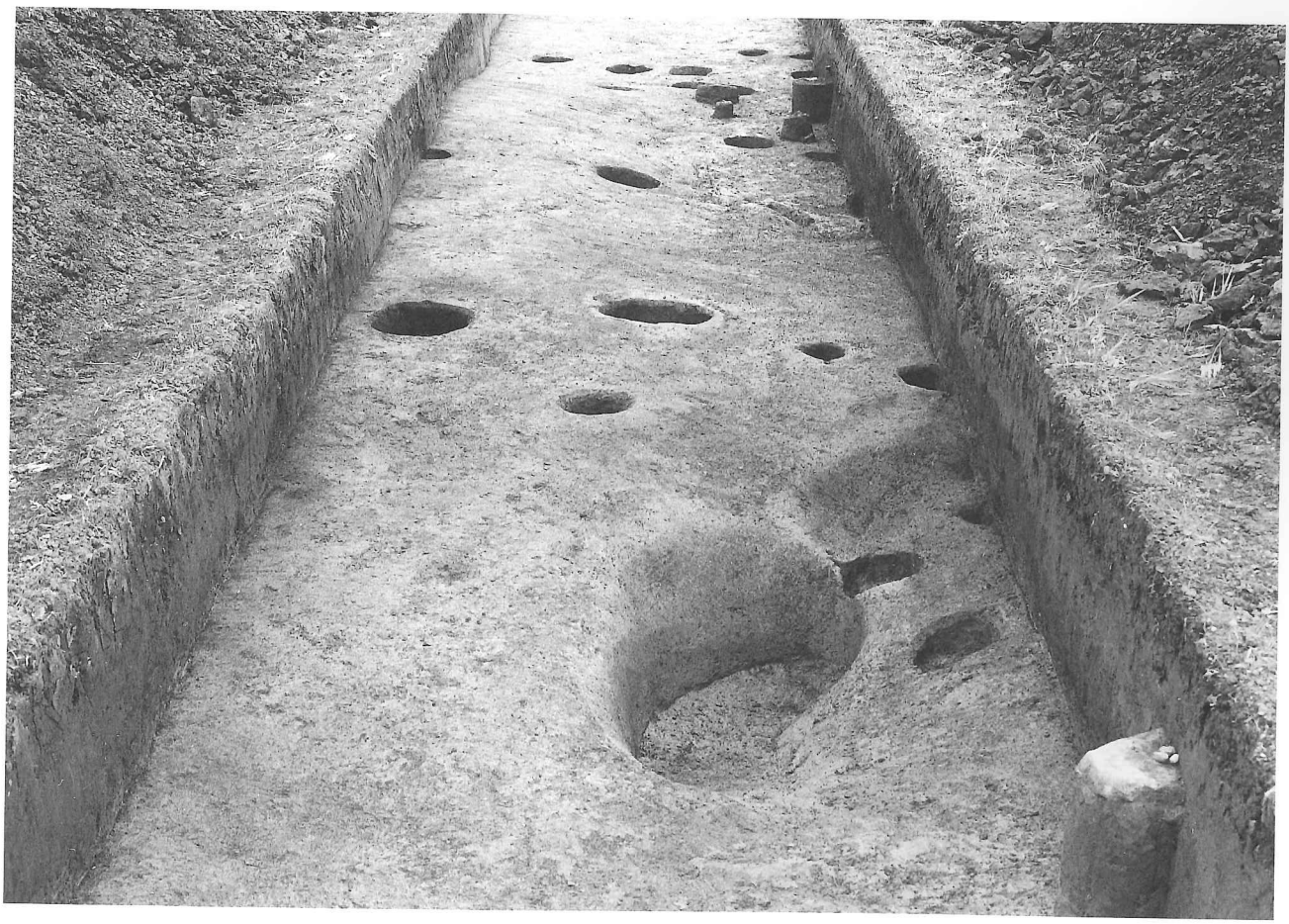
苣ノ木地区空中写真（西から）

苣ノ木地区空中写真（東から）

苣ノ木地区空中写真

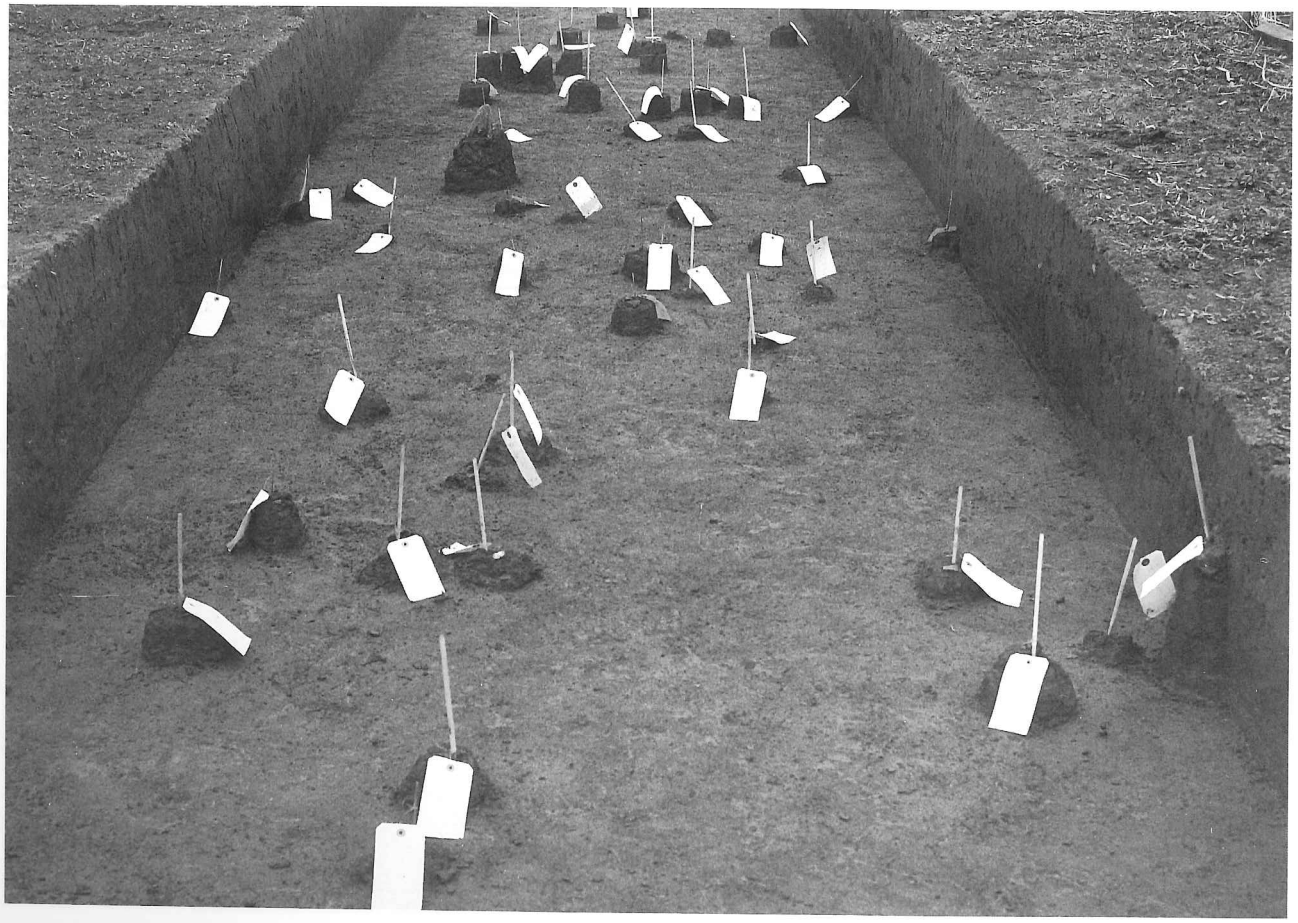
苣ノ木３区空中写真

苣ノ木１区南側土層



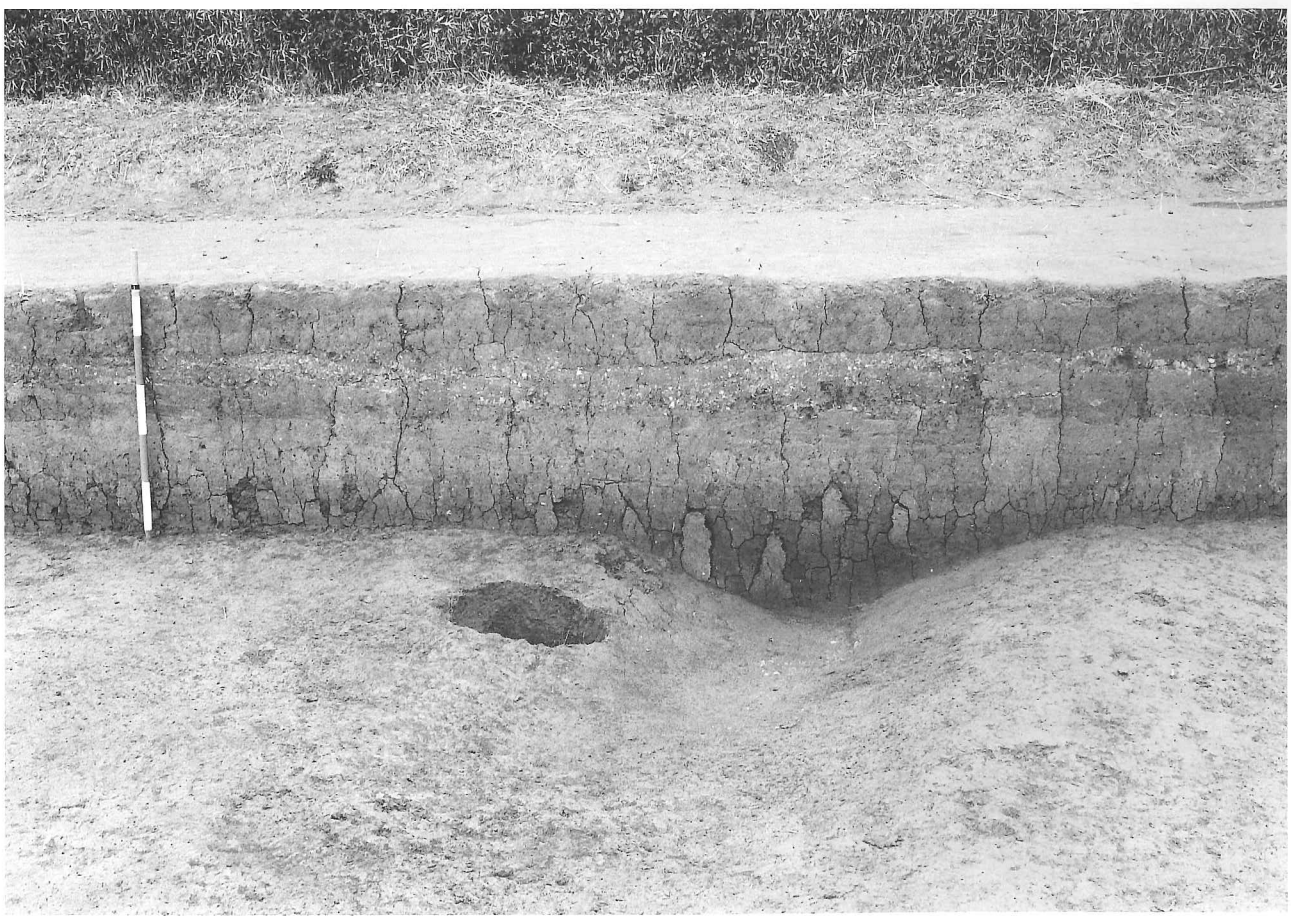
苣ノ木１区遺構出土状況

苣ノ木１区調査状況



苣ノ木１区遺物出土状況

苣ノ木 3 区南側土層



苣ノ木 3 区東側土層

Ⅳ　ま　と　め

平成10年度から平成11年度に実施した「原の辻遺跡調査事業」については，調査地区の概要と遺構・遺物についての説明を行った。今回の調査対象は，台地つけ根部分の大川地区で確認されていた古代の遺物等がどこまで範囲を拡げるのか，また新たな発見につながるのかという点と，これまでの調査で確認されている墓域が南側まで拡がるのかという目的をもって行われた。

平成６年に実施された農道拡幅工事に伴う調査では，これまで原の辻遺跡に見られなかった新しい発見があった。それは，初期貿易陶磁の出土である。内容は越州窯系青磁・白磁・長沙窯系陶磁に加え，国産の洛西系緑釉陶器や東海系の灰釉陶磁が含まれ，北部九州の古代遺跡の出土例から比較しても高いといえ，壱岐の特殊性が考えられる。今回は，さらにこれらの資料に加え，イスラム陶器の出土があり，その意義が問われることとなった。

出土遺物から時期的には８世紀から10世紀頃が考えられるが，これを文献上から検討してみると，壱岐には古墳時代から，壱岐氏が台頭し，現在の国分寺に自分の氏寺を提供したとあり，発掘調査によって寺域の拡がりが確認されている。また壱岐氏の居館跡も特定されているが，国府跡がどこに該当するかとなると，不明な点も多いのである。『延喜式』によれば，壱岐島は下国に位置づけられ，壱岐郡と石田郡に分かれている。さらに和名抄では壱岐郡は風早郷，那賀郷，伊宅郷など７郷から成り，石田郡は物部郷，沼津郷など４郷から成り，国府は石田郡にありとしている。石田郡には『延喜式』兵部式に壱岐島駅馬を「優通各五疋」としており，勝本町の「可須」まで続いている。優通駅家と推定される小字名に「湯頭」の地名が今も残っているので，この地は現在の印通寺港を見下す所にあり，最近石田町教育委員会の発掘調査においても越州窯陶磁などが出土しており間違いないと思われる。現在の津ノ宮を経て，大川地区までは約１kmの距離である。

国府の所在地については，壱岐氏の本拠地国分にあったのではないかという説や，湯岳触の興神社に「壱岐一ノ宮印鑰大明神」が置かれているところから，この周辺とも考えられているが，どちらにしろ決定的な証拠はない。しかし，大川地区でまとまった古代の遺構や遺物が出土したことで，公的な施設が存在したことは確かなようで，更に面的な調査を行っていくことによって解決の糸口はつかめよう。

古代の出土した調査壕の約100m北側の８区からは，斜めに削った所に礫を貼りつけた集石が確認されたが，この地区は中世まで下るのではないかと思われる。同じ所に掘建柱の柱穴も位置し，建物と一体となった遺構と考えられる。当初は大川地区の墓地がここにも及んだのではないかと思われたが，確認されたのは，弥生中期の須玖Ⅱ式の合口小児甕棺１基だけの出土で，墓域は拡がっていないことが判明した。また弥生時代の包含層はかなり削平され，ほとんど遺物が残っていない状況であったが，15区でわずかに弥生土器片が残っていることが確認された。

原ノ久保Ａ地区も墓域の拡がりを確認することに主眼が置かれた。平成８年度調査区では石棺墓や土壙墓や土壙，甕棺墓など37基の遺構が確認され，９号土壙からは長宣子孫銘内行花文鏡，筒形不明

青銅器，石製管玉，ガラス勾玉，ガラス小玉などが出土し，首長墓があった可能性が極めて高いとされる墓地である。今回の調査区はそこから南へ約100mの地点が中心である。地主の話によれば，かつてこの畑からは石棺や甕が出土したということで，確かに畑の隅に棺材や甕棺の破片と思われるものが置いてある。しかし，調査の結果畑の造成による２次的破壊が進んでおり，成果は得られなかった。表面採集の甕棺は弥生中期であり，前回の墓域が弥生後期から終末であったことを考えると，南側から北側に向って墓域が形成された可能性がある。西はずれの谷状に入り込んだ地形に設定した５区では，弥生土器の小片がわずかに流れ込みの状況で出土しており，この周辺には弥生時代の主要な包含層は見られない。

芦辺町高元，原地区では居住域を区画する濠を確認する目的として７本の調査壙を標高８mから14mの水田にほぼ南北に設定した。区画濠については平成９年度の調査で，台地頂上部の祭儀場と確認されている地域を東西方向に走る区画濠として環濠まで達することが判明したため，若干くびれ部をもつ地形にも区画濠の存在が認められるのではないかという期待感があったが，結局確認されなかった。しかし，全体的に住居跡の確認や，溝のはじまりの部分，貝層の検出について成果をあげることができた。遺物を含む層の時期はほとんどが弥生中期須玖Ⅰ～Ⅱ式期と古墳時代初頭まで継続して営まれていることが確認された。これまで台地部で調査された時期とほぼ同じであるが，平成９年度Ｂ区で出土している弥生前期の資料は出土していない。また朝鮮半島系の土器については三韓系瓦質土器がほとんどで，楽浪系の土器がわずかに見られる。この土器の出土は７区が最も多い。またこの７区では溝の始まりの部分と岩盤を平坦に削った部分が検出されたが，性格については今後調査区を拡幅して検討することになる。６区の貝層中からはイノシシ，イヌ，カエル，ヘビ，クロダイ，サメ，貝類ではアワビ，サザエなどが出土している。奈良国立文化財研究所の松井章氏の指摘では，貝層の量からすると，魚類が少ない感じもするという。また，日常のゴミを捨てたというよりも，公式行事の時のゴミ捨て場という性格が強く，つまり厳密に使い分けがなされたのではないかという考え方である。

平成11年度の調査は芦辺町域が不條地区の調査を実施した。この地域は台地突端部の西側平坦面にあたる部分である。ここでは平成10年度特定調査Ｃ区で検出した弥生中期から後期にかけての１号旧河道の延長を確認し，東部で弥生中期の多重環濠の内濠，外濠と考えられる濠２条と，１号旧河道内に切り込み，南北に走る。古墳時代前期の溝を検出した。これらの遺構はさらに特定調査区の南西方向へとつながっている。

柏田地区では昭和50年度の範囲確認調査時の広口壺と平成５年緊急調査出土の弥生中期小児合口甕棺の追跡調査の意味合いを含めて調査区を設定したが，追加資料は得られなかった。広口壺もおそらく小児棺と考えられるが，小児棺の場合はポツンと単独で検出される傾向にあるが，今回の出土状況も群として捉らえられるものではないであろう。

苣ノ木地区では弥生時代の遺構遺物よりも，旧石器時代の文化層が確認された。この時期の遺物は柏田地区でも狭い範囲で捉えられた。また原の辻遺跡全域の弥生時代の層や表土層などから，これまでにかなりの数の旧石器が得られており，この時代の文化層にも注意を払っていかなければと思われる。

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡発掘調査事業に関わる範囲確認調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	安楽　勉・宮崎　貴夫・杉原　敦史
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092-1　TEL09204(5)4080
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
原の辻遺跡	長崎県壱岐郡 芦辺町・石田町	42423 42424	73－10 72－92	3度 45分 24秒	129度 45分 14秒	1998 20000204	1,550	原の辻遺跡発掘調査事業（国庫補助事業）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落 墓地	弥生時代 古墳時代	竪穴式住居跡 濠，溝 甕棺墓	弥生土器，石器，土師器 朝鮮半島系土器 ガラス小玉，イスラム陶器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第18集

原の辻遺跡

2000．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷